

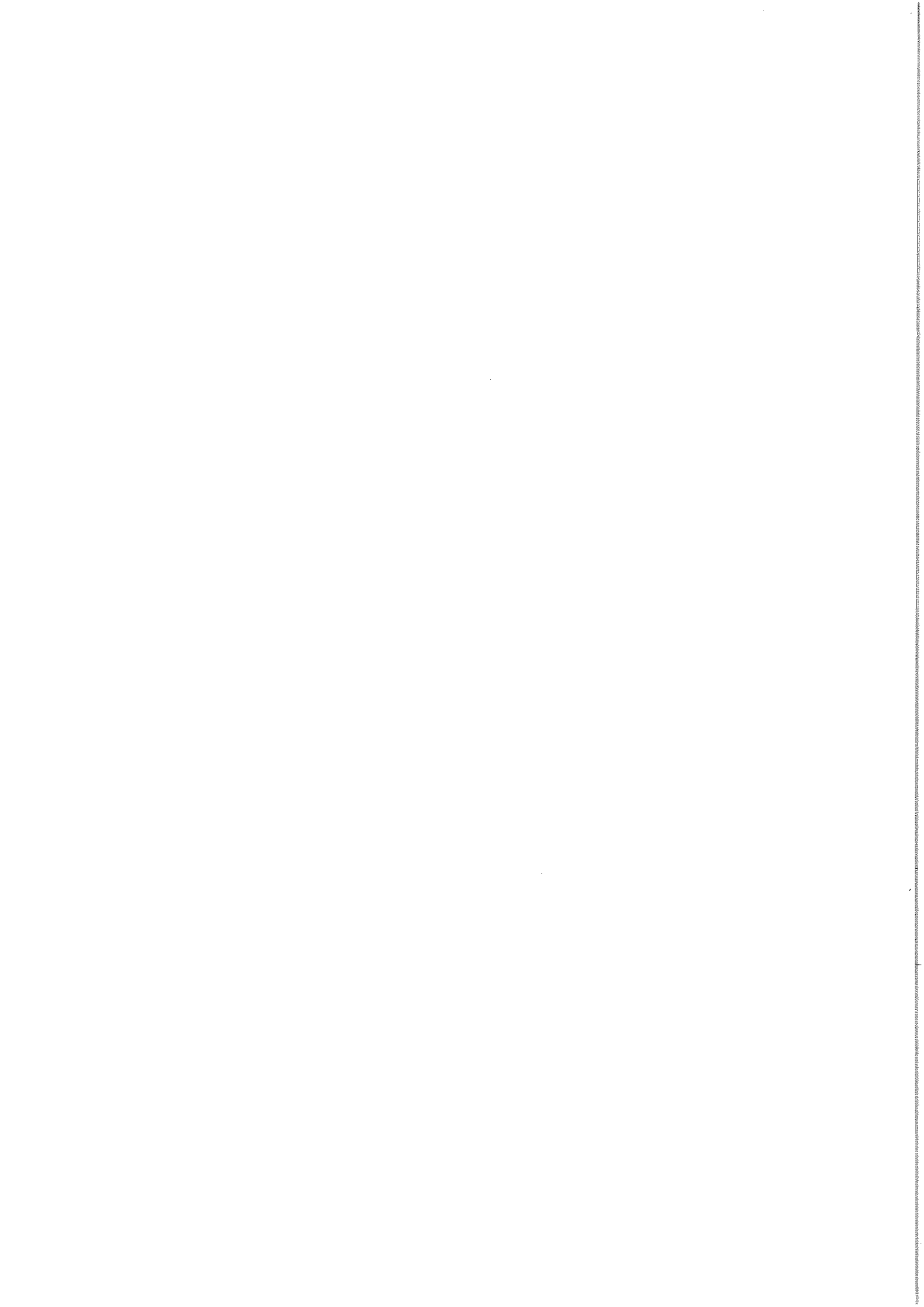
会 報

第 41 号

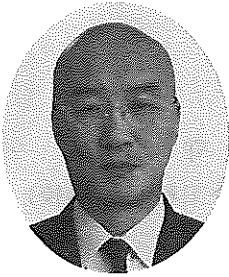
平成 25 年度



東京都公立高等学校副校長協会



会報第 41 号の発刊に寄せて



会 長 中 間 均
(東京都立江北高等学校)

「会報 41 号」の発刊にあたり一言ご挨拶を申し上げます。日頃から東京都公立高等学校副校長協会の事業、研究活動に御理解と御協力をいただきまして厚く御礼と感謝を申し上げます。

さて今年度から、高い専門性と優れた指導力を持つ教員の力を活用して教員全体の意欲と学習指導力の向上を図るため、指導教諭の職が設置されました。職務の級としては、既に導入されている主幹教諭と同級であります。職務の内容は、校内の OJT、模範授業や公開授業、他の教員へ学習指導に関する指導・助言をする個別相談や授業支援、そのほか教科指導資料等の開発を行います。

また、教科主任を設置して、経営体制強化のために設置してきた主任の仕組を新たに教科指導にも導入して「教科目標・方針の共有及び授業進度の調整」や「教科指導に関する人材育成の充実」等の目的を達成させる動きがありました。ハード面の改革から、都立高校に通う生徒の学力向上を目指すという内面的な充実を図る動きが出てきました。

来年度は、生徒の規範意識を高めて、都立高校に通う生徒は生活指導面でもしっかりさせようとする取り組みが始まってきます。

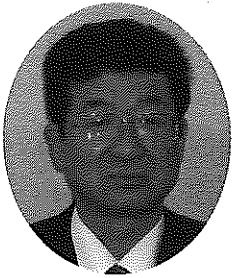
このような都全体の動きを見ていると、我々副校長はいかに本質である目的を達成させるかという課題に対して各学校レベルで当事者意識を持って、その取り組みに対する策や成果等を共有して都立高校をさらに魅力あふれるものにしていきたいと考えます。そのために副校長協会が各学校の副校長に情報を発信して、少しでも支えとなれば幸いです。

今年度は、三重県伊勢市で行われた夏の全国大会において、全国高等学校教頭・副校長会の会長である錦織先生が会長をご退任されました。私は、錦織先生から副校長協会の役割や副校長間の情報交換の大切さなどを学びました。来年度からは、事務局という立場でまた我々を支援いただければと考えております。

この一年間会長を仰せつかりまして、さまざまな関係各所にご迷惑をおかけしたことで存じますが、私にとってはとても有意義でした。ちょうど 2 年前に研究主任のお誘いがあったときに、上司に相談した時の上司の言葉どおり、全国に知り合いができました。北海道からは、全国大会でお会いしたことをきっかけに本校に学校訪問に来ていただいたりしました。また、生活指導の発表をされた佐賀県の先生には、データを USB メモリーでいただいたりしました。

副校長の仕事は、仕事が重なると頭の中が整理できなくなるほど激務になることがあります。そんな時に、ただ仕事だけをこなしている副校長では、大きな流れを見失うことにつながるのではないのでしょうか。実際に文科省の方のご講演や大学の総長のお話を伺っていると教育の本質をつかむことができるものだと思います。具体的には、もっと勉強しなければいけないということを感じさせられました。

最後になりましたが、「会報 41 号」を発刊するにあたり、教育庁指導部高等学校教育指導課、東京都公立高等学校長協会をはじめとする関係各位に、今年度 1 年間のご支援に対し感謝を申し上げます。また、編集・発刊のご尽力いただいた事務局の皆様、各地区の常任幹事をはじめとする役員の皆様に心から感謝申し上げます。



会報第 41 号の発刊に寄せて

全日制部会長 守 屋 誠 一
(東京都立総合工科高等学校)

「会報第 41 号」の発刊にあたり一言ご挨拶を申し上げます。日頃は、東京都公立高等学校副校長協会の事業や研究活動にご協力、ご尽力をいただき厚く御礼申し上げます。

今年度は、新教育課程の全校実施、学力スタンダード推進校 32 校が決定され、2 月 13 日 14 日の 2 日間に学力スタンダード学力調査の試験が各校に配布され 1 学年に実施しました。今まで推進されてきた学力向上推進事業（各学校で対応）の試験も同日 2 学年に実施がされました。

また、専門高校でも技能スタンダード推進校 12 校が決定され平成 27 年度専門高校全校実施に向け準備が進められています。

現在の東京都の副校長協会は、会の運営に当たる、会長、全日制部会長、会計などを担当した副校長が退職や昇任を迎えていることで、新しく担当者を選出する必要があります。また、全国高等学校教頭・副校長会の役員は東京都から選出しておりましたが、昨年、錦織会長が退職し、続いて本年度就任した玉井会長も退職となります。来年度に向け常任幹事や研究幹事のほか、会を運営する担当者の選出が必要になっています。

「全日制副校長会役員選出内規」を決め、来年度に向けて各支援センター別に選出作業を進めています。副校長の異動等は 3 月になって決定するため、役員選出は 3 月の副校長連絡会以降になる予定です。

この「発刊によせて」を書いています、この時期、教育課程編成、教科課程調書の作成、入学選抜業務、若手教員育成研修報告、各委員会報告、教職員面接実施、異動処理など年度末に向けて多くの業務が副校長にはあります。多くの業務を適切に処理して当たり前になります。体調を整え、健康に留意してください。

私事になりますが、本年度で退職となります。3 年間工業副校長会の会長として、2 年間は全日制部会長として副校長会の業務に微力ながら携わることができたことは、自分を成長させる大きな要因となったと自負しております。副校長は孤独になることが多いと思いますが、多くの副校長が連携し、情報を共有し助け合うこともできます。これを可能にする、できる組織が現在の副校長会であると感じています。副校長業務は多忙ですが、より良い副校長会を全副校長が意識することで、情報交換を頻繁に行い業務の効率化を進めることや同じ悩みを共有することで多忙感や孤独感を癒し、より業務に専念していただきたいと感じています。

最後になりましたが、「会報 41 号」を発刊するにあたり、教育庁指導部高等学校教育指導課、東京都公立高等学校長協会、東京都公立高等学校副校長協会定通制部会をはじめとする多くの関係各位に、今年度 1 年間のご支援に対して感謝を申し上げます。また、編集・発刊にご尽力いただいた事務局の先生方、各地区の常任幹事をはじめとする役員の皆様に心より感謝申し上げます。

目 次

会長・部会長あいさつ（発刊によせて）

1. 教頭会・副校長会のあゆみ

1. 本会創設以前の教頭会	1
2. 会員数と会費の変遷	3
3. 本会のあゆみ	7
4. 本会のあゆみ一覧	11

2. 総務部会報告

1. 本部の活動	17
2. 平成 25 年度予算	18
3. 平成 25 年度事業報告	20
4. 副校長協会 総会	21
5. 全日制部会 総会	21
6. 幹事会	22
7. 総務部会	22
8. 指導部との賀詞交歓会	25
9. 特別委員会	26

3. 主な活動報告

1. 全国高等学校教頭・副校長会	27
2. 都立高校副校長研究協議会	28
3. 関東大会報告	29

4. 地区別支部副校長会報告

1. 東部 A 地区副校長会	31
2. 東部 B 地区副校長会	32
3. 東部 C 地区副校長会	33
4. 東部 D 地区副校長会	34
5. 中部 AB 地区副校長会	35
6. 中部 C 地区副校長会	36
7. 中部 D 地区副校長会	37
8. 西部 A 地区副校長会	38
9. 西部 B 地区副校長会	39
10. 西部 C 地区副校長会	40
11. 西部 D 地区副校長会	41

5. 学科別副校長会報告

1. 工業科副校長会	42
2. 商業科副校長会	44
3. 農業科副校長会	46

6. 研究部会報告

1. 管理運営研究部会	
第 1 委員会（学校管理関係）	49
第 2 委員会（職務・待遇関係）	52
2. 高校教育研究部会	
第 1 委員会（教育課程）	54
第 2 委員会（教育対策）	56
3. 生徒指導研究部会	
第 1 委員会（生活指導・進路指導）	58
第 2 委員会（教科以外の教育指導）	60

7. 退任者の声

8. 転任者の声

9. 新任者の声

10. (1) 挨拶

東京都教育庁指導部主任指導主事
永森 比人美 先生 97

(2) 挨拶

東京都公立高等学校長協会会長
柴田 哲 先生 98

(3) 講演「都立高校活性化のための副校長の役割」

前都立荒川商業高等学校長
森田 聖一 先生 99

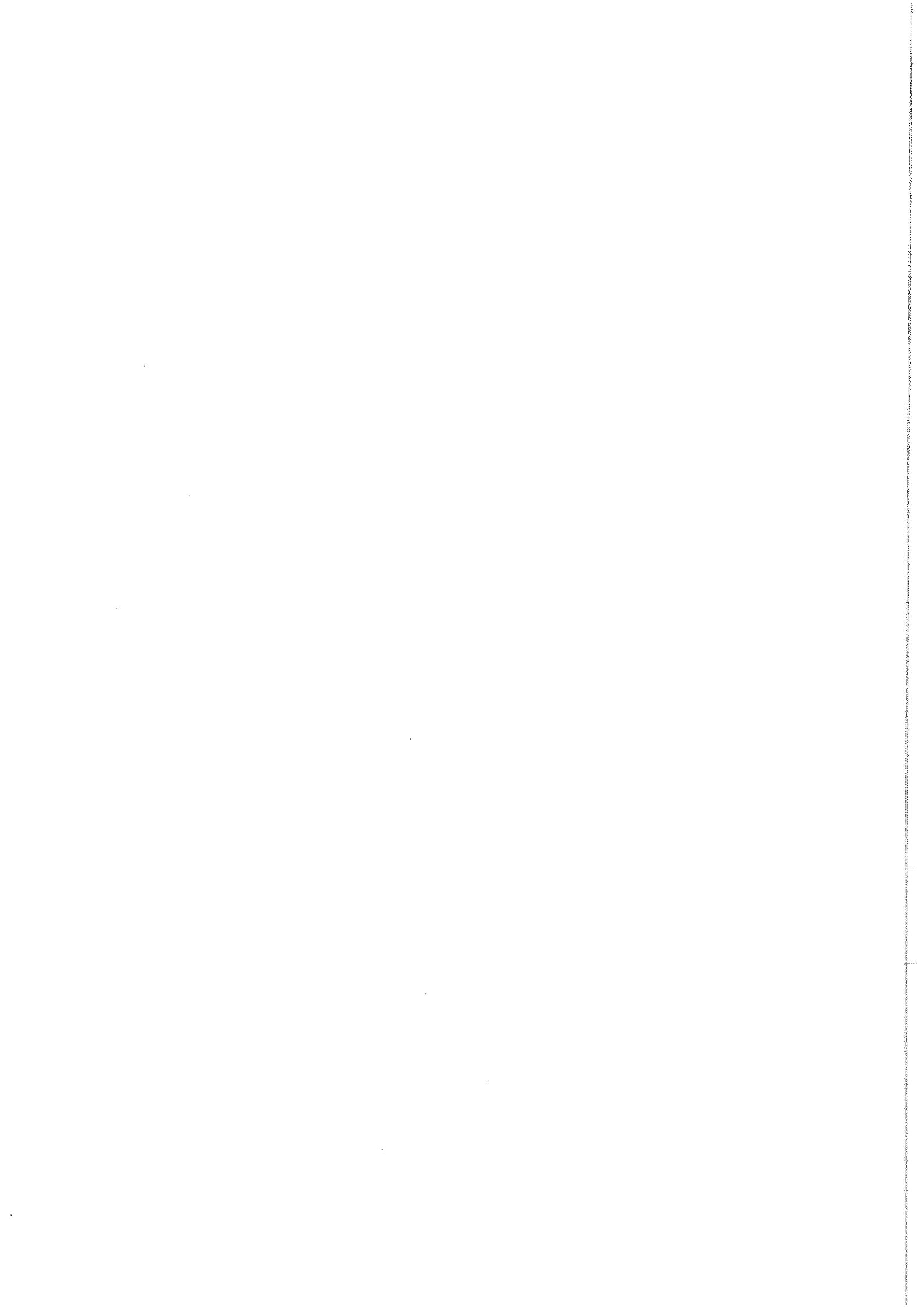
(4) 講演「今だから話せること」

元つばさ総合高等学校長
山上 隆男 先生 107

11. 会 員 異 動

会員異動 114

編 集 後 記



1. 教頭会・副校長会のあゆみ

1. 本会創立以前の教頭会

明治19年10月勅令65号「尋常師範学校官制」第3条「教頭ハ教諭中ヨリ之ニ兼任シ、学校長ノ監督ニ属シ、教務ヲ整理シ教室ノ秩序ヲ保持スルコトヲ掌ル」とあり、また昭和16年3月勅令第148号「国民学校令」で「学校長及ビ教頭ハ其ノ学校ノ訓導ノ中ヨリ之ヲ補ス、教頭ハ学校長ヲ補佐シ校務ヲ掌ル」と定めるなど、戦前は教頭職制度があった。その当時の教育制度は5年制の中学校・高等女学校・工業学校・商業学校・農業学校などに分かれていた。戦前の教頭会は関係の深い学校同志が校務連絡と親睦のため集まる程度の会はあったが教頭会としての組織化されたものはなかった。

戦後の昭和22年3月法律第26号「学校教育法」公布により、教頭職は法制的になくなったので、校長の命ずる校務分掌の一部として名ばかりの教頭が存在していた。昭和30年都教委は、「校務主任」の制度を設け、教頭全員に「校務主任」の辞令を渡し、12月1日付で任命した。このようなことから普・工・商・農などの教頭会は規約をもうけるなどし、各々「校務主任会」

を組織、やや教頭会的活動を行うようになった。その後昭和38年に全都の高校で組織する本会を創設した。本会が創立する以前の教頭会の歴史は次の通りである。(昭和49年2月内山調)

東教会（普通科）

昭和12年創立。昭和38年本会の創立により、昭和38年発展的解散

昭和12年春、府立第7高女に府立高女全校の教頭10名が集り親睦と校務連絡を目的に会を創設した(故松岡忍岡高女教頭の日記より)。昭和18年に都政がしかれ、府立高女も市立高女も全部都立高女と呼ばれるようになった。そのとき全都立高等女学校25校が忍岡高女に集り総会を開き組織を強化した。その後、戦争のため会は開けなかったが、昭和24年より開けるようになり、昭和30年頃より男子系高校の入会も増加し会は発展してきた。昭和32年に都立高校校務主任会が発足したがこれと並行して会は存続、昭和38年都立高校教頭会が創立したので昭和39年1月23日、南多摩高校で最後の総会を開き発展的解散した。

年 度	昭 12 年	昭 13 年	昭 18 年	昭 19 年	昭 24 年	昭 25 年
会 員 数	10 校	10 校	25 校	25 校	31 校	35 校
会 費	—	—	—	戦争のため昭和24年まで中断する	300 円	300 円
当番幹事校と会場	府立第7高女	昭14~17年 不明	忍 岡		駒場、富士、忍岡、足立	竹台、井草、千歳、鷺宮

昭 26 年	昭 27 年	昭 28 年	昭 29 年	昭 30 年	昭 31 年	昭 32 年
35 校	35 校	35 校	38 校	40 校	42 校	46 校
300 円	300 円	300 円	300 円	300 円	300 円	300 円
八潮、市谷、紅葉川、明正	京橋、本所、台東、三田	不 明	不 明	豊島、玉川、桜町、深川	雪谷、武蔵、北野、大崎	南多摩、目黒、神代、江北

昭 33 年	昭 34 年	昭 35 年	昭 36 年	昭 37 年	昭 38 年	昭 39 年
48 校	50 校	50 校	60 校	63 校	63 校	63 校
300 円	300 円	300 円	300 円	300 円	300 円	300 円
千歳丘、一橋、足立、荻窪	白鷗、南多摩、富士森、府中	竹早、本所、広尾、青山	志村、板橋北多摩	不 明	不 明	不 明

会合は毎年5回を目標にし、4回は学校、1回は外部の会場を選んだ。

(昭和49年2月神藤調、昭和50年神藤訂正)

東京都立高等学校校務主任会（普通科）

昭和32年創立。昭和38年本会創立全校入会、その後普通科高校教頭会支部となる。

昭和32年1月17日駒場高校で普通科高校が集り、各学区から幹事を出し、その中から代表幹事をきめる組織で創立総会を行った。目的は親睦と校務連絡が主なもので、第1回の総会と

年2～3回の幹事会を行う程度の会であった。組織は普通科高校全体であるが、大島・三宅・八丈の島関係は未加入、昭和35年府中高、昭和38年は深沢・小岩・小平・南・大山の5校新設入会とし、86校となる。

年 度	昭 32 年	昭 33 年	昭 34 年	昭 35 年	昭 36 年	昭 37 年
会 員 数	76 校	76 校	76 校	77 校	77 校	77 校
会 費	500 円	500 円	500 円	500 円	500 円	500 円
代 表 幹 事	鈴木 菊雄 (駒 場)	森本久次郎 (日比谷)	岸田 文男 (西)	渡辺 元 (板 橋)	細沼 清 (白 鷗)	田代清三郎 (両 国)

(昭和49年2月神藤、内山調、昭和50年2月神藤、内山訂正)

東京都立工業高等学校教頭会

昭和25年創立。昭和38年本会創立全校入会、その後工業高校教頭会支部となる。

はじめは校長会主催の教頭をねぎらう親睦の会であったが、昭和31年に校務主任会と名称を変え、会則を設けるなどし、会長と幹事3名で運営するようになり、昭和38年には幹事長と副幹事長、幹事4名に変更され現在に至ってい

る。組織は工業高校全校であるが、昭和31年共同実習所入会、昭和34年一橋工と羽田工が合併、同年鳥山工新設、昭和38年は練馬・荒川・足立・葛西・田無・多摩・砧・杉並・町田・府中の新設10校、同年航空工廃止し、共同実習所を含めて29校となる。

年 度	昭 25 年	昭 26 年	昭 27 年	昭 28 年	昭 29 年	昭 30 年	昭 31 年	昭 32 年	昭 33 年	昭 34 年
会 員 数	19 校	19 校	19 校	19 校	19 校	19 校	20 校	20 校	20 校	20 校
会 費	会場校の負担から必要に応じ徴収するようになる						500 円	500 円	500 円	500 円
備 考	校長会主催の会から教頭会に発展						都立工業高校校務主任会			

昭 35 年	昭 36 年	昭 37 年
20 校	20 校	20 校
500 円	500 円	500 円
都立工業高校校務主任会		

(昭和19年2月内山・遊佐調、昭和50年2月内山・元田訂正)

東京都立商業高等学校教頭会

創立は昭和26年頃らしい。昭和38年本会創立時に全校入会。その後商業高校教頭会支部となる。

はじめのうちは記録がないので不明である

が、昭和32年に組織を強化し、幹事長制度を設け、年に数回の会合を行っている。

その後、昭和38年に四谷・赤羽の2校新設入会し、25校となった。

年 度	昭 32 年	昭 33 年	昭 34 年	昭 35 年	昭 36 年	昭 37 年
会 員 数	不 明					25 校
会 費	不 明					1,000 円
備 考	都立商業高校校務主任会					

(昭和49年2月八田調)

東京都立農業高等学校教頭会

昭和24年創立。昭和38年本会創立時に全校入会。その後農業高校教頭会支部となる。

はじめは記録がないので不明であるが、教頭の集まる会はあった。昭和30年に会則を設け、持ち廻り幹事で運営していたが、昭和36年に幹

事を2名に強化し、毎年6回の会合を行っている。会員数は昭和32年に農産高が独立、昭和36年大島・三宅・八丈の農業科3校入会、昭和40年瑞穂農芸高独立し、9校となる。

年 度	昭24年	昭25年	昭26年	昭27年	昭28年	昭29年	昭30年	昭31年	昭32年	昭33年
会 員 数	4校	4校	4校	4校	4校	4校	4校	4校	4校	5校
会 費	不 明	不 明	不 明	不 明	不 明	不 明	500円	500円	500円	500円
備 考	教頭の集まる会はあったが細部不明									

昭34年	昭35年	昭36年	昭37年
5校	5校	8校	8校
500円	500円	500円	500円
都立農業高校校務主任会			

(昭和49年2月池田調、
昭和50年2月山本訂正)

2. 会員数と会費の変遷

本会創立から現在まで、学校数・会員数・会費・新設校のあゆみを次の表にまとめた。

<変遷表について>

1. 本会が設立した昭和38年度は新設17校と廃校1校があるので125校から140校となった。
2. 昭和38年～昭和45年は普+商・普+農・本校+分校・共同実習所など各々1校として入会、会員数は実際の学校数より多い。

3. 昭和38年大森高馬込分校(定)は南高として新設、同年代々木高(定)は3部制となり入会。
4. 昭和40年浅草高(定)は東高(全)に変わり新設、昭和46年大島高差木地分校は大島南校に変わり新設。
5. 昭和44年秋川高、昭和48年大島南高に舎監長制度が新設され入会、昭和48年だけ世田谷工高は2人教頭であった。(昭和52年2月神藤・内山調、その後追加)

〔会員数と会費の一覧表〕

(昭和38年以降)

年 度	学 校 数	会 員 数 (人)					年 会 費 (円)				新 設 高 校 名 ※ 募集停止校名 ○ 転科した高校名	1. 1校で2科や2名教頭などの入会校名 2. 分校・共同実習所などの入会校名
		普 通	工 業	商 業	農 業	計	都 費	私 費	個 人	計		
昭和38年	140校	86人	28人	25人	8人	148人	—	500円	—	500円	深沢 小岩 小平 南 大 山 四谷商 赤羽商 荒川工 杉並工 砧 工 練馬工 足立工 葛西工 田無工 多摩工 町田工 府中工 (計17校)	杉並共実 北多摩 三宅 代々木 五日市 八丈 赤坂 大島 (計8)
" 39	141	88	30	25	8	151	—	500	—	500	練 馬 (計1校)	杉並共実 赤 坂 浅草(定) 八丈 江東共実 北多摩 大 島 代々木 五日市 三 宅 (計10)
" 40	144	90	30	24	9	153	—	500	—	500	秋 川 久留米 東 瑞穂農芸 (計4校)	杉並共実 赤 坂 大 島 江東共実 北多摩 三 宅 代々木 五日市 八 丈 (計9)
" 41	145	91	30	20	6	147	—	500	—	500	日 野 (計1校)	杉並共実 江東共実 (計2)

年 度	学 校 数	会 員 数 (人)					年 会 費 (円)				新 設 高 校 名 ※ 募集停止校名 ○ 転科した高校名	1. 1校で2科や2名教頭などの入会校名 2. 分校・共同実習所などの入会校名
		普 通	工 業	商 業	農 業	計	都 費	私 費	個 人	計		
昭和 42年	146	92	29	20	6	147	—	1,000	—	1,000	羽 田 (計1校)	杉並共実 (計1)
" 43	147	94	29	20	6	149	—	1,000	—	1,000	東村山 (計1校)	秋川 (舎監長) 杉並共実 (計2)
" 44	149	97	28	20	6	151	—	1,000	—	1,000	国分寺 小笠原 (計2校)	秋川 (舎監長) 差本地分校 (大島) (計2)
" 45	149	97	28	20	6	151	1,000	—	—	1,000	— (な し)	前年に同じ (計2)
" 46	155	102	28	20	6	156	1,000	—	—	1,000	淵 江 福 生 新 島 東大和 忠 生 大島南 (計6校)	秋川 (舎監長) (計1)
" 47	161	108	28	20	6	162	1,000	—	—	1,000	片 倉 府中東 神 津 永 山 保 谷 芸 術 (計6校)	前年に同じ (計1)
" 48	164	112	29	20	6	167	9,000	—	—	9,000	葛西南 狛 江 清 瀬 (計3校)	秋川 (舎監長) 大島南 (舎監長) 世田谷工 (2人制) (計3)
" 49	168	116	28	20	6	170	9,000	—	—	9,000	高 島 足立西 調布北 久留米西 (計4校)	秋川 (舎監長) 大島南 (舎監長) (計2)
" 50	172	120	28	20	6	174	9,000	—	2,000	11,000	水 元 府中西 武蔵村山 野津田 (計4校)	前年に同じ (計2)
" 51	177	125	28	20	6	179	9,000	—	5,000	14,000	光 丘 八王子東 青梅東 足立東 武蔵村山東 (計5校)	前年に同じ (計2)
" 52	184	132	28	20	6	186	9,000	—	5,000	14,000	青 井 調布南 稲 城 羽 村 篠 崎 小平西 秋留台 (計7校)	前年に同じ (計2)
" 53	191	139	28	20	6	193	9,000	—	6,000	15,000	蒲 田 八王子北 昭 島 大泉北 成 瀬 城 東 清瀬東 (計7校)	前年に同じ (計2)
" 54	196	144	28	20	6	198	9,000	—	6,000	15,000	永 福 足立新田 南 野 砂 川 武蔵野北 (計5校)	前年に同じ (計2)
" 55	202	150	28	20	6	204	9,000	—	6,000	15,000	大森東 大泉学園 館 小 川 日野台 小金井北 (計6校)	前年に同じ (計2)
" 56	202	152	28	20	6	206	9,000	—	6,000	15,000	田 柄 松ヶ谷 (計2校)	前年に同じ (計2)
" 57	204	152	28	20	6	206	9,000	—	6,000	15,000	— (な し)	前年に同じ (計2)
" 58	207	155	28	20	6	209	9,000	—	6,000	15,000	小平南 田 無 山 崎 (計3校)	前年に同じ (計2)
" 59	209	157	28	20	6	211	9,000	—	6,000	15,000	東大和南 東村山西 (計2校)	前年に同じ (計2)
" 60	210	159	28	20	6	213	11,300	—	6,000	15,000	南 平 (計1校)	秋川 (舎監長) 大島南 (舎監長) 紅葉川中央校舎 (計3)
" 61	210	160	28	20	6	214	11,300	—	6,000	17,300	— (な し)	秋 川 (舎監長) 大島南 (舎監長) 紅葉川中央校舎 隅田川堤校舎 (計4)

年 度	学 校 数	会 員 数 (人)					年 会 費 (円)				新 設 高 校 名 ※ 募集停止・閉課程校名 ○ 転科した高校名	1. 1校で2科や2名教頭などの入会 校名 2. 分校・共同実習所などの入会校 名
		普 通	工 業	商 業	農 業	計	都 費	私 費	個 人	計		
昭和 62年	210	160	28	20	6	214	11,300	—	6,000	17,300	—— (な し)	前年に同じ (計 4)
" 63	211	162	28	20	6	216	11,300	—	8,000	19,300	八王子高陵 (計 1校)	秋 川 (舎監長) 大島南 (舎監長) 紅葉川中央校舎 隅田川堤校舎 国際 (開設) (計 5)
平成 元	212	162	28	20	6	216	11,300	—	8,000	19,300	国 際 ※赤城台 (計 1校)	秋 川 (舎監長) 大島南 (舎監長) 紅葉川中央校舎 隅田川堤校舎 (計 4)
" 2	213	163	28	21	6	218	11,300	—	8,000	19,300	単位制 (計 1校)	秋 川 (舎監長) 大島南 (舎監長) 紅葉川中央校舎 隅田川堤校舎 単位制 (普・商) (計 5)
" 3	212	162	28	21	6	217	11,300	—	8,000	19,300	単位制を新宿山吹と改称	秋 川 (舎監長) 大島南 (舎監長) 紅葉川中央校舎 隅田川堤校舎 新宿山吹 (普・商) (計 5)
" 4	212	160	28	23	6	217	11,300	—	10,000	21,300	※紅葉川中央校舎 ○赤 坂 (普→商) ○五日市 (普→商)	前年に同じ (計 5)
" 5	212	160	29	23	6	217	11,300	—	10,000	21,300	—— (な し)	前年に同じ (計 5)
" 6	213	160	28	23	6	217	11,300	—	10,000	21,300	(公立学校開設)	秋 川 (舎監長) 大島南 (舎監長) 隅田川堤校舎、新宿山吹 (普・商) (計 4)
" 7	214	161	28	23	6	218	11,300	—	10,000	21,300	※北 京橋、京橋南 飛鳥開設	前年に同じ (計 4)
" 8	214	161	28	23	6	218	11,300	—	10,000	21,300	晴海総合高校開設 (計 1校)	前年に同じ (計 4)
" 9	211	159	28	22	6	215	11,300	—	10,000	21,300	—— (な し)	前年に同じ (計 4)
" 10	211	159	28	22	6	215	11,300	—	10,000	21,300	※江東工	前年に同じ (計 4)
" 11	211	158	28	22	6	214	11,300	—	10,000	21,300	——	新宿山吹 2名から 1名となる
" 12	212	167	33	21	6	230	11,300	—	10,000	21,300	桐ヶ丘南工開設 ※羽田、城北、秋川	教頭複数配置校大幅増 (計 18)
" 13	208	169	40	21	6	239	11,300	—	10,000	21,300	※明 正、墨田川堤、 桜水商、牛込商、 清瀬東 (英語コース) ○町田工 (機械・電気情報・ 工業化学→総合情報) 墨田工 (自動車科新設)	教頭複数配置校 31 校 (計 31)
" 14	207	170	39	20	6	238	11,300	—	10,000	21,300	つばさ総合 ※城南、大森東、永福、 大泉北、館、武蔵村山東、 稲城、八王子高陵、 池袋商、港工業、 大泉学園 (国際教養コース)	同 上 (計 31)
" 15	207	173	37	19	9	238	11,300	—	10,000	21,300	芦花 ※南、大泉学園、南野 新宿 (進学重視型単位制)	同 上 (計 31)
" 16	200	167	37	18	9	231	0	—	19,000	19,000	六郷工科、千早、大江戸 上水、杉並総合 ※忍岡、北野、青梅東 砂川、本所工業	同 上 (計 31)

年 度	学 校 数	会 員 数 (人)					年 会 費 (円)				新 設 高 校 名 ※ 募集停止 ▲ 閉校名 △ 閉課程校名 ○ 転科した高校名	1. 1校で2科や2名教頭などの入会校名 2. 分校・共同実習所などの入会校名
		普 通	工 業	商 業	農 業	そ の 他	計	都 費	私 費	個 人	計	
平成 17	194	165	34	18	8		225	0	—	19,000	19,000	一橋、六本木、美原 大泉桜、上野（一橋分校） 翔陽、砂川、若葉総合 (計 26)
" 18	212	177	32	17	8		234	0	—	19,000	19,000	桜修館中等、小石川中等 両国附属中学、浅草、 青梅総合、総合工科 ※水元、深川商業、四谷商業 第二商業（全日） (計 29)
" 19	191	167	26	12	7		214	0	—	19,000	19,000	板橋有徳、橘 八王子桑志、葛飾総合 東久留米総合 ※九段（普通科）、玉川 忠生（普通科）、第二商業（定） 王子工業（工業科） 赤坂（商業科） 市ヶ谷商業（商業科） (計 23)
" 20	201	138	23	12	7	29	209	0	—	19,000	19,000	世田谷総合 ※小金井工業（工業科） ▲九段、忠生、王子工業 赤坂、市ヶ谷商業 農林、世田谷工業 王子工業、台東商業 (計 17)
" 21	201 〔九段中等含む〕	138	21	11	6	32	208	0	—	18,000	18,000	大田桜台 ▲久留米、向島工業 八王子工業、向島商業 四谷商業、第二商業 △定時制で11校 (計 16)
" 22	204 〔九段中等・分校含む〕	135	21	11	5	36	208	0	—	18,000	18,000	富士附属中学、大泉附属中学 総合芸術、総合芸術駒場校舎 町田総合、多摩科学技術 南多摩中等、三鷹中等 ▲小石川、都立大学附属 (計 16)
" 23	202 〔九段中等・分校含む〕	134	21	11	5	36	207	0	—	18,000	18,000	王子総合 ▲芸術、総合芸術駒場校舎 (計 18)
" 24	200 〔九段中等含む〕	133	21	11	5	35	205	0	—	16,500	16,500	▲北多摩 (計 18)
" 25	199 〔九段中等含む〕	133	21	11	5	39	209	0	—	16,500	16,500	(計 22)

「その他」には総合学科、産業、芸術、国際、中等教育学校、付属中学校を含む。



3. 本会のあゆみ

昭和 32 年度 12 月：文部省は「学校教育法施行規則」を改正、第 22 条に教頭職を位置づけた。

昭和 35 年度 4 月：都教委は「東京都公立学校の管理運営に関する規則」に教頭職を設け、「校務主任」を「教頭」に改め、辞令を渡した。

4 月：文部省は教頭を「管理または監督の地位にある管理職手当支給対象」に入れた。都教委は教頭を管理職と位置づけ、はじめて管理職手当 7% を支給した。

昭和 37 年度 38 年 1 月：全国高等学校教頭会は、都立両国高校で創立総会を開催した。

昭和 38 年度 6 月 20 日：都立高校校務主任会（普通科教頭会）と各職業高校校務主任会（各職業科教頭会）が合同し、「東京都立高等学校教頭会」が誕生した。当時の会員数は 140 校 148 人であった。

昭和 39 年度 40 年 1 月：「ILO78 号条約批准にともなう国内法の改正」により「人事院規則 17-0」を改正した。都教委は管理職手当を 8% に増額した。

昭和 41 年度 7 月 9 日：文部省は教頭を正式に管理職の範囲に指定した。

昭和 42 年度 6 月：都教委は教頭の管理職手当を 10% に増額した。

昭和 45 年度：都教委は教頭の管理職手当を 10% から 15% に増額、教頭会に教育研究団体会費（都費）1 校あたり 1,000 円の割で補助された。本会はこの年「全国高等学校教頭会」に正式加入し、本会会則の一部改正により、毎年交代制の代表幹事を、継続できる会長制に改め、組織を強化した。この年から東京都立高等学校教頭研究協議会が箱根三昧荘にて 1 泊 2 日で始まった。翌年からは 2 泊 3 日の研究協議会になった。

昭和 46 年度 5 月：「教育職員の給与等に関する特別措置法」の公布があり、教諭に 4% の教職調整額が支給された。

47 年 1 月：都教委は教頭が教諭なので、管理職手当を 15% から 13% に減額した。

昭和 47 年度 「教頭職の法制化」を望む世論の高まりと共に教頭会意識も強まり、「親睦会的体質」から「活動できる体質」へ改善に着手した。役員組織、学区別・学科別支部教頭会、研究部会組織、継続活動のできる独立した事務局、これらの運営に必要な資金等を調査研究し、翌年度から 3 年計画で実施することにした。

昭和 48 年度 会則を変更し、活動のための細則を新設した。また、全国高等学校教頭会と協力し事務所を新設した。本会は新役員組織と活動組織を新しくスタートさせ、本会の基礎となる大改革に着手した。都教委のご理解により、教育研究団体会費（都費）が 1 校 1,000 円から 9,000 円に増額された。そのお蔭で研究集録・会報の増刊号が刊行できた。

49 年 2 月 25 日：法律第 2 号「教員の人材確保に関する特別措置法」の公布があり、教頭職の法制化を望む世論の高まりと共に教頭会の活動に期待をよせる声が高まった。本会は全国高等学校教頭会に協力し、教頭職法制化と教頭職 1 等級格付に全力をあげ活動した。

昭和 49 年度 6 月 1 日：法律第 70 号「学校教育法の一部を改正する法律」の公布により、教頭職が法制化されたので、都教委は 10 月 1 日教頭に「教頭職」を命ずる辞令伝達式を挙行了した。

50 年 3 月 31 日：法律第 9 号「一般職の職員の給与に関する法律の一部を改正する法律」が公布される。（昭和 49 年神藤、内山調）

昭和 50 年度 4 月 1 日：都教委は教頭職の 75% を 1 等級に昇格発令した。これで「3 年計画」の 3 年目、永年の念願が法律上完成した。本会の活動のため、会則の一部改正と各種内規を設け、活動資金 1 名 5,000 円（個人負担）の特別会費を 10 月に臨時総会を開き決定した。「活動できる体質」改善 3 年計画は、全員一致協力のもとでめでたく完了した。

12 月：文部省は主任制度化のための学校教育法施行規則の改訂を公布した。

昭和 51 年度 : 石油ショックで、東京都立高等学校教頭研究協議会は宿泊研修を中止し、2 日の日程で、都内実施となった。

昭和 53 年度 6 月 8 日 : 総会で、特別会費 5,000 円から 6,000 円に改正された。

昭和 55 年度 5 月 22 日 : 法律第 57 号改正「教頭定数法」が施行され、教諭定数内で扱われていた教頭は、正式定数と定められた。その給与は地方交付税制度により、保証が受けられる。

5 月 : 事務局は渋谷区宇田川のアパートから、同区道玄坂の島田ビル 4 階へ移転した。

7 月 15 日 : 東京都条例第 71 号改正給与条例の公布と、東京都教育委員会規則第 29 条「昇給等に関する規則」の改正により、本年 4 月 1 日付で、校長は特 1 等級、教頭は 1 等級に全員格付けされた。これは昭和 52 年 12 月 21 日「給与法の一部改正」の公布によるものである。

昭和 57 年度 : 創立 20 周年を迎え、3 月 4 日「創立 20 周年記念号」を発行した。

昭和 59 年度 8 月 : 臨時教育審議会設置法が公布された。

昭和 60 年度 6 月 13 日 : 総会で、教育研究団体会費（都費）1 校あたり 9,000 円から 11,300 円へ改正され、通常会費が増額された。そのお陰で全日制・定時制合同の東京都立高等学校教頭研究協議会「研究協議会報告」創刊号が刊行できた。

昭和 62 年度 : 臨時教育審議会第 3 次答申（4 月）と最終答申（8 月）があった。これらに呼応して、研究部が中心となり、新しい時代の高校教育の改善と充実に務めていくことにした。

昭和 63 年度 5 月 : 文部省は、初任者研修法を公布した。

6 月 9 日 : 総会で、特別会費 6,000 円から 8,000 円に改正された。

平成 2 年度 9 月 : 都教委は、校長・教頭・指導主事の任用制度を改正した。

3 月 1 日 : 文部省は校長・教頭・永年勤続教諭に、期末・勤勉手当の傾斜配分加算率を通知した。

平成 3 年度 12 月 : 文部省は生徒数急減のため、学級定員を 45～40 名に学級編成基準を弾力化した。

平成 4 年度 6 月 23 日 : 本会の 30 周年記念式を挙行し、総会で、特別会費 8,000 円から 10,000 円に改正された。

9 月 : 学校 5 日制を目指し、月 1 回土曜日が休業日になる。これに対応するよう総務部が中心となり、各校の校内態勢整備に務めてきた。

（平成 4 年 赤津改訂）

平成 6 年度 4 月 : 普通科等の学級編成が 1 学級 40 人となり、入学選抜制度が、グループ選抜から各学校単独選抜となった。この制度は平成 6 年度の入学者から適用された。また、今年度から、高等学校学習指導要領が改定され、各校新教育課程の実施が始まった。本教頭会では、平成元年度から研究部が中心になって、これに伴う研究を継続してきた。

6 月 : 平成 8 年 7 月に行われる全国大会（東京大会）を主管するため、本会は企画委員会を発足させた。

12 月 : 都教委は、全都立学校の校長及び教頭に、職務に関する目標と成果及び職務に関する希望を自己申告させ、それらを参考して今年 12 月の期末手当から、勤勉手当へ成績率を導入し経過措置として人事管理の適正を図った。

平成 7 年度 5 月 : 全国大会（東京大会）準備委員会が総務部を母体にして結成され、11 月に団結式が行われた。

6 月 : 都教委は教頭問題等検討委員会を設立し、教頭の職務・任用制度・表彰制度・再雇用制度等について検討を始めた。本会からは川島副会長がその担当となった。（平成 7 年 奥井追加）

平成 8 年度 4 月・5 月 : 「補欠募集要項」、「全日制間の転学」について改正が行われた。

7 月～11 月 : 「教頭問題等検討委員会報告」（平成 8 年 3 月）、を受けて「校長及び教頭の任用に関する基準及び東京都教育委員会表彰実施要項の一部改正」（7 月）、「教頭職務の明確化のための規定整備について」（10 月）、「校長・教頭

業務実態調査について」(11月)、「東京都立学校事案決定規程の制定」(1月)等が相次いで出された。

7月23・24日：全国高等学校教頭会総会・研究協議大会が本会の主管で開催された。

10月：本会の研究部活動活性化に向けての「アンケート調査」が行われた。

1月25日：「これからの都立高校の在り方」についての答申が公表された。

平成9年度 6月：第15期中央教育審議会が「21世紀を展開したわが国の教育の在り方について」、審議のまとめを答申した。

7月：教育職員養成審議会第1次答申が提出された。

8月：教育改革プログラムの主な改訂点が公表された。

9月：都立高校の予算について、検討報告書(案)が提出された。

10月：都立高校改革推進計画の概要が公表され、向う10年間の長期計画が具体化されることになった。

本年度の特徴的な活動として、都教委(指導部)との協議(2回)、定通・事務長との話し合いが持たれた。

3月：「都立学校あり方検討委員会報告書」が答申された。

平成10年度 6月：学校教育法の一部改正により、公立の中・高一貫校の設置が可能になった。都立高校では都立大学付属高校、三宅高校が発足する予定である。

7月：「東京都公立学校の管理運営に関する規則」の一部改正が行われた。

12月：東京都教員の「人事考課に関する研究会」より中間まとめが公表された。

3月：「高等学校学習指導要領」が公布された。

教頭会は都教委と本部役員会との連絡会を2回開催し、諸課題について情報交換を行い、全教頭に周知徹底に努めた。

平成11年度 10月：都立高校改革・二次実施計画により、全日制23校、定時制17校が統廃合または再編成計画の対象として発表された。

12月：教員人事考課制度につき検討委員会報告が出され、平成12年度より実施されることとなった。

平成12年度 4月：教頭複数配置校が複数学科、工業・農業学科、単位制その他の高校を中心に15校増加された。従来からの舎監・分校を含め計18名となった。

同月：教員人事考課制度発足。

9月：全定教頭研究協議会が教育庁主催から全定教頭会の共催に変更された。教育予算削減等によるものであり、この会の意義については認識に変化なく引き続き教育庁の指導・支援を得ながら運営すべきことが確認された。

平成13年度 4月：教頭複数配置校が31校になる。都教委主催の教頭連絡会が発足。教頭会への出席のサービスの取り扱いが、職免へと変更。教頭の管理職手当が15%になる。

6月：学校運営連絡協議会が全都で実施される。

10月：学校運営組織に「主幹」の設置が決定され、実施は平成15年度からとなる。

平成14年度 4月：管理職降格制度の導入。

10月：都立学校改革推進計画、新たな実施計画の策定(15-18年)

11月：主幹選考の実施。

12月：自律経営推進予算の導入。

1月：入試学区の廃止。

平成15年度 4月：学校経営計画の導入。

11月：毎年11月第1土曜日を「東京都教育の日」とする。

11月：都からの分担金一挙全廃する。

11月：事務局は渋谷区道玄坂の島田ビル4階から、文京区湯島のナールお茶の水2階へ移転した。

1月：「東京都教育ビジョン」中間まとめ発表。

3月：16年度より教頭の名称を副校長と変更。

平成16年度 4月：補助金なしの団体となる。(会費年1人19,000円)

6月：団体名を東京都立高等学校副校長会とする。

副校長任用一次筆記試験実施最終年度。

平成17年度 4月：副校長複数配置校が26校となる。

副校長研究協議会が9月から8月に変更。

平成18年度 4月：副校長複数配置校が29校となる。

7月：26～28日 第45回全国高等学校教頭会・研究協議大会が本会の主管で開催された。

副校長研究協議会が日程の関係で8月から9月に変更。

平成19年度 4月：副校長複数配置校23校となる。

8月：副校長研究協議会が日程の関係で9月から8月に変更。

管理職再雇用・再任用制度改革される。

平成20年度 9月：学校経営における副校長の役割の明確化（検討委員会最終報告）

12月：主任教諭制度の設置（平成21年度より）

平成21年度

定通副校長会との合併協議始まる。

教員用TAIMS端末が配備される。

指導部との賀詞交歓会を実施した。

平成22年度

定通副校長会との合併が総会で承認される。

全日制部会の規約の改正が臨時総会で承認される。

副校長研究協議会後に教育懇談会を実施した。

指導部との賀詞交歓会を実施した。

成績管理サーバー、旅費システム、自己申告システムが導入される。

平成23年度

東京都立高等学校副校長協会の総会が開催された。

副校長研究協議会後に教育懇談会を実施した。

指導部との賀詞交歓会を実施した。

平成24年度

都立高校改革推進計画第一次実施計画の初年度。

各学校で宿泊防災訓練を実施した。

成績管理システムが全校に配付された。

創立50周年記念式典、祝賀会を実施した。

指導部との賀詞交歓会を実施した。

推薦入試に集団討論が導入された。

平成25年度

都立高校改革推進計画第一次実施計画の2年目。

教科主任、教科会が設置された。

各学校でビブリオバトルに取り組む。

定期考査の民間会社による調査。

名古屋塾講師からの国語を除く定期考査問題の開示請求。

道徳・奉仕（仮称）の先行実施始まる。

各学校で宿泊防災訓練を実施。

副校長研究協議会後に教育懇談会を実施した。

指導部との賀詞交歓会を実施した。



4. 本会のあゆみ一覧

本会運営は、昭和38年創立当初は幹事長制度、45年から会長制度、48年度には役員組織と部会組織の規定を設け、現在に至っている。

年 度	幹 事 長	総 会	刊 行 物
昭和38	内山（立 川）	創立総会、白鷗（一）	会員名簿（13P）
〃 39	中馬（九 段）	総会、日比谷（一）	〃 （13P）
〃 40	志村（玉 川）	〃 白鷗（一）	〃 （13P） 私費軽減（10P）
〃 41	小笹（富 士）	〃 教育会館（一）	〃 （13P）
〃 42	鈴木（向 丘）	〃 私学会館（80名）	〃 （13P） 年間行事状況（4P）
〃 43	岸野（足 立）	〃 精養軒（90名）	〃 （13P） 会報（4P）
〃 44	池田（小松川）	〃 〃 （90名）	〃 （13P） 〃 （4P）
〃 45	青木（北 園）	〃 〃 （90名）	〃 （13P） 調査（5P） 高校生徒指導研究協議会発表要旨（都教委編）不明 高校生徒指導研究協議会研究集録（都教委編）不明
全国高等学校教頭会に東京都全員入会			
〃 46	青木（北 園）	総会 出版クラブ（90名）	会員名簿（13P） 高校生徒指導研究協議会発表要旨（都教委編）33P 高校生徒指導研究協議会研究集録（都教委編）40P

年 度	○ 会 長 副 会 長	事務局長 次 長	総 会 総 務 部 会	研 究 部 部員数（部長名）	刊 行 物
昭和 47	○神 藤（桜 町） 波多野（江東商）	な し	総会、青山会館（100名） 臨時総会、私学会館（80名） 常任幹事会 5回 体質改善計画立案と実施準備	な し 高校教頭研究協議会発表要旨（都教委編） 高校生徒指導研究協議会研究集録（都教委編）	会員名簿 15P 教頭勤務実態 10P 49P 40P
〃 48	○若 林（東 ） 波多野（江東商） 内 山（鳥山工）	○神 藤	総会、青山会館（110名） 臨時総会（90名） 総務部会 14名 5回 「体質改善3年計画」初年度着手 全国教頭会事務局内に本会事務局を設置	管理研 25名（安 部） 高校研 24名（西 村） 生徒研 23名（古 賀） 高校教頭研究協議会発表要旨（都教委編） 高校生徒指導研究協議会研究集録（都教委編）	会員名簿 16P 会報創刊号 40P 研究集録創刊号 43P 67P 不明
〃 49	○内 山（鳥山工） 波多野（江東商） 安 部（北多摩）	○神 藤	総会、青山会館（100名） 総務部会 18名 6回 全国大会運営委員会（22名） 全国大会（九段会館・都市センター）	管理研 28名（吉 野） 高校研 24名（長 里） 生徒研 22名（古 賀） 高校教頭研究協議会発表要旨（都教委編） 高校生徒指導研究協議会研究集録（都教委編） 文部大臣特別出席	会員名簿 18P 会報第2号 58P 教頭職に関する調査・研究 25P 32P 48P 出席 520名

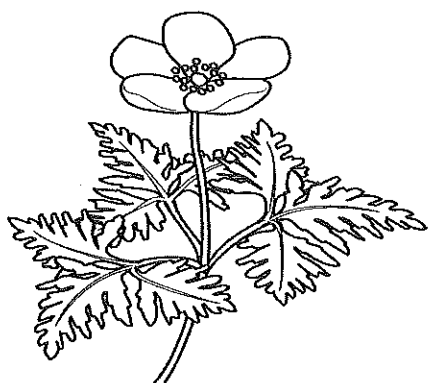
年 度	○ 会 長 副 会 長	事務局長 次 長	総 会 総 務 部 会	研 究 部 部員数 (部長名)	刊 行 物
昭和 50	○内 山 (鳥山工) 千 野 (井 草) 石 坂 (小石川)	○神 藤	総会、出版クラブ (130 名) 臨時総会、 " (85 名) 総務部会 19 名 5 回 教頭会「体質改善 3 年計画」完了	管理研 28 名 (吉 野) 高校研 26 名 (長 里) 生徒研 22 名 (小 林) 高校教頭研究協議会発表要旨 (都教委編) 高校教頭研究協議会研究集録 (都教委編)	会員名簿 18P 会報第 3 号 49P 研究集録第 2 号 72P 28P 44P
" 51	○千 野 (井 草) 西 村 (千 歳) 吉 野 (西)	○神 藤 内 山	総会、青山会館 (125 名) 総務部会 29 名 5 回	管理研 29 名 (金 井) 高校研 30 名 (長 里) 生徒研 37 名 (小 林) 高校教頭研究協議会研究集録 (都教委編)	会員名簿 19P 会報第 4 号 69P 研究集録第 3 号 75P 校長選考方法調査 5P 54P
" 52	○千 野 (井 草) 梅 本 (北 園) 伊 藤 (忍 岡)	○神 藤 内 山	総会、青山会館 (135 名) 総務部会 26 名 5 回 全国大会運営委員会 (79 名) 全国大会 (国立教育会館・プレスセンター・サンケイ会館)	管理研 35 名 (金 井) 高校研 39 名 (山 崎) 生徒研 37 名 (諏訪部) 高校教頭研究協議会研究集録 (都教委編)	会員名簿 24P 会報第 5 号 75P 教頭研究協議会資料(研究集録 第 4 号兼全国大会資料) 72P 44P 出席 736 名
" 53	○青 木 (南) 乃 方 (日 黒) 大 畑 (広 尾)	○神 藤 内 山	総会、市ヶ谷会館 (136 名) 総務部会 29 名 6 回	管理研 48 名 (杉 江) 高校研 51 名 (浅 川) 生徒研 46 名 (吉 田) 高校教頭研究協議会研究集録 (都教委編)	会員名簿 24P 会報第 6 号 81P 研究集録第 5 号 33P 46P
" 54	○青 木 (南) 吉 田 (志 村) 安 西 (農 林)	○神 藤 内 山	総会、市ヶ谷会館 (142 名) 総務部会 29 名 5 回	管理研 50 名 (高 橋) 高校研 73 名 (佐 藤) 生徒研 52 名 (大 滝) 高校教頭研究協議会研究集録 (都教委編)	会員名簿 26P 会報第 7 号 83P 研究集録第 6 号 34P 63P
" 55	○川 島 (四谷南) 鮎 沢 (戸 山) 大 滝 (葛西南)	神 藤 代 ○内 山 古 賀	総会、市ヶ谷会館 (161 名) 総務部会 30 名 5 回 全国大会準備委員会 (6 名)	管理研 59 名 (高 橋) 高校研 78 名 (田 辺) 生徒研 54 名 (松 井) 高校教頭研究協議会研究集録 (都教委編)	会員名簿 26P 会報第 8 号 82P 研究集録第 7 号 42P 49P
" 56	○鮎 沢 (戸 山) 赤 津 (大 森) 桑 原 (板 橋)	○内 山 神 藤 古 賀	総会、市ヶ谷会館 (175 名) 総務部会 32 名 5 回 全国大会運営委員会 (69 名) 全国大会 (国立教育会館・サンケイ会館・農協ホール)	管理研 65 名 (山 田) 高校研 72 名 (鈴 木) 生徒研 66 名 (白 井) 高校教頭研究協議会研究集録 (都教委編)	会員名簿 28P 会報第 9 号 88P 研究集録 (全国大会資料兼) 42P 出席 973 名
" 57	○赤 津 (大 森) 牛 込 (鷺 宮) 岡 田 (国 立)	○内 山 神 藤 古 賀	総会、市ヶ谷会館 (176 名) 総務部会 36 名 4 回	管理研 65 名 (山 田) 高校研 70 名 (鈴 木) 生徒研 69 名 (白 井) 創立 20 周年臨時号 (教頭の職務に関する研究特集) 高校教頭研究協議会研究集録 (都教委編)	会員名簿 26P 会報第 10 号 74P 研究集録第 8 号 66P 研究集録第 9 号 138P 53P

年 度	○ 会 長 副 会 長	事務局長 次 長	総 会 総 務 部 会	研 究 部 部員数 (部長名)	刊 行 物
昭和 58	○大 森 (田園調布) 剣 持 (杉 並) 鈴 木 (三 商)	○内 山 古 賀	総会、市ヶ谷会館 (174 名) 総務部会 33 名 4 回	管理研 66 名 (高 橋) 高校研 71 名 (大 山) 生徒研 72 名 (永 井)	会員名簿 26P 会報第 11 号 78P 研究集録第 10 号 66P
" 59	○高 橋 (明 正) 飯 島 (蒲 田) 村 上 (練馬工)	○内 山 古 賀	総会、市ヶ谷会館 (154 名) 総務部会 34 名 4 回 全国大会調査委員会 8 名	管理研 66 名 (高 橋) 高校研 75 名 (篠 田) 生徒研 70 名 (山 本)	会員名簿 26P 会報第 12 号 81P 研究集録第 11 号 67P
" 60	○山 本 (駒 場) 杉 内 (江 北) 清 水 (国分寺)	○内 山 古 賀	総会、市ヶ谷会館 (164 名) 総務部会 34 名 4 回 全国大会準備委員会 34 名 4 回	管理研 68 名 (高 橋) 高校研 78 名 (篠 田) 生徒研 67 名 (岡 本)	会員名簿 26P 会報第 13 号 83P 研究集録第 12 号 77P 研究協議会報告創刊号 54P
" 61	○山 本 (駒 場) 杉 内 (江 北) 小 宮 (富士森)	○内 山 古 賀 赤 津	総会、市ヶ谷会館 (177 名) 総務部会 35 名 4 回 全国大会運営委員会 64 名 4 回 全国大会 (国立教育会館、石垣ホール、ニッショウホール)	管理研 67 名 (白 井) 高校研 72 名 (篠 田) 生徒研 75 名 (白 田)	会員名簿 26P 会報第 14 号 78P 研究集録第 13 号 74P 研究協議会報告第 2 号 59P 出席 1,101 名
" 62	○中 村 (竹 早) 白 川 (新 宿) 廣 瀬 (保 谷)	○古 賀 赤 津	総会、グランドヒル市ヶ谷 (161 名) 総務部会 34 名 4 回	管理研 84 名 (高 橋) 高校研 61 名 (田 口) 生徒研 69 名 (栗 田)	会員名簿 26P 会報第 15 号 74P 研究集録第 14 号 71P 研究協議会報告第 3 号 63P
" 63	○白 川 (新 宿) 廣 瀬 (保 谷) 中村(新) (千歳丘)	○古 賀 赤 津	総会、グランドヒル市ヶ谷 (158 名) 総務部会 34 名 4 回	管理研 93 名 (鈴 木) 高校研 61 名 (田 口) 生徒研 62 名 (栗 田)	会員名簿 26P 会報第 16 号 71P 研究集録第 15 号 69P 研究協議会報告第 4 号 71P
平成 元	○崎 田 (狛 江) 奥 井 (豊 島) 小 峰 (練 馬)	○古 賀 赤 津	総会、グランドヒル市ヶ谷 (160 名) 総務部会 34 名 4 回	管理研 86 名 (木 村) 高校研 64 名 (澤 井) 生徒研 68 名 (福 島)	会員名簿 27P 会報第 17 号 73P 研究集録第 16 号 63P 研究協議会報告第 5 号 68P
" 2	○奥 井 (豊 島) 木 村 (国分寺) 和 田 (光 丘)	○古 賀 赤 津	総会、グランドヒル市ヶ谷 (151 名) 総務部会 34 名 4 回	管理研 85 名 (井 上) 高校研 65 名 (進 藤) 生徒研 68 名 (延 藤)	会員名簿 27P 会報第 18 号 74P 研究集録第 17 号 68P 研究協議会報告第 6 号 73P
" 3	○木 村 (国分寺) 和 田 (光 丘) 嶋 澤 (芝 商)	○赤 津 奥 井	総会、青山会館 (140 名) 総務部会 33 名 4 回	管理研 86 名 (野 中) 高校研 64 名 (大 室) 生徒研 67 名 (原 口)	会員名簿 27P 会報第 19 号 73P 研究集録第 18 号 68P 研究協議会報告第 7 号 69P
" 4	○高 橋 (小平南) 栗 林 (大泉学園) 井 上 (瑞穂農芸)	○赤 津 奥 井	総会、青山会館 (174 名) 創立 30 周年記念式典・祝賀会 青山会館 (120 名) 総務部会 34 名 4 回	管理研 81 名 (浦 野) 高校研 70 名 (大 室) 生徒研 66 名 (結 城) 創立 30 周年記念誌 編集委員会 (高 橋)	会員名簿 27P 会報第 20 号 78P 研究集録第 19 号 66P 研究協議会報告第 8 号 55P 創立 30 周年記念誌 81P

年度	○ 会 長 副 会 長	事務局長 次 長	総 会 総 務 部 会	研 究 部 部員数 (部長名)	刊 行 物
平成 5	○高 橋 (小平南) 浦 野 (保 谷) 井 上 (瑞穂農芸)	○赤 津 奥 井	総会、星陵会館 (142名) 総務部会 35 名 4 回	管理研 77 名 (桑 原) 高校研 71 名 (武 田) 生徒研 69 名 (横 田) 平成5年1月、奥井	会員名簿 27P 会報第 21 号 67P 研究集録第 20 号 64P 研究協議会報告第 9 号 54P 昭和45～58年度について追加
" 6	○原 口 (南 野) 川 島 (富 士) 内 海 (墨田工)	○赤 津 奥 井	総会、星陵会館 (132名) 総務部会 34 名 4 回 全国大会企画委員会 (12名) 2 回	管理研 74 名 (牛 島) 高校研 75 名 (武 田) 生徒研 68 名 (横 田)	会員名簿 27P 会報第 22 号 68P 研究集録第 21 号 64P 研究協議会報告第 10 号 53P
" 7	○原 口 (南 野) 川 島 (富 士) 白 鳥 (芝 商)	○赤 津 奥 井	総会、星陵会館 (130名) 総務部会 35 名 4 回 全国大会企画委員会 (12名) 3 回 全国大会準備委員会 (全員) 5 回	管理研 73 名 (新 妻) 高校研 75 名 (森 本) 生徒研 70 名 (横 田)	会員名簿 27P 会報第 23 号 68P 研究集録第 22 号 64P 研究協議会報告第 11 号 58P
" 8	○白 鳥 (芝 商) 安 盛 (小松川) 中 西 (井 草)	○奥 井 坪 井	総会、星陵会館 (137名) 総務部会 35 名 4 回 全国大会企画委員会 (12名) 5 回 全国大会運営委員会 (65名) 5 回 全国大会 (国立教育会館、灘尾ホール、石垣ホール)	管理研 74 名 (新 妻) 高校研 72 名 (森 本) 生徒研 72 名 (廣 見)	会員名簿 27P 会報第 24 号 82P 研究集録第 23 号 62P 研究協議会報告第 12 号 60P 出席 1,260 名
" 9	○白 鳥 (芝 商) 安 盛 (小松川) 中 西 (井 草)	○奥 井 坪 井	総会、星陵会館 (152名) 総務部会 35 名 4 回 幹事会 65 名 2 回 全国大会 (松江市) 61 名参加	管理研 64 名 (新 妻) 高校研 74 名 (東) 生徒研 77 名 (小 泉)	会員名簿 24P 会報第 25 号 60P 研究集録第 24 号 54P 研究協議会報告第 13 号 54P
" 10	○東 (富 士) 山 口 (府 中) 松 尾 (農 業)	○奥 井 坪 井	総会、星陵会館 (144名) 総務部会 35 名 4 回 幹事会 65 名 2 回 全国大会 (秋田市) 82 名参加	管理研 70 名 (新 妻) 高校研 73 名 (松尾川) 生徒研 72 名 (中 村)	会員名簿 24P 会報第 26 号 58P 研究集録第 25 号 56P 研究協議会報告第 14 号 62P
" 11	○鈴 木 (深 川) 山 口 (府 中) 齋 藤 (中野工)	○奥 井 高 橋	総会、星陵会館 (169名) 総務部会 35 名 4 回 幹事会 65 名 2 回 全国大会 (高知市) 83 名参加	管理研 72 名 (新 妻) 高校研 71 名 (小 林) 生徒研 71 名 (大 澤)	会員名簿 24P 会報第 27 号 60P 研究集録第 26 号 49P 研究協議会報告第 15 号 56P
" 12	○山 口 (府 中) 上 林 (武蔵野北) 相 川 (三 商)	○奥 井 高 橋	総会、星陵会館 (108名) 総務部会 35 名 4 回 幹事会 65 名 2 回 全国大会 (横浜市) 85 名参加	管理研 78 名 (白 木) 高校研 73 名 (小 林) 生徒研 79 名 (橋 本)	会員名簿 24P 会報第 28 号 60P 研究集録第 27 号 48P 研究協議会報告第 16 号 55P
" 13	○相 川 (三 商) 矢 嶋 (足 立) 渡 邊 (向島工)	○高 橋 白 鳥	総会、星陵会館 (65名) 総務部会 35 名 4 回 幹事会 65 名 2 回 全国大会 (長崎市) 83 名参加	管理研 78 名 (平 山) 高校研 79 名 (村 井) 生徒研 82 名 (坂 本)	会員名簿 24P 会報第 29 号 56P 研究集録第 28 号 48P 研究協議会報告第 17 号 55P
" 14	○町 田 (保 谷) 坂 本 (小平南) 合 津 (蔵前工)	○高 橋 白 鳥	総会、フロラシオン青山 (59名) 創立 40 周年記念式典・祝賀会、 フロラシオン青山 (83名) 総務部会 35 名 4 回 幹事会 65 名 2 回 全国大会 (富山市) 82 名参加	管理研 72 名 (針 馬) 高校研 80 名 (初 見) 生徒研 84 名 (梶 野)	会員名簿 24P 会報第 30 号 62P 研究集録第 29 号 49P 研究協議会報告第 18 号 55P 創立 40 周年記念誌 88P

年度	○ 会 長 副 会 長	事務局長 次 長	総 会 総 務 部 会	研 究 部 部員数 (部長名)	刊 行 物
平成 15	○坂 本 (小平南) 錦 織 (稲 城) 後 藤 (農 業)	○高 橋 白 鳥	総会、星陵会館 (28名) 総務部会 35 名 4 回 幹事会 65 名 2 回 全国大会 (岐阜市) 68 名参加	管理研 76 名 (伊 藤) 高校研 77 名 (福 嶋) 生徒研 83 名 (鹿 目)	会員名簿 22P 会報第 31 号 63P 研究集録第 30 号 44P 研究協議会報告第 19 号 47P
" 16	○錦 織 (府 中) 和 田 (南 野) 高 田 (台東商)	○高 橋 白 鳥	総会、公文書館 (150 名) 総務部会 33 名 5 回 幹事会 48 名 1 回 全国大会 (和歌山市) 44 名参加	管理研 88 名 (北 林) 高校研 68 名 (根 本) 生徒研 73 名 (山 本)	会員名簿 22P 会報第 32 号 69P 研究集録第 31 号 34P 研究協議会報告第 20 号 51P
" 17	○錦 織 (府 中) 和 田 (保 谷) 小 島 (蔵前工)	○白 鳥 松 野	総会、都教職員研修センター (約 20 名) 総務部会 33 名 5 回 幹事会 48 名 1 回 全国大会 (札幌市) 37 名参加	管理研 106 名 (古 山) 高校研 68 名 (菊 池) 生徒研 54 名 (長 島)	副校長名簿 23P 会報第 33 号 88P 研究集録第 32 号 34P 研究協議会報告第 21 号 55P
" 18	○和 田 (保 谷) 小 島 (蔵前工) 玉 井 (志 村)	○白 鳥 綿 田	総会、エミール (50 名) 総務部会 31 名 5 回 幹事会 38 名 1 回 全国大会 (東京都大田区) 233 名参加	管理研 72 名 (本 多) 高校研 78 名 (塚 本) 生徒研 84 名 (都 築)	副校長名簿 26P 会報第 34 号 101P 研究集録第 33 号 66P 研究協議会報告第 22 号 75P
" 19	○和 田 (調布北) 玉 井 (竹 台) 飯 島 (農 産)	○白 鳥 綿 田	総会、都立忍岡高校 (28 名) 総務部会 30 名 6 回 幹事会 29 名 3 回 全国大会 (山口市) 37 名参加	管理研 67 名 (有 馬) 高校研 71 名 (佐 藤) 生徒研 76 名 (都 築)	副校長名簿 27P 会報 35 号 101P 研究集録 34 号 48P 研究協議会報告 23 号 74P
" 20	○錦 織 (武 蔵) 玉 井 (竹 台) (会長代行) 都 築 (雪 谷) 高 橋 (市ヶ谷商)	○白 鳥 町 田	総会、家庭クラブ会館 (47 名) 総務部会 31 名 年 6 回 常任幹事会 23 名 年 3 回 幹事会 年 1 回 全国大会 (郡山市) 41 名参加	管理研 68 名 (下 條) 高校研 75 名 (志 村) 生徒研 66 名 (熊 谷)	副校長名簿 28P 会報 36 号 102P 研究集録 35 号 53P 研究協議会報告 24 号 58P
" 21	○玉 井 (竹 台) 都 築 (雪 谷) 守 屋 (墨田工業)	○白 鳥 針 馬	総会、家庭クラブ会館 (31 名) 総務部会 31 名 年 6 回 常任幹事会 23 名 年 3 回 幹事会 年 1 回 全国大会 (高松市) 27 名参加	管理研 71 名 (宮 本) 高校研 70 名 (仁井田) 生徒研 67 名 (鈴 木)	副校長名簿 31P 会報 37 号 121P 研究集録 36 号 44P 研究協議会報告 25 号 68P
" 22	○都 築 (雪 谷) 小 堀 (農 産)	○白 鳥 針 馬	総会、文京シビックセンター (49 名) 臨時総会、文京シビックセンター (46 名) 総務部会 31 名 年 6 回 常任幹事会 23 名 年 3 回 幹事会 年 1 回 全国大会 (宇都宮市) 22 名参加	管理研 76 名 (遠 山) 高校研 64 名 (齋 藤) 生徒研 68 名 (藪 田)	副校長名簿 30P 会報 38 号 121P 研究集録・研究協議会 報告 37 号 128P

年 度	◎ 会 長 ○ 部 会 長 副部会長	事務局長 次 長	総 会 総 務 部 会	研 究 部 部員数 (委員長)	刊 行 物
平成 23	◎堀 江 (武蔵村山) ○都 築 (大 崎) 守 屋 (総合工科) 昼 間 (葛飾商業)	○白 鳥 針 馬	総会、都立大崎高校 (62名) 全日制部会総会、" (36名) 幹事会 28名 年1回 総務部会 37名 年11回 関東大会 (甲府市) 15名参加 全国大会 (大分市) 20名参加	管理研① 34名 (木田) 管理研② 37名 (小林) 高校研① 36名 (生田) 高校研② 28名 (高島) 生徒研① 42名 (樋口) 生徒研② 30名 (岡島)	副校長名簿 30P 会報39号 120P 研究集録・研究協議会 報告38号 128P
" 24	◎小 堀 (農 産) ○守 屋 (総合工科) 都 築 (大 森) 黒 澤 (多摩工業)	○白 鳥 針 馬	総会、都立農産高校 (54名) 全日制部会総会、" (34名) 幹事会 22名 年1回 総務部会 37名 年11回 関東大会 (宇都宮市) 9名参加 全国大会 (長野市) 22名参加	管理研① 33名 (小林) 管理研② 32名 (富川) 高校研① 41名 (渡邊) 高校研② 29名 (宮川) 生徒研① 37名 (吉田) 生徒研② 33名 (難波)	副校長名簿 30P 会報40号 124P 研究集録・研究協議会 報告39号 126P 創立50周年記念誌 114P
" 25	◎中 間 (江 北) ○守 屋 (総合工科) 瀧 澤 (足立工業) 栃 倉 (飛 鳥)	○白 鳥 針 馬	総会、文京区民センター (62名) 全日制部会総会、" (36名) 幹事会 28名 年1回 総務部会 38名 年11回 関東大会 (水戸市) 13名参加 全国大会 (伊勢市) 13名参加	管理研① 30名 (高山) 管理研② 32名 (川口) 高校研① 38名 (福田) 高校研② 36名 (中山) 生徒研① 30名 (博田) 生徒研② 43名 (外川)	副校長名簿 30P 会報41号 119P 研究集録・研究協議会 報告40号 122P



2. 総務部会報告

全日制部会長 守 屋 誠 一

1. 本部の活動（総務部会・幹事会の詳細は別記）

平成 25 年

- 4月11日 (木) 都第1回総務部会（ナーベルお茶の水・会員集会室）
- 5月 2日 (木) 都会計監査・本部役員会（ナーベルお茶の水・事務局）
- 5月 9日 (木) 都第2回総務部会（ナーベルお茶の水・会員集会室）
- 5月10日 (金) 全国会計監査・本部役員会（ナーベルお茶の水・事務局）
- 5月20日 (月) 全国第1回総務部会（アルカディア市ヶ谷）
- 6月 3日 (月) 全国第1回理事研究協議会（アルカディア市ヶ谷）
- 6月 8日 (土) 都第3回総務部会（文京区民センター）
- 6月 8日 (土) 都第1回幹事会（文京区民センター）
- 6月 8日 (土) 平成25年度都副校長協会総会（文京区民センター）
- 6月 8日 (土) 平成25年度都副校長協会全日制部会総会（文京区民センター）
- 7月 4日 (木) 都第4回総務部会（ナーベルお茶の水・会員集会室）
- 7月 5日 (金) 全国第2回総務部会（アルカディア市ヶ谷）
- 7月31日 (水) 全国第2回理事研究協議会・研究部会（三重県伊勢シティホテル）
- 8月 1日 (木) 全国高等学校教頭・副校長会総会、研究協議大会（三重県伊勢観光文化会館）
- 8月 2日 (金) 全国高等学校教頭・副校長会研究協議大会（三重県伊勢観光文化会館）
- 8月19日 (月) 都副校長研究協議会（都教職員研修センター）
- 8月28日 (水) 全国研究集録編集会議（ナーベルお茶の水・事務局）
- 8月28日 (水) 第1回校長協会、経営企画室長会等連絡会議（ナーベルお茶の水・会員集会室）
- 8月29日 (木) 都第5回総務部会（ナーベルお茶の水・会員集会室）
- 10月 1日 (火) 都中間監査・本部役員会（ナーベルお茶の水・事務局）
- 10月 3日 (木) 都第6回総務部会（ナーベルお茶の水・会員集会室）
- 10月 4日 (金) 全国中間監査・本部役員会（ナーベルお茶の水・事務局）
- 10月21日 (月) 全国第3回総務部会（アルカディア市ヶ谷）
- 11月 7日 (木) 都第7回総務部会（ナーベルお茶の水・会員集会室）
- 11月 8日 (金) 関東地区研究協議会（茨城県・水戸市ホテルレイクビュー水戸）
- 11月22日 (金) 全国第3回理事研究協議会（アルカディア市ヶ谷）
- 12月 5日 (木) 都第8回総務部会（ナーベルお茶の水・会員集会室）
- 12月13日 (金) 第2回校長協会、経営企画室長会等連絡会議（都校長協会会議室）

平成 26 年

- 1月 9日 (木) 都第9回総務部会（ナーベルお茶の水・会員集会室）
- 1月21日 (火) 教育庁指導部との賀詞交歓会（レストラン～Jbien～じぇびあん）
- 2月13日 (木) 都第10回総務部会（ナーベルお茶の水・会員集会室）
- 3月10日 (月) 都第11回総務部会（ナーベルお茶の水・会員集会室）
- 3月28日 (金) 本部新旧役員引継ぎ会（ナーベルお茶の水・事務局）

2. 平成 25 年度予算

【一 般 会 計】

平成 25 年 4 月 1 日

東京都公立高等学校副校長協会 全日制部会

収 入

(単位：円)

項 目	前年度予算	前年度決算	本年度予算	備 考
一 般 会 費	2,550,000	2,512,500	2,562,500	12,500 円×205 名
研 究 助 成 金	800,000	800,000	800,000	(財)日本教育公務員弘済会東京支部
雑 収 入	500	384	500	預金利息
繰 越 金	430,984	430,984	1,201,417	平成24年度より
そ の 他	100,000	105,500	100,000	全国高等学校教頭・副校長会
合 計	3,881,484	3,849,368	4,664,417	

支 出

項 目		前年度予算	前年度決算	本年度予算	備 考
運 営 費	会 議 費	100,000	101,999	120,000	総務部会・幹事会・総会・役員会
	印 刷 費	50,000	10,105	100,000	資料・封筒・コピー・用紙等・教頭のホンネ
	旅 費 交 通 費	200,000	165,440	300,000	総務部会交通費・関東大会
	渉 外 費	100,000	40,000	100,000	講師謝礼・友好団体祝儀等
	運 搬 送 料 費	180,000	137,767	200,000	宅配郵送料等
	資 料 費	90,000	76,030	100,000	教職員名簿・日本教育会(@¥3600×20名)等
	周 年 行 事 積 立 金	300,000	100,000	100,000	平成 34 年度予定(60 周年)
	全 国 大 会 積 立 金	200,000	200,000	200,000	平成 28 年度予定
	通 信 費	100,000	92,820	200,000	郵券、振込料、HP作成費
	消 耗 品 費	30,000	2,803	30,000	事務用品等
	雑 費	2,000	645	2,000	
小 計		1,352,000	927,609	1,452,000	
事 業 費	学 科 別 副 校 長 会 費	60,000	49,885	60,000	商業・工業・農業 @¥20000×3
	地 区 別 副 校 長 会 費	360,000	359,600	360,000	@20000×6 地区(A,C) @40000×6 地区(B,D)
	地 区 研 究 部 会 費	60,000	55,000	60,000	@¥5000×12 地区(全地区)
	研 究 協 議 会 費	40,000	0	40,000	
	会 員 名 簿	60,000	56,091	100,000	A4 550 部
	会 報 費	450,000	446,775	500,000	A4 650 部
	研究集録・研究協議会報告	350,000	312,000	400,000	A4 650 部
小 計		1,380,000	1,279,351	1,520,000	
維 持 費	慶 弔 費	30,000	19,872	30,000	香典・見舞金等
	人 件 費	650,000	544,000	650,000	全国分担金(実質 7/100)
	家 賃 ・ 光 熱 費	450,000	389,000	450,000	全国分担金(実質 14/100)
	小 計	1,130,000	952,872	1,130,000	
予 備 費		19,484	12,320	562,417	
合 計		3,881,484	3,172,152	4,664,417	

全国会費預かり金

項 目	前年度予算	前年度決算	本年度予算	備 考
全 国 会 費	816,000	804,000	820,000	全都立校副校長分(@¥4000×205 名)

平成 25 年度積立金会計

平成 25 年 4 月 1 日

東京都公立高等学校副校長協会 全日制部会

〈創立 60 周年積立金〉

(単位：円)

項 目	繰越金	本年度積立予定額	合 計	備 考
創立 60 周年積立金	1,300,000	100,000	1,400,000	平成 34 年度実施予定
雑 収 入	1,199	150	1,349	預金利息
合 計	1,301,199	100,150	1,401,349	

〈全国大会積立金〉

(単位：円)

項 目	繰越金	本年度積立予定額	合 計	備 考
全国大会積立金	1,200,000	200,000	1,400,000	平成 28 年度実施予定
雑 収 入	2,376	150	2,526	預金利息
合 計	1,202,376	200,150	1,402,526	

(注) 日本教育会に都会計より振込して、以下の人たちが入会する。

- ・ 常任幹事 15 名
 - ・ 都部会長 (1)・都副部会長 (2) 3 名
 - ・ 全国会長 (1)・副会長 (1)・会計 (1) 3 名
- 21 名

1 人 円 3,600 (年間)

3. 平成 25 年度事業報告

平成 26 年 3 月 31 日

東京都公立高等学校副校長協会 全日制部会

会 合

幹事会 6月 8日(土) 文京区民センター
総 会 6月 8日(土) 文京区民センター
副校長研究協議会 8月19日(月) 都教職員研修センター
総務部会 4月11日(木) 5月 9日(木) 6月 8日(土) 7月 4日(木) 8月29日(木)
10月 3日(木) 11月 7日(木) 12月 5日(木) 1月 9日(木) 2月13日(木)
3月10日(月) ナーベルお茶の水 会員集会室他
指導部との賀詞交歓会 1月21日(火) レストラン～Jbien～ じぇびあん
地区支部副校長会 原則として副校長連絡会の日 地区ごとに開催
学科支部副校長会 原則として副校長連絡会の日 (3学科)
研究部会 各地区 委員会ごとに開催

総務部会

- 1 諸会議についての協議と原案の作成、学科・研究部相互の連絡・情報交換を行った。
- 2 副校長名簿、研究集録・研究協議会報告等を編集し発行した。
- 3 教育庁、全国高等学校教頭・副校長会、各種友好団体との連絡・情報交換・陳情・提言を行った。
- 4 教育庁、校長協会、経営企画室長会等関係団体との連絡・協議・連携の維持を行った。
- 5 全国高等学校教頭・副校長会第 52 回全国大会（三重大会）への参加と支援を行った。
- 6 「教頭のホンネ（改訂版）」（全国教頭・副校長会と共同出版）を、新任副校長に配付した。
- 7 ホームページ及びメーリングリストの管理・運営を行った。

研究部会

- 1 全会員が管理運営・高校教育・生徒指導の 3 部会 6 委員会に分かれ研究協議を行った。
- 2 研究成果を研究集録・研究協議会報告にまとめ、教育庁・都立高等学校長・全定通副校長に配付した。
- 3 都立高等学校副校長研究協議会には各委員会より各 1 主題の発表を行った。
全国高等学校教頭・副校長会の全国大会には 1 主題（生徒研）の研究発表を行った。東部 B が担当した。
全国高等学校教頭・副校長会の(特別研究)は各部会が共同して協力し、その成果を調査研究集に発表した。
- 4 都立高等学校副校長研究協議会発表担当者は、東部 C（管理研第 1）・西部 C（管理研第 2）・中部 A（高校研第 1）・中部 C（高校研第 2）・西部 A（生徒研第 1）・東部 A（生徒研第 2）であった。

全国大会

- 1 期 日 7月 31日(水) 全国研究部会・全国理事会
8月 1日(木) 総会・研究協議会(分科会)
2日(金) 研究協議会(分科会)
- 2 開催地 三重県伊勢市 伊勢市観光文化会館 都の参加者 13 名

関東地区高等学校教頭・副校長会研究協議会

- 1 期 日 11月 8日(金)
- 2 開催地 茨城県水戸市
- 3 主 管 茨城県高等学校教頭・副校長会 都の参加者 13 名

刊行物

総会資料（平成25年度版）	6月刊行	21p	教育庁・校長・全定通副校長等に配布	500部
平成25年度副校長名簿	6月刊行	30p	〃	550部
研究集録・研究協議会報告(第40号)	平成26年1月刊行	128p	〃	650部
会報（第41号）	平成26年3月刊行	119p	〃	550部

4. 副校長協会 総会

平成25年6月8日(土) 14時40分～16時00分

場所 文京区民センター3階 3-A会議室

講演「都立高校活性化のための副校長の役割」

前都立荒川商業高等学校長

森田 聖一 先生

開会の辞……………司会 定時制副部会長

市川 政弘 (中野工業)

副校長協会挨拶……………全日制部会長

守屋 誠一 (総合工科)

東京都教育委員会挨拶……………指導部主任指導主事

永森 比人美 先生

東京都公立高等学校長協会挨拶……………協会長

柴田 哲 先生 (墨田川)

議事

1. 平成24年度事業報告……………会 長

2. 平成25年度役員選出……………会 長

3. 新会長挨拶……………新会長

4. 副会長他役員紹介……………新会長

5. 平成25年度常任幹事承認……………新会長

6. 平成25年度各部会役員委嘱……………新会長

7. 平成25年度事業計画 (案) について

……………新会長

閉会の辞……………司会 定時制副部会長

市川 政弘 (中野工業)

注 議事はいずれも異議なく承認された。

(出席者 62名)

5. 全日制部会 総会

平成25年6月8日(土) 16時05分～16時50分

場所 文京区民センター3階 3-A会議室

開会

部会長挨拶

議事

1. 平成24年度事業報告……………部 会 長

2. 同 決算報告……………会 計

3. 同 会計監査報告……………会計監査

4. 平成25年度役員選出……………部 会 長

5. 同 全日制部会幹事について……………部 会 長

6. 正副会長他紹介 (全国推薦者を含む)

常任幹事・会計・会計監査・研究部長・

委員長・事務局等紹介……………新部会長

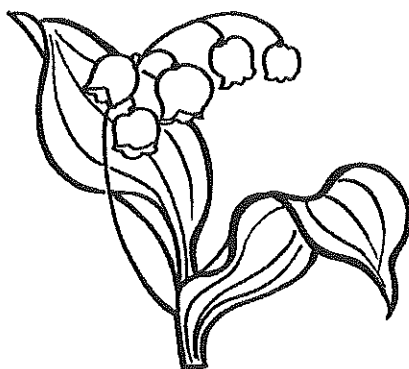
7. 平成25年度事業計画(案)について・新部会長

8. 同 予算案について……………新 会 計

閉会

注 議事はいずれも異議なく承認された。

(出席者 36名)



6. 幹 事 会

総会に次ぐ機関で主に総会提出議案や全日制部会や定通制部会からの原案を審議する。

平成25年6月8日（土）14時15分～14時35分

場所 文京区民センター3階 3-A会議室

出席者 会長、副会長、会計、会計監査、
全日制常任幹事、定通制常任幹事
計 28名

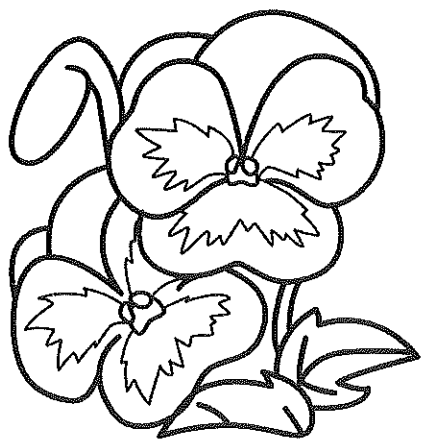
【会議次第】

司会・議長 部会長

- 1 会長挨拶……………会 長
- 2 平成24年度事業報告……………会 長
- 3 平成25年度役員について……………会 長
- 4 平成25年度事業計画について……………会 長
- 5 総会の運営について……………会 長
- 6 研究協議会の実施について……………会 長

※幹事会は年1回（6月）に開催される。

（出席者 22名）



7. 総務部会

第1回総務部会

第1回総務部会は旧年度総務部員及び新年度役員候補者で開催

平成25年4月11日（木）19時00分～20時30分

於、ナベールお茶の水2階 会員集会室

- 1 部会長挨拶……………守屋部会長
- 2 自己紹介……………出席者
- 3 昨年度の報告と今年度の課題
（事業計画他）……………守屋部会長
- 4 会合日程その他の連絡……………事務局
- 5 新役員推薦（会長、副会長、会計、会計監査）
……………守屋部会長
- 6 全国役員候補（会長、副会長、会計）推薦
……………守屋部会長
- 7 新旧役員（全国、都関係）挨拶…新旧役員
- 8 全国高等学校教頭・副校長会報告
……………錦織全国会長
- 9 前期会費の集金について……………守屋部会長
- 10 各地区での活動について……………守屋部会長
- 11 地区・学科からの報告……………各常任幹事他
- 12 事務局より……………事務局

第2回総務部会

平成25年5月9日（木）19時00分～20時30分

於、ナベールお茶の水2階 会員集会室

- 1 部会長挨拶……………守屋部会長
- 2 平成24年度事業報告と会計報告
……………守屋部会長、志村・瀧澤会計
- 3 “ 会計監査報告
……………昼間・杉本会計監査
- 4 平成25年度役員組織（都・全国候補）
……………守屋・錦織会長
- 5 平成25年度事業計画と予算案
……………守屋部会長、会計
- 7 事務局より……………事務局
- 8 地区、学科からの報告・意見等……常任幹事
- 9 その他

第3回総務部会

平成25年6月8日(土) 13時40分～14時10分

於、文京区民センター3階 3-A会議室

- 1 部会長挨拶……………守屋部会長
- 2 平成24年度事業報告と会計報告
……………守屋部会長、志村・瀧澤会計
- 3 〃 会計監査報告
……………昼間・杉本会計監査
- 4 平成25年度役員組織（都・全国候補）
……………守屋・錦織会長
- 5 平成25年度事業計画と予算案
……………守屋部会長、会計
- 6 事務局より……………事務局
- 7 地区、学科からの報告・意見等………常任幹事
- 8 その他

第4回総務部会

平成25年7月4日(木) 19時00分～20時30分

於、ナーベルお茶の水2階 会員集会室

- 1 部会長挨拶……………守屋部会長
- 2 全国高等学校教頭・副校長会報告
……………錦織全国会長
- 3 全国大会（三重大会）について
……………錦織全国会長
- 4 副校長協会総会の総括……………守屋部会長
- 5 副校長研究協議会について……………守屋部会長
- 6 校長協会、企画室長会との第1回連絡会について……………守屋部会長
- 7 地区、学科からの報告……………常任幹事
- 8 事務局より……………事務局
- 9 協議・情報交換・今後の課題などについて
……………守屋部会長他
- 10 その他

第5回総務部会

平成25年8月29日(木) 19時00分～20時30分

於、ナーベルお茶の水2階 会員集会室

- 1 部会長挨拶……………守屋部会長
- 2 全国高等学校教頭・副校長会報告
（三重大会について）……………玉井全国会長
- 3 京都大会（東京の発表）について
……………守屋部会長
- 4 副校長研究協議会の報告・反省
……………守屋部会長
- 5 「研究集録・研究協議会報告」の作成につ

いて……………守屋部会長

- 6 校長協会、企画室長会との第1回連絡会について……………守屋部会長
- 7 関東地区高等学校教頭・副校長会研究協議会について……………守屋部会長
- 8 後期会費納入のお願い……………守屋部会長
- 9 地区、学科の報告……………常任幹事
- 10 事務局より……………事務局
- 11 協議・情報交換・今後の課題などについて
……………守屋部会長
- 12 その他

第6回総務部会

平成25年10月3日(木)19時00分～20時30分

於、ナーベルお茶の水2階 会員集会室

- 1 部会長挨拶……………守屋部会長
- 2 全国高等学校教頭・副校長会報告
……………玉井全国会長
- 3 平成26年度全国大会（京都）について、発表地区など……………守屋部会長
- 4 関東地区高等学校教頭・副校長会研究協議会について……………守屋部会長
- 5 「研究集録・研究協議会報告第40号」の作成について……………守屋部会長
- 6 会計中間報告、会計監査報告
……………会計・会計監査
- 7 後期の会費納入のお願い……………守屋部会長
- 8 会報第41号（平成25年度）の編集について
……………守屋部会長
- 9 地区、学科の報告……………常任幹事
- 10 事務局より……………事務局
- 11 今後の課題（全国大会への参加、来年度以降の役員）……………守屋部会長
- 12 その他

第7回総務部会

平成25年11月7日(木) 19時00分～20時30分

於、ナーベルお茶の水2階 会員集会室

- 1 部会長挨拶……………守屋部会長
- 2 全国高等学校教頭・副校長会報告
……………玉井全国会長
- 3 関東地区高等学校教頭・副校長会研究協議会について……………守屋部会長
- 4 指導部との賀詞交歓会について
……………守屋部会長

- 5 後期の会費納入のお願い……………守屋部会長
- 6 会報第41号（平成25年度）の編集について
……………守屋部会長
- 7 地区、学科の報告……………常任幹事
- 8 事務局より……………事務局
- 9 協議・情報交換・今後の課題などについて
……………守屋部会長
- 10 その他

第8回総務部会

平成25年12月5日(木) 19時00分～20時30分

於、ナーベルお茶の水2階 会員集会室

- 1 部会長挨拶……………守屋部会長
- 2 全国高等学校教頭・副校長会報告
……………玉井全国会長
- 3 来年度以降の役員選出について
……………守屋部会長
- 4 関東地区高等学校教頭・副校長会研究協議
会報告……………守屋部会長
- 5 指導部との賀詞交歓会について
……………守屋部会長
- 6 後期の会費納入について……………守屋部会長
- 7 校長協会・企画室長会との第2回連絡協議
会について……………守屋部会長
- 8 地区、学科の報告……………常任幹事
- 9 事務局より……………事務局
- 10 協議・情報交換・今後の課題などについて
……………守屋部会長
- 11 その他

【講演】

「今だから話せること」

元つばさ総合高等学校長

山上 隆男 先生

第9回総務部会

平成26年1月9日(木) 19時00分～20時30分

於、ナーベルお茶の水2階 会員集会室

- 1 部会長挨拶……………守屋部会長
- 2 全国高等学校教頭・副校長会報告
……………玉井全国会長
- 3 来年度以降の役員選出について
……………守屋部会長
- 4 指導部との賀詞交歓会について
……………守屋部会長
- 5 校長協会・企画室長会との第2回連絡協議

- 会について……………守屋部会長
- 6 会報第41号（平成25年度）の編集について
……………守屋部会長
- 7 地区、学科の報告……………常任幹事
- 8 事務局より……………事務局
- 9 協議・情報交換・今後の課題などについて
……………守屋部会長
- 10 その他

第10回総務部会

平成26年2月13日(木) 19時00分～20時30分

於、ナーベルお茶の水2階 会員集会室

- 1 部会長挨拶……………守屋部会長
- 2 全国高等学校教頭・副校長会報告
……………玉井全国会長
- 3 平成26年度年間行事予定・役員選出につい
て……………守屋部会長
- 4 地区、学科の報告……………常任幹事
- 5 会報第41号の作成について……………事務局
- 6 地区別副校長会費・地区研究部会費の報告
について……………事務局
- 7 事務局より……………事務局
- 8 協議・情報交換・今後の課題などについて
……………守屋部会長
- 9 その他

第11回総務部会

平成26年3月10日(月) 19時00分～20時30分

於、ナーベルお茶の水2階 会員集会室

- 1 部会長挨拶……………守屋部会長
- 2 全国高等学校教頭・副校長会報告
……………玉井全国会長
- 3 地区、学科の報告及び今年度の反省
……………常任幹事
- 4 事務局より……………事務局
- 5 協議・次年度の活動目標
平成26年度活動計画、体制作り、副校長研
究協議会、異動などについて
……………守屋部会長
- 6 その他

8. 指導部との賀詞交歓会

平成26年1月21日(火) 19時00分～21時00分

場所 レストラン～Jbien～ じぇびあん

文京区春日1-6-30 講道館B1

次第

司会 瀧澤全日制副部会長

開会のことば……………中間副校長協会会長

教育委員会挨拶……………高野教育庁教育監

乾 杯……………出張指導企画課長

歓 談

指導部挨拶……………金子指導部長

指導部出席者紹介

副校長会挨拶……………玉井全国会長

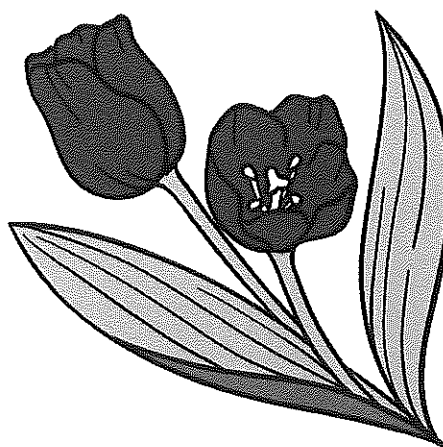
副校長協会出席者紹介

(東部・中部・西部毎紹介)

歓 談

閉会のことば……………守屋全日制副部会長

この指導部との賀詞交歓会は、副校長全員に呼びかけて実施しているものである。今年度で5回目となる。参加者は教育庁から教育監、指導部から部長、課長、主任指導主事、統括指導主事が17名、副校長は48名、合計65名であった。指導部と副校長協会との交流ができた。



9. 特 別 委 員 会

全日制部会長 守 屋 誠 一

- 1 東京都教育管理職等連絡会理事会
出席実績無し

- 2 東京都教職員互助会運営委員会
出席実績無し

- 3 教育公務員弘済会評議委員会
出席実績無し

- 4 日本教育会東京支部役員

理 事

玉井 篤（日本橋） 中間 均（江北） 守屋 誠一（総合工科）

評議委員

瀧澤 隆司（足立工業） 梶倉 和則（飛鳥） 鹿子木由紀夫（足立東） 須永 修爾（白鷗）
柴田 元也（八潮） 黒後 茂（東） 鵜澤 裕（杉並総合） 小林 正人（深沢）
橘田 進（王子総合） 栗原 爾（石神井） 白野 一治（永山） 鈴木 真人（日野台）
井戸 康文（小金井北） 羽生 英雄（小平西） 守屋 文俊（工芸） 高山 昭彦（赤羽商業）
吉野 剛文（農芸） 加瀬きよ子（荒川商業） 杉本 悦郎（武蔵付属中）

・日本教育会の諸事業に協力し、支部事業（総会・研修会・支部報発刊など）を企画・実施する

- 5 東京都公立高等学校PTA連合会相談役
特になし

- 6 周年行事、開校・閉校式典等
特になし

3. 主な活動報告

1. 全国高等学校教頭・副校長会

1. 会 合

5月 10日 (金)	会計監査・本部役員会	東京・事務局
5月 20日 (月)	第1回総務部会	東京・アルカディア市ヶ谷
6月 3日 (月)	第1回理事研究協議会 (含、地区研究協議会)	東京・アルカディア市ヶ谷
7月 5日 (金)	第2回総務部会	東京・アルカディア市ヶ谷
7月 31日 (水)	研究部会 第2回理事研究協議会	三重県・伊勢シティホテル 〃
8月 1日 (木)	総会・研究協議大会 (第1日)	三重県伊勢市観光文化会館
8月 2日 (金)	研究協議大会 (第2日)	〃
10月 4日 (金)	中間会計監査・本部役員会	東京・事務局
10月 21日 (月)	第3回総務部会	東京・アルカディア市ヶ谷
11月 22日 (金)	第3回理事研究協議会	東京・アルカディア市ヶ谷

2. 地区研究協議会

北海道地区	① 5月15日～16日 帯広支部	東海地区	全国大会と兼ねる	三重県主管
	② 11月15日 石狩支部	近畿地区	10月25日	兵庫県主管
東北地区	10月31日～11月1日 青森県主管	中国地区	8月19日～20日	広島県主管
関東地区	11月 8日 茨城県主管	四国地区	10月24日～25日	香川県主管
東京地区	8月19日 東京都	九州地区	11月 7日～ 8日	沖縄県主管
北信越地区	11月14日～15日 福井県主管			

3. 刊 行 物

・発表資料集	第33号	平成25年 7月	110頁 2,100部	参加者・県教委・校長会などに配付
・会報	第85号	〃 7月	24頁 6,500部	会員・県教委・校長会などに配付
・全国要覧	第36号	〃 9月	52頁 6,500部	〃
・会報	第86号	〃 10月	32頁 6,500部	〃
・研究集録	第38号	〃 11月	244頁 6,500部	〃
・創立50周年記念誌	〃	〃 11月	194頁 6,500部	〃
・全国大会集録 (三重県)	〃	〃 12月	128頁 6,500部	〃
・会報	第87号	平成26年 1月	20頁 6,500部	〃
・調査研究集	第37号	〃 2月	113頁 6,500部	〃

4. 研 究 発 表

県・題 (東京 5 題、三重 4 題、千葉 2 題、奈良 2 題、広島 2 題、12 県各 1 題)

部 門	全 国 大 会	研 究 集 録	計
管理運営	三重、広島、青森、福井、東京(誌上)	岩手、栃木、茨城、東京、三重	8県 10題
高校教育	奈良、千葉、香川、三重、東京(誌上)	秋田、群馬、京都、奈良	8県 9題
生徒指導	長崎、三重、北海道、東京、東京(誌上)	千葉、静岡、広島	7県 8題

5. 特 別 調 査

本年度四国地区 (調査研究集に掲載)、来年度は関東地区が担当。

2. 東京都立高等学校副校長研究協議会

東京都公立高等学校副校長協会

平成 25 年度東京都立高等学校副校長研究協議会を教育庁指導部及び各地区の学校経営支援センターのご支援をいただき平成 25 年 8 月 19 日(月)に東京都教職員研修センター研修室及び視聴覚ホールを会場として 184 名の副校長が参加し開催いたしました。

研究主題を『都民に信頼される魅力ある都立高校づくりを目指して』として、4 つの分科会(管理運営、高校教育、生徒指導、定時制通信制)において 7 つの主題の研究発表及び研究協議を行い、全体会においては「都立高等学校等に在籍する発達障害のある生徒の現状と支援について」と題して講話を頂きました。

分科会(午後 1 時 30 分から午後 3 時)

第 1 分科会(全日制 管理運営研究部)

803(2)研修室

発表① 主題:「組織的な学校経営の強化
～副校長職としての有効な関わり方～」

第一委員会 東部 C チーム

高山 幹人(晴海総合)

柴田 元也(八潮)

桐野 勝利(六郷工科)

発表② 主題:「教科会と教科主任の設置に基づく組織的な教科指導の取組と副校長の関わり」

第二委員会 西部 C チーム

丸茂 聡(武蔵野北)

川口 典子(清瀬)

指導講評:教育庁指導部高等学校教育指導課
指導主事 堀江 敏彦 先生

第 2 分科会(全日制 高校教育研究部)

803(3)研修室

発表① 主題:「新学習指導要領の全面実施に当たっての指導の工夫に関する取組について」

第一委員会 中部 A チーム

福田 洋三(杉並)

発表② 主題:「宿泊防災訓練における意識の変化と副校長の関わりについて」

第二委員会 中部 C チーム

廣末 修(高島)

指導講評:教育庁指導部高等学校教育指導課

指導主事 佐藤 幸司 先生

第 3 分科会(全日制 生徒指導研究部)

803(1)研修室

発表① 主題:「一泊二日宿泊防災訓練参加生徒への指導に関する各校の取組についての研究」

第一委員会 西部 A チーム

博田 英明(野津田)

発表② 主題:「高校における特別支援教育の充実～特別支援教育コーディネーターの果たす役割～」

第二委員会 東部 A チーム

外川 裕一(南葛飾)

指導講評:教育庁指導部高等学校教育指導課
指導主事 松鶴賢二郎 先生

第 4 分科会(定時制・通信制)

802 研修室

発表① 主題:「都立定時制・通信制高等学校における学校評価について
～平成 24 年度学校運営連絡協議会実施報告書における学校評価を中心に～」

東部研究委員会

長田 学(葛西南)

指導講評:教育庁指導部高等学校教育指導課
統括指導主事 小林 正人 先生
各分科会とも充実した調査研究による発表が行われ、活発な協議のあと貴重な指導助言を頂きました。

全体会(午後 3 時 20 分～午後 5 時視聴覚ホール)

玉井篤全国高等学校教頭・副校長会長、江本敏男指導部高等学校教育指導課長よりご挨拶を頂いた後、「都立高等学校等に在籍する発達障害のある生徒の現状と支援について」と題して、星政典都立学校教育部特別支援教育課長から講話を頂きました。

直面する課題や今後の対応について理解を深めることができました。

全日制副部会長 瀧澤 隆司(足立工業) 記

3. 関東地区高等学校教頭・副校長会 研究協議会報告

1 はじめに

関東地区高等学校教頭・副校長会研究協議会は「関東地区高等学校教頭・副校長の連携を図るとともに、高等学校教育の諸問題について、研究協議を実施し、時代の進展に即応する教頭・副校長としての資質の向上と高校教育の充実を図る」ことを目的に昭和 62 年に始まり、平成 25 年度茨城大会で 27 回を迎えている。

東京、茨城、栃木、群馬、埼玉、千葉、神奈川、山梨の各県と神奈川県横浜市、川崎市、横須賀市の 8 都県、3 市の教頭会及び副校長会で構成され、開催は東京を除く各県・市の持ち回りとなっている。

平成 25 年度の茨城大会には、各都県市より 187 名を越える参加者が集まった。東京からは、事務局を含め 15 名が参加した。

2 平成 25 年度茨城大会の概要

期日 平成 25 年 11 月 8 日(金)

会場 ホテルレイクビュー水戸

J R 常磐線 水戸駅南口から徒歩約 3 分
(開会式)

開式のことば

国歌斉唱

茨城県高等学校教頭・副校長会長あいさつ

全国高等学校教頭・副校長会長あいさつ

来賓あいさつ

茨城県教育庁高校教育課長

茨城県高等学校長協会長

閉式のことば

諸連絡・日程説明

<講演>

講師 山海 嘉之 先生

(筑波大学大学院教授)

演題 「革新的ロボット H A L の開発と未来開拓への挑戦
～課題解決、新産業創出、人材育成の同時展開～」

<研究協議>

◇テーマ

「新たな未来を拓く教育の推進

～強い自信と熱い思いをもって～」

◇発表

- ① 栃木県立栃木農業高等学校 教頭 羽山 潔
- ② 群馬県立桐生南高等学校 教頭 関野 豊
- ③ 埼玉県立飯能南高等学校 教頭 安藤龍嗣
- ④ 東京都立杉並高等学校 副校長 福田洋三

(閉会式)

開式のことば

茨城県高等学校教頭・副校長会長あいさつ

次年度開催県 群馬県高等学校教頭・副校長会 会長あいさつ

閉式のことば

3 研究発表の要旨

- ① 栃木県立栃木農業高等学校 教頭 羽山 潔
「栃木県の県立学校における校務の効率化・迅速化に向けての取組」

学校を取り巻く環境の変化により、学校及び教職員が対応すべき課題の複雑化・多様化が進んでいる。また、それに伴い、校務に関わる教職員の時間的負担や精神的負担感が増大している現状がある。このような中で、新たな未来を開く教育の推進を図るためには、教員の多忙な現状を改善することが不可欠である。

この調査は、各学校で行われている校務の効率化・簡素化・迅速化に関係した取組について調査し、各学校におけるさらなる校務改善につなげていくことを目的とした。

○会議・打合せの持ち方、○学校行事の精選・見直し・作品募集・調査など依頼事項への対応、○校務分掌の見直し、校務処理の工夫、○部活動の工夫、○職員間の協力体制、人間関係づくりについて調査した。

今回の調査では、各学校が校務の効率化・迅速化のため様々な改善に取り組んでいることが分かった。しかし、何か一つの取組により劇的に業務を改善するような処方もまたないことも事実である。各学校では、地道ではあるが一つの校務に関わる事項を検討し、小さなことでも改善を図って行くことが求められる。

- ② 群馬県立桐生南高等学校 教頭 関野 豊
「保護者が学校に求めるもの」

群馬県の桐生・みどり地区の教頭・副校長部会での平成 23～24 年度の研究では、この地区にある普通高校・専門高校・特別支援校の多様な特性から得られるデータを活かした主題を設定することにした。その際に、教頭業務固有の視点―即ち、校長補佐・校務整理の視点を強く意

識した研究ができれば、と考えた。そこで、「保護者が学校に求めるもの」というテーマのもと、保護者の視点を活かして学校経営のヒントを探る研究を実施することにした。

当然の結論であるが、学校の特色のための特色づくりを保護者は求めている。むしろ、万古不易のオーソドックスな視点を持っている。生徒が卒業後に歩む人生に対し、学校がどのような支援を提供してくれるかに最大の関心があると言って良いだろう。保護者の求めに真摯に各校が応じようとする中で、否が応でも各校の特色が現れるであろう。

学年や教科受講者、部活動といった学校の中の集団としての成果を求める教職員の発想と、一人一人の生徒に視点が集中する保護者の思いの双方が重なってくる領域に管理職の立ち位置がある。こういった中で、トップにいる校長の最終判断のための補佐を、絶えざる校務整理の業務を通して担う教頭の機能は、保護者の思いと学校の営為をつなぐ仕事そのものであると言える。あまりにも平凡な結論であるが、これが研究を通して得られた現時点の展望である。

③ 埼玉県立飯能南高等学校 教頭 安藤龍嗣 「新学習指導要領に対応した教育課程編成上の工夫について」

新学習指導要領に基づく教育課程編成が大詰めを迎えているこの時機に、各学校それぞれの教育課程編成上の工夫等を整理・報告することによって、今後、自校の教育活動を振り返る上で第一に参照される資料となろう。

このような問題意識をもって教育課程編成と見直しの視点を考えるべく、西部地区研究部会では「新学習指導要領に対応した教育課程編成上の工夫について」を研究テーマに設定した

調査内容は、「目指す学校像」に向けた教育課程編成、選択科目等の設置状況、学校設定科目の設置状況、理数教育の充実、教育課程の基本方針や手順である。

今回のアンケート結果からは各学校が創意工夫をしながら教育課程編成をしてきたことがわかる。引き続き、各学校においては、新学習指導要領の理念の実現に向けた授業改善等生徒の学力向上への取組が求められてくるが、今後も各学校が、情報を共有しながら、進めていくことが必要である。

④ 東京都立杉並高等学校 副校長 福田洋三 「新学習指導要領の全面実施に当たっての指導の工夫に関する取組について」

平成 25 年度入学生から、新学習指導要領が高等学校で全面実施され、各校は取組を始めている。都立高等学校においては、平成 23 年度から学力向上開拓推進事業が始まり、来年度からは、各校が学力スタンダードを策定して、より明確な学力の向上に取り組む。また、「道徳・奉仕(仮称)」についても来年度からすべての都立高等学校で実施することになっている。

各校の取組状況等についてアンケート調査を行い、結果を分析して方策を探ることとした。

学力スタンダードの策定により、各校の生徒実態に適した学力向上の到達目標が明確になることが確認できた。言語活動の充実を図る取り組みは、現状でも様々な工夫が多く教科・科目等で実践されている。道徳教育については、高校で道徳の時間を設定して行うことは手探りの状態であるが、生徒たちの、人間としてよりよく生きていく力を培うことを意識した取組が重要である。一方、課題としては、教員が新学習指導要領と改革推進計画の内容を十分に理解し、実践に生かせるようになるための研修を各校で充実させることの必要性が指摘されている。

このような現状において副校長の役割で大切なことは、各校の取組の情報を得て、自校においてリーダーシップを発揮することである。

4 平成 26 年度関東地区高等学校教頭・副校長会研究協議会開催要項(案) ー抜粋ー

主催 関東地区高等学校教頭・副校長会研究協議会

主管 群馬県高等学校教頭・副校長会

期日 平成 26 年 12 月 5 日(金)

会場 高崎シティギャラリー コアホール

発表 ①神奈川 ②山梨 ③茨城 ④千葉

5 おわりに

会場は水戸駅近くで便利であった。

講演の山海嘉之先生の H A L のお話しは、日本の科学技術の素晴らしさを再確認させてくれるものであった。

事務局 記

4. 地区別支部副校長会報告

1. 東部 A 地区副校長会

地区幹事として過ごした 1 年間

前任の住吉先生のあとを引き継ぎ、何となく幹事になってしまった感があったが、この一年間で様々なことを学ばせていただいた。定刻で退庁できる日はほとんどないが、総務部会の日だけは、堂々と「出張なのでお先に」と学校を後にしてお茶の水に向かった。早めにナールに着き、会議室でのんびりとサンドイッチをはおばりながら、新聞など読んで過ごす時間が、私にとって月に一度の至福のひとつときであった。

総務部会では、教育に関する最新の動向をつかむこともできた。また、他校が抱えている課題、それは遠からずそれぞれの勤務校にも降りかかってきそうな問題である場合が多く、副校長連絡会後のチーム別の情報交換会の場で各校の先生方と共有し、善後策を練ることもできた。

また、講演会では、普段めったにお目にかかることができないような講師から貴重な話を聞かせていただき、大きなヒントを得ることもできた。

以下にこの一年間、副校長連絡会やその後のチーム別の情報交換会の議事録を抜粋して振り返ってみたい。

(5 月) 急速に広がった SNS に絡む生徒同士のトラブルが話題に上った。また、江北高校定時制、清水副校長の基調報告を受けて、学校ツイッターの活用状況に対する情報交換が行われた。

南葛飾高校では、返信はしない指針に沿って、行事や天候等に関して発信している。1 日 1 回、ミニブログのつもりで更新している。被害は出ていない。葛飾総合高校では、テキストのみで写真掲載はしていない。ホームページを見るよう誘導するツールとして、また、提出物を促す目的で使っている。足立西高校では、在校生・卒業生はもちろんだが、中学生やその保護者が結構見ている現状があり、募集対策には有効であると考えている。足立東高校では、4 月の時点で、炎上の懸念を考え、参加しない方向で情報担当者との間で話が進んでいた。その後ディズニーランドの件で大混乱になったため、現時点では参加しない方向である。

(6 月) ビブリオバトルに向けた各校の取り組みと

中高連絡協議会が話題に上った。

葛飾商業高校では、期末考査後に読書の時間を設定するとともに、夏の百選を選定した。

江北高校では、朝学習の中で読書を取り入れている。葛飾野高校では、期末考査後、朝 20 分の読書週間を設定。国語科が夏に課題図書を選定。バトルは図書委員会が動き始めた。荒川商業高校では、遅刻をなくす目的で朝読書を採用した。教員研修会で感じたのは、まず教員が模擬バトルをやってみることの大切さであった。葛飾総合高校では、元司書の司書教諭の意識が高く、教員へ呼びかけ、推薦の図書を生徒に紹介した。さらに家庭科で学習したデザインで図書館のレイアウトを衣替えし、入りやすい図書館にした。足立東高校では、各教科が夏休みの課題を出す際、参考図書を示すことにしている。7 月の朝 10 分学習を読書に当てることを検討中。「青空文庫」という不要図書回収ボックスを図書委員会が設置した。

なお、9 月の総務部会では、ビブリオバトルのルールの不統一、参加生徒の交通費等の課題が明らかになり、次年度の改善が提案された。

中高連絡協議会について、東部 A チームを構成する足立・葛飾の現状が報告された。

足立区の場合、生活指導連絡会で高校で課題を抱える生徒について、中学校から個別の情報が提供され、指導方法の継承等がスムーズに行われていること、連絡会ではないが、「子ども支援センターげんき」とつながることで情報提供を受けることができることが報告された。

葛飾区の場合、生活指導に係る中高連絡会はすでにできており、進路も動き始めたことが報告された。

(11 月) 相次ぐ考査問題紛失を受けた定期考査に関する民間委託調査について、すでに実施した学校から対応方法等の情報がもたらされた。委託業者は 1~2 名で来校すること、本部や監督状況など各ポイントの写真を撮影すること、副校長が指名した試験監督 1 名を定めて問題用紙を保管庫から出し、考査終了後回収しバインド、教務に提出するところまでを追跡観察する、終了後、管理職、教務主任、出題者、試験監督より聞き取りを行い、それぞれの話が符合するかを照合する等が明らかになった。

常任幹事 鹿子木由紀夫（足立東）記

2. 東部B地区副校長会

1 はじめに

平成 25 年度東部Bチームは進学校から中高一貫校や専門学科校が所属しています。副校長会における情報交換は時間的な制約もありますが、各校の現況を率直に語り合うことができ、日頃の学校運営において参考となることが多く、とても役立っています。平成 25 年度常任幹事は須永 修爾（白鷗）、研究幹事は新鞍 均（小石川中等教育）が運営のお手伝いをしました。

2 活動報告

○4 月

宿泊防災
入学式
指導要録の検査

○5 月

SNSと個人情報の各学校の状況
推奨ファイルの状況
宗教法人からの勧誘

○6 月

ビブリオバトルの各校の取組
プール水の適正な管理状況
日本学生支援機構の奨学金の提出書類

○7 月

防災教育推進の取組
定期考査の答案回収・保管場所
電気使用量が、一定量を超えると警報が鳴る
デマンドモニター

○9 月

安全予防指導含めての twitter などの扱い
中高生が受け子になる例もある振り込め詐欺
指導教諭のOJTとしての活用
イエデンワの設置場所、利用
異動面接、授業観察
定期考査の管理状況

○10 月

センター学校訪問
学校危機管理
自己申告の対応

○11 月

実務記録
定期考査の民間会社による調査

○12 月

行政系副校長の取組

名古屋塾講師からの国語を除く定期考査問題の開示請求

○1 月

業績評価による副校長の役割
部活推進校としての取組

○2 月

卒業式の準備
各校の抱える課題

○3 月

入学式の準備
次期常任幹事、研究幹事選出

3 終わりに

今年度常任幹事を担当させて頂き、支援センターとの事前調整、副校長協会からの連絡、冊子の配布などを行いました。エレベーターが工事中で、配付冊子が多いときは苦劳しました。東部AB合同企画で年3回会場外に移動しての情報交換会も行いました。顔なじみになり、日頃の憂さを晴らす一助になったとの声が届き、うれしい限りです。

来年度26年度は、東部Bチームが管理研として研究発表当番です。25年度後半から話し合いを始め、「学校広報」というテーマで調査を開始しました。

いろいろご協力ありがとうございました。

常任幹事 須永 修爾（白鷗）記

3. 東部C地区副校長会

1 はじめに

本副校長会は、東部学校経営支援センター支所（以下、東部支所）所管の高校10校〔普通科高校5校、専門学科高校3校（商業科1校、工科・デュアルシステム科1校、ビジネスコミュニケーション科1校）総合学科高校2校〕の14名の副校長で構成されている。平成25年度常任幹事は柴田（八潮）・研究幹事は高山（晴海総合）・世話役桐野（六郷工科）が担当した。

2 活動報告

（1）副校長連絡会における意見交換会

東部支所所管のC・D地区副校長会合同で昨年度、一昨年度に引き続き意見交換会を実施した。意見交換のテーマについては、東京都の教育課題及び学校経営における副校長の課題に関するものとした。また推進指定校に指定されている学校においては、推進校としての取組をはじめ、どのような活動を実施したか等報告を行い、その後意見交換会を行った。意見交換会は進学校班、中堅校班、生活充実班、専門学科班、定時制班の5班に分かれて実施した。

意見交換会のテーマ及び発表者は以下のとおりである。

○ 4月18日（木）教職員研修センター

テーマ及び発表者検討

○ 5月14日（火）東部支所

「防災教育推進校としての取組を終えて」

東 高校 副校長 黒後 茂

○ 6月11日（火）東部支所

「英語教育の推進」

深川高校 副校長 山浦 敏之

○ 7月9日（火）東部支所

「学力向上に向けた組織的な取組について」

城東高校 副校長 浅見浩一郎

○ 9月5日（木）教職員研修センター

「キャリア教育の一環としてのインターンシップの取組」

芝商業高校 副校長 新井 義雄

○ 10月8日（火）東部支所

「部活動推進指定校としての取組について」

（学校経営の視点から）

墨田工業高校 副校長 高 幹明

○ 11月12日（火）東部支所

「規範意識向上推進モデル校の取組」

（先行実施校）

小岩高校 副校長 余湖 浩一

○ 12月10日（火）教職員研修センター

「地域貢献に向けた取組」

葛西南高校 副校長 杉森 共和

○ 1月21日（火）教職員研修センター

「道徳・奉仕（仮称）先行実施校の取組」

蒲田高校 副校長 長田 真一

副校長 武市 玲子

○ 2月20日（木）東部支所

○ 3月18日（火）東部支所

「OJT推進指定モデル校の取組」

三田高校 副校長 降幡 高志

本所高校 副校長 佐藤 斗志夫

紅葉川高校 副校長 伊達崎 広

（2）副校長研究協議会

8月19日（月）に行われた東京都立高等学校副校長研究協議会に参加した。

（3）意見交換・交流会

今年度につきましては、C地区・D地区合同にて、年間を通じて交流を図り、情報交換を活発に行っていくと、年度当初よりC地区・D地区の常任幹事同士にて話し合い、実施した。まずは8月19日（月）に行われた東京都立高等学校副校長研究協議会後に、C地区・D地区との交流を図った。普段の副校長連絡会後にも、有志にて意見交換を行うよう努めた。また平成25年12月10日（火）に開催、平成26年に入ってから情報交換を行なう様に務めた。年度ごとにメンバーが入れ替わる中、日頃取り組んでいる実務での問題や悩み、各学校での課題解決への取り組み方法等、多岐に渡り充実した意見交換の場とすることが出来た。

3 おわりに

1年間、活動にご協力頂き、ありがとうございました。今後とも互いの親睦を深めながら、学校経営に資する情報交換の場となりますよう、よろしくお願い申し上げます。副校長の先生方、健康にご留意され、ご活躍ください。

常任幹事 柴田 元也（八潮）記

4. 東部D地区副校長会

1 はじめに

本副校長会は、東部学校経営支援センター支所（以下、東部支所）所管の高校20校〔普通科高校13校、専門学科高校6校（商業2校、工業2校、科学技術1校、産業1校、附属中学校1校）〕の21名の副校長で構成されている。平成25年度常任幹事は黒後（東）・研究幹事は浅見（城東）が担当した。

2 活動報告

(1) 副校長連絡会における意見交換会

東部支所所管のC・D地区副校長会合同で昨年度、一昨年度に引き続き意見交換会を実施した。意見交換のテーマについては、東京都の教育課題及び学校経営における副校長の課題に関するものとした。また推進指定校に指定されている学校においては、推進校としての取組をはじめ、どのような活動を実施したか等報告を行い、その後意見交換会を行った。意見交換会は進学校班、中堅校班、生活充実班、専門学科班、定時制班の5班に分かれて実施した。

意見交換会のテーマ及び発表者は以下のとおりである。

○ 4月18日（木）教職員研修センター

テーマ及び発表者検討

○ 5月14日（火）東部支所

「防災教育推進校としての取組を終えて」

東 高校 副校長 黒後 茂

○ 6月11日（火）東部支所

「英語教育の推進」

深川高校 副校長 山浦 敏之

○ 7月9日（火）東部支所

「学力向上に向けた組織的な取組について」

城東高校 副校長 浅見浩一郎

○ 9月5日（木）教職員研修センター

「キャリア教育の一環としてのインターンシップの取組」

芝商業高校 副校長 新井 義雄

○ 10月8日（火）東部支所

「部活動推進指定校としての取組について」

（学校経営の視点から）

墨田工業高校 副校長 高 幹明

○ 11月12日（火）東部支所

「規範意識向上推進モデル校の取組」

（先行実施校）

小岩高校 副校長 余湖 浩一

○ 12月10日（火）教職員研修センター

「地域貢献に向けた取組」

葛西南高校 副校長 杉森 共和

○ 1月21日（火）教職員研修センター

「道徳・奉仕（仮称）先行実施校の取組」

蒲田高校 副校長 長田 真一

副校長 武市 玲子

○ 2月20日（木）東部支所

○ 3月18日（火）東部支所

「OJT推進指定モデル校の取組」

三田高校 副校長 降幡 高志

本所高校 副校長 佐藤 斗志夫

紅葉川高校 副校長 伊達崎 広

(2) 副校長研究協議会

8月19日（月）に行われた東京都立高等学校副校長研究協議会に参加した。

(3) 意見交換・交流会

今年度につきましては、C地区・D地区合同にて、年間を通じて交流を図り、情報交換を活発に行っていくと、年度当初よりC地区・D地区の常任幹事同士にて話し合い、実施した。まずは8月19日（月）に行われた東京都立高等学校副校長研究協議会後に、C地区・D地区との交流を図った。普段の副校長連絡会後にも、有志にて意見交換を行うよう努めた。12月10日（火）に開催した。年度ごとにメンバーが入れ替わる中、日頃取り組んでいる実務での問題や悩み、各学校での課題解決への取り組み方法等、多岐に渡り充実した意見交換の場とすることが出来た。

3 おわりに

1年間、活動に御協力いただき、ありがとうございました。今後も互いの親睦を深めながら、学校経営に資する情報交換の場となりますようよろしくお願い申し上げます。副校長の先生方、健康には十分御留意ください。

常任幹事 黒後 茂（東）記

5. 中部A B地区副校長会

1 はじめに

中部地区副校長会はつねに連絡会をAB地区合同で開催してきたので本報告も同様に申し上げます。A地区常任幹事は杉並総合高校の鵜澤裕校長、研究幹事は杉並高校福田洋三副校長が担当し、B地区常任幹事は深沢高校の小林正人、研究幹事は桜修館中等学校の伊藤直晃副校長が担当しました。(伊藤副校長は2学期末で異動)

8月の副校長研究協議会では、福田副校長が「新学習指導要領の全面実施に当たっての指導の工夫に関する取組みについて」の発表をしました。

校種別連絡会では毎回冒頭に中山博之学校経営支援担当課長から連絡その他でお話いただき、その後に意見交換を行いました。

2 センター別連絡報告・講演等

○第1回 4月18日(木) 教職員研修センター
防犯講話 警視庁少年育成課 山形 哲氏
「学校における防犯対策について」

○第2回 5月14日(火) 戸山高校
講演 経営支援アドバイザー 石井杉生氏
「副校長として学校経営感覚を磨く」

○第3回 6月11日(火) 杉並高校
協議 「特別支援教育の推進」
報告者 世田谷泉高校 副校長 角本芳樹
深沢高校 副校長 小林正人

○第4回 7月9日(火) 総合芸術高校
協議 「広報・募集活動の工夫」
報告者 杉並総合高校 副校長 鵜澤 裕
世田谷総合高校 副校長 濱田准一

○第5回 9月5日(木) 教職員研修センター
協議 「学力向上に向けた取組」
報告者 調布北高校 副校長 土肥 剛
総合工科高校 副校長 守屋誠一

○第6回 10月8日(火) 芦花高校
協議 「学力スタンダード推進校の取組」
報告者 神代高校 副校長 大島和華子
雪谷高校 副校長 猪又英夫

○第7回 9月5日(木) 教職員研修センター
協議 「教科『道徳・奉仕(仮称)』先行実施校の取組」

報告者 杉並高校 副校長 福田洋三
永福学園 副校長 小池巳世

○第8回 12月10日(木) 第一商業高校

協議 「防災教育推進校の取組」

報告者 三宅高校 副校長 志波昌明
神津高校 副校長 小澤 彰

○第9回 1月21日(火) 教職員研修センター
協議 「OJT推進モデル校の取組」

報告者 松原高校 副校長 赤羽美佐恵
大島海洋国際高校
副校長 佐藤尚之

○第10回 2月20日(火) 目黒高校
協議 「学校経営診断を受けて、次年度に向けた学校経営の改善・戦略」

報告者 中央ろう学校 副校長 高橋忠雄
大崎高校 副校長 小林孝行

3 情報交換会での話題

- * 非常勤講師の一日8時間を超える持ち時数について
- * 成績処理推奨ファイルの利用で「校長印」の取扱い、「格納」について
- * 荻窪高校の全国大会出場への支援について
- * 「道徳」について
- * 大島の土砂災害への支援について
- * イエ電話の利用について
- * pass システムの限界について
- * 次世代リーダー参加派遣生徒の英文書式について
- * ビブリオバトル参加生徒の交通費について
- * 民間企業による定期考査の適切な実施及び個人情報管理にかかる委託調査について
- * TAIMS 端末13への交換について
- * 「悉皆参加」事業の生徒参加時の生徒交通費について
- * 部活動の人数制限について
- * 講師の教務手帳管理場所について
- * 教育実習生の都教委取りまとめについて
- * 関東大会、来年度京都大会参加について
- * 学力スタンダードへの取組について
- * 小山台高校の選抜高校野球出場について

他

4 おわりに

毎回意見交換の時間が十分でなかったと感じる。反省とともに次年度への申し送りとしたい。

常任幹事 鵜澤 裕(杉並総合)
小林正人(深沢) 記

6. 中部C地区副校長会

1 はじめに

平成25年度、中部学校経営支援センターCチームが所轄する都立学校は、10校が特別支援学校、11校が高等学校であった。そのうち、全日制課程担当の副校長が配置されている高等学校は10校11名であった。他のチームと比較して少人数であり、また、今年度は副校長研究協議会での発表担当でもあったため、先生方一人一人の負担が多かったと思う。

副校長会総務部会報告や研究協議などでは中部Dチームと連携し取組んできた。また、中部学校経営支援センター支所並びに学校経営支援主事とも連携を図りながら会の運営が円滑に進むように心がけてきた。

2 活動報告

(1) 平成25年4月18日(木)

会場：東京都教職員研修センター

(2) 平成25年5月14日(火)

会場：戸山高校

(3) 平成25年6月11日(火)

会場：文京高校

研究協議「組織的な個人情報紛失事故防止の取組について」

赤羽商業高校 副校長 高山 昭彦

(4) 平成25年7月9日(火)

会場：桐ヶ丘高校

研究協議「生徒の学力向上のための取組について、広報・募集活動の取組と問題について」

武蔵丘高校 副校長 高橋 秀信

(5) 平成25年9月5日(木)

会場：東京都教職員研修センター

(6) 平成25年10月8日(火)

会場：王子総合高校

研究協議「主任教諭の活用と若手教員育成のOJT」

練馬工業高校 副校長 中里 真一

(7) 平成25年11月12日(火)

会場：稔ヶ丘高校

研究協議「教科主任及び教科会の活用について(指導と評価の一体化にむけて)」

練馬高校 副校長 小城原 友子

(8) 平成25年12月10日(火)

会場：石神井高校

研究協議「宿泊防災訓練について」

農芸高校 副校長 吉野 剛文

(9) 平成26年1月21日(火)

会場：東京都教職員研修センター

(10) 平成26年2月20日(火)

会場：志村学園

研究協議「学校施設・設備の安全管理について、保護者・近隣住民等への対応について」

大山高校 副校長 黒田 正

(11) 平成26年3月18日(火)

会場：中部学校経営支援センター支所

研究協議「キャリア教育の推進について、スクールカウンセラーの活用について」

文京高校 副校長 山田 道人

3 平成25年度副校長研究協議会報告

(1) 発表主題 第2分科会(高校教育)

「宿泊防災訓練における意識の変化と副校長の関わり」

(2) 提案者

高島高校 副校長 廣末 修

(3) 司会

文京高校 副校長 山田 道人

(4) 記録者

飛鳥高校 副校長 栃倉 和則

(5) 分科会責任者

王子総合高校 副校長 橘田 進

(6) 研究幹事

板橋有徳高校 副校長 中山 繁

4 おわりに

今年度は、「学校管理職育成指針」にあるように、「サービス、学事、施設・設備の管理等を様々な工夫を凝らして行っている者も多い。副校長連絡会等を活用し、先輩副校長の管理方法を学ぶことで、より計画的・効率的な管理方法を身につけさせる」の観点で各学校の取組や事例を発表、それぞれの学校経営に活かしてもらえるように、また、横のつながりができるように会の運営を行ってきた。

常任幹事 橘田 進(王子総合)記

7. 中部D地区副校長会

1 はじめに

中部学校経営支援センターDチームが所轄する都立学校の全日課程（含む付属中学校）は18校で、全日課程の担当の副校長は19名であった。その中で、今年度の全日課程の常任幹事は栞原（石神井高校）、研究幹事は大塚（田柄高校）が務めた。

副校長連絡会後に行われた副校長会総務部会報告や研究協議などは、中部Cチームと連携して取組んできた。また、中部学校経営支援センター支所並びに学校経営支援主事とも連携を図りながら会の運営が円滑に進むように心がけた。

2 活動報告

○ 研究協議会の運営方法の変更について

副校長連絡会終了後に行っていた研究協議の運営方法を今年度から変更した。

昨年度までは、中部CD地区の常任幹事の担当者が中心となって、情報交換会の運営や情報提供等を行ってきた。しかし、昨年度までのように十分な情報提供を常任幹事だけで用意できるかどうか、また当日提示したテーマで十分な意見交換が可能かどうかなどについて心配な点があった。そこで今年度は、副校長の先生方全員の力を借りる方法で運営することにした。

具体的には、まず1年間を通した月別の意見交換のテーマをあらかじめ提示することにした。テーマについては支援センター支所の先生方に相談したうえで決定した。次に、そのテーマに沿った実践事例の発表を副校長の先生方に募り、発表を依頼した。そして当日は、発表いただいた内容を中心に意見交換を行った。

○ 月別の意見交換テーマについて

今年度は以下のようなテーマを設定した

6月	組織的な個人情報紛失事故防止の取組について
7月	生徒の学力向上のための取組について、広報・募集活動の取組と問題について
10月	主任教諭の活用と若手教員育成のOJTについて
11月	教科主任及び教科会の活用について（指導と評価の一体化にむけて）

12月	宿泊防災訓練について
2月	学校施設・設備の安全管理について保護者・近隣住民等への対応について
3月	キャリア教育の推進についてスクールカウンセラーの活用について

当日に十分な発表時間を確保できなかった回もあったが、発表いただいた内容を中心に意見交換ができた。発表内容と交換された意見は今後の学校運営の参考になることばかりであり、有意義な時間とすることができた。

なお、発表いただいた先生方は下記の通りである。大変お忙しい中、発表用の印刷物やパワーポイント等を作成いただき感謝申し上げます。

①平成25年6月11日（火）

会場：文京高校

赤羽商業高校 副校長 高山 昭彦

②平成25年7月9日（火）

会場：桐ヶ丘高校

武蔵丘高校 副校長 高橋 秀信

③平成25年10月8日（火）

会場：王子総合高校

練馬工業高校 副校長 中里 真一

④平成25年11月12日（火）

会場：稔ヶ丘高校

練馬高校 副校長 小城原 友子

⑤平成25年12月10日（火）

会場：石神井高校

農芸高校 副校長 吉野 剛文

⑥平成26年2月20日（木）

会場：志村学園

大山高校 副校長 黒田 正

⑦平成26年3月18日（火）

会場：中部学校経営支援センター支所

文京高校 副校長 山田 道人

3 おわりに

副校長協会の総務部会は、お茶の水で開催された。すべての回に参加することはできなかったが、「副校長協会は学校運営に関する研究を進めるための団体である」という話を伺ったことが最も記憶に残っている。協会の一員としてこの言葉を大切にしていきたいと思う。

常任幹事 栞原 爾（石神井）記

8. 西部A地区副校長会

1 はじめに

西部学校経営支援センターAチームは、町田、稲城、多摩市の普通科5校、総合学科2校、専門学科1校、三科併設1校と多様な学校から構成されています。今年度、新しく副校長として2名の先生が昇任され、他の地区から2名の先生が異動されてきました。人数は比較的少ないですが、その分、意思疎通がし易く、和気藹々とした雰囲気の中で貴重な情報交換を進めることができました。

2 活動報告

○副校長連絡会の情報・意見交換について

(1)4月18日(木)教職員研修センター

- ・宿泊防災訓練の各校の実施日程について
- ・副校長研究協議会での西部Aとしての研究テーマについて

(2)5月14日(火)多摩社会教育会館

- ・副校長研究協議会での研究テーマ
- ・「一泊二日宿泊防災訓練における各校の取組」
- ・アンケート配布時期、回収方法

(3)6月11日(火)多摩社会教育会館

- ・副校長研究協議会役割分担発表、司会、記録の選出

(4)7月9日(火)多摩社会教育会館

- ・副校長研究協議会での役割分担確認
- ・各校への調査案件について
- ・定期考査の外部委託による立ち入り調査

(5)9月5日(木)教職員研修センター

- ・定期考査の外部委託による現地調査
- ・いじめ対策調査の進捗状況
- ・プール水の管理について
- ・ビブリオバオルについて

- ・宿泊防災訓練について

- ・関東地区高等学校教頭・副校長研究協議会参加者確認

- ・いじめ対策について

(6)10月8日(火)多摩社会教育会館

- ・検定試験検定料等の取り扱いについて
- ・学力スタンダードの進捗状況
- ・インフルエンザ予防接種情報

(7)11月12日(火)多摩社会教育会館

- ・定期考査の立ち入り調査の情報交換

- ・校長協会に依頼する意見・要望等
- ・総合学科高校教育活動成果発表会
- ・言語能力向上推進校における講演会

(8)12月10日(火)多摩社会教育会館

- ・体罰実態把握調査の取組状況
- ・特別支援教育の充実について
- ・教科主任と教科会の設置について
- ・英語科採用3年目教員の派遣研修について
- ・卒業式・入学式の事務手続き日程について
- ・教科主任の活用状況聞き取りについて
- ・各推進校の報告書作成の日程について
- ・学校マネジメント講座の実施について

(9)1月21日(火)教職員研修センター

- ・推薦入試について
- ・異動・異動面接について
- ・業績評価について
- ・体罰把握調査について
- ・教科主任の活用について
- ・指導要録のPDF化について
- ・教科主任の活用について
- ・次年度の本部役員の選出について

(10)2月20日(木)多摩社会教育会館

- ・入学者選抜に関する情報交換
- ・各学校が抱える課題に関する情報交換
- ・次年度の常任幹事・研究幹事・本部役員の選出について

(11)3月18日(火)多摩社会教育会館

- ・次年度の常任幹事、研究幹事、本部役員の選出について

3 平成25年度役員

常任幹事 白野 一治(永山)

研究幹事 博田 英明(野津田)

4 おわりに

学校現場では、日々様々な問題が生じ、対応を迫られ、解決策を見出すのに苦勞する場面が多々あります。そのような時、頼りになるのが、横のネットワークだと思います。Aチームの皆様には大変お世話になりました。今後もこの連携を大切にして、学校経営に取り組んでいきたいと思っています。

常任幹事 白野 一治(永山) 記

9. 西部B地区副校長会

1 はじめに

今年度教職員研修センターで行う日以外は全て多摩社会教育会館で開催され、時間の効率を考えるとありがたい措置であった。

常任幹事 鈴木 真人（日野台）

研究幹事 佐藤 和彦（日野）

2 活動報告

多様な課題について研修と情報交換を行い、理解を深め解決の糸口を得ることができた。

4月（教職員研修センター）

○情報交換

成績推奨ファイルの取り扱い

5月（多摩社会教育会館）

○事例発表・グループ協議

「体罰根絶に向けた取組について」

森藤 才 学校経営支援担当課長

上野勝敏 学校経営支援担当課長

○情報交換

次世代リーダー、模範授業

6月（多摩社会教育会館）

○事例発表・グループ協議

「本校における特別支援教育について」

永山高校 副校長 白野一治

○情報交換

調査統計システム、自己申告システム、旅費システム及び出退勤システムの改善希望

7月（多摩社会教育会館）

○事例発表・グループ協議

「道徳教育の推進について」

翔陽高校 副校長 水本香

武蔵野北高校 副校長 丸茂聡

○情報交換

ビブリオバトル、体罰調査、プール水管理

9月（教職員研修センター）

○情報交換

いじめ対策、定期考査外部委託調査、宿泊防災訓練

10月（多摩社会教育会館）

○事例発表・グループ協議

「ミドルリーダーの人材育成」

加藤瑞樹 統括学校経営支援主事

○情報交換

次年度の本会組織編成

11月（多摩社会教育会館）

○事例発表・グループ協議

「都立高校学力スタンダード推進校の取組について」

成瀬高校 副校長 皆川貢治郎

秋留台高校 副校長 高橋和久

○情報交換

学力スタンダード、悉皆イベントの扱い

12月（多摩社会教育会館）

○事例発表・グループ協議

「発達障害の生徒の理解と支援」

町田の丘学園 副校長 大和田邦彦

○情報交換

特別支援教育、外国語教育の充実

※終了後に AB 合同で忘年会を行い、課長・経営支援主事にも参加いただき交流を深めることができた。

1月（教職員研修センター）

○事例発表・グループ協議

「OJT推進指定モデル校の取組み」

清瀬高校 副校長 川口 典子

砂川高校 副校長 並川 直人

○情報交換

推薦入試、異動事務連絡、体罰調査、指導要録の保存、業績評価、人材育成

2月（多摩社会教育会館）

○事例発表・グループ協議

「退職副校長からの提言」

八王子拓真高校 副校長 中村 直治

府中工業高校 副校長 益子 義明

片倉高校 副校長 畑中 喜八

○情報交換

業績評価、次年度の経営計画、卒業式

3月（多摩社会教育会館）

3 おわりに

現場で抱えている課題を共有することのできる貴重な場でした。一年間ご協力いただいた副校長先生方に感謝申し上げます。

常任幹事 鈴木 真人（日野台） 記

10. 西部C地区副校長会

1 はじめに

西部C地区は、4月に6名の副校長の異動があり構成メンバーが大きく変わった。2年目の副校長は2名だったので、引き継ぎは、迷うことなく常任幹事と研究幹事を分担することができた。

メンバーの構成は、全日制副校長11名と定時制の副校長2名の合計13名と他の地区と比べ人数が少ないので、連絡調整をスムーズに行うことができた。懇親会や意見交換会等の出席率が高く、会の運営に対して会員の皆さんがとても協力的であった。しかし、8月に、管理研の発表担当があり、研修会のプレゼンを見据え、全員で検討していく体制で臨まなければならなかった。そこで、役割分担も少人数の特性を生かし、一人一役を全員に割り振り、研究会や副校長会に関われるようにした。

今年度の成果としては、発表会で担当した第一分科会に63名の副校長が参加し、意見交換を行った。さらに、平成26年度の全国大会への発表に結びつけることとなった。

2 活動報告

4月18日 教職員研修センター

- ・総務部から事業報告、事業予定
平成24年度の事業報告
平成25年度の事業予定について
- ※ 回覧にて名簿等確認
- ・研究部 本年度の研究について
研究テーマについて

5月14日 多摩社会教育会館

- ・研究発表会について
- ・アンケートの依頼、集計等について

6月11日 青梅総合高校

- ・青梅総合高校の施設管理・見学
「制服の衣替え」
「入選、推薦入試の件について」
「6月中のエアコンの稼働について」
- ・アンケートの依頼、集計から発表原稿の作成について

7月9日 多摩社会教育会館

- 「部費についての意見交換」「ビブリオバトルについて」「熱中症について」

9月5日 教職員研修センター

- 「エアコンの設置温度について」
- 「宿泊防災訓練の実施状況報告」
- 「2学期からの講師の依頼」

10月8日

- 「11月29日の緊急地震速報の訓練の参加について」
- 「休校における行事の変更について」
- 「イエデンの活用について」

11月12日 教職員研修センター

- 「学カスタンダードについて」
- 「工業高校の技能スタンダード」
- 「奉仕体験活動・道德・キャリア教育に関する新教科について情報交換」

12月10日 多摩科学技術高校

- 「業者テスト」「不審者情報の連絡」
- 「入学者選抜の推薦選考問題作成」
- 「成績推奨ファイルのPDF化」

1月21日 教職員研修センター

- 「OJT実践発表 清瀬高校川口副校長による実践報告」
- 「宿泊防災訓練」「アレルギー」
- 「学級増における入選業務」
- 「成績推奨ファイルPDF化」
- 「修学支援金制度」

2月20日 多摩社会教育会館

3月18日 多摩社会教育会館

3 おわりに

副校長会の総務部会から多くの情報を会員に紹介しながら、学校間の情報交換をできる限り行った。

今後、昇進、退職、異動でメンバーが多く入れ替わり、引き継ぎの苦労が予想される。

さらに、教育施策の拡大、事務量の増加、複雑多岐にわたるICTの環境の改良が進むであろう。これらの点からも、学校間のネットワークの大切さを痛感した一年であった。

常任幹事 井戸 康文（小金井北）記

11. 西部D地区副校長会

1 はじめに

西部D地区の都立高校は、19校23課程校25人の副校長(全日制21人、定時制4人)で構成されている。今年度4月には11名の副校長の異動があり、メンバーもかなり入れ替わりがあったためか、当初、戸惑いもあったが、連絡会の情報交換などもスムーズに行うことができるようになってきて、会の運営に対して会員の皆さんがとても協力的であった。

2 活動報告

4月18日 教職員研修センター

- ・自己紹介
- ・総務部から事業報告、事業予定
平成24年度の事業報告
平成25年度の事業予定について
- ※ 回覧にて名簿等確認 集金
「宿泊防災訓練に関する情報交換」
「情報セキュリティの徹底」

5月14日 多摩社会教育会館

- 「学校公式ツイッターに関する情報交換」
- 「指導要録の電子化」

※ 副校長協会総会出席の件

6月11日 青梅総合高校

- ・青梅総合高校の施設管理・見学
「ビブリオバトル 各校の取り組み」
「夏季休業中の読書指導」
「エアコンの稼働開始時期について」
「プール水の管理について」

※ 総会参加者からの報告
研究協議会について、
全国大会参加の呼びかけ

7月9日 多摩社会教育会館

- 「部費の扱いに関する情報交換」
- 「宿泊防災訓練の状況報告」
- 「自転車事故の報告」
- 「熱中症対策について」

※ 研究協議会について

9月5日 教職員研修センター

- 「公共のマナー遵守と情報モラルの徹底」
- 「宿泊防災訓練の実施状況報告」
- 「部費管理についての情報交換」

「生活統一基準について各校の状況」

10月8日

「ビブリオバトル参加の生徒交通費」

「定期試験監査、各校の状況」

「台風災害時の措置について」

※ 後期会費集金

関東大会参加の呼びかけ

11月12日 教職員研修センター

「情報モラルに関する事例報告」

「学力スタンダード、奉仕体験活動に関する新教科について情報交換」

「定期試験の外部監査情報交換」

12月10日 多摩科学技術高等学校

「教育課程届について」

※ H26の役員について意見聴取

賀詞交換会参加呼びかけ

夜、西部支所管内高校、特別支援副校長懇談会を実施した。

1月21日 教職員研修センター

「成績推奨ファイルPDF化」

※ H26の役員について、意見聴取

2月20日 多摩社会教育会館

「降雪の影響について」

※ H26 研究幹事決定

3月18日 多摩社会教育会館

※ H26 常任幹事等決定

研究発表について

3 おわりに

2月20日の連絡会では、青梅地域で2月14日の大雪のため、まだ通学できない生徒がいたという、西部D地区らしい情報があつた。

副校長会の総務部会から多くの情報を会員に紹介しながら、学校間の情報交換をできる限り行った。今後、昇進、退職、異動でメンバーが多く入れ替わり、引き継ぎの苦労が予想される。また、来年度は研究発表の年でもあり、早めに着手することを確認している。

常任幹事 羽生 英雄(小平西) 記

5. 学科別副校長会報告

1. 工業科副校長会

(1) 平成 25 年度役員構成と定例会について

都立工業高等学校副校長会は、全日制課程と定時制課程の副校長で構成され 3 年目を迎えた。また、工業副校長会の会員は工業校長会に加入されている総合高校や産業高校、科学技術高校を加え 24 校 39 名の構成とした。

役員構成以下の通り選出された。

会 長 守屋文俊（工芸高校）
副会長 守屋誠一（総合工科高校）
副会長 市川正弘（中野工業高校）
会 計 高 幹明（墨田工業高校）
書 記 橋本広明（町田工業高校）

定例会は年間 11 回開催した。副校長連絡会実施日の午前中に工芸高校で行った。年 3 回行われている副校長研修がある日は、副校長連絡会の会場で実施した。

(2) 工業科生徒研究成果発表大会について

平成 25 年度の本会の重要課題である「工業科生徒研究成果発表大会の更なる活性化を通して工業高校生のすばらしさを都民に広報する」を主目的として昨年度に引き続き実施した。今年で第 20 回となる本大会は工業校長会が主催であり、東京都教育委員会との共催で行われるが、実質は副校長会が運営を行っている。

昨年度は都立総合工科高校で実施したが、本年度は東京都教職員研修センターの視聴覚ホールをお借りして実施することができた。

参加は口頭発表 20 本、パネル発表 5 本であった。今年度より、口頭発表は学術研究部門と実践報告部門の 2 部門となり、実践報告部門は、工業技術に関する競技会やコンテストへの参加や資格取得、ボランティアなどの実践発表とした。学術部門は、工業技術に関する研究を発表項目として審査を行った。

今年度においても、研究内容、プレゼンテーション技術、研究成果要旨の表現、体裁など、全ての面で向上しており、審査員の先生方からも高い評価を得ることができた。

以下に平成 25 年度第 20 回大会受賞校を紹介

する。

入選団体及び研究主題

口頭発表

最優秀賞 学術研究部門

東京都産業教育振興会賞 科学技術高校

「廃棄物が浄化する～貝殻を利用した水質浄化～」

最優秀賞 実践報告部門 総合工科高校

「3G 通信でスマートハウスの実現～オープンソースハードウェアとインターネットの連携～」

優秀賞 学術研究部門 多摩科学技術高校

「廃プラスチック油化技術の実用化に向けて」

優秀賞 学術研究部門 多摩科学技術高校

「バラフ育成について」

優秀賞 学術研究部門 六郷工科高校

「『Full color Tube』の製作」

優秀賞 実践報告部門

日本設計工学会賞 墨田工業高校

「富嶽三十六景（神奈川沖浪裏）立体造形の製作」

特別賞 実践研究部門 蔵前工業高校

「省エネカーを用いた性能試験装置の製作と研究」

特別賞 実践研究部門 蔵前工業高校

「太陽エネルギーの利用に関する実践報告」

特別賞 実践研究部門 八王子桑志高校

「からくり時計（ギミック）の製作」

東京都立工業高等学校 P T A 連合会理事長賞
田無工業高校

「『逃げる』を考える～地域防災に向けた意識づくり～」

パネル発表部門

東京都産業教育振興会賞 多摩科学技術高校

「光の色とナノバブル水が植物に与える影響～タ張から羽ばたく最新植物育成システムの提案～」

入選を逃した発表者には努力賞が贈られた。

また、ポスター製作では練馬工業高校の佐藤

智駿さん、沖柚月さんが入選し、本年度のポスターとして使用させて頂いた。

今後の課題として、今年度は周年行事や公開授業など学校行事などと重なり、例年よりも参加者が少ない状況であった。学校行事なども視野に入れて開催日程を決め、もっと中学校や企業、都民の方々に参観していただけるように努力していかなければならない。

(3) 本年度工業副校長対応事業について

- ①東京都科学技術週間への参加（3校参加）
ふしぎ祭（サイ）エンス出展
- ②「わくわくどきどき夏休み工作スタジオ」
平成 25 年 7 月 24 日～8 月 28 日
19 校で 68 講座実施
申し込み数 9357 通
参加人数 1297 名
- ③設備拠点校実習推進協議会ワーキンググループの開催
- ④産業労働局「職業能力開発センター」と都立工業高等学校との連携
- ⑤都立高校改革推進計画（第一次実施計画）
 - ・学力スタンダード
 - ・技能スタンダード
 - ・企業訪問、企業研究
 - ・教員の専門的指導力、技術力の向上
- ⑥生徒の就業支援プログラム
- ⑦創造ものづくり教育フェア in TOKYO
- ⑧都立高等学校合同説明会
工業科・科学技術科相談コーナー設置
- ⑨全国指導主事連絡協議会への資料提出
- ⑩都立工業高校生徒作品展
都庁での生徒作品展示
平成 25 年 11 月 16 日～11 月 20 日
- ⑪ものづくり人材育成プログラム
ものづくり講座（工業高校 18 校で実施）
特定分野推進校（工業高校 6 校で実施）
- ⑫工業校長実践研究協議会講演会参加
 - ・(株)ベネッセコーポレーション
「確かな進路実現について」
 - ・(株)高橋機械
「カブトムシ型巨大ロボット製作の工学技術と人材育成」
- ⑬平成 25 年度関東地区工業高校研究協議会
東京大会（実行委員会）
平成 25 年 12 月 6 日

東京電機大学 東京千住キャンパス

⑭平成 25 年度高校生夕張キャンプ

選抜大会 平成 25 年 6 月 22 日

「広報・PR 部門」4 校参加

「研究・開発部門」2 校参加

夕張メロン等農産物の流通体験と現地交流活動

平成 25 年 7 月 23 日～26 日 4 校参加

⑮工業副校長会 研究部会発表会

平成 26 年 2 月 20 日・3 月 18 日

(4) 研究活動について

研究組織は工業教育研究部会、管理運営研究部会、生徒指導研究部会、定時制課程研究部会の 4 つの部会とした。平成 25 年度から始まった教育課程、都立高校改革推進計画・第一次実施計画を進めるため、工業高校の特色を活かし、日常の学校運営や教育活動に資する研究テーマで取り組んできた。各部会の研究テーマは以下のとおりである。

工業教育研究部会

「都立高校改革推進計画・第一次実施計画」

の副校長から見た検証について

～技能スタンダードについて～

管理運営研究部会

「教科主任の制度化に伴う、工業高校の教科会の実態把握と課題について」

生徒指導研究部会

「生活指導統一基準を策定するにあたって各工業高校の現状と取組」

定時制課程研究部会

「定時制工業高校の現状と課題」

(5) おわりに

「都立高校改革推進計画・第一次実施計画」を受けて 2 年目となり、様々な取り組みが行われている。専門高校においても「技能スタンダード」の平成 27 年度実施に向け、推進校での取り組みを検証していかなければならない。

また、「都立専門高校改編基本構想検討委員会」が設置され、企業や生徒のニーズに応じた学科や改編や新たな学科の設置などについて、学識経験者、民間企業関係者、PTA 関係者を委員として検討されている。工業副校長会としても、様々な意見を出し合い、変革が行われる機会を見逃さずに携わっていきたい。

常任幹事 守屋 文俊（工芸）記

2. 商業科副校長会

東京都商業関係高校副校長会は、13校の副校長13名で構成されています。内訳は、商業科9校、ビジネスコミュニケーション科2校、普通科併設校1校、産業科1校となっています。

毎月開催される支援センター別副校長連絡会の日の午前中に全商会館（全国商業高等学校協会会館）を主会場として実施しています。

定例会では、東京都教育委員会からの連絡・報告、東京都商業教育研究会からの連絡・協議、商業関係高校間での研究協議や情報交換等を行い、商業関係高校の学校運営とその活性化に関する研究を行っています。

今年度の研究協議・情報交換を行った項目は次のとおりです。

第1回定例会（教職員研修センター）

平成25年4月18日（木）9時05分から

- (1) 東京都教育委員会からの連絡
 - ・今年度担当者の紹介
 - ・夕張キャンプ
 - ・都立専門高校技能スタンダード
- (2) 東京都商業教育研究会からの連絡
 - ・夕張キャンプと生徒商業教育研究発表大会
- (3) 研究協議等
 - ・自己紹介ならびに今年度役割分

第2回定例会（全国商業高等学校協会会館）

平成25年5月14日（火）10時から

- (1) 東京都教育委員会からの連絡
- (2) 東京都商業教育研究会からの連絡
 - ・東京都商業校長会との連携
 - ・東京都商業教育研究会の組織見直し
 - ・教員研修分科会
 - ・東京都検定委員会に関する確認事項
 - ・東京都産業教育振興会総会および講演会
 - ・第61回全国商業教育研究大会
- (3) 研究協議等
 - ・宿泊防災訓練
 - ・苦情対応
 - ・商業関係高校教務主任研究会
 - ・生徒指導（ネット関係）
 - ・各校の様子

第3回定例会（全国商業高等学校協会会館）

平成25年6月11日（火）10時から

- (1) 東京都教育委員会からの連絡
- (2) 東京都商業研究会からの連絡
 - ・東京都商業高等学校体育連盟平成25年度定期総会及び研究協議会について
- (3) 研究協議等
 - ・教育実習生
 - ・体育祭
 - ・業務服務監察
 - ・生徒指導
 - ・各校の様子

第4回定例会（全国商業高等学校協会会館）

平成25年7月9日（火）10時から

- (1) 東京都商業教育研究会からの連絡
 - ・第61回全国商業教育研究大会での役割分担
 - ・夕張キャンプ及び生徒商業教育研究発表大会の応募状況
 - ・東京都商業高等学校体育連盟定期総会報告
 - ・全国商業高等学校協会による大学推薦
 - ・商業関係高校生活指導主任研究会
 - ・アプリケーションソフトに関する教員研修会（夏季休業中）
- (2) 研究協議等
 - ・学力スタンダード及び技能スタンダード、規範意識向上先行実施校の取組について
 - ・ビブリオバトル
 - ・ファミリーウィーク
 - ・成績推奨ファイル
 - ・部費の管理
 - ・生徒指導（自転車通学とレインウェア）
 - ・各校の様子

第5回定例会（教職員研修センター）

平成25年9月5日（木）9時05分から

- ・研究協議等
- ・次回定例会での協議内容確認、役割分担

第6回定例会（全国商業高等学校協会会館）

平成25年10月8日（火）10時から

- (1) 東京都教育委員会からの連絡
 - ・学力スタンダード先行実施校の学力調査

- ・都立専門高校技能スタンダード
- ・都立専門高校の現況及び関係主体の意向に関する実態調査への協力依頼

(2) 研究協議等

- ・規範意識向上先行実施校の取組状況報告
- ・定期考査実施状況の委託調査
- ・留学関係書類の発行
- ・指導要録の電子化の状況
- ・生徒指導（ツイキャス、身だしなみ指導）
- ・各校の様子

第7回定例会（全国商業高等学校協会会館）

平成25年11月12日（火）10時から

(1) 東京都商業教育研究会からの連絡

- ・商業高校PTA連合会主催文化交流会
- ・全商広報都道府県ページの原稿執筆依頼
- ・学力育成研究会
- ・都立商業高校間ネットワーク連絡会

(2) 研究協議等

- ・規範意識向上先行実施校の取組状況報告
- ・都立合同説明会での各校の様子
- ・都立合同説明会での商業ブースの様子
- ・就職内定状況
- ・商業科講師、養護教諭、美術講師に関する情報
- ・文化祭実施状況
- ・台風等の気象状況悪化に伴う学校行事への影響
- ・ベテラン教員の授業力の更なる向上
- ・防災サミット
- ・生徒指導（ネット関係、暴力事件、虐待）
- ・各校の様子

第8回定例会（全国商業高等学校協会会館）

平成25年12月10日（火）10時から

(1) 東京都商業教育研究会からの連絡

- ・商業関係高校進路指導主任研究会

(2) 研究協議等

- ・基礎学力の向上
- ・定期考査実施状況の委託調査の状況
- ・業務服務監察
- ・個人情報提供に関する注意事項
- ・長期休業中の承認研修
- ・各校の様子

第9回定例会（教職員研修センター）

平成26年1月21日（火）9時05分から

第10回定例会（全国商業高等学校協会会館）

平成26年2月20日（木）10時から

(1) 東京都教育委員会からの連絡

(2) 東京都商業教育研究会からの連絡

(3) 研究協議等

- ・入学者選抜（推薦）
- ・検定試験の実施方法
- ・今年度の取組みのまとめ
- ・来年度の役割分担
- ・各校の様子

第11回定例会（全国商業高等学校協会会館）

平成26年3月18日（火）10時から

(1) 東京都教育委員会からの連絡

(2) 東京都商業教育研究会からの連絡

(3) 研究協議等

- ・入学者選抜（学力）
- ・今年度の取組みのまとめ
- ・来年度の予定
- ・夕張キャンプ
- ・生徒商業教育研究発表会
- ・各校の様子

商業関係高校副校長会では、今年度も多岐にわたる内容について、研究協議・情報交換を行いました。商業に関する学習を中心として教育課程を実施している高校同士ですが、地域性や伝統・校風など様々な特徴があります。東京都教育委員会が推進する様々な事業への対応・取組方法や募集対策、地域との連携、生徒指導の様子など、学校運営に関する多様な話題を共有することで大変有意義な時間を持つことができました。

平成26年度からは学力スタンダードが、平成27年度からは生活指導統一基準が全校に導入されます。それに加えて専門高校には、専門高校技能スタンダードが平成27年度から導入されます。これらについての研究協議も継続し、商業関係高校のより一層の活性化を推進していきたいと思います。

常任幹事 高山 昭彦（赤羽商業）記

3. 農業科副校長会

東京都農業関係高等学校副校長会は、都教育委員会より平柳指導主事の参加をいただき、会員学校数9校・15名のメンバーで、支援センター別副校長連絡会の午前中に農芸高校を会場として実施している。

定例会では、都教育委員会からの連絡、各部署からの連絡・報告、情報交換、連携事業などの調整等を行い、農業教育の推進と一層の活性化を目指している。

第1回定例会

日時 平成25年4月18日(木) 9:30～11:00

会場 教職員研修センター

- 内容 ①指導部高等学校教育指導課より
②幹事会報告
③平成25年度役割分担
④全国農業高等学校長協会総会
⑤都庁花壇植栽
⑥都農研
⑦三宅緑化プロジェクト
⑧情報交換

夕張キャンプ、スポーツ祭東京2013など

第2回定例会

日時 平成25年5月14日(火) 9:30～11:00

会場 農芸高校

- 内容 ①指導部高等学校教育指導課より
②幹事会報告
③都庁花壇植栽
④農場主任会議
⑤東京都農業祭
⑥都農研
⑦農業クラブ都連盟
⑧農場協会
⑨東京都学習成果発表会
⑩全国農業高校収穫祭
⑪三宅緑化プロジェクト
⑫平成25年度 農ク全国大会
⑬平成26年度 農ク関東大会
⑭情報交換

全国農業高等学校長協会総会、夕張キャンプなど

第3回定例会

日時 平成25年6月11日(火) 9:30～11:00

会場 農芸高校

- 内容 ①指導部高等学校教育指導課より
②幹事会報告
③都庁花壇植栽
④農場主任会議
⑤東京都農業祭
⑥都農研
⑦農業クラブ都連盟
⑧農場協会
⑨東京都学習成果発表会
⑩全国農業高校収穫祭
⑪三宅緑化プロジェクト
⑫平成25年度 農ク全国大会
⑬平成26年度 農ク関東大会
⑭情報交換

夕張キャンプ、第64回関東甲信地区農業関係高等学校教頭・副校長研究協議会・埼玉大会、防災宿泊など

第4回定例会

日時 平成25年7月9日(火) 9:30～11:00

会場 農芸高校

- 内容 ①指導部高等学校教育指導課より
②幹事会報告
③都庁花壇植栽
④農場主任会議
⑤東京都農業祭
⑥都農研
⑦農業クラブ都連盟
⑧農場協会
⑨東京都学習成果発表会
⑩全国農業高校収穫祭
⑪三宅緑化プロジェクト
⑫平成25年度 農ク全国大会
⑬平成26年度 農ク関東大会
⑭情報交換

夕張キャンプ、第64回関東甲信地区農業関係高等学校教頭・副校長研究協議会・埼玉大会、防災宿泊など

第5回定例会

日時 平成25年9月5日(木) 9:30～11:00

会場 教職員研修センター

- 内容 ①指導部高等学校教育指導課より
 ②幹事会報告
 ③都庁花壇植栽
 ④農場主任会議
 ⑤東京都農業祭
 ⑥都農研
 ⑦農業クラブ都連盟
 ⑧農場協会
 ⑨東京都学習成果発表会
 ⑩全国農業高校収穫祭
 ⑪三宅緑化プロジェクト
 ⑫平成 25 年度 農ク全国大会
 ⑬平成 26 年度 農ク関東大会
 ⑭情報交換

第 64 回関東支部地区農業関係高等学校教頭・副校長研究協議会・埼玉大会など

第 6 回定例会

日時 平成 25 年 10 月 8 日 (火) 9:30～11:00

会場 農芸高校

- 内容 ①指導部高等学校教育指導課より
 ②幹事会報告
 ③都庁花壇植栽
 ④農場主任会議
 ⑤東京都農業祭
 ⑥都農研
 ⑦農業クラブ都連盟
 ⑧農場協会
 ⑨東京都学習成果発表会
 ⑩全国農業高校収穫祭
 ⑪三宅緑化プロジェクト
 ⑫平成 25 年度 農ク全国大会
 ⑬平成 26 年度 農ク関東大会
 ⑭情報交換

テスト立ち入り調査、学校説明会、防災活動、文化祭、都立専門校高校の現状及び関係主体の意向に関する実体調査 など

第 7 回定例会

日時 平成 25 年 11 月 12 日 (火) 9:30～11:00

会場 農芸高校

- 内容 ①指導部高等学校教育指導課より
 ②幹事会報告
 ③都庁花壇植栽
 ④農場主任会議

- ⑤東京都農業祭
 ⑥都農研
 ⑦農業クラブ都連盟
 ⑧農場協会
 ⑨東京都学習成果発表会
 ⑩全国農業高校収穫祭
 ⑪三宅緑化プロジェクト
 ⑫平成 25 年度 農ク全国大会
 ⑬平成 26 年度 農ク関東大会
 ⑭情報交換

全国農業校長協会の表彰、学カスタンダード、技能スタンダード、文化祭など

第 8 回定例会

日時 平成 25 年 12 月 10 日 (火) 9:30～11:00

会場 農芸高校

- 内容 ①指導部高等学校教育指導課より
 ②幹事会報告
 ③都庁花壇植栽
 ④農場主任会議
 ⑤都農研
 ⑥農業クラブ都連盟
 ⑦農場協会
 ⑧平成 26 年度 農ク関東大会
 ⑨情報交換

テスト立ち入り調査、学校説明会、図書館業務、防災講話、64 回関東甲静地区農業関係高等学校教頭・副校長研究協議会・埼玉大会など

第 9 回定例会

日時 平成 26 年 1 月 21 日 (火) 9:00～9:30

会場 教職員研修センター

- 内容 ①指導部高等学校教育指導課より
 ②幹事会報告
 ③都農研都農研
 ④平成 26 年度 農ク関東大会
 ⑤情報交換

第 10 回定例会

日時 平成 26 年 2 月 20 日 (木) 9:30～11:00

会場 農芸高校

- 内容 ①指導部高等学校教育指導課より
 ②幹事会報告
 ③農場主任会議
 ④都農研

- ⑤農業クラブ都連盟
- ⑥農場協会
- ⑦平成 26 年度 農ク関東大会
- ⑧情報交換

第 11 回定例会

日時 平成 26 年 3 月 18 日（火）9:30～11:00

会場 農芸高校

内容 ①指導部高等学校教育指導課より

②幹事会報告

③次年度の役割分担

④都農研

⑤農場協会

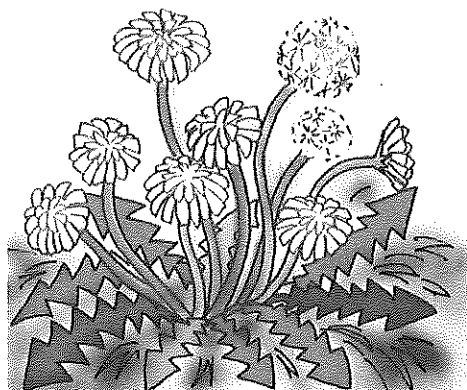
⑥平成 26 年度 農ク関東大会

⑦情報交換

農業高校の専門性を活かした特色化を積極的に図り、魅力ある農業高校の活性化に向け、島嶼を含めた農業系高校が連携している。また、情報交換を密に行いながら各種の行事・事業等に取り組んでいる。

今後も農業科副校長会を連絡調整、情報交換のみにとどまらず、農業教育の発展を目指して取り組んでいきたい。

常任幹事 吉野 剛文（農芸）記



6. 研究部会報告

1. 管理運営研究部会

第1委員会（学校管理関係）

発表内容の概要

1 はじめに

平成24年2月、東京都教育委員会は、社会の要請や都民の期待を踏まえ、「真に自立した社会人を育成すること」を目的に、「都立高校改革推進計画」を策定した。

本研究は、その目標Ⅲに示された「生徒の育成を担う教員の資質・能力と学校経営力の向上」のうち、「組織的な学校経営の強化」に焦点を当て、改革の方向（施策）や第一次実施計画（平成24年度から平成27年度まで）における取組に関する現職副校長へのアンケート調査を実施し、所属校や副校長自身の実態を明らかにすることで、副校長職としての有効な関わり方を提案することをねらいとした。

2 組織的な学校経営に関する調査

- ・調査期間 平成25年5月～6月
- ・調査対象 都立高等学校副校長
- ・調査内容
 - (1) 校長による自律的経営体制の強化
 - (2) 校長の学校経営を支える経営企画室の機能の充実
 - (3) 学校経営に対する組織的支援の推進
 - (4) 教科における組織体制
 - (5) 外部人材の活用
 - (6) 地域との連携協力

・調査結果

各設問に対する回答は、副校長職として、組織的な学校経営への取組という観点から、状況を4段階で評価することにした。また、備考欄を設け、具体的な実践例の紹介をできるようにした。なお、回答者数は全日制課程72名、定時制課程16名、通信制課程2名の計90名であった。

3 考察

(1) 校長による自律的経営体制の強化について

校長のリーダーシップの下、教員が一体となって学校運営に当たっていく体制を構築するために、多くの副校長が企画調整会議や主幹会議等を有効に活用して主任層の参画意識を高める

とともに、自己申告による面接等も利用しながら、教員の意識の高揚に努めている実態が分かった。しかし、主任教諭の活用については、具体的な実践例がほとんど見られず意外であった。
(2) 校長の学校経営を支える経営企画室の機能の充実について

経営企画室の経営参画が充実し、校長の学校経営を支えることにつながっている学校は、校長、副校長と経営企画室長が毎日の打合せ等により、綿密な連携をとっていることが分かった。副校長は、経営企画室長との連携を密にし、予算執行や施設・設備の改善等の業務について、積極的な関わりをもつことが大切だと考える。

(3) 学校経営に対する組織的支援の推進について

計画的で組織的な学校経営を実践するためには、具体的な学校経営計画の提示や、経営マネジメントサイクルの確立が必要である。また、副校長のマネジメント能力が高まることにより、主幹教諭、主任教諭、教諭という組織的なラインがより確立され则认为。しかし、今回の実態調査を見る限り、この項目に関する評価は全体的に低く、副校長が苦慮している実態のあることが分かった。

(4) 教科における組織体制について

平成25年度より教科主任の導入が行われ、週案の点検や教科会の招集、開催が各学校で実践されるようになっている。多くの学校では、教科会の会議録作成と提出による校長、副校長への報告も行われている。一方で、教科主任制は導入されたばかりであり、無回答の副校長も多く見られた。今後も生徒の学力の定着と伸長に向けた組織的な教科指導を推進することは必要であり、教科主任の果たす役割は大きい。

(5) 外部人材の活用について

専門的な教育ニーズに的確に対応するために、様々な専門知識やノウハウを有する外部人材を活用し、授業、部活動、講演会等で活用している学校は多い。副校長は、自校の実態に合った形で外部人材を活用し、魅力ある学校づくりを推進することが必要であるとする。

(6) 地域との連携協力について

地域社会との確かなパートナーシップの下での円滑な学校運営に向け、学校運営連絡協議会、地域社会、保護者による評価結果を教職員に周知し、課題解決に取り組んでいる学校は多い。副校長は、自校の実態を踏まえ、地域との連携協力による教育活動の一層の充実を図るとともに、学校から地域へ教育力の発信を推進し、より良い学校づくりを積極的に進めることを求められていると考える。

4 おわりに

副校長は、学校や地域の実態を把握し、校長の示す学校経営計画の具現化に向け、その内容を所属職員一人一人に周知・理解させるとともに個々の力を結集し、組織的な教育活動を展開するマネジメント能力が求められている。

本研究は、「組織的な学校経営の強化」をテーマとし、6項目全16の設問を用意して所属校や副校長自身の実態を明らかにする中で、副校長職としての有効な関わり方を提案することをねらいとした。しかし、状況に関する評価、具体的な実践例等の回答からは、副校長自身の工夫や苦勞を知ることはできたが、その関わり方は決して一様ではなく、何をもって有効な関わり方とするのかを結論付けることは難しい。しかしながら、今回の調査では自校の置かれている状況を理解する、他校の実践例を参考にする、副校長同士の情報交換を密にする中で、それぞれに有効な手立てを見出すヒントを得られることが分かった。今後、「都立高校改革推進計画」を学校現場で実りあるものとするためには、副校長の果たすべき役割は極めて大きく、そのことを自覚して職務に当たる必要がある。

指導助言 教育庁指導部高等学校教育指導課 指導主事 堀江 敏彦

本研究発表は、「都立高校改革推進計画第一次実施計画」に示されている目標Ⅲ「生徒の育成を担う教員の資質・能力と学校経営力の向上」のなかから、「組織的な学校経営の強化」に焦点を置き、副校長先生方を対象に実施したアンケート結果から取組状況を調査し、課題を分析し、解決に向けた提言を行おうとするものでした。

まず、(1)「校長による自律的経営体制の強化について」ですが、副校長先生方が企画調整会議や主幹会議等を活用して主任教諭の参画意識

を高めていることが伺える一方、主幹教諭の意欲の問題などから、組織の体制作りに苦慮していることが理解できます。さらに、主任教諭の具体的な活用例がほとんどないことも伺え、大きな問題であると思われました。さらなる工夫をお願いします。

次に、(2)「校長の学校経営を支える経営企画室の機能の充実について」ですが、校長、副校長が経営企画室長と毎日、打合せを行っている学校は、経営企画室の経営参画が充実し、校長の学校経営を支えていることが伺える。副校長先生方が経営企画室長と連携を密にして、積極的に業務を進められるようにする必要がありますと思います。副校長は積極的にキーパーソンとなってください。

次に、(3)「学校経営に対する組織的支援の推進について」です。副校長先生方のマネジメント能力により、学校組織の活性化が図られるという分析があります。しかし、現状では能力を向上させるための自己啓発等の時間を割けないとの調査結果が出ています。多忙を極める中で、副校長先生方自らの能力向上に向けた取組をいかに行うかという、スケジューリングなど、更なる工夫が大切であると思いました。

次に、(4)「教科における指導体制について」です。今年度から実施されている、教科主任を中心とした教科の指導体制づくりは、喫緊の課題であると言えます。教科の指導体制の構築と、若手教員育成を推進するためにも、教科主任が積極的に参画できるように副校長先生がフォローする必要がありますと考えます。

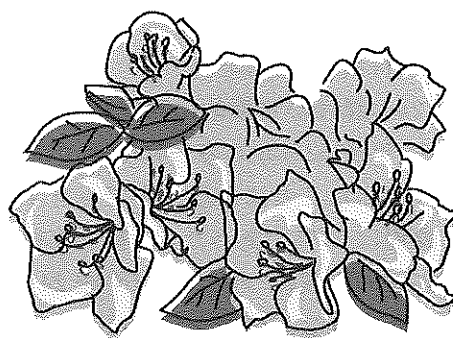
次に、(5)「外部人材の活用について」です。多くの学校が、部活動や講演会等で外部人材を活用していますが、教員との連携が不十分であるなどの課題が伺えます。活用に当たっては十分に調整するなど、副校長としての役割がやはり重要であると考えます。

最後に、(6)「地域との連携協力について」です。(5)の外部人材の活用と同様に、副校長として調整能力が問われるものと考えます。副校長先生が地域と連携を密にすることで、様々な取組が進められたという例も伺っております。

本研究発表では、「組織的な学校経営の強化」をテーマとし、副校長としてどのように有効的に関わることができるのかを探る研究であった

と思います。それぞれの学校の状況に的確に対応していらっしゃる副校長先生の姿が目に浮かぶようです。自校の状況を理解し、他校の実践例を参考にし、副校長先生同士の横の連携による情報交換を密にし、有効な手段を見出す可能性があるとの御提言であると思います。

委員長 高山 幹人（晴海総合）記



第2委員会（職務、待遇関係）

1 はじめに

平成24年度「教科における組織体制の整備に係る状況調査」によると、同学年、同一教科で授業の進行が調整できていない学校や定期考査問題が共通化されていない学校があり、教員が組織的に学習指導や人材育成に取り組むための校内組織が未整備であることが課題視された。

これらの課題解決を図るために、各教科における指導の目標、方針の共有及び授業進度の調整を図り、校内における教科指導に関する人材育成を強化することを目的として、平成25年度より教科主任を設置することとなった。また、教科主任の職務遂行の円滑化と教科内の教員相互の連携強化を図るため、校務分掌組織の一つとして教科会を設置することが同時に定められた。

今年度は、導入年であることから、設置や運営上の課題など、現段階の各学校の状況について情報を共有し、今後、各校の学校運営に反映していけるよう、本調査研究を行った。

2 調査について

(1) 調査目的

各学校における教科会の設置や運営状況及び教科主任の設置に伴う課題などを把握する。

(2) 調査方法

全ての都立高等学校及び都立中等教育学校の副校長を対象に、TAIMS メールに添付した URL にアクセスして回答を入力する形式で、平成25年5月にアンケート調査を行い、204校240課程のうち155課程から回答を得た。

(3) 調査結果及び考察

① 教科会の開催について

72%の課程が定期的に開催を計画しており、平成24年度53%からさらに20%が定期的な開催に移行したことになる。中でも月1回以上という課程は57%であった。「都立高校における教科主任の設置について」（平成24年12月）に基づき、月2回開催を目安に、今後改善していく必要がある。

また、時間割上に組み込まれている学校はほとんどなく、放課後や教科ごとに設定する学校が多かった。定時制課程は始業前という回答が多かった。

② 教科会を開催する上での課題について

「課題がある」と回答した学校が43%あり、内容は以下に示すとおりである。

- 水曜日や放課後は会議が集中するなど、時間設定が難しい
- 進度調整等は担当ごとに随時行っているため、月2回開催する内容がない。
- 回数で縛るなどの制度化を必要としていないと考える教員が少なからず存在する。
- これまでに実施していない会議であるため、移行に時間がかかる。

また、教科会の設置の目的を理解していない教員も一部にみられることから、教科会設置の背景・主旨を説明することにより、教員の意識改革を図ることが求められる。

③ 議事録について

「議事録の作成はしているが、管理職への提出を求めている」課程が5%あった。「東京都立学校の管理運営に関する規則」に基づき、早急に整備を進める必要がある。

④ 教科会の議題について

「年間を通して教科共通」あるいは「特定の時期に教科共通」の議題を計画している割合が平成24年度に比べ平成25年度は約10%増えており、組織的な取組に移行しつつあることが分かった。

⑤ 教科会の所掌事項について

「東京都立学校の管理運営に関する規則」に記載されている所掌事項のうち、各校の教科会において重要性の高い所掌事項（上位3項目を選択）については、「定期考査及び学習評価に関すること」「授業の進度や指導内容の確認に関すること」を挙げた課程は、65%以上と高い値を示した。

「教科指導に関する人材育成を円滑に進める体制の確保」に必要な「教科指導力の向上に必要なOJTに関すること」については、35%とあまり高い値を示さなかったが、経験豊かな高年齢の教員が大量退職期を迎え、新規採用教員や指導経験の少ない若手教員が多く、多くの学校に配置されている現状では、教科として組織的に授業進度の調整や指導内容の調整を図っていく上で、教材準備や指導方法など事前の周知な情報共有や指導を行っていくことが必要と思われる。

また、記載されている所掌事項のほかに重

要視していることとして、「学校の一組織としての自覚」、「組織的な取組」、「情報共有」がキーワードであることが分かった。

【所掌事項の他に重要視していること】

- ・学校の一組織としての自覚
- ・組織的な学力向上への取組
- ・組織的な授業力向上への取組
- ・組織的な土曜講習計画
- ・教科内での情報の共有
- ・進学指導力の向上、生徒の進路実現
- ・学力スタンダード策定

⑥ 教科主任について

選任するに当たり、主任教諭以上が不在の教科や教職経験の浅い教員ばかりの教科があるなど、「人材不足」という意見が多かった。

これらの課題を解決していくためには、教科主任会で綿密な情報交換により情報共有を図りながら教科会運営を行っていくなど、教科主任会を活用したOJTにより、経験の浅い教員を育てていく必要がある。

副校長としては、教科主任設置の目的の理解など、教員の意識啓発にも努めていかなければならない。

⑦ 教科主任会について

議題で重要だと思うことは、「学力向上のための研修会の企画・運営」が最も多く、次に、「教科会の情報交換」、「成績の分析・検討」などが高い値を示した。

その他としては、「学校の課題の整理」、「新教育課程の検証」、「教育課程上の課題解決」などが挙げられた。今後は、学校として教科主任会の位置付けを明確にしていく必要があると考える。

⑧ 副校長としての教科会の活用について

特に多かった意見は、組織的な取組による学力向上や教科全体の指導力向上への期待、人材育成、特に若手教員育成への期待、などであった。そのための情報共有、協議の場としての活用、コミュニケーションの活性化などを期待する声もあった。

他には、学力スタンダードの適正な策定、学校の一組織としての役割を自覚させる、横断的、系統的な組織の運営、各教科における課題と改善策の集約、進路部との連携、などの意見もあった。

3 まとめ

生徒の授業への信頼感を十分なものにするためには、①同学年、同一教科で授業の進行を管理する、②教科として、担当者によらない同じレベルの学習を保証する、③定期考査問題を共通化して、評価基準の統一化を図る、などの手立てが必要と考えられている。

そして、そのためには、教科が組織的に学習指導や人材育成に取り組むことが必要である。

平成 25 年度から設置された教科主任や教科会は、その実現のための施策である。

今回の調査では、多くの学校が時間設定についての課題を抱えながらも教科会を定例化し、教科主任を中心として組織的に動き始めていることが分かった。

議題として、「定期考査及び学習評価に関すること」や「授業の進度や指導内容の確認に関すること」は重視されているので、今後は、副校長として、教科会の議題について教科に任せるだけでなく、教科主任を活用したOJTへの取組について、校長への情報提供や指導方針の確認なども踏まえて、教科全体の指導力向上を図っていくことが必要である。

4 おわりに

今回の調査は計画段階のものであり、成果は未知数である。今年一年の実施をとおして、教科会の進行に対して指導助言を与えながら、定期考査問題の共通化が図られたのか、教科指導において組織的な教科指導ができたのか、特に若手教員の指導力向上を図ることができたのか、などを校長の意見も踏まえて副校長としてしっかりと検証し、年度末までに次年度に向けての自校の課題を把握しておくことが必要である。

研究協議会の後には、担当の堀江敏彦指導主事から、「今回の研究発表は、『組織マネジメント』と『人材育成』がキーワードになるのではないかと感じた。学校運営においては、「組織マネジメント」と「人材育成」の両者とも、副校長先生が中心となって解決すべき課題である。副校長として、指導部や学校経営支援センターと十分に情報交換をして、都教育委員会の施策がそれぞれ生徒のどのような変容をねらいとしているのかを十分に理解し、学校の先生方に自分の言葉で説明していただきたい」との指導助言をいただいた。

委員長 川口 典子（清瀬）記

2. 高校教育研究部会

第1委員会（教育課程）

主題：「新学習指導要領の全面実施に当たっての指導の工夫に関する取組について」

1 研究のねらい

平成25年度入学生から、新学習指導要領が高等学校で全面実施され、各校は取組を始めている。都立高等学校においては、平成23年度から学力向上開拓推進事業が始まり、来年度からは、各校が学力スタンダードを策定して、より明確な学力の向上に取り組む。また、「道徳・奉仕（仮称）」についても来年度からすべての都立高等学校で実施することになっている。このような中、各校では先行実施校の実践を参考にしながら、課題解決を目指し様々な指導の工夫を行っている。中部Aチームでは、各校の取組状況等についてアンケート調査を行い、結果を分析して方策を探ることとした。

2 アンケートの概要と回答の集計方法

(1) 調査概要

都立高等学校、都立中等教育学校後期課程の副校長を対象にアンケートを実施した。193校230課程のうち、89課程から回答を得た。（回収率38.7%）

(2) 回答の集計方法

学習指導の工夫、学力向上開拓推進事業への取組は、生徒の進路希望により異なると考え、下記AからDのようにグループ分けを行い、各校に選択回答してもらったうえで、そのグループごとに回答を集計し分析した。

A 国公立大学・難関私大への進学希望者が多い学校（12課程）

B 中堅以上の大学への進学希望が多い学校（17課程）

C 大学進学希望が多いが、AO入試や推薦入試を活用する生徒の割合が高い学校（14課程）

D 就職、専門学校進学者も一定程度見られるなど生徒の進路希望が多様な学校（46課程）

3 アンケート結果

以下のAからDは前述の2(2)を指す。

(1) 新学習指導要領で許される、指導要領に示していない、より高度な内容を指導する

A、Bの学校で高度な内容を指導する予定との回答が見られるが、全体的には少ない。対象と

する教科は、多い順に英語（11課程）数学、国語（共に9課程）であるが、専門

教科（5課程）で行うという回答もあった。

(2) 学力スタンダード作成の実務担当者（複数回答可）

教務主任が多いが、Dでは副校長が多い。学力向上推進委員もAを除いて多い。

(3) 学力スタンダード作成の時に参考とするもの

Dでは定期考査の問題が多く、ABでは大学入試問題が多い。その他として、センター試験、外部模試、都立高校入試、検定試験等の回答があった。

(4) 基とする「都立高校学力スタンダード」の段階

未定が多いが、Aでは発展、B、Cでは応用、

Dでは基礎を基とする傾向である。

(5) 言語活動の充実を図る具体的な取組（複数回答可）

Aでは「生徒が説明する」、Dでは「レポートや新聞にまとめる」が多いが、全体では「ペアで意見交換する」も多く、多岐にわたり様々な工夫がされていることが分かる。中心となって実施している教科は、国語（67課程）が最も多く、英語（46課程）、地歴、公民、理科、保健体育がともに15課程、数学（13課程）、専門学科（12課程）、

その他として、産業社会と人間、課題研究、総合的な学習の時間等の回答もあった。

(6) 道徳教育の計画作成の実務担当者（複数回答可）

教務主任（54課程）が最も多く、次が副校長（31課程）、その他、総合的な学習・奉仕の担当、生活指導主任、学年、委員会等である。

(7) 学習指導要領解説で示された道徳教育の項目の中で、特に重視する項目（複数回答可）「道徳性を養う」がやや少ないのは、他の項目

		A	B	C	D
はい	11	4	4	0	3
いいえ	55	2	9	8	36
未定である	23	6	4	6	7

		A	B	C	D
基礎	37	0	0	2	35
応用	19	3	7	7	2
発展	11	6	4	0	1
未定	20	2	5	5	8

		A	B	C	D
生徒がペアで意見交換する。	39	8	10	7	14
生徒が付箋を使って話し合う	7	1	2	2	2
先生が説明するだけでなく生徒が説明する	43	10	9	8	16
生徒が制作物を使って発表する	31	6	4	9	12
生徒が立場を決めて討論する	15	4	6	2	3
生徒がレポートや新聞にまとめる	50	8	11	10	21
その他	9	0	2	1	6

全般をまとめた包括的な項目であること、高等学校では現時点で、この項目の要となる道德の時間がないことなどが理由として考えられる。

		A	B	C	D
人間尊重の精神と生命に対する畏敬の念を培う	77	10	15	12	40
豊かな心をはぐくむ	60	8	14	9	29
伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛し、個性豊かな文化の創造を図る人間を育成する	33	8	5	8	12
公共の精神を尊び、民主的な社会及び国家の発展に努める人間を育成する	59	9	11	9	30
他国を尊重し、国際社会の平和と発展や環境の保全に貢献する人間を育成する	40	6	5	9	20
未来を拓く主体性のある日本人を育成する	35	5	10	4	16
道德性を養う	41	5	9	7	20

(8) 道德的実践力の育成としての奉仕体験活動の工夫について

「まだ検討していない」「未定である」がともに40課程で最も多い。

(9) 英語で行う英語の授業の実施状況（自由記述）

授業の進行を挨拶から終了まで、英語で実施。
／ALTとのTTの授業ではオールイングリッシュで実施している／文法の説明は日本語を補助的に用い、その他は英語でと使い分けている／教科会で話し合い、統一的に実施 等

(10) 体づくり運動の授業はどのように行っているか（自由記述）

スポーツテストと関連付けて実施している／準備運動を兼ねたストレッチや補強運動等を行っている／各授業の前に授業の特性を踏まえて、単独又は二人組で行っている

(11) 体育理論の授業はどのように行っているか（自由記述）

各種目実施の前段階において、歴史や文化的特性などについて実施している／運動やスポーツの効果的な学習の仕方やスポーツの歴史など、教科書やワークシートを用いて行う／各学年、2時間ずつを3期に分けて実施している

(12) 新学習指導要領の全面実施に当たっての課題、取り組み、解決策について（自由記述）

教職員が学習指導要領の内容を十分に理解すること／教員の意識を変容させることや具体的な指導方法の構築について、継続的に取り組む必要がある／教科主任を中心に各科で挙げた課題

や解決策等について、教科主任会で調整する

4 考察

東京都教育委員会は、平成24年2月に策定した「都立高校改革推進計画第一次実施計画」の目標の第一に「社会的自立の基礎となる力の確立」を掲げている。そして具体的な施策として、「学校の設置目的に応じた学力の向上」「都立高校学力スタンダード」に基づく学習指導、「道德教育の推進」「基礎体力の向上」を挙げて事業を推進している。

本研究では、新学習指導要領への各校の取組や、改革推進事業への取組を調査した。学習指導要領については、全面実施したばかりであり、改革事業についても、推進校での実践研究が始まったところであり、各校では、まだこれから検討すること多いと考えたが、現状を調査することにより、今後の参考になることを目指したものである。今回の調査から、以下のようなことが見えてきた。

学力スタンダードの策定により、各校の生徒実態に適した学力向上の到達目標が明確になることが確認できた。言語活動の充実を図る取り組みは、現状でも様々な工夫が多く教科・科目等で実践されている。道德教育については、高校で道德の時間を設定して行うことは手探りの状態であるが、生徒たちの、人間としてよりよく生きていく力を培うことを意識した取組が重要である。英語の授業を英語で行うことは、現時点での各校、各教員の取組状況は様々ではあるが、生徒の実態と指導項目の特性に応じて、生徒が英語に触れる機会を充実し、授業を実際のコミュニケーションの場とする努力がなされている。体づくり運動については、各校で様々な工夫がされ取り組んでいる。体育理論の授業は、実施時期、形態は様々であるが各校で工夫している。3(12)では、各校での取組が組織的に進められていることが分かった。一方、課題としては、教員が新学習指導要領と改革推進計画の内容を十分に理解し、実践に生かせるようになるための研修を各校で充実させることの必要性が指摘されている。このような現状において副校長の役割で大切なことは、各校の取組の情報を得て、自校においてリーダーシップを発揮することである。

委員長 福田 洋三（杉並）記

第2委員会（教育対策）

1 研究の目的と方法

学校において従来行われてきた防災訓練は年間1ないし2回の火災からの避難訓練が主であり、緊急放送を用いてグラウンド等へ速やかに避難し、出欠点呼を報告させ、その避難の様子や経過時間などを消防署職員に講評していただく形式がほとんどであった。しかし、平成23年3月11日に発生した東日本大震災により、防災に関する意識は大きく変わり、防災教育が強力に推し進められるようになっていった。その中で年間4回以上の避難訓練を教育課程に位置づけて実施するとともに、その内容も火災非難だけではなく地震災害、その後の復旧支援も含んだバリエーション豊かなものとなった。平成24年度より、定時制課程、特別支援学校を除く全ての都立高校で1泊2日の宿泊防災訓練が開始され、さまざまな学校としての取り組みが行われた。そこでその実態把握と連携協力先・体験活動等を調査研究し、今後の宿泊防災訓練の充実に資するとともに、組織的な対応を行うための他校の有効な事例などをあげていき、今後の防災訓練実施の参考になることを目的とした。

幅広くそれぞれの学校の取り組みを把握するため、多岐に渡るアンケートを作成し、実施された全ての学校に送付し、数値データ及び記述による意見を回収した。

2 発表内容の概要

実施時期

5月、10月に集中しており、学校での宿泊を検討した際に気候のよい時期を設定していることが分かる。教室や体育館アリーナで毛布のみで就寝することを考えると適切な判断であると考えられる。

実施曜日

金曜を主とし、他も休日の前日等を設定するなど翌日の生徒・教員への対応を行っている。

対象学年について

1年が圧倒的に多く、早期の意識付けや指導の入りやすさなどから選択されている。

地域との連携・協力について

連携先は消防署が最も多く、保護者、地

域消防団、区市町村、警察署の順になっている。

体験内容について

体験内容は多岐に渡り、平均で5.3種類を実施していた。講演会が最多であるが、様々な組み合わせで調整や運営に取り組み、10種類実施した学校も報告された。

食事について

食事に関しては夕食にアルファ化米、朝食に乾パン・クラッカー、ペットボトルの水を配布が最も多かったが、50%の学校で保護者等による炊き出しが出されていた。

生徒の様子、意見感想について

学校として保護者も含め周知徹底して実施しており、訓練の実施に否定的な生徒はほとんど見られず、訓練実施後は様々な体験を通して訓練の大切さを感じ取り、被災者の苦労などを自分のこととして考えられるようになったとの意見が多かった。

教員の様子の変化（実施前後）について

宿泊防災訓練を実施して、教員の意識の変化について回答を求めたところ、当初より肯定的（やや肯定的含む）で実施後も同様である学校はもちろん、多くの学校で実施後に何らかのプラス方向への変化があったことを回答している。

防災訓練の運営について

運営主体は分掌が4割であり、多くの学校で副校長が大きな役割を果たしている。具体的な企画立案の多くは副校長が行っており、役割分担やサービスへの対応、特に渉外関係は副校長に一任されることが多く、かなりの時間と労力を使っている。

3 研究協議、意見交換

○自衛隊との連携について詳しい内容を教えて欲しい。

○起震車体験について、管轄が区役所であり、利用が平日昼間の時間帯のみであり、土曜日や夜間の訓練ができなかった。

○連携先を確保するためにはいろいろな機関に幅広く依頼をしていくことが必要であった。

○訓練時間や訓練内容について、具体的な中身を教えて欲しい。

○職員を被災地に派遣し、実感を持たせたこと

がよかった。

○生徒をボランティアとして派遣し、前年度の体験を後輩に話をさせた。

練を充実させていくことがを目的にこのアンケート調査を実施し、分析を行った。

委員長 中山繁（板橋有徳）記

4 指導助言

平成 23 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災の教訓を踏まえ、平成 24 年度より防災教育が推進され、「まず自分の命を守り、次に身近な人を助け、世のため人のために尽くす高い社会貢献意識と実践力を兼ね備えた人間を育成し、防災に関する社会的要請に応える」というねらいのもとに年 4 回以上の避難訓練を教育課程上に位置付け、内容も様々な場面を想定して実施してもらっている。

1 泊 2 日の宿泊防災訓練は、1 年目は就寝訓練や非常災害用備蓄食訓練を通して、発災時を想定した避難生活の疑似体験を行うことを主眼とした。2 年目の今年度は、地域との連携の強化、事前事後学習の充実などを重点項目として実施をお願いしている。

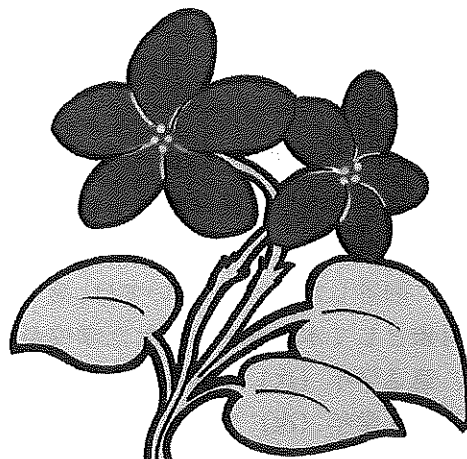
今回の発表では時期・対象学年から地域との連携強化、体験活動の実態など様々な報告がされたが、いつ訪れるか分からない災害のための訓練という点では、意識として 3 月 11 日の寒さの中の災害を忘れずに持ち続けて欲しい。

地域との連携強化は今年度の重点項目であり、地域消防団との良好な連携が築かれていることが伝わっており、D 級ポンプの使い方や心肺蘇生法・止血法などに関する知識や技術を地域の方やボランティアの方たちから指導され、身についていると聞いている。

運営面では一つ一つの回答が副校長先生方のご苦勞であり、全体の企画立案から外部団体との連携や役割分担、服務など様々な課題を一つずつ解決して実施していただいております。学校や地域の特性もあり、他校と同じとはいきませんが、他校の工夫を参考に、自校ならではの地域と連携した地域貢献ができる訓練の実施、人材の育成をお願いいたします。

まとめとして

1 泊 2 日の宿泊防災訓練が昨年度より実施され、すでに 2 回目を終了した学校も多く出ている。その実施の際の様々な課題等を共有し、他校の工夫やうまくいったことを参考に自校の訓



3. 生徒指導研究部会

第1委員会（生活指導・進路指導）

1 はじめに

平成23年3月11日に発生した東日本大震災を受けて、東京都教育委員会は、「都立高校改革推進計画 第一次実施計画」において、災害発生時、自分の命を守り、身近な人を助け、さらに避難所の運営など地域に貢献できる人間を育てるため、平成24年度から全ての都立高等学校（定時制・通信制課程を除く）及び都立中等教育学校後期課程で一泊二日の宿泊防災訓練（以下：本訓練と略す）を実施することとした。

そこで、西部Aチームでは、今年度の研究テーマを「一泊二日宿泊防災訓練参加生徒への指導に関する各校の取組」とし、今後の各校における本訓練の充実に還元したいと考えた。

西部学校経営支援センター所管内の全日制高等学校等（定時制・通信制課程を除く）61校にアンケート調査をお願いし、32校の副校長から回答（回収率52.5%）があった。調査時期は、平成25年5月25日から6月7日までであった。

2 アンケート調査項目

平成24年度に実施した本訓練参加生徒への指導に関する各校の取組を具体的に把握できるよう質問項目を精選し、以下の4項目についてアンケート調査を行った。

- (1) 対象生徒及び実施時期
- (2) 訓練内容
- (3) 訓練に伴う学習
- (4) 地域との連携

なお、調査時点で平成25年度に既に本訓練を実施した学校については、平成25年度に実施した直近の内容での回答を求めた。

3 アンケート調査の分析と考察

(1) 対象生徒及び実施時期について

まず対象学年について尋ねたところ、アンケートに回答した32校においては、第1学年（次）を対象として本訓練を実施した学校が9割を超え、第2学年（次）で実施した学校は僅かであり、第3学年（次）で実施した学校は皆無であった。

次に、対象学年（次）の在籍数に対する本訓練に宿泊した生徒の割合を見ると、50%以下の

学校はなく、逆に81%を超える生徒が宿泊した学校が8割近くに上り、95%を超える生徒が宿泊した学校も15校（回答校の46.8%）あった。

さらに、宿泊しなかった理由について尋ねると、体調不良、部活動、保護者の不同意といった理由に三分された。

本訓練を実施した時期を尋ねたところ、6月が最も多く、7月と10月がそれに続いた。実施時期は、夏季休業前後の時期に集中していた。

それでは、その実施時期を決定した理由を尋ねたところ、暑くもなく寒くもないという温暖な季節を選んだ学校が一番多く、学校行事との兼ね合いで時期を設定した学校がそれに続いた。

(2) 訓練内容について

次に訓練内容について具体的に尋ねたところ、講演会を約9割の学校で実施していた。

では講演会の講演者（講師）はどのような方であったかを尋ねたところ、管轄消防署員と回答した学校が6割以上であった。続いて管轄警察署員と回答した学校が多く、本訓練の講演会実施における消防署員及び警察署員の協力の大きさが分かった。その他として、大学教員や防災専門家といった専門研究従事者、被災地出身の大学院生などの震災体験者、また水道局や日本赤十字社といったライフライン関連職員や医療機関職員を講師として招いた学校もあった。

講演内容としては防災講話が最も多く、続いて緊急時対応や地域協力、災害時体験談といった具体的な内容をテーマに講演会を実施した学校も多かった。

講演会を除いて実施した訓練内容については、備蓄食準備を実施した学校の割合が最も高く6割以上であった。続いて応急救護訓練や救助訓練、消火訓練といった消防署員や消防団員の指導のもと生徒が自ら行う実践型訓練、さらに起震車体験や煙体験などの体験型訓練が多かった。一方、地域防災マップや震災時帰宅計画作成、災害用伝言ダイヤル訓練の実施率は低かった。

実施後の生徒の感想や教員アンケート結果から、実施して効果が高かったと思われる訓練を尋ねたところ、応急救護訓練（AEDや三角巾、担架の使用法など）を挙げた学校が6校と最も多かった。続いて、震度7レベルの地震を実感できたとして起震車による揺れの体験が効果的であったとした学校が3校、消防署と連携した

救助訓練が3校、消火器や簡易ポンプを使った消火訓練が2校、災害時の水の確保方法や視界不良時の避難路の確保方法といったサバイバル的訓練を挙げた学校が2校あった。

(3) 訓練に伴う学習について

次に本訓練に伴う学習について、事前と事後に分けて尋ねた。「事前学習」を実施しなかった学校は皆無であり、内容として「訓練実施等の目的」や「訓練内容」の説明等を挙げた学校が9割を超えた。続いて「訓練参加の心構え等」を指導した学校も6割以上あった。

また本訓練に先立ち、地域防災マップや震災時帰宅計画の作成を実施することで、訓練に対する動機付けを行った学校もあったが、どちらも1割に届かなかった。

実施効果の高かった事前学習の取組みとしては、「訓練実施の目的等」の指導を挙げた学校が5校と最も多く、学習によって生徒の自覚が高まり、災害時の対応方法がきちんと理解できたと評価していた。

さらに「事後学習」についても、実施しなかった学校は皆無であり、内容として「振り返りワークシート」や「感想文」の作成の順で多く、事後学習は書く作業が中心であったが、「体験発表」の場を設定した学校も1校あった。

実施効果の高かった取組みとして、「振り返りワークシート」を挙げる学校が4校と最も多く、「体験した内容を自分自身の視点から振り返ることが可能になった」、「体験して良かった点、悪かった点を各自が認識できた」と評価していた。

(4) 地域との連携について

最後に、本訓練実施に際しての地域との連携について尋ねた。1校を除くすべての学校で「管轄消防署」との連携を行っていた。消防署との連携なしには本訓練の実施が成り立たないくらいに重要であることが改めて浮き彫りになった。

次に多かったのが、市区町村役所・役場との連携である。また、都立高校等が避難所や帰宅支援ステーションとなることを想定して、地域団体（自治会等）や管轄警察署等と積極的に連携を行った学校も多かった。

効果が高かったと思われる地域との連携としては、管轄消防署との連携を挙げた学校が8校と最も多かった。

4 まとめと今後の課題

東京都教育モニターアンケートの結果（平成25年3月）によると、「本訓練の実施を通して、高校生にどのような実践力を身に付けさせることができるか」という問いに対して、都民からは「災害時の避難所の運営補助（救援物資の運搬、炊き出しの際の調理補助等）」、「災害時の避難してきた幼児、児童の安全確保などの対応」、「災害時の高齢者の避難誘導などの対応」等への回答が比較的高いことが分かる。この結果からは、若くて体力のある高校生に対して、自分の身を守るだけでなく、「他者を守ってくれる」存在として大いに期待している都民の願いが伝わってくる。

今後は、都民が高校生に期待する「共助」の観点からも訓練内容を見直し、「自助」と「共助」の精神をバランスよく養うプログラムに改善を図る必要がある。また同時に、本訓練の都民への認知度を高めるため、ホームページ等による情報発信や近隣の学校との積極的な連携も進めていきたい。

5 研究協議会と講師からの指導助言

発表に引き続いて行われた研究協議会では、特に質問や意見等は出されませんでした。

当日講師でいらした教育庁指導部高等学校教育指導課指導主事、松鶴賢二朗先生からはまず、①防災教育の意義について②都立学校全校における「防災教育推進委員会」について③防災教育推進指定校の取組等について紹介があった。

続いて、同指導主事から、①1泊2日の宿泊防災訓練に関して、各学校が地域の特色を生かし、様々な機関と連携し、充実した内容の訓練を実施していること。②今後は、実施したことを訓練で終わらせることのないように、マニュアルや備蓄物資の見直しを図ること。③東日本大震災時の東松山市立大曲小学校を例に、避難場所へ誘導した教職員のとっさの対応から学べること。④今後は、都民が高校生に期待する「共助」の観点から、宿泊防災訓練の改善を図ってほしいこと、などについて指導助言をいただいた。

委員長 博田 英明（野津田）記

第2委員会（教科以外の教育指導）

研究テーマ

「高校における特別支援教育の充実 ―特別支援教育のコーディネーターの果たす役割」

1 はじめに

平成19年4月、特別支援教育が法的に位置付けられた改正学校教育法が施行されるに当たり、文部科学省が「特別支援教育の推進」の通知を出し、特別支援教育を行うための体制の整備及び必要な取組を示した。東京都も都立高校に対して、同年6月に特別支援教育推進資料「高等学校における特別支援教育（指導部作成）」を参考に体制整備を進めるよう指示した。その後、特別支援教育コーディネーター（以下、「Cdnt」と略す）の指名や校内委員会の設置等、各校の実情に応じた整備が進んできた。平成25年度、スクールカウンセラー（以下、「SC」と略す）の全都立高校への配置をきっかけに、更なる特別支援教育の充実を各高校に求められている。各都立高校の特別支援教育の整備状況について、平成25年6月、副校長にアンケート調査を実施した。アンケート結果から、特別支援教育の充実に関する都立高校の現状の一端を理解するとともに、先進的な実践校の改革・改善の参考にすることが可能であると考ええる。

2 調査の方法と調査結果

(1) 調査方法

平成25年6月12日から6月21日にかけて、都立高等学校の副校長に、TAIMSを使用して「高校における特別支援教育の充実に関する実態調査について」の依頼及び回収を行った。回答率は、38.8%であった。対象校227校中、88校から回答を得た。内訳は全日制課程66校、定時制課程22校である。

(2) 調査結果と分析

質問1 Cdntに関すること

Q1<指名の理由>、「特支教育を担当する分掌」が6割、「特支教育に対する資質に富む」と「教育相談の経験を有す」がともに4割で、適切な教員がいる場合はその人を指名し、十分な経験者がいない場合は担当分掌から指名している実態が伺える。Q2<人数>、78%が1名の

みを指名、場合によっては2名にしている学校もある。Q3<分掌>、保健部が39%、生活指導部が25%で、教育相談や生徒指導を担当する分掌から指名する傾向がある。Q4<教職年数>、教職年数10年以内の割合と25年以上の割合がほぼ同じ35%になっている。

質問2「校内委員会に関すること」

Q1<名称>、名称は様々で、類似した名称をまとめ集計をする。「特別支援教育」が30%、「教育相談」が27%であった。Q2<構成員>、副校長（89%）と養護教諭（84%）が必須の傾向があり、学年担任（70%）や生活指導部（69%）が続いている。SCと校長は半数の学校で構成員となっている。Q3<人数>10名以上（22%）、8名（18%）、6名（17%）の順だが、特徴的なことは見られない。Q4<回数>4回以上（47%）、3回（34%）の順で、学期に1回以上の開催をしている。質問3「特別支援教育の状況について」

『後期中等教育段階における特別支援教育のモデル構築に関する基礎的研究』（平成25年）広島県内の全公私立高校を対象とし平成24年度に調査の際に使用されたアンケートと同様のものとし、都立高との比較をすることを通し、課題の特性を把握することとした。なお、広島での回答校は、全日制62校、定時制6校、通信制3校、全定併設4校である。Q1<特別な配慮を必要とする生徒（以下、「配慮生徒」と略す）の在籍状況>、身体障害のある生徒、発達障害の診断を受けている生徒、発達障害等の疑いがあり支援が必要な生徒の順で数値が高くなっている。0~2名までを配慮生徒なしと扱えば7割位の学校が配慮生徒なしの状況となる。配慮生徒が10名以上の学校は、定時制課程あるいは進路多様校であった。

Q2からQ7は広島の調査結果をあわせて載せ、傾向を比較する。

Q2<配慮生徒への学習上の対応>表1

特別な配慮を必要とする生徒への学習上の対応		
対応方法	今回	広島
補習実施	20	19
授業補助	9	9
個別資料	9	9
環境整備	21	37
試験問題	3	0
設定科目	2	3
その他	18	29

- Q3<配慮生徒の定期考査での対応>表2
 Q4・5<配慮生徒の卒業認定等の対応>表3
 (表2・3は省略)
 Q6<配慮生徒の指導で感じる事柄>表4

特別な配慮を必要とする生徒の指導で成果や困難を感じる事柄

事 柄	成果		困難	
	今回	広島	今回	広島
学習内容の理解	15	20	17	26
一般的な生活態度	12	17	15	17
友人関係	11	16	22	31
食生活	1	4	4	1
遅刻	6	2	6	4
進級判定	10	3	7	6
長期欠席	0	5	6	5
卒業認定	7	1	3	1
家庭との連携	21	25	19	16
進路指導	5	9	18	17
コミュニケーション	14	17	17	27
健康	2	4	2	3
飲酒・喫煙	0	0	3	0
異性関係	0	1	7	2
経済的問題	0	0	7	4
一般的な常識	3	5	14	17

広島と同様に、家庭との連携や学習内容等に成果を感じている学校が多い。困難だと感じるものの中心は、友人関係やコミュニケーション等、生徒間のつながりに関する事柄である。

- Q7<実施している事柄>表5

特別支援教育に関してすでに実施している事柄

事 柄	実施済み		実施望	
	今回	広島	今回	広島
校内委員会設置	60	57	3	5
SCの配置等	72	35	6	21
コーディネーター指名	58	57	1	2
教員の加配	2	2	25	27
指導に関する研修	42	55	20	12
特別支援学級の設置	0	0	4	2
支援員の配置・増加	0	3	16	18
養護教諭の複数配置	13	8	26	8
巡回相談	8	13	23	19
通級指導教室の設置	0	0	4	3
中学校との引き継ぎ	10	39	38	28
進路先への引き継ぎ	2	3	13	26
専門機関との連携	13	17	22	28
センター的機能の活用	6	17	20	14

広島の状況と大きく異なっている事柄は、実施済みではSCの配置(都:広=72:35)と中学校との引き継ぎ(都:広=10:39)である。実施を望んでいる事柄では、SCの配置(都:広=6:21)や養護教諭の複数配置(都:広=26:8)が異なっている。自治体ごとの教育政策の違いだが、重要な事柄なので改善が望まれる。

質問4「SCの活用状況について」

平成25年4月16日付25教指企第67号「スクールカウンセラー活用事業充実のための観点について」の調査で使われた項目を本アンケートでも利用した。SCとCdntとの役割の重複や連携が求められるので、SCの現状の把握した。(結果は、省略する。)

3 特別支援教育に関する取組み事例

AH高校における組織的な対応事例

(具体的な取り組みは省略し、見出しのみ)

- (1) 校内の特別支援教育に関する委員会の設置と支援体制の構築の概要
- (2) スクールカウンセラーとの連携
- (3) 巡回相談
- (4) メンタルヘルス検診
- (5) 校内研修会の計画
- (6) 関係機関との連携

4 まとめ

SCの全校配置となった本年、高校における特別支援教育の「整備」期から実動期への展開が求められている。しかし、特別な配慮を必要とする生徒がいない、もしくは顕在化していない学校においては、学校現場の様々な課題への対応に追われ、取組みが進んでいない状況があると考えられる。

紹介した事例にあるように、生徒の実態把握を通して課題が発見され、それを克服するプロジェクトが起動する。その後、個別の指導計画を後追いで作成されていく。その間に学校内外の連携がとられ、課題の共有化が図られていく。一連の対応の舵取りを任せられるのがCdntである。十分な経験を持つCdntは高校の現場には、まだ多くはいないので、役割を担わせる中で育成していくことになる。従って、管理職が適切な人材を見つけて指名し、関係組織との連携を円滑にすすめる体制作りを促進することが重要な職務である。

委員長 外川 裕一(南葛飾)記

7. 退 任 者 の 声

教頭・副校長生活を振り返って

原田 明（工芸）

私の管理職生活は、平成 11 年 9 月 1 日付で世田谷地区チャレンジスクール（現世田谷泉高）開設準備担当教頭を命ぜられたことに始まる。

校長、2 人の教諭、2 人の行政職、1 人の行政系嘱託員が烏山工業高校の 1 室に勤務していた。当時、3 部制をとる総合学科単位制の定時制高校は全国的に例がなく、現在の桐ヶ丘高校の開設準備室が先行しているだけだった。チャレンジスクールをどう創るか、様々な観点から教育課程や施設・設備を検討した。

入選も特色があった。作文と面接だけであり、戸惑いが強かった。予想される倍率は高く、この入選をどう円滑に実施するかは教育課程の編成とともに大きな課題だった。

また、地域社会の関心も高く、注目された。そのため、神経も疲れた。開校が近づく就多忙さが増し、徹夜もしばしばであった。

開校に際しては、本庁もよく対応してくれたが、翌年度の教員が何人になるのかも分からず、施設・設備の整備も思うように進行せず、心身ともに疲労した。事務室職員も新しい学校づくりに精魂を込めて仕事をした。献身的に働く教職員と学ぶ意欲旺盛な生徒の姿が救いであった。

開校後も大変なことが続いた。チャレンジスクールでは様々な特色ある科目を開講することとなっており、このことに興味・関心をもって入学した生徒も多かった。しかし、その開講は年度ごとに順次開講するものであって一度にすべてを開講することはできない。このことへの不満や所属の部の変更ができないことへの不満が特に保護者に強く、よく批判された。

また、開校 3 年目に改修なった新校舎から化学物質が出て、「シックスクール」問題が生じた。都立高校で初めてということで新聞にも取り上げられ、教育委員会、学校ともに批判された。この問題には、PTA とともに対策委員会を発足させ、誠意をもって対応した。また、化学物質過敏症の勉強会も開催した。

開設準備や開校当初の様々な取組は、豊かな

想像力や創造力、正確な法規の知識、厳正な服務、広い視野、新しい教員像の形成等今までにない仕事であった。

今日、キャリア教育の重要性が強く指摘されている。キャリア教育とは、「つなぐ」教育であると思う。学校外部の社会を教材として取り込み、社会、学校、生徒をつなぐことがこれからの教員の役割であるとする。人間としての在り方生き方を探求し、自己理解や社会の中で自己をどう生かしていくかを考えさせる教育活動は、高校生の発達にとって極めて重要である。

チャレンジスクールを皮切りに、エンカレッジスクール、閉課程校、生活科学科と普通科を併置する単位制など高校改革推進計画対象校に多く勤務してきた。この間、「ゆとり教育」から「確かな学力と生きる力」を身に付けさせる教育に学習指導要領が変わっていった。また、「奉仕」、日本史や「江戸から東京へ」の東京都独自の必修化、宿泊を伴う防災体験活動等の導入が図られるなど、教育行政も活発となった。

これからの学校は、多様な教育ニーズに応えるため、「地域」「国際化」「たくましく生きる力」がキーワードとなっていくであろう。

最後になったが、多忙な勤務の支えは、家族と多くの勤勉で熱心な教職員であった。とりわけ、家族への感謝には限りがなく、言葉にならない。

皆様も、ご家族を大切にされて益々ご活躍ください。

教員生活を振り返って

長田 真一（蒲田）

平成 53 年 4 月、初任校に赴任して以来 30 数年の教師生活も終わりを迎えます。初任校での初めての担任、5 月の連休を終えてみたら担任学級生徒の半数近くが近隣の都立高校に殴り込みを掛けて謹慎。毎日放課後には家庭訪問をしていた。生徒の学ランの裏には、昇り龍の刺繍が施されていたりと、懐かしい思い出が蘇ってくる。

2校目の学校では、3度の担任のうち2回が臨時増学級で9クラス編成となった。文化祭での餅搗きも思い出に残っている。餅米の残量、生活指導部（文化祭実行委員会）の指導による販売量制限がある中、ある教員からの文化祭を盛り上げるためにもっと餅搗きをして欲しいとの要請に閉口した記憶が残っている。また、応募者の減少に歯止めを掛けるべく若手教員で校内清掃等を行った思い出もある。そう言えば、職員会議中、教頭の一言に切れたこともあった。

3校目では、不登校の女子生徒（留年生）の対応に四苦八苦した。家庭訪問しても会えず、2階にいる生徒に階段下から声を掛けたこともあった。この女子生徒、午後になると部活動に出て来ていることを知り、活動場所まで行って話したこともあった。合唱祭の時期に出て来て、指揮者をやりたいと言ってきたので、すでに指揮者に決まっていた生徒、合唱祭委員、学級生徒と順に話し、女子生徒を指揮者に据えた。女子生徒の指導は厳しかったが、生徒達もよく応え1学年でありながら総合準優勝に輝き、女子生徒は指揮者賞を射止めた。この女子生徒とは今も交流が続いている。

そして、管候補主幹教諭となる直前の卒業式で勲奨退職をする男性教諭が不起立をし、翌年度の研修会に参加せざるを得なくなったのが、管理職としてのその後を予言していたような気がする。

副校長として1校目では、公民科教員に日本史の授業を担当させていたが、副校長連絡会から帰島し、経営企画室に入った途端に指導部から連絡が入った。「公民科教員の所持免許を確認せよ。」との内容であった。本人に聞いたところ、地歴科の免許を持っていないとの回答であった。丁度、社会科が地歴科と公民科に分かれた直後の出来事であった。人事異動の際に、地歴科と公民科両方の免許を持っている教員を要望し、赴任してきた教員であるから、当然両方の免許を持っていると確信していた。当該教員も前任校の校長との会話の中で島嶼の学校では許されていると認識していたことも判明した。

2校目では、もう無くなっているはずだった教員による人事委員会、予算委員会が存在していた。校長も容認している部分もあったが、指

導力が今一つだった新採教員に対する委員の一言が火種となって教育委員会が知るところとなった。3校目では、多くの高校等で起こった指導要録紛失問題に関わった。自己の過失に依るところでは無い部分でお叱りを受けるのは心外だが、これも管理職としての職務の一部と自分自身を納得させた。

いま、退職を目の前にし教員生活、特に管理職としての生活を振り返ってみると、それぞれに懐かしい思い出が蘇ってくる。また、多くの人々との交流が走馬燈のように目の前を巡っている。最後に、これまで私をご指導、ご鞭撻を頂いた方々にこれまで育てて頂き、また大過なく教員生活を全うさせて頂いた感謝をし、筆を置くこととしたい。

ありがとうございました。

退職にあたって

玉井 篤（日本橋）

本題の前に、私たち昭和28,29年生まれがどんな時代を生きてきたかを知っていただきたいと思います。

神武・岩戸・イザナギ景気と続く高度経済成長期の中で安保闘争、成田闘争、大学紛争といった社会運動・学生運動を傍に眺めつつ、高校紛争を経験しながら四当五落と言われ続け、受験戦争を潜り抜けてきました。一括りで表すと、団塊世代の後ろに続く『学園紛争経験世代』となろうか。

教育界に目を向けると、「入試準備教育の是正について」（昭和40.11.19）、「学校と家庭の教育上の協力について」（昭和41.2.11）、そして「高等学校入学選抜制度の改善と教育の正常化について」（昭和41.7.1）と続く、所謂小尾通達により、高校における補習科の廃止、過度な進学指導の禁止、学校群制度などの影響を直接受けた世代でもあります。

昭和44年1月の東大安田講堂攻防戦をテレビで眺めつつ、間近に迫った高校入試に思いを馳せながら、東大入試中止を目の当たりにしてきました。後に、芥川賞受賞作となる庄司薫氏の「赤頭巾ちゃん気をつけて」には妙に感情移入したものです。高校入学後も、学生運動は燎原

を駆け抜ける火の如く、全国津々浦々に波及し、筆者の高校においてもバリケード封鎖が現実となり、「ナンセンス」、「ノンポリ」、「三無主義」、「日常性への埋没」という言葉が当時一年生だった私たちの頭上で交錯していました。卒業間際の札幌オリンピックと浅間山荘事件に釘付けとなり、挙って浪人への道を突き進んだ仲間は多い。大学入学後も学生運動は燦り続けていましたが、大学管理法の成立とともに急速に鎮火した感があります。教科書無償制度は常に私たちの背中を通り過ぎて行き、退職金削減、年金支給の開始の延伸など、巡り合わせの悪さには事欠かないが、唯一、教員免許更新を免れたのが救いだろうか。

大分前置きが長くなりましたが、平成9年度から教頭、副校長として深川商業、墨田川、志村、竹台、日本橋と17年の歳月が経過しました。消費税が5%であった期間に相当します。その間お世話になった校長先生、教職員の皆様にはお礼を申し上げます。江東地区チャレンジスクール、進学重視型単位制高校、閉校準備、移転、重点支援校等とそれぞれの学校のミッションは異なりますが、全てにおいて都立高校改革推進計画が根底にありました。

平成18年度に都の副会長として、全国大会の運営に携わって以来、都会長、全国会計、全国会長と8年間にわたって都ならびに全国高等学校教頭・副校長会に関わってきました。都教育委員会をはじめ文部科学省、教育再生実行会議や各県の教頭・副校長会と情報交換や交流を行うことができたと思います。

全国会長の任期は今年の7月末まで残っておりますが、平成28年度の全国大会の主管開催に向けて、協力していきたいと考えております。

4月からは毎朝TAIMSを開く必要もなく、SECOMからの深夜の電話もなくなり、穏やかな日々を期待しています。

会員の皆様におかれましては、ご自身の健康に留意され、ご活躍されますことを祈念いたします。

退職を迎えて

清水 進（神代）

11年間で3校に渡り、教頭・副校長職を勤めました。皆様のご協力で退職を迎えますことに厚く御礼申し上げます。

1校目の六郷工科は、東京初の単位制工業高校の開校であり、試行錯誤を繰り返しました。また、デュアルシステムの導入も加わり、1日が30時間あっても足りない状況でした。教員は多士済済であり、学校づくりの楽しさ・難しさを経験しました。たくさんの企業を訪問したことも、良い思い出です。通勤時間が長かったことが、少し残念です。

2校目は石神井の定時制で、閉課程まで4年間お世話になりました。定時制課程は初めてで、定時制生徒の抱えている課題の大きさや家庭の苦悩を勉強しました。定時制課程を知ること、少しオーバーな表現ですが、都立高校の奥深さを理解できたような気がします。閉課程とともに、石神井高校の改築にも関係しましたので、六郷工科同様、学校づくりのハード面もしっかり学びました。

3校目が最後にお世話になった神代です。4年間で進路実績の改善・高校入試倍率の上昇を果たしました。平成28年度からの改築も計画されています。職員・PTA・同窓会・支援センターのお力と思っております。特に同窓会からは、今年卒業して約8年位のMさんが文化祭の片付けの日に来校し、他のメンバーとともにヒット曲を歌唱し、大いに後輩たちを元気付けてくれました。人の輪の大切さ・偉大さに気付かされました。

その他神代では、今秋2013スポーツ祭東京閉会式のプラカード係を1学年生徒が担当し、大きな達成感を味わうことができました。

11年間を通じて理解したのは、人の輪・チームワークの重要性です。言葉では簡単ですが、教員集団として実現させることの困難さを痛感してきました。退職間際にこのことが少しでも成功したことが、大変嬉しいです。

副校長先生方、健康に留意され、趣味を大事にしてください。私は趣味の剣道に救われました。もう1つは、友人です。悩みの相談相手として必要不可欠です。皆様のご活躍をお祈りし

ております。

退職を迎えて

中村 辰夫（北豊島工業）

平成 15 年 8 月、突然の配置を命ぜられ、都立久留米高等学校定時制課程の副校長に着任しました。自分は工業（機械系）の教員だったため、初めての普通科高校勤務に少しとまどいながらも赴任しました。8 月という夏季休業日中の赴任のため、先生方の顔と名前を覚えるのに時間がかかりました。

初めて管理職としての職務を遂行するに当たり、前任者との引継ぎも無く、最初の任務は、定時制の全国大会にサッカー部（全日制のサッカー部は強豪だが、定時制も強かった）が出場するための資金調達を校長に命じられ、市の教育委員会や保護者、関係機関を廻った事を覚えています。

平成 18 年には、平成 19 年度から新しく「東久留米総合高等学校」になるための改修工事も始まり、引越しや準備におわれて忙しい日々を送りながらも、平成 19 年 3 月まで勤めさせていただきました。

平成 19 年度より、「都立六郷工科高等学校・昼間定時制課程（デュアルシステム担当）」の副校長に転任し、やっとホームに帰ってきた感じでしたが、東京都初の「デュアルシステム」導入 4 年目の高等学校のため、生徒の実態に即した教育課程の再編成や各方面（外国も含めて）からの見学や訪問が多く、その対応もしなくてはならないため、多忙な毎日でした。また、昼間定時制課程（現在は全日制課程）とデュアルシステムという特色があるため、如何に中学生やその保護者及び先生にこのシステムを理解してもらうかという点に努めてきました。

平成 21 年、次の異動はなんと同じ職員室内で右方向へ 10m の異動でした。そのわけは、六郷工科高等学校・昼間定時制課程担当から六郷工科高等学校・夜間定時制課程担当への異動でした。六郷工科高等学校の職員室には、全日制課程・昼間定時制課程・夜間定時制課程の先生方が同居しているからです（職員室は一つです）。

夜間定時制の勤務は久留米高等学校で経験し

ているため、大きな問題は無かったが、学校行事の大きな特色の一つに「文化祭におけるねぶたの巡航」というものがあり、総合的な学習の時間の授業で「ねぶた」と「ねぶた」を製作し、文化祭の前夜祭に太田区六郷町会を巡航するという企画があり、全生徒が参加する一大イベントがありました。これには生徒が積極的に参加し、大いに盛り上がったことを覚えています。

平成 23 年 4 月からは現任校の北豊島工業高等学校へ転任しました。北豊島工業高等学校は創立 90 年を超える伝統ある学校で「総合技術科」を設置している高等学校です。「総合技術科」は、1 学年では同じ教育課程で学習し、2 学年から「類型」別に 5 つのクラスに分かれて専門的な分野を学習して行くシステムです。

このような管理職としての経験を積んでまいり、特に心がけて推進してきたことは「人材育成」ということでした。おかげさまで、今まで多数の「主任教諭」、「主幹教諭」、「管理職候補者」を発掘し、これからの東京都の教育に携わる重要な人材を育てることができたことに満足しています。これからも都立高等学校の更なる発展を願っています。

退職を迎えて

北川 昇（練馬工業）

教頭、副校長として 13 年間東京都に奉職いたしました。教員になる時、最初の面接で「中野工業高等学校に一生いることになると思います。がそれでも良いのですか。」と尋ねられ、「それでも結構です。」と答えたのがつい昨日のように思い出されます。

中野工業高等学校では食品工業科の担当で、当時からクラスの女子が 60% を占めそれが普通のように考えていました。教頭として最初に赴任したのが小金井工業高等学校でしたが、女子がほとんどいないのを目の当たりにして工業高校は男子の学校なんだと認識したのを覚えています。

その後府中工業高等学校、総合工科高等学校定時制、練馬工業高等学校と転勤してまいりましたが各校なりの特色がありそれなりに良い経験をさせていただいたと思っております。

その中で特に印象に残っているのは、府中工業高等学校で生徒が野球のドラフトに指名され、プロ野球の入団発表に立ち会えたこと。練馬工業高等学校で生徒がプロのサッカーから指名され入団したことに立ち会えたことなどがこの仕事をしていなければ経験できなかったことと考え、この仕事を選んで良かったと、今でも思っております。

また、府中工業高等学校では府中地区の官公所連絡協議会に参加し、府中刑務所内を見学したのが印象に残っています。

副校長になって特に感じたのが、先生方も様々な悩みや苦労を背負って生きていると知ったことでした。副校長として解決できることはそれなりに解決できるようにさせて戴きましたが、その人が背負っている苦労を聞くだけで何もできない時、自分の無力さとその人の話を傾聴しかできない自分に無念を感じずにはいられませんでした。

また、各校を回って全日制と定時制の違いは全日制は親が生徒を必死に育てていること、定時制の親はそれすらあきらめてしまっている親が多いということでした。

子供の成長に必要なのは、子供が幼少期にどれだけ親から愛情を注がれたかによって決まってしまうのではないかと、これらの学校を経験して思うようになりました。

それぞれの家庭でそれなりの事情があるとは思いますが、やはり子供は親が育てた方が精神的にも安定するのではないかと教育経験を通じて感じている次第です。

つたない文書になりましたがこれで私の話を終了させていただきます。東京都に奉職させていただいて37年になりました。長い間誠に有り難うございました。

退職を迎えて

益子 義明（府中工業）

C選考で合格し、小金井工業（定）で3年間、府中工業で2年間、副校長を務めました。小金井工業高校の定時制課程では、全日制の副校長や経営企画室の職員の人たちにだいぶ助けられました。おかげで、なんとか1年間を乗り切り、

5年間勤めることができました。

5年間という短い期間でしたが、副校長をやってみて良かったと思っています。連絡や書類作成の依頼などで、学校内のほとんどの教職員と関わりを持つことができました。多くの情報も入ってきて、大事なものは校長に報告し指示を仰ぎました。TAIMS端末で送られてくる調査物は締め切りが設定されていて、何とか間に合わせようと緊張した日々を送ることができました。

5年間で、3人の校長先生と仕事をしました。毎朝、打ち合わせをすることは同じでしたが、打ち合わせの進め方、打ち合わせで取り上げる内容、副校長への指示の仕方などは三者三様で、同じ打ち合わせといっても違ったものでした。学校経営はその人が現れるものだと思います。私自身も職員室の中にいたのだから、私自身の性格や人柄が周囲の教職員に影響を与えていたのかと思います。

5年間を振り返ってみると、教育的なねらいを実行するために、企画・実行・評価をしてきたというよりは、毎日の仕事に追われてきたというのが実情です。突然かかってくる電話、教員からの連絡などには、生徒の交通事故の知らせや生徒の問題行動、学級担任に対する不満、教職員の病気の連絡、同僚教職員に対する非難などがありました。通常の授業観察や学校行事などを予定通り実施し、その合間を縫って、それらの急に降りかかってくる問題に対して、校長と協議し策を練り、関係者や関係機関に連絡し対応してきたというのが実情です。

学力スタンダードや奉仕に変わっての新教科など、澁むことなく教育現場は新しい課題に向かって進んでいます。副校長として忙しい毎日を送ることになるとと思いますが、体に気をつけて頑張っていたきたいと思います。若い高校生のために本当に充実した高校教育が実施されるよう願っています。

退職を迎えて

大山 宗一（農業）

教頭・副校長として12年間勤めさせて頂きました。この間3校を経験しましたが、教科が農

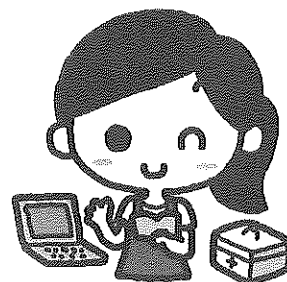
業科であり、瑞穂農芸高校、園芸高校（定時制）、農業高校と3校とも農業の専門高校でやって参りました。いずれの学校においても校長をはじめとして経営企画室やまわりの皆さんに支えられて職務を全うすることができたと感謝しております。

瑞穂農芸高校では、赴任時は2人教頭体制で農業学科と家庭学科の2学科の校務を分担して持つ体制でした。5年間勤めましたが、途中で副校長に変わり、都立高校改革が浸透しはじめ校長中心の職場体制、サービスの厳正等がかなり進んできました。このことは都立高校全体に見られる現象でした。

2校目は園芸高校の定時制課程でしたが、1学年1クラスでこじんまりしていてアットホームな雰囲気在校風でした。生徒数も少なく、生徒全員の情報について生徒指導連絡会で密に情報交換を行い、あるケースによっては特別支援教育の手法を取り入れ、一人ひとりの生徒をきめ細かく全教職員で指導していきました。給食を生徒と共に摂りながら生徒の体調を気づかいながら指導したことを懐かしく思い出します。

3校目は現在の農業高校の全日制課程です。創立104年を迎える伝統校であり、地域に卒業生も多く、地域に根づき地域と共に歩み生徒を育てていく学校です。緑の環境と明るい生徒に囲まれ、楽しく3年間勤めあげることができました。伝統校ゆえ地域の関心も高く地域貢献の面でも地域の期待が高く、農高祭での入場者は毎年5000人以上ありました。また、教職員が丸となって授業公開・体験入学・学校説明会・年末の個別相談会に取り組み、食物科では一次学力選抜2.48倍、食品科学科で中進対の調査結果が2.34倍（専門学科中トップ）となり教職員と喜びを分かち合うこともできました。と同時に地域の期待に応えねばという意識を強くしたものです。病気休職者の対応に苦労の連続することもありましたが、何とか健康を維持し無事退職を迎えることができました。

大変お世話になり、ありがとうございました。



8. 転任者の声

葛飾商業高等学校に赴任して

加藤 哲次（葛飾商業）

3年間お世話になりました荒川商業高等学校の定時制課程から転任してきました。

荒川商業では本当にいろいろなことを経験し勉強させていただきました。様々な課題を抱えた生徒ばかりで、毎日生徒たちと向き合ってきました。考えさせられる場面も非常に多かったです。警察のお世話になることも決して少なくなかったですし、児童相談所と連携が必要になることも少なからずありました。家庭で不安を抱えている生徒、生活面が崩れている生徒…。しかし、一人一人が皆一生懸命生き、高等学校で学ぶことを喜びとしていました。安心して学校生活を送るために、中心として取り組まなければならない課題は、生活指導を充実させることでした。問題行動をとる生徒も多く、喫煙、バイク、いざこざ、等々。そして授業として成立させ、学ぶ楽しさを味あわせるため、授業規律を徹底させることを常に目標とし、生活指導とともに授業力向上に取り組みました。習熟度別授業、学びなおし、外国籍生徒の取り出し授業などの方法も工夫をしていきました。粘り強く取り組んでいく先生方の姿に、少しずつではありますが、生活指導・授業など確実によい方向に向かっていると実感しました。また、荒川商業では人権教育をひとつの柱として、差別を許さない教育、生徒一人一人の人権を考えることの大切さがありました。

葛飾商業は、私が初任者として着任し、10年間お世話になった学校です。初任校として非常に思い入れのある学校です。恩返しをしなければなりません。15年ぶりに戻りました。その間いろいろな取り組みがなされ、もともと元気な学校でしたが、さらに元気な学校となりました。言語能力向上推進校、規範意識向上先行実施校としての取り組みをはじめ、商業大会での活発な研究発表、地域のイベントへの積極的な参加などです。また、部活動も引き続き活発に活動しています。定時制のときの忙しさとは違った忙しさです。この多くの取り組みは、忙しさの

中にも楽しさ、責任を感じております。さらに都教委の様々な新たな取り組みがみるみる増えていき……。

副校長として関わっていかなければならない部分は果てしなく多いです。すべてがうまくまわるわけではありませんが、誠実に仕事に向かっていくことしかないと思っています。また、いろいろな方々のご指導や助言を頂きながらがんばっていきます。今後ともよろしくお願いします。

それぞれの環境の中で

赤羽 美佐恵（松原）

今年度4月に3年間お世話になった荻窪高等学校（3部制・定時制課程）より、松原高等学校（全日制課程）に異動してまいりました。

前任校は基本的に1部が午前、2部が午後、3部が夜間授業の学校で、全日制と定時制が同居している感じでした。生徒も各部によって違い、1部は真面目系、2部はだらしな系、3部はシャウト or サイレント系と个性的で、学力もバラバラでした。ただ荻窪高校は一つの学校ですから、どの部でも常識のラインを“生徒”レベルから“世間”レベルに転換すること（生活指導の徹底）、学力差が大きいので個別指導をして個々の学力定着を図ること（授業力向上）、発達障害系の生徒もいるので教育相談を充実させること（教育相談の充実）を目標にしてやってきました。また、教員は8時40分からのA勤務と12時50分からのB勤務に分かれ、職員室も3つに分散していたため、教員間の意思疎通がしにくい状況でした。そこで副校長として私が取り組んできたことは、生活指導と教育相談については主任をバックアップして管理職からも学年に働きかけ、分掌と学年が協力して生徒を動かすようにし、授業力向上については授業観察で授業を褒めることに主眼を置いた参観メモを配布し、褒めて伸ばすように努めました。また、教員間の意思疎通については教員一人ひとりの話を聴くことで不満を緩和し、風通しのよい、

明るい職場をつくることを心掛けました。しかし今にして思えば、どれも中途半端でやり切れていなかったなあ、と赤面する思いです。

一方、現任校の松原高校は1学年5クラスの小規模校中堅校であり、教員時代を通して中堅校は初めてだったので、赴任当初は自分に何ができるのか戸惑っていました。松原は以前荒れていましたが、5年前から制服導入・頭髮指導を行い、厳しい生活指導により中堅校になった、いわゆる可もなく不可もない学校です。そこで特色を出そうと、生活指導の後は進学指導ということで、平成25年4月から1学年に特進クラスを設けました。中堅校は何もしなければ楽ですが、何かをすることとなると大変です。私はすぐに特進クラスについてやらざるを得ない状況下に置かれることになりました。というのも、新しい取組に着手した時にはありがちなことです。特進クラスの運営方針がきちんと決まっておらず、あらゆることが後手後手になっていた。特進クラス担当教員も戸惑っている状態でした。このままでは折角特進クラスに入ったのに学力が伸びず、生徒に迷惑が掛かってしまいます。そこで、特進クラス担当主任に特進クラスのあり方について状況確認をすることによって進行管理をさせる一方、来年度の特進クラスのあり方についてはほぼ週1回の割合で委員会を開いて、2月中には決定・教員周知する予定です。また、教科担当によって特進クラスの授業内容がバラバラなので、2年間を通してのシラバスを作成したり、予備校の講師をスーパーバイザーとして月1回の割合でお招きし、アドバイスや相談にのっていただいています。副校長として自分が陰になり日向になり動くことによって、少しでも教員・生徒・学校が動き出していけばよいのですが・・・。

荻窪と松原とでは全く環境が違いますが、その中で学んだことは、“人は置かれた環境の中でベストは無理でもベターを尽くす”ということです。

引き続きご指導のほど、よろしくお願い申し上げます。

高校に転任して

海發 真一（富士）

今年度、練馬区立光が丘第三中学校より異動してまいりました。

中学校には3年間勤務しました。勤務経験のない校種で最初は不安でしたが、区内中学校の副校長先生に親切にいただき、すぐに馴染むことができました。

中学校に勤務して、高校との文化やシステムの違いを感じました。このことを少し述べたいと思います。

毎朝8時15分の職員打合せでは、先生方は全員起立をして大きな声で「おはようございます」と挨拶をしてくださいますので、朝からやる気が出ます。挨拶は大切です。教員数は高校に比べて少ないので、分掌よりも学年で動く傾向があります。また、卒業生を出すとすぐに1年生と連続担任になる先生も少なくありません。

経営企画室がないので、副校長の仕事は多々あります。事務室には都費負担の職員が1名、区費の臨時職員が1名いました。外線電話は職員室にかかってくるので電話を取るのは基本的に副校長です。また、副校長は文書取扱主任になっているので、文書收受簿に毎日、印鑑を押します。休暇・職免等処理簿には決定と出勤整理の2箇所印鑑を押し、出勤簿に年休等のゴム印を押します。中学校には、都費負担の教職員と事務職員、栄養士、時間講師の他に、用務主事、調理主事等の区職員、区費負担の学力向上支援講師、心のふれあい相談員等がいますので、それぞれの服務規程に基づき、年休等を処理しなければなりません。

校内巡回も大きな仕事です。1回目は床を見て、2回目は壁を見て、3回目は天井を見て巡回するよう教えられました。危険箇所や異変をいち早く把握することが大切なのだと思います。

中学校は地域の学校なので、地区祭に生徒作品を出してほしいといった依頼等で地域の方が多く来校されます。この対応や地域の方への体育館やグラウンドの貸し出し手続きも大切な仕事です。

このように書くと、大変なことばかりという印象をもたれるでしょうが、人の心の温かさを実感する場面も多くあり、大変よい経験となり

ました。中学校に勤務して身に付いたことは多かったと思いますし、よかったと感じています。今後は、高校での職務に生かしていきたいと思っています。これからも、どうぞよろしくお願い申し上げます。

定時制3年間を振り返って

亀崎 隆彦（北園）

第三商業定時制課程より異動して参りました。定時制3年間は、教員として特別支援学校と全日制普通科高校の経験しかもたない自分にとってすべてが未知の体験でした。

最初の1年間は、それまでの全日制時代と同様に毎日6時には目が覚めていました。11時ごろの出勤には充分過ぎる時間がありました。しかし、転勤した5月には周年行事がありましたので、とにかくあせっていたことが記憶に残っています。午前中は大体読書に当てていたと思います。様々な事件？はありましたが、何とか過ごせたようです。

この頃、「副校長はプレーヤーではなくマネージャーである。」と自らに言い聞かせていました。商業科や定時制特有の教員対応には苦労しました。10年ぐらいタイムスリップした感がありました。とにかく副校長として初めての業務に追われていたと思います。

2年目からは、2日に1度位の割合で6時に目が覚めていました。ゆったりとした定時制独特の時間が過ぎていくことに徐々に身体が慣れていったようです。身体がなまってきたので午前中を中学校訪問に当てました。江東区全中学校、近隣の区も含めてほとんど訪問して学校を紹介しました。この時、定時制のイメージにはずいぶん誤解があることを知りました。

「定時制の生徒＝やんちゃな生徒」のイメージを持った中学校の先生方が多いのです。ほとんどが不登校等の経験のある生徒であることを話し、むしろ授業中は静か過ぎるほどであることを力説しました。この年、定時制では稀なことですが倍率が生じました。（翌年はまた二次募集でした。要は受かりそうなところになかなか出願してくれないのですね。）

3年目は、6時に目覚めることはなくなりまし

た。すっかり定時制リズムに慣れていました。この頃は、2年目から担当した全教協（全国高等学校定時制通信制教頭副校長協会）で生徒生活体験発表会などの業務？に追われました。しかし、全国の先生方と直に話す機会は、刺激的で狭くなりかけている自分の視野が幾分広がるのを感じました。

今年度、教員生活を通じて最短の通勤時間となりました。乗り換えはありますが、自宅から3駅目の学校とは驚きでした。朝5時半ごろ起床、6時過ぎに自宅を出て6時半過ぎに学校着、7時ごろには生徒が登校してきます。この朝の時間をフル活用してパソコン作業？を一気に行います。「調査統計システム」が稼動していないのがとても残念です。

実は高校教員としてのスタートは、同じ旧4学区の高校です。今年度、北園高校の入学式でかつての教え子（夫婦そろって）が保護者として現れたのは驚きでした。北園高校への転勤に何か運命を感じる出来事でした。

3年半ぐらいを振り返ってみましたが、日々の業務の多さと時の過ぎ去る早さを実感いたします。それぞれに課題を抱えた中で、先生方との連携が時に課題解決の突破口になったり、発散？の機会になったりすると思います。今後ともよろしくご指導ください。

杉並工業高校に着任して

山本 誠（杉並工業）

二年間お世話になった北豊島工業高校定時制課程（以下定時制課程）から、杉並工業高校全日制（以下本校）に異動し、間もなく一年が経とうとしています。定時制課程では、副校長として、学校の抱える様々な課題や職員、保護者、生徒との対応などについて、幅広く経験させて戴くことが出来ました。副校長として多様な業務を遂行する上で、基礎を確立することが出来たと感じています。

本校は、東京オリンピックの開催の前年の昭和38年に開校し、昨年創立50周年を迎えました。専門学科として、機械科、電子科、理工環境科の三科があり、練馬区、杉並区を中心に約500名の生徒が通学しています。

環境学習、資格取得、部活動、地域連携を柱として、工業技術と環境技術を身に付けた心豊かな技術者の育成を目指し、ISO14001を取得するなど、新しい取り組みを推進しています。今年度から、新たに技能スタンダード推進校としての指定を受け、指導内容や資格取得の充実に努めています。卒業後の進路状況は概ね就職6割、進学4割で、入学時から就職試験に向けて、礼儀や服装などの指導に重点を置き、生徒一人一人を大切に、全員の希望進路の実現を目指しています。

この様な背景の下、本校に着任当初、驚いたことが三つあります。第一は、生徒が来校者にきちんと挨拶をすることです。始業式の始まる前、生徒は私を副校長と知りませんが、通り返りに「おはようございます」、「こんにちは」と複数の生徒から声を掛けられました。中には、立ち止まってお辞儀をする生徒もいて、着任早々礼儀正しい生徒が多い学校であることを実感しました。第二は、資格取得のための朝講習が、一時限目の前に行われていることです。生徒は、朝7時半を過ぎた頃から登校し、危険物取扱者、電気工事士、計算技術検定などの資格取得のための講習を受講しています。生徒達の真面目な態度と先生方の努力に頭の下がる思いがしました。第三は、部活動が盛んなことです。野球部、柔道部、バスケットボール部など運動系の部活動をはじめとして、文化系の部活動においても朝早くから放課後遅くまで活動しています。先日も、コンピュータを使ったロボットの関東地区大会で優勝しましたが、工業高校ならではの機械工作部や電子工作部等の活動が目立っています。かつては学校が荒れ、地域から敬遠された時期もあった本校ですが、これまでの教職員の方々の多大な努力によって、「あいさつの杉工」、「資格取得の杉工」、「部活動の杉工」として、現在は地域から信頼され、認められる学校へと変化しています。今後は、本校の良き伝統を継承させると同時に、地元の小学校、中学校、地域との連携をさらに広げて深め、地域から一層信頼される学校へと発展させたいと考えています。

副校長の仕事は、教員の担任であるとも言われていますが、日々の雑務に追われる中で、微力ながら学校の発展に貢献出来ればと感じてい

ます。様々な場面で、諸先輩先生方のご支援、ご協力を戴ければ幸いです。宜しくお願い致します。

豊島高等学校に着任して

佐藤 昭二（豊島）

「お早うございます」「こんにちは」雪谷高校定時制課程から転勤して9ヶ月、毎朝、元気のよい生徒の挨拶で1日が始まります。この清々しい挨拶で「よし今日も頑張るぞ」とエネルギーを貰っています。

定時制課程から全日制課程に変わり、生活は大きく変わりましたが、生徒の明るい挨拶と素直な態度、校長先生初め教職員の皆さんの生徒の為に真摯に取り組む姿勢に助けられ、毎日のルーティーンや様々な取り組みは大変ですが頑張っています。

現在、重点支援校、言語能力向上推進校として3年目を迎えており、成果発表に向けた準備を進めているところです。午前8時15分からの朝学習には驚かされました。早朝から朝練習に取り組んでいた生徒達も制服に着替えて参加し、その他の生徒達もほぼ100%の参加率で行われています。自由参加で15分間のドリルですが、継続して行われている事は、1年、2年後、大きな財産になると思います。先生方のご指導にも頭が下がります。

又、学力スタンダード推進校として、重点支援の取り組みと合わせて実践しています。しっかりと生徒の実態を分析し、確かな学力をつけさせるとともに進学実績の向上に向けた会議が頻繁に行われています。本校は、3年後に80周年を迎えますが、校舎は古く教室数も不足している現状が有り、現在は施設検討が大きな課題になっています。先生方との意見交換はかなり熱くなる事も有りますが、将来を見据えた生徒の為により良い環境作りを目標に頑張っています。

部活動も盛んで部員数90人の男子サッカー部、100人越えの吹奏楽部を筆頭に陸上部、バドミントン部、男女バレー、バスケットボール部など都大会上位の成績を上げています。

行事も盛んです。5月の行事「歩こう会」で

は。1日かけて秩父の山の中を22Kmひたすら歩きました。全学年参加の名物行事ですが、1年時の辛さを知る2年生・3年生も全員参加していたのには感激でした。その他、練馬文化会館を使い弁論大会を舞台祭の中で実施しています。今回、言語の祭典で都大会出場者5名の中に本校生徒が1名参加できたのは大変嬉しい出来事でした。

豊島高校は、安全に学校生活が送れる学校です。これからもこの伝統を引き継ぎつつ、新たな実績を積み重ねて行けるように、生徒はもちろんの事、先生方とも「互いに認めあい、学びあえる環境作り」に重点を置き努力して行きます。

久しぶりの都立学校

長嶋 浩一（南多摩中等）

今年度、南多摩中等教育学校（前期課程）の副校長を務めることになった長嶋です。主に中学校年齢層の生徒を担当しますが、南多摩高等学校との兼務発令により、幅広い校務を行っております。

前年度まで3年間、西東京市立保谷中学校の副校長を務めてきました。私は高校籍ですが、採用時は中学校で入都しました。3年して高校に異動し、以来11年間高等学校で教諭及び主幹教諭として勤務してきました。その後5年間、入学選抜係指導主事、学校経営支援主事を経て、管理職として公立中学校の副校長を拝命いたしました。そこでは、都立とは違った環境の中、多様な生徒・保護者・地域との関わりを学んできました。都立の学校では経営企画室が担っている業務の多くは、たった一人の副校長に課せられています。また、学校の規模にもよりますが、私の勤務していた学校は学級数、教職員数が高校並みの規模だったため、大変な労力を要しました。その点で、都立学校の経営企画室の機能は大変ありがたいものであり、うらやましく感じておりました。

都立学校には8年ぶりに戻ってきました。副校長連絡会では、何人かの先生方に「お帰りなさい」という声をかけていただきました。変わらぬご厚情はとてありがたいものでした。その一方で、改めて都立学校の管理職としての動

きを学んでいくことが大切であるとも感じました。

南多摩中等教育学校は、東京都立南多摩高等学校を母体校として6年制の中高一貫教育校として平成22年に開校し、4年目を迎えました。教育目標は、『心を拓（ひら）く』『知を極（き）める』『体を育（はぐく）む』です。『心、知、体の調和』から生まれる人間力を大切にしたい教育を行っています。人として大らかなところ、深い思慮と的確な判断力、健やかなからだをもって、社会のさまざまな分野において、指導的な立場で活躍していく人材の基礎を上げることが本校の使命です。開校以来、各教科等で学んだことを活かし、本校の特色ある教育活動である「フィールドワーク」を通して、生徒の思考力・判断力・表現力の育成に努めてまいりました。

フィールドワークの具体的取組として、1年生は地元八王子市の地域探訪、2年生は職場体験やモノづくり体験、3年生は知床研修旅行や課題研究、4年生はゼミ形式で個人による探究活動等を、それぞれ進めてまいりました。

先生方は中学校1年から高校3年までの年齢層の生徒の教育に携わることになります。生徒は、入学選抜を経て入学してただけに、学校生活に対するモチベーションが高く、何事にも意欲的で、大変落ち着いているように思われます。しかし、私たちには、そのことに甘んじることなく、生徒の力を伸ばし、社会のリーダーとなる資質を育てていくというミッションが課せられています。

私にとっては、今まで歩んできた中学校、高校、教育行政の経験すべてが活かされる職場であり、大変やりがいを感じております。私一人の力は微々たるものにすぎませんが、意欲をもち集まってきた先生方、生徒、保護者とともに、最高の学校づくりに邁進していく所存です。どうぞ、よろしくお願い申し上げます。

中学校から高等学校に異動して

高橋 和久（秋留台）

今年度、中学校から秋留台高等学校へ異動しもうすぐ一年がたとうとしています。三年間高等学校から離れていました。わずか三年間だと

と思っていましたが、その間にさまざまな変化ががあったと痛感しています。

そもそも中学校にと思ったのは、高等学校の入り口となる中学校は、どのようなところなのか、それを高等学校で生かせないかと思ったからです。実際に着任してみると、共通するものはありましたが、いろいろな点で驚いたり納得したりとの連続でした。入学式、保幼小中連携、学校規模や予算編成のあり方、出勤簿の整理に原義の作成方法、入学者の決定等々…。ある意味、初めは興味津々でしたが、その場になると戸惑うことばかりでした。しかし、保護者や地域との連携については、「地元密着型」であり参考になることも多くありました。

大きな違いは、義務教育ということで、どんな状況下でも生徒を卒業まで導くということでしょう。高校では、生活指導上あるいは学力上の問題がある生徒に対しては、転学等を勧めていくのが当然のように行われていました。義務教育下では、校内での指導のみならず、本人や保護者との繰り返しの面談や家庭訪問を通し粘り強い指導をして、卒業式を迎えます。なかには、3年間で数日の登校しかできなかった生徒もいます。そのような生徒に対しても、在学中は、当然のように家庭訪問をし、指導を継続していきます。また、進路についても、現在のように進学率がほぼ100%の状況下では、進路先についても関連機関と連携をとりながら決定していきます。

本校は、ご存知のように学び直しを掲げているエンカレッジ校です。学力的にも生活指導面でも課題を抱えている生徒がいます。そのような生徒に対し、社会で生きる力を身に付けさせるためには、勉強ができないからとか規則が守れないからということで、本校の生徒にはふさわしくないといっていたら、退学者の山になってしまうでしょう。実際、数年前まではその様な状況であったということです。

現在は、極論を言えば「義務教育でできる教育を本校でも行いましょう」という発想の下、できるようになるまで粘り強い指導を心がけるように学校が動いています。

当然本校にも学校としての（学習上や生活指導上の）決め事（校内規程等）はあります。それを守らせることも教育上必要です。ただ、で

きないからといって「さようなら」では、教育機関としての使命は果たされたことになるのでしょうか。「義務教育ではないから」でよいのでしょうか…。

現在の取組は、先生方にかかなりの負担をかけるのは事実です。しかし、入学を許可したのであれば、学校側にもそれ相応の覚悟は必要でしょう。「だめなものはだめ」その指導方針は間違っていないと思います。しかし、その指導内容はずっと考えていくべきではないでしょうか。今、本校はその岐路に立っていると考えます。生きる力を育むためには、今何ができるのかを考えて職務に当たりたいと思っています。

都立高校に転任して

加藤 竜吾（東村山）

この4月から東村山高校に転任し、半年余りが過ぎました。前任校は、西東京市立田無第二中学校で、4年間、異校種の管理職として過ごしました。私は行政にいた期間もあるので、都立高校への復帰は、実に8年ぶりになります。4月当初は、完全に「浦島太郎」状態でしたので、期待と不安が交錯する中での着任となりました。しかし、本校はエンカレッジスクールということもあり、副校長二人体制のため、先輩の中山善弘副校長先生に、多方面に渡ってご指導をいただき、何とか今日まで至っているところです。4月3日にNotesのメールが復帰したときは、戻ることができた気持ちになりました。

教育管理職の発掘が難しくなる中で、異校種の配置も多くなってきました。当初、高校も中学も同じ中等教育の3年間だから、これまでの既有知識を応用して…と考えていました。しかし現実とは異なり、公立中学校副校長は、立場の違いもさることながら、区市町村教育委員会の傘下であること、義務教育独自の課題や取組などこれまで考えることがなかったことの多くの対応を学びました。例えば、経営企画室（事務室）の統括も当然副校長の職務です。経営支援組織は立ち上がりましたが、学事や施設管理に至るまで、義務の副校長は、「副校長・室長」として校内のすべてのことの直接的な司令塔であることは、都立学校と大きく異なることでし

た。例えば、教職員の出勤簿の作成（義務はまだ紙に押印です、旅費システムありません）や休暇取得状況調査なども年度末の副校長の大きな仕事でした。また、通常学級の規模は、中学校としては普通規模でした。しかし、本校は、旧田無市と保谷市の合併の歪が残っており、特例地域として入学直前まで、隣接中学校と学校を選べるシステムが残っていたため、学級数の増減の境界線の入学者数のときは、入学式直前まで校内学級数が確定できず、クラス分けのみならず、校内人事や新規採用まで年度越しになることも珍しくありません。年度末・初めの副校長業務や提出書類は、高校と中学校の比較を常にしながら多くを学びました。更に、前任校は、3年前から市内初の中学校通級指導学級を開級しました。特別支援学級の対応も一つの別の小さな学校を運営しているようなものでしたので、教育課程の管理から関係学校・教育委員会との調整まで学びました。市内の副校長会も9名だけなのでアットホームに行っていました。

都立高校に戻ってみて感じたことは、当然のことですが、4学級規模だった前任校に比べると、6学級の本校は教職員数も多い印象を受けました。そして、若手教員が多く、かつて私が勤務していたいくつかの都立高校の印象とは異なるものでした。また、エンカレッジスクールの制度についても30分授業の時間割や二人担任制など、苦心しながらよく展開されていると感心させられました。生徒たちもほぼ全ての生徒たちが元気よく挨拶し、問題行動も少なく朝学習からよく取り組んでいます。私が勝手に想像していた東村山高校の生徒たち印象とは全く異なるものでした。しかし、本校の生徒たちの学びの定着や家庭環境の厳しさ、特別な支援を必要とする生徒の多様さなど取り組まなければならない多くの課題があることも再認識しました。これからも西部支所Dチームの先生方を中心に大変お世話になることと思いますが、どうぞよろしくお願い申し上げます。

国分寺高校に着任して

白鳥 靖（国分寺）

平成25年4月に2年間お世話になった福生高校定時制課程から、国分寺高校に着任いたしました。福生高校にはあと1年という思いもあり、指定事業にも応募し取り組みを検討していた矢先のことだっただけに、異動内示を受けた時は驚いたと同時に、後ろ髪を引かれる思いでした。

進学校を経験したことがない私にとって、国分寺高校での勤務は不安でいっぱいでした。そんな不安を抱えたまま、4月1日の朝、校門をくぐり職員玄関に向かって歩いていると、部活動の朝練で登校した生徒たちが、次々に「おはようございます。」と挨拶をしてくれました。緊張していた気持ちが一気にほぐれ、「この生徒たちのため、国分寺高校のために頑張るぞ。」という気持ちが湧き上がってきました。

国分寺高校は、平成14年に進学重視型単位制高校に改編、平成19年からは進学指導特別推進校の指定を受けています。難関国公立大学を含む希望大学への進学を可能にし、グローバル社会の指導的人材の育成を目指す学校として、学習指導・進学指導はもちろんのこと、部活動や学校行事、国際交流活動にも力を入れています。

学習指導では、土曜授業・水曜日7時間授業・長期休業日の短縮等を導入し、年間34単位を確保しています。また、単位制の利点を生かし、国・数・英の3教科では、習熟度別授業・少人数授業を3年間にわたり実施しています。家庭学習時間を確保するために、部活動は5時半終了6時完全下校、土日の練習は半日を基本としています。生徒たちは、少しでも多くの活動時間を確保しようと、朝練・昼練など時間を有効に活用しています。

最大の行事は、「木もれ陽祭」という合唱祭・文化祭・中夜祭・体育祭の4祭を9月上旬の1週間で実施するものです。その運営はそれぞれの実行委員会によって行われ、早いところは1年近く前から準備に取り掛かるという力の入れようです。自主的に取り組む生徒たちと、それを支える先生方の姿には、国分寺高校の伝統と力強さを感じました。

定時制時代と比べ、教員数が5倍近くになったため、毎日の服務処理や、いくらやっても終

わらない授業観察・面接に、1 学期の間は疲れきった毎日でした。最近はややくペースがつかめ、やっと本格的に国分寺高校のために働けるかなと思っています。

進学指導特別推進校として課された期待に応えるため、微力ながらも力を尽くしたいと思います。今後ともご指導の程、よろしくお願い申し上げます。

定時制課程から全日制普通科に転任して

池田 克則（小平南）

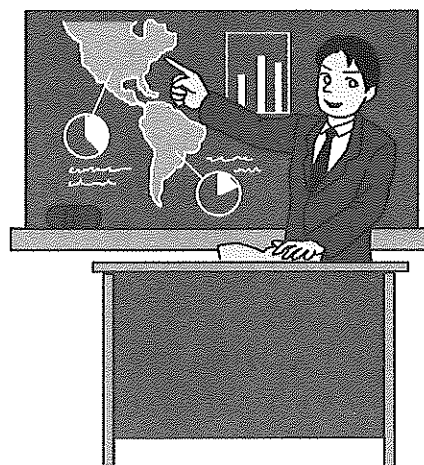
今年度、3 年間勤務しました都立町田高等学校校定時制課程から都立小平南高等学校へ転任しました。前任校は夜間定時制課程では大規模校 16 学級規模の学校でした。生徒数が多く部活動も盛んで、陸上競技部、自転車競技部、サッカー部等が全国大会に出場しました。特にサッカー部は 3 年連続定時制通信制の全国大会で優勝するという偉業に立ち会うことができました。学校行事においても文化祭、修学旅行、マラソン大会等、全日制課程と同様な内容を実施していました。また、3 年間の定時制勤務では、多様な生徒と向き合う先生方の辛抱強く、丁寧に指導している姿を見て、何度も感心しました。生徒も上級生になると教員（学校）との信頼感が強くなり、学校に協力的な生徒も多くなります。そして、卒業式では生徒がとてもたくましく思えました。学校に馴染めなかった生徒たちが厳しい中にも暖かい指導によって学校に目向き、自分の目標を見つけて社会に巣立っていく姿は、教育の原点を考えさせられました。

全日制普通科高校に異動し、今までの生活のリズムがなかなか抜けないため、夜は目がさえて眠れず、朝起きるのがつらい日々が続きました。管理・監督する教員数も 2 倍近くになり、土曜授業の振替、宿泊防災訓練、部活動合宿をはじめ地域との連携、PTA との対応など定時制では経験しなかった活動も多くあり、自信を失う場面もありました。しかし、主幹教諭の先生方からのサポートや協力もあり、どうにか半年を終えることができました。生徒は大学進学を目指す生徒が大半で、部活動も盛んな学校です。部活動に熱心な先生も多く、休みなく活動

を続けています。大会前には緊張した場面も見られ生徒たちにとってはいい刺激になっています。

管理職として全定 2 校を経験して思うことは、学校にはそれぞれ設置されている目的があり、その目的を果たすことが何よりも重要な使命だと考えるようになりました。前任校では、特別支援教育を必要とする生徒、不登校、家庭での問題等で学校に目が向かない生徒たちをどのように学校に向かわせ、一人でも多く社会に巣立たせることが大切だと思いました。また、現任校では中学生が中堅進学校として大学進学を目指して入学して来ます。そのような生徒の目標をいかに卒業時まで持続させ、進路実現をさせるかが大きな課題です。そして、生徒の成長を見守りながら、管理職として生徒を指導する先生方をしっかりと応援していきたいと思っています。

今後とも微力ながら頑張っていきますので、ご指導をよろしくお願いいたします。



9. 新 任 者 の 声

「起案と押印に追われる中で」

加藤 正和（青井）

東京都立青井高等学校副校長の加藤正和です。4月1日副校長として初出勤の電車の中で、本当に自分が副校長としてやっていくことができるのか、正直なところ不安が期待より大きかったことを憶えています。

朝一番に職員室を開けて、副校長席に座った時の違和感というか座り心地の悪さはこれまでに無い経験でした。次々に出勤してくる初対面の教職員とお互いにぎこちなく挨拶を交わしていると、初めての外線電話です。電話の取り方もよくわからない中、ようやく電話に出ると「副校長先生ですか、〇〇ですが年休を〇時間お願いします。」と顔も分らない先生からの連絡です。これをどう処理していくのか、事前研修では聞いたような気はしているのですが、実際は思うようには手が動きません。何名かの同様の電話をメモに取って、企画室に駆け込み室長に事務処理を教えてもらいました。とにかく、ノートにメモを取りながら一つ一つ仕事を覚えることに精一杯な毎日が始まりました。

連休明けまでは、押印する書類やT I M Sで送信されてくる通知文などの多さに圧倒される日々でした。特に、行政の経験の無い私には、調査回答等の起案書類の作成に手間取ることが多かったのです。なぜ、副校長は一日中パソコンばかり眺めて難しい顔をしていたのか、その理由が良く分かりました。ある先輩の副校長からは、「授業の合間の休み時間には、先生方が話しかけやすいようにゆっくりお茶でも飲んでいるように。」と言われましたが、とてもその余裕は無く、「副校長、話しかけても大丈夫？」と心配される始末でした。また、P T Aとの連携でも、学校としてどこまでができることで、何をP T Aにお願いできるのか等、不明なことばかりでP T A役員の方に負担をかけることになってしまいました。

ようやく夏休みに入る頃には、今日一日のやるべきことは何か見通しを持って仕事ができるようになったのだと思います。押印することの

責任や起案することの責任など、考えることができるようになったのも、恥ずかしい話ですがこの頃だったと思います。

夏の副校長ベシックプログラムで、同期の仲間とゆっくり話のできる時間があり、副校長の職務について、自分の仕事に取り組む姿勢など改めて見直すことができました。また、様々な情報交換などができる仲間をつくることができ、有意義な研修となりました。

毎日の起案と押印に追われる中で、校長の学校経営を補佐するために、副校長として学校運営の中で果たすべき役割などを考えるようになったのは、すでに初冬を過ぎた頃でした。1週間、1ヵ月と先のことにも目が向くようになりました。「副校長」と声をかけられて意識せず自然に反応できるようになりました。

副校長として10ヶ月が過ぎ、今では副校長席の座り心地も随分と変わりました。事務処理能力が大いに欠ける副校長を、常に丁寧に指導し見守ってくださっている藤田正美校長先生、生徒たちのために共に働く教職員の皆さん、日頃からご支援いただいている東部学校経営支援センターの皆様、東部Aチームの先輩副校長先生方や、同期の副校長先生方へ深く感謝するとともに、今後もし指導ご鞭撻よろしく願いいたします。

「チームワークと4つのH」

高野 幸代（足立新田）

“集まりを意味するグループとは違う、目的のために力を合わせた「チーム」の姿”これはある企業の正月の新聞の全面広告の一節です。

保健体育科教員として取り組んだチーム学習や主幹教諭として閉校・開校の中で体感した、チームの真髄ともいえる「協働」の具現化を志し、この道を選びました。

けれど4月1日に揃ったのは、昇任したての校長と私、法務監察課から異動した室長。しかも学校は全面改修中。何がどこにあるのか？から始まった三人の打ち合わせは止まるところを

知りません。着任前の志には程遠く、目の前のことに精一杯の毎日。入学式も他校の全日制と定時制の隙間の時間に間借りして挙行了しました。終了直後、指導部への報告のFAX用紙を1枚しか用意していなかった私は、慌てて会場の副校長先生の元に走り、助けていただきました。会場から引き揚げるとき、校長先生からいただいた自販機のお茶を飲みながら、着任からの緊張がやっと解け、安堵感に浸りました。そして初めて職責の重みと昇任の実感が湧いたように思います。この頃、大きなチームは程遠くても、まず初めにチームの中核を作ること、それは校長先生と私なのだ、と気付きました。研修では「副校長は校長のパートナー」と教わりましたが、私には「二人のチーム」の方がしっくりきます。

さて、あるブログでチームの発展ステップとして「四つのH」を紹介していました。

第一段階 Honeymoon

「何をやっても新鮮で楽しい！」

第二段階 Hostility

「異なることに対する敵対」

第三段階 Humor

「環境に慣れユーモアを感じる」

第四段階 Home

「くつろぎ、阿吽の呼吸」

最も大切なことは、「Hostility」はあくまで「Humor」、「Home」へと発展していくステップの一つにすぎない、そして決して長く続くものではない、と理解することです。

4月当初、校長先生から、ご自身の経験の中で工夫した校務日誌など、様々な贈り物をいただきました。打ち合わせの合い間には楽しいお話も沢山ありました。四面楚歌だった私にとって、この関係だけは正に「何をやっても新鮮で楽しい！」けれど、それだけでは済まされません。課題に直面するたびに、手法の違いや自分の未熟さを思い知らされ、第二段階に突入。長い時間を経て、指摘されたことを受け入れ、冷静に分析し、自分自身の成長に役立てようと考えることができました。そのとき、次のステップが見えてきました。またその頃、校内の様々な課題を解決していく中で、教職員の間にもチームが広がっていくことを実感できました。

今、1年間で最も重要な残り3ヶ月を前に、

予断は許されません。けれど、二人から始めたこのチームを大切に育て、いつの日か「チーム足立新田」をお披露目したいと思います。この道を真摯に歩み続ければ、きっと実現できると信じています。

行政系副校長として

大竹 裕二（葛飾野）

平成25年4月1日付で葛飾野高校に行政系副校長として着任しました。

葛飾野高校に行政系副校長が配置されたのは、葛飾区教育委員会との連携を推進することが大きな理由になります。

平成24年度に葛飾区教育委員会から、区内の小・中学生の学力向上を図るため、区内にある都立高校との連携を強め、お互いの学力向上を進めたいとの依頼に応え、検討委員会での検討を経て、平成25年3月26日に区内都立高校5校と葛飾区教育委員会で「教育に関する相互協定」を結びました。

本校での具体的な取組は、区立中学3年生を対象にした①本校の教員が過去の都立高校入試問題などを解説する「進学重点教室」の実施、②東京理科大学葛飾キャンパスの大学生と協力した「放課後寺子屋」事業の実施になります。また、人事面では中高異校種間で1年間の期限付き人事交流があり、区内中学校より主幹教諭1名が私と同時に配置されました。

4月の着任時には進学重点教室も放課後寺子屋も具体的なことが決まっておりましたので、重点教室の4月下旬開設に向けて、早々に区教委と募集規模や区教委の望む事業内容の確認、本校職員への周知と協力体制の取付け、教科主任会で過去問題解説講師の依頼など、目の回るような毎日を過ごしました。

進学重点教室は4月下旬から1月まで中学3年生40名が毎月2回、夏期休業中は連続5日間、都立高校過去問題演習を実施しました。特に夏期休業中は区立中学校教員の指導補助の協力を得て、連携を強めることができました。

放課後寺子屋は、自学自習に励む中学3年生と葛飾野高校生徒に対して、その学習場所を確保し理科大生によるサポートを行います。会場

は本校と東京理科大の2箇所で開催することになり、本校では10月より2月末まで、毎週(月)(水)の夕方2時間、中学生20名と本校生徒で実施しております。

行政系副校長としての業務は葛飾区連携に特化した訳ではありません。副校長として行う業務は全て行うことが基本となります。幸いにも本校にはベテランの藤田副校長がいらっしゃいましたので、年間を通じて業務を手取り足取り教えていただき本当に助かりました。

副校長として10ヶ月ほど過ごしてまいりましたが、まさに「忙しい」の一言に尽きると思います。都教委への調査回答、生徒指導、職員管理、授業観察など、今までに経験したことのない業務に戸惑いながらもどうにか副校長職をやってこられました。

ああすればよかった。こうすればよかった。と反省の毎日ですが、行政経験を生かしながら、一つずつ学ばせていただきたいと思います。多忙な中にも副校長の魅力を発信していきたいと感じています。

今後ともよろしくお願いします。

農産高校に着任して

形部 光昭(農産)

平成25年4月1日、都立農産高等学校全日制に着任いたしました。葛飾区の亀有駅が最寄り下車駅です。「こち亀」とかいう漫画ですっかり有名になり、駅前ではその主人公の像が迎えてくれるのですが、何体か置かれている像の一つの背後には、本校の生徒が手入れをしているささやかな花壇があります。

昭和23年創立の本校は東京都東部地区唯一の農業高校で、園芸デザイン科と食品科の2科を有し、比較的穏やかな生徒達は日々充実した学校生活を送っているように見受けられます。

私自身、専門学科については工業科に勤務した経験はあるのですが、農業科に勤務するのは初めてです。園芸デザイン科では草花・野菜・果樹の栽培の他、造園や植物バイオテクノロジー、さらにはフラワーアレンジメント等を学びます。

食品科では食品加工として穀類加工(パン・

ケーキ)、園芸加工(ジャム・ケチャップ等)、醸造(主に味噌)、畜産加工(マヨネーズ・ウインナーソーセージ等)における製造の知識や技術の他、微生物や食品化学や食品流通について学びます。お恥ずかしい話ですが、着任が決まるまで農業高校に関するこのような知識はまったくなく、着任以来授業観察等では数多くの新鮮な発見がありました。何よりも教員の指導の中で実習に取り組む生徒達の真剣さが印象に残りました。

日々の勤務の中で、農業科の教育とは専門学科の教育としてだけでなく人間教育という見地からも、非常に有意義なものであると考えるようになりました。しかし、都内には現在農業科だけの高校はわずか5校であり、私自身がそうであったように農業科の教育の良さとその価値は、教員の中でもあまり知られていないのではないのでしょうか。本校でも農業の後継者となる、すなわち「就農」する生徒はほぼおりませんが、都市の環境整備や食の安全といった今後東京都に生活する人々にとって極めて重要な部分に関わる人材を育成する教育を、東京都の農業高校は担っているのではないかと考えます。中学生や保護者、そして中学校の先生方にも「農業高校の良さとその価値」を一層認知してもらえるようにすること、また、生産品販売や地域イベントへの参加による地域交流は積極的に行われていますが、さらに広い範囲での地域で農業高校への認知度を高めていくことが、農業高校の副校長としての任務の一つではないかと考えております。

新米の副校長のくせに偉そうなことを書いてしまいましたが、実際のところ着任以来慣れない仕事ばかりであたふたしてばかりいるのが正直なところです。前年度は3学年の学年主任で、入学から接してきた生徒の卒業式を終えて着任しましたので、職務の内容も激変いたしました。校長先生や経営企画室長にはご面倒ばかりかけていると思いつつ、職務に十分慣れて、勤務校の発展を考え行動する時間をもてるようにしなければならぬ、と日々を過ごしております。決して器用な人間でも無く、非力な我が身ではありますが、一日一日を大切にして研鑽に励んでいこうと思います。先輩の先生方のご指導を一層賜りたく、今後ともどうぞよろしくお願い

申し上げます。

校内をよく見つめていきたい

山本 一之介（九段中等）

平成 25 年 4 月 1 日付、千代田区立九段中等教育学校に着任いたしました。平成 19 年度に教育管理職候補者 A 選考に合格して以来、中部学校経営支援センター及び千代田区教育委員会において教育指導行政に関わり、指導主事として担当していた学校に副校長として着任した次第です。本校は開校から 8 年を経過しており、都立中高一貫教育校とは一線を画しながらも特色ある教育活動を展開しています。応募倍率が 10 倍を超えるなど、躍進目覚ましい学校です。これまでの 5 年間で身に付けた学校経営の考え方や就学前・初等中等教育への理解を生かし、本校の教育活動の更なる充実と発展に取り組むべく、決意を新たにしているところです。

昇任 1 年目、着任 1 年目である本年度は、日々の職務を着実に遂行しつつ、本校の課題や改善が必要な点を把握していきたいと思っております。指導主事として担当していた学校とはいえ、中に入ってみれば、当然ながら外側からは見えなかったこと、気が付かなかったことが多々あります。生徒、教職員、保護者及び地域の状況を十分把握し、次年度の学校経営計画の作成に向け、校長先生に意義ある進言を申し上げることができればと思っております。

10 か月が経過した現在、次の 2 点を感じているところです。①校務の重複を省き、効率化を促進させ、教員に心身を休める時間を少しでも確保させたい。②教員の勤務に関する諸規定を改めて研究し直したい。①については、これまでの行政経験を生かし、仕事のスリム化を促進したいと思っています。また②については、これまでの 5 年間の職務で触れることが意外に少なかった事柄であり、自分自身の勉強不足を一日でも早く補わなくてはならないと改めて感じているところです。

最後になりましたが、いつも御迷惑をおかけしております校長先生や前期課程の副校長先生、千代田区教育委員会や東部学校経営支援センターの先生方、各都立学校の校長先生方や先

輩あるいは同期の副校長先生方に深く感謝を申し上げますとともに、今後も御指導と御鞭撻とを賜りたく、改めてお願いを申し上げます。

前進あるのみ

杉渕 明子（向丘）

向丘高等学校へ着任いたしました杉渕明子と申します。向丘高校は実家からも至近で、古くから友人、知人が通っていたため、大変親しみのある高等学校でした。地域性も理解している、覚悟も準備も、立場の違いも十分認識したつもりでわくわくして着任しました。大変ありがたいことに、校長、経営企画室長ともに温かく、十分連携を取って学校経営に取り組めると意気込んでもおりましたし、この環境を精一杯活用しなくてはと力も入りました。

ところが、日々の業務に追われるうちに「これが学校経営なんだろうか」と焦り始めます。体育科の私は、それまで多くの時間を屋外で過ごしていたのに、毎日の天候さえわからないうちに夕方になる、向丘の把握もできていないまま日々が過ぎる。何より生徒たちの顔が全く見えないことに非常に違和感を覚えました。

とにかくこれを乗り切るようにと言われた入学式も新生の顔は全く目に入らず、大人の顔ばかり見ていました。触りたくないパソコンにずっと向かいながら「これでいいのだろうか」と考えます。たまに段取りがうまくいって、仕事に追われる所からちょっとだけ仕事と並走できるくらいになると嬉しくなり「こんなことを喜んでいていいのか」と悩みます。

そんなあるとき、ふと学級経営をしていた時のことを思い返してみました。当時は毎朝クラスの子に話す言葉を考え、教室環境の整備に励んでいました。あのときの教室を学校全体だと考えれば、と思い立ってからは自然に能動的に行動できました。学校内の掲示板を点検して、ポスターや掲示物のレイアウトを考える、職員室の環境を改善する、等々些細ながらできることがあるのです。

また、昇任するまで週休日は部活動指導で明け暮れていたのに休養日にすることはないと思い、6 月頃からは、週休日に専門であるバスケ

ット部の活動を見せてもらうことにもしました。ここで、初めて本校の生徒たちの姿をじっくり見る事ができました。他の部活動の生徒たちの会話も、息遣いも感じる事ができ、これは非常に大きなストレス解消になりました。

10 か月過ぎようとしている現在、改めて副校長のやるべきことを考えています。業務は多岐に及びますが「校長を助け、学校経営計画を実現すること」一言に尽きます。

そして、そのために現在私がやるべきことは

① 常に課題を見つけ出すこと

② ミドルリーダーを育成し、それぞれのプロとして職務を遂行してもらい、その進行管理を行うこと

③ 教員の服務管理を適切に行うこと

当たり前のことですが、ようやく自分の中で整理することができました。

まだまだ勉強不足であるにもかかわらずここまで来られましたのも、副校長協会の諸先輩の皆様のお指導のおかげです。また東部学校経営支援センターの皆様には文字通り支援をしていただき心より感謝申し上げます。また、同期の副校長仲間にも支えられてきましたが、支えあうということなら今後も役に立てるかもしれません。お互いに前を向いて進みましょう。今後ともよろしくお願い致します。

無我夢中

中村 力（竹台）

私は、平成 25 年 4 月 1 日、荒川区に 2 校しかない都立高校の一角、73 年の歴史と伝統をもつ竹台高等学校に着任しました。今までの勤務校は定時制が多く、初任校以来の全日制なので不安を抱えての副校長スタートでした。

副校長になりまず感じたことは、仕事量の多さ、その質の違い、想定外の業務に対する機敏な対応力が必要、ということです。分掌主任として、その範囲内での調査なり業務は十分こなしてきたつもりでした。仕事量の多い業務でも、週休日、休日に出勤し時間さえかければ業務をこなすことはできました。しかし、副校長になると調査ものも学校経営等、学校全体にかかわるものが多く、当然のことながら学校全体を掌

握していないと回答できないものばかりでした。したがって、当初は分からないことだらけで、各主任に「此処のところどうなっているのですか。」と聞きながらの回答作成で、大変時間がかかりました。その調査も文章で回答するものが多く、文章作成を苦手とする私にとってはかなりの時間を費やしました。また、調査の締め切りから逆算して計画的に業務を遂行していると、急遽、近隣、保護者等からの苦情処理が無い込み、その対応で一日が終わってしまうことも何回かありました。苦情に耳を傾け、克明にメモを取り、学校としてどこまで行えるのかを判断し、誠実に対応する。危機管理意識を常に持ち、その対応は迅速かつ適格に行う、これが今まで経験してこなかった業務、副校長の仕事の一部ということを実感しました。

副校長になり 10 ヶ月が過ぎました。「副校長は、校長を助け、命を受けて公務をつかさどり、及び公務を整理する」とありますが、なかなか実行できない自分に腹が立ちます。早くルーティンワークの処理速度を上げ、学校経営に関するアイデアを練る時間を確保したいと考えます。

最後になりますが、戦力にならない私を日々愛情あふれるご指導くださる校長には、この場を借り、深く感謝申し上げます。今後早い段階で、しっかりと補佐できる力量を備えたいと考えます。また、校長はじめ本校をサポートいただいている東部学校経営支援センターの皆様、先輩副校長先生方、同期の副校長先生方へ深く感謝申し上げるとともに、今後ともご指導・ご鞭撻賜りますようお願い申し上げます。

荒川工業高校に着任して

岡田 悟（荒川工業）

私は平成 25 年 4 月 1 日、伝統ある都立荒川工業高等学校に副校長として着任いたしました。荒川工業全日制は創立以来 50 年、定時制は 65 年になります。下町の皆様に親しまれて育ってきた学校です。また、本校には電子科、電気科、情報技術科の 3 科があり、地域に根ざした都立学校唯一の電気系工業高校として、地域の産業社会を支える多くの人材を育成・輩出してきた

学校でもあります。

荒川工業高校での副校長としての最初の大きな仕事は、創立 50 周年の式典の準備と記念誌の発行でした。最初のうちは、慣れない副校長業務の傍ら、これらの仕事をするのは、正直言って負担ではありました。特に記念誌の編集作業は、ほぼゼロからのスタートでしたので、不安も大きいものでした。しかし、記念誌の編集のために過去の記念誌や卒業アルバムなどを拝見する機会を得ました。本校の歴史と伝統を感じて身の引き締まる思いがし、この仕事に携われることを大変光栄に思い、仕事を進めることができました。

式典の実施と記念誌の発行は、御陰様で昨年 11 月に無事終えることができました。これもひとえに本校の先生方をはじめ、PTA・同窓会の皆様のご協力の賜物であると感謝の念に堪えません。

さて本校は、今年度から「都立高校学力スタンダード推進校」「都立専門高校技能スタンダード推進校」の指定を受けています。これは学力の定着と共に、専門的な技術・技能の習得、資格・検定の取得を目指す取り組みの推進です。また、「都立高等学校部活動推進指定校」「規範意識向上先行実施校（規範意識向上推進モデル校）」としての指定も受けています。推進校として取り組むべき課題は沢山ありますが、校長先生の経営方針の下、ひとつひとつ組織的に実行していくしかない、と思っております。

学校を取り巻く状況は目まぐるしく変化していますが、工業高校の使命が「ものづくりを担う人材の育成」であることは、昔も今も変わりはありません。そのことを心に刻み、新米副校長で未熟な点は多々ありますが、荒川工業高校の為に精一杯働いていく所存です。

副校長協会の先生方におかれましては、今後共、ご指導、ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。

エンカレッジ着任記

武市 玲子（蒲田）

「頑張ります。」「いや、頑張っても生徒はついて来ないから。」「はあ。」4 月着任早々、

上村肇校長から、釘をさされてしまった。通常の努力のさせ方では生徒がつぶれてしまう、と。なぜなら、エンカレッジには、認知の仕方が通常とは異なったり、手足の協調がうまくいかなかったり、コミュニケーションが苦手だったりする生徒が集うからだ。エンカレッジの実態と専門的知識に乏しい私が、管理職として、いったいどんな具体策を企画実行できるのか。こうして、ジレンマと自問の日々が始まった。

エンカレッジに転換して 7 年目になり、中学校に認知されるようになったため、境界線児や発達障害等、学習や生活に困難のある生徒はますます増加していた。それ故、表面的には落ち着いているが、時折、缶ココアを自販機の受け皿にぶちまける、地蔵を壊し、たたりて怯えて自首するなど、脱力するような事件が起こる。しかし、少子高齢社会のカギを握るのは、この生徒達が自分の長所を活かし、将来、生き生きと社会を支えることができるかどうかだ、と気を取り直す。エンカレッジの社会的責任は、重大である。

そんな蒲田の奮闘ぶりを見ようと他県からの学校視察も多い。北は北海道から、南は鹿児島まで。その他、大阪、京都、静岡。私にとって、案内は、自校の状況を確認し、自校の状況を全国的な視点でとらえ返す機会になっている。

さらに、地域柄、地域との連携、会合が多い。PTA の新年会に行ったら、座敷に座っている人の半分は PTA 以外の地域の町会長さん達だった。町会長さん達は、地域イベントのボランティアとして、生徒の活躍の場を提供して下さり、生徒へ温かな目を向けてくださっている。

ともあれ、今年度は、ベテランの長田副校長が実務の多くを処理してくださっている傍らで、ほとんど何もしてないのではないかと内心忸怩たるものがある。来年度こそは、発達障害等の教員研修を進め、生徒の実態に合ったキャリア教育の具体策を推進し、生涯に渡って自立・協働できる生徒を組織的に育成したい。先生方や経営企画室の方々が経営方針に向かって元気に頑張れるような雰囲気を作りたい。

こんな反省ばかりの 1 年生副校長ですが、副校長会の皆様、どうぞよろしくお願い致します。

副校長になって楽しいこと

杉森 共和（葛西南）

先日の入学選抜打ち合わせの中で、教務部主任の説明後、すかさず生活指導主任が生徒の動きについて補足説明を加えていた。本校は教員の入れ替わりが多く、経験の少ない若手も多い。気を抜けない入選業務に対して真剣に打ち合わせが進んでいった。全員で「うちの学校」の入選を作っていく、という気概が感じられた一瞬だった。副校長になって楽しいことは、こんなふうに先生方が一丸となって動く瞬間を見ることである。

本校は、長い間、地域の学力困難校として位置づけられ、近隣に迷惑をかけることも多かった学校だ。しかし、この数年、茶髪対策、遅刻対策など生活指導を徹底した。かつて、ほとんどの生徒が茶髪で、三割近い生徒が一時間目の授業に遅刻していたのだが、現在は授業遅刻者も茶髪の生徒もゼロになった。学校の指導に従わない「指導無視」は特別指導で退学もあり得ると周知し、頭髪、遅刻、カラーコンタクト、身だしなみ、授業態度など生徒の学校生活に問題があれば学年の教員が全員で（6対1で）指導する体制を取ってきた。この指導が成果を上げ、生徒の規範意識も目に見えて向上した。授業中も落ち着いて授業を受けるようになり、習熟度別授業や少人数授業の効果もあって、生徒からは「高校に入って初めて授業がわかるようになった」という声も聞かれるようになった。進路指導でも9割近い進路決定率を誇り、就職希望者においては毎年ほぼ100パーセントの就職率である。いまや、募集広報活動で、学習指導も進路指導も生活指導においても「先生が熱心」であることが本校のセールスポイントになっている。

本校では、主幹教諭を集めた主幹会議を時間割に位置づけ、本校の課題解決を図る会議を行っている。主幹会議は校長の助言もあって、「うちの学校」をよりよくするにはどうすればいいかを「ざっくばらんに」話し合う場となった。そしてその中で、いろいろな提案をするとそれが各分掌で実施されていくスタイルが固まりつつある。今年度はこれまでに、音楽準備室から体育館へのピアノの移設、ホームページのCM

S化、一斉部活動会の開催、などを提案、実施してきた。また、この主幹会議での提案を基に、奉仕・地域貢献プロジェクトチームを作って、奉仕、道徳、キャリア教育の学習を「総合的な学習の時間」に3年間にわたって継続的に実施することにした。本校の課題は、セールスポイントは「先生が熱心」だけ、という状態を脱し、生徒の活動もセールスポイントになっていくことである。総合的な学習の時間の活性化により、ようやく、もう一つのセールスポイントが生まれそうである。

本校は熱心な先生が多い。いい学校を作るという目標のために、一丸となったチームができつつある。副校長になって楽しいことは、チームが一丸となって動く瞬間を見ることである。

「絆」

飛田 牧弘（豊多摩）

どうして管理職になったのかと質問されることがある。「教員は生徒を前にしてなんぼのもの」と、教壇に立つことにこだわった。管理職試験へのお誘いを頑なに拒んだ。単に管理職になることが人生の目標であつたら、もっと若く『択一と論文』の勉強をしていただろうに。

その根本的な理由を探てみると、長い教員生活の中でお世話になった管理職の先生方の存在があつた。「普段は気さくに教職員や生徒に話しかける一方で、言うべきことはしっかり言う先生」「朝礼台の上に立つだけで、ざわついてた生徒たちが静まりかえった先生」「保護者からのクレームを前にして、若い教員をサポートしてくれた先生」「どんな立場に立っても、しっかりした授業ができなければだめだぞ、と常に若手に言い聞かせていた先生」「机の上に書籍を山にして材料を仕入れ、含蓄のある講話をしてくださった先生」。その先生方の年齢に自分も達して、その存在に近づいてみたいという、『親を慕う子』のような心境になったのかもしれない。

その憧れに似た気持ちを抱いて副校長の任に就いたわけだが、その船出は順風満帆とは程遠いものだった。『青葉マーク』の私は日常業務さえ覚束なく、年休処理簿の押印箇所さえ、企

画経営室の若手職員に確認するほどだった。加えて、セキュリティに関わる事案が続き、さらに複数の教員が病気休暇を取得することになり、慣れないPASシステムと格闘した。(この件については、元同僚だった中部支援センターの〇〇さんが支えてくださった。感謝。)

怒涛のような日々が続いていたある日、思いがけなく懐かしい顔が、私の目の前に現れた。

「あれ、●●先生、どうしてここに？」●●先生も元同僚で、並々ならぬお世話になった恩人である。物理教育の第一人者であるとともに、若手の育成にも熱心で、若かった私をいろいろとサポートしてくださった。「たしか、再任用期間も終わったはず...」実は、豊多摩高校の卒業生で、同窓会事務局長として、毎週、学校に足を運ばれているという。ご自宅も正門から歩いて5分のところにあり、お父様も豊多摩の教頭をされていたとか。とても不思議な縁を感じた。

さらに、嬉しい偶然が重なった。PTA総会の会場で、一人の保護者が近づいてきて、「お久しぶりです。中学生の時にお世話になった◎◎です。娘がこの学校に入学させていただきました。」と話しかけてきた。その女性の顔を見て記憶の糸を手繰り寄せると、泥まみれになってソフトボールを追いかけている中学生の顔が浮かんできた。「茶髪にしたな、不良だぞ。」と私が冗談を飛ばす中、PTA役員をしている彼女は、ソフト部員のようにパイプ椅子を並べていった。

押し寄せてきた思わぬ出会いが、私を運命論者に変えてしまった。『単純な頭脳』との誹りは免れまい。お陰さまで、奈良隆校長先生に導かれ、職場の教職員の方々に文字通り支えられて、どうにか副校長の一周目を務めている。昔は公道であったメインストリートを抱える学校のセキュリティを充実させ、台風のために中止・延期になった学校行事に決着をつけ、念願の進路室移転を実現し、センター試験激励会を野球部が唄う『豊多摩健児』で飾った。PTA、同窓会、おやじの会など、多数の支援組織が『オール豊多摩』体制を敷いてくださっている。過去にお世話になった方々に感謝し、現在の時間と場所を共有している仲間と力を合わせ、未来の出会いを楽しみにしながら、これからの人生

をいかに描いていくか思案している昨今である。

三宅島での生活

志波 昌明 (三宅)

三宅高校に着任して9ヶ月が経ちました。副校長職も含めて、島での生活、単身赴任、一人暮らしなど初めてのことばかりの9ヶ月でした。

会議等の出張では、船での移動になります。1日1往復の船しかないため、東京に向かう際は、会議前日の午後2時20分に出航。そこから6時間半かかります。1日半学校を空けるため、早め早めに仕事を進めなくてはなりません。帰りは、夜の10時20分竹芝桟橋発の船に乗り、翌朝5時着、船の揺れがひどい時には、睡眠不足の状態で勤務に入ります。さらに学校を空けていた1日半分の書類や仕事が山積み。常に、早めの仕事を意識しているものの、如何せん経験不足から、先々まで見通せず、港に行くため学校を出る直前まで、あせって仕事をしている時もありました。

三宅高校は、普通科、併合科(農業科・家政科)で1学年2クラス計6クラスありますが、今年度の生徒数は三学年合わせて23名しかいません。2000年の噴火により、全島民が避難し無人島になり、2005年に復帰してからまだ9年しかたっていません。噴火以前は7000人いた人口も3000人を下回っています。現在の高校生たちは、噴火のころ産まれた子ども達です。帰島しなかった、またはできなかった島民もあり、現在の高校生たちは、小学校や中学校の時も少ない人数で育ってきました。少人数ゆえ、丁寧に指導することができるのは利点であり、昨年度も国公立大学に合格する生徒がおりましたが、一方で、行事・部活動などでは苦勞をしています。また、競争意識を持ちにくいことも問題となります。

そのため、三宅高校の課題としては、第一に生徒数を増やすことがあげられます。島で唯一の高校であり、50年以上もの歴史もあり、島民にも卒業生が大勢います。島民の方からも三宅高校への期待を強く感じる事が多くありま

す。

残念ながら、毎年、島外の高校へ進学してしまう中学生がいます。彼らに一人でも多く、三宅高校に進学を希望してもらえるような魅力のある高校を作り、島民の期待に少しでも答えることができればと思っています。その結果、三宅高校を卒業し、将来の三宅島を支えてくれる人材が育っていくためにも、精一杯努力したいと思います。まだまだ、日常の書類整理、提出に追われ、不十分な点ばかりですが、今後ともご指導をよろしくお願いいたします。

「汝の手に堪ふことは」

野村 悟（田園調布）

平成 25 年 4 月 1 日に新任の副校長として、都立田園調布高等学校に着任しました。

本校は昭和 25 年に開校した全日制普通科高校です。環境も閑静な住宅街にあります。

その勤務先に、3 月末、引き継ぎ連絡のため初めて訪れました。穏やかな天候で、春らしい陽気だったことを微かな記憶として覚えています。前任の副校長から長時間にわたって本校の現状や課題についてレクチャーを受けました。

その後、穏やかな春先の陽光を感じながらも、これまで経験のない職責について、不安な気持ちをぬぐい去ることのできないまま 4 月 1 日を迎えたのです。管理職候補者研修の中で、副校長としての研修を受講はしてきたものの、業務内容を十分に把握できていないことや慣れないことで、右も左もわからず、ただただ流されるように時間が過ぎていきました。学校長を始めとして、様々な方に協力や教示をしてもらいながら、その日一日をなんとか過ごす日が続きました。

学校長の指示を受けての業務や教員からの依頼や相談、要望、PTA 役員の人たちの依頼、中部学校経営支援センターへの連絡、保護者や外部の方々への電話対応など、様々な業務に追われていきます。夏季休業中になれば、少しは余裕がもてるのかと思っていた矢先、突然の講師対応に追われて 1 ヶ月間が飛ぶように過ぎてしまいました。

秋になり、ようやく涼しさを感じられるよう

になった頃、いつものように夜の校内を巡回している際に、ふと校内に置いてある不要物などが気になってきたのです。それまでの自分は、視界に入っている、ほとんど気にも留めることができなかったのです。それを不要物として認識できるようになり、少しは周囲を見渡すことが可能になったことに改めて気づいたほどです。

副校長の職務はマルチタスクであるといわれます。同時に複数の課題や問題を抱えていくことはいうまでもなく、視野を広くもち、教員のペースを上手にコントロールして学校運営の仕事を進めることがポイントのような気がしています。

現在の課題は、いかにして効率よくスピーディーに仕事を進めるかということです。校長の学校経営方針を推進させるために、副校長として目の前の業務に追われつつも、いかに組織を動かしていくかを考えています。副校長として勤務し始めた直後に出会った「汝の手に堪ふことは力を尽くしてこれをなせ」という言葉をそのまま実践したいと考えています。

まだまだ不慣れなことばかりです。これらもご指導、ご鞭撻を賜りますようお願いいたします。

50 年に一度有るかどうかの経験

今井 啓介（目黒）

平成 25 年 4 月 1 日、都立目黒高等学校に新任副校長として着任した。他の副校長と同様、右も左もよくわからないまま、あっという間に 1 ヶ月が過ぎた。休暇簿の押印を始めとし、旅費システムの処理は気付いたら数 10 件の案件がたまっていた。経営企画室の若い担当者に一から教えてもらおう。苦しい時、他人から教えてもらうことの有難さが身にしみる。入学式を終え、怒涛のような 1 ヶ月が過ぎた。今までの人生でこれほど密度の濃い日々を経験したことは初めてだった。

約 1 年間の中で一番、印象に残る出来事といえば校舍落雷停電事件であろう。7 月 23 日の午後、ゲリラ豪雨となり、4 時過ぎに本校の校舍に落雷し、停電となった。周辺は通常通り何も

なかったかのように過ごしているのに校舎内部だけが暗闇になった。その日、校長は出張で不在。携帯電話で直ぐに連絡を取る。支援センターに報告を入れる。職員を集めて状況説明、落ち着かせ担任を通じて生徒に連絡させる。

電気がなければ暗いだけではなくパソコン、インターネットも使えない。3 時間を経過した頃から電話の声が遠くなり、使用不可能となった。コンビニで購入したプリペイドカードを使って携帯電話で担任へ連絡。電話も停電の時は使えなくなることを初めて経験した。支援センターも待機して支援、応援を続けていただいた。

電気設備の復旧は深夜までかかり、完全に戻ったのは午前 1 時過ぎ。終電もなく、更衣室で仮眠し、朝帰宅後、8 時には出勤。緊張で頭は冴えていたが、さすがに午後、睡魔に襲われた。

PTA の携帯配信も有効な連絡方法だった。懐中電灯だけの真っ暗な経営企画室から携帯電話で通じた時は、心強く感じた。電気がないというめったに無いこの経験は、学校でもし災害にあった場合に、どう対応するかというシミュレーションとなった。懐中電灯、ラジオ、ランタン等の整備。連絡網等の書類がどこにあるか、暗い職員室の中でも分かるように日頃から整理しておくことも大切である。停電した時、校内 LAN は大丈夫か？本校ではハードディスクが破壊され、復旧に非常に時間がかかった。

50 年に一度有るか無いかの貴重な経験をした。緊急時であっても報告・連絡・相談、情報の共有化という普段から言われていることに従って、一生懸命にあたっていくこと。これに尽きると思う。今後とも宜しくお願い致します。

「挑戦する人」を目指して

市村 裕子（国際）

国際高校は平成 25 年 3 月に国際バカロレア（IB）の認定の取得を目指す学校として東京都教育委員会から選定された。平成 27 年度に認定を取得し、平成 28 年度から IB のディプロマ・プログラムを実施することを予定している。

私は IB の開設準備を担当する副校長として、平成 25 年 4 月 1 日に本校に着任した。私と共に開設準備に携わるスタッフとして、主任教諭 1

名が同じく 4 月に着任し、都教育委員会と連携しながら、校長先生の学校経営計画の実現に向け、IB の調査・研究、認定の取得に向けた業務に取り組んでいる。校長先生からは、折りに触れ教育課題に関する情報とともに教育観をお話しいただき、大学を始めとする外部との連携推進のため関係者へご紹介いただくなど、IB のより効果的な導入に向け、御指導と様々な機会を与えていただいている。

既に国際学科の学校として多様な教育活動に取り組み実績を上げている本校に新たな教育プログラムを導入するためには、教職員、生徒、保護者等とコミュニケーションをとって理解を深め信頼関係を構築することが大変重要なこととなる。業務の関係で経営企画室内に執務場所があるため、なるべく職員室や教科準備室に出かけ対面で話をする心を心がけてきたつもりだが、私の力不足から自分が考えるようにはうまくいかないこともある。教職員、生徒、保護者等とのコミュニケーションについて、本校の 2 人の副校長から助言を得たり、助けてもらったりしており感謝している。また、IB の認定の取得に向けた取組では、海外との連絡や外貨による入金等、煩雑な事務が頻繁に発生するが、室長を始め経営企画室ではいつも迅速な対応で開設準備の業務を支えてもらい、ありがたく思っている。都教育委員会の担当者の方々には、予算、人事、施設等のあらゆる面について学校の立場に立って御尽力いただいている。

IB では、目指すべき学習者像として、「探求する人」、「考える人」、「信念のある人」など端的な用語で 10 の学習者像が示されている。標題の「挑戦する人」もその内の一つである。

より良いプログラムを実施するためには解決しなければならない様々な課題がある。平成 26 年 2 月現在、日本の公立高校でディプロマ・プログラムを実施している学校はなく、課題解決に向けた取組は困難を伴うが、どのようにしたら本校に合うプログラムになるか、日々生徒と接し、学校を熟知している先生たちから出される意見やアイデアが大変参考になっている。今後も、校長先生から与えていただいた様々な機会を十分に活用し、副校長と密接に連携して、教職員と協力しながら進めていきたい。本校のコアの生徒と IB の生徒が互いに切磋琢磨して

良い影響を与え合い、自分たちの可能性をより大きく伸ばして世界に羽ばたいて行けるよう、本校校歌にある「パイオニア」精神を持って、「挑戦する人」として取り組んでいきたい。

伊豆大島で舎監長と呼ばれて

小口 淑美（大島海洋国際・寄宿舎）

本校は伊豆大島にあり、都立高等学校で唯一、寄宿舎のある学校です。私は今年度4月、舎監長として赴任いたしました。

寄宿舎の専任舎監の教員を本校ではハウスマスター（HM）と呼称します。寄宿舎のことはドミトリ（略して「ドミ」）です。

生徒定員は240名、HMは4人です。5日間の勤務日のうち14:30から翌日の14:40までの通し舎監業務が2回、宿日直のない14:30から23:00までの日勤が1回という勤務です。土曜・日曜は全員が勤務します。

夜間の発熱やケガ人が出れば緊急対応です。残念ながら特別指導の案件も発生します。学校でも勤務時間外の対応はありますが、この変則な勤務の他に対応しなくてはなりません。私も宿日直など、HMとともにルーチンの業務もこなします。部下を休養させられないことが、一番の悩みです。

ドミで家庭学習の時間に相当するのが「宅習」です。19:45～20:30を1限、20:40～21:25を2限、21:35～22:20を3限として、3コマの自習時間を確保しています。ホールにある個別の学習机を利用して全員が学習します。図書館に近い静寂さです。出席を確認し、机間巡視をします。もちろん、居眠りをする生徒を指導し、体調不良者の対応もします。自習監督のような業務です。

22:30の点呼のためHMが毎日「点呼連絡票」を作成しています。他のHM業務は、登校指導、毎日の居室の点検、郵便・宅配荷物の受け取り、食数の確認、ストーブ燃料の管理、金庫への貴重品預かり等々があります。

ダイビングや釣りなどの「海行き」許可のために、HMは海況を確認します。ボランティア活動の支援などの地域との連携もあります。

授業日は、生徒が欠席・早退した場合の生徒

対応や保護者連絡などもありますが、昼間はHM1名体制です。

生活を支えるということは、並大抵のことではありません。そして寄宿舎と学校との連携のため、主任は企画調整会議に参加し、各学年担当のHMは学校の学年会に出席します。その他、養護教諭・特別支援教育コーディネーター・SCとの連絡会、学習委員会などもあります。

さて、学校紹介が長くなりましたが、この職場環境は、副校長職に昇任する前と似ていると感じています。私は、養護教諭として保健室を核に仕事をしてきました。

多様な生徒の訴えに臨機応変に対応してきました。自分の判断で速やかに方針を決め、状況によっては軌道修正しつつ、担任、部活動顧問などと協力して生徒の円滑な学校生活を支えてきました。生徒のことを第一に考え、時に学校医の助言を仰ぎ、時に専門機関とも連携しました。当然のことながら様々な保護者対応もありました。多くの先生方に助けられましたし、また、養護教諭として情報を発信し、学校保健への理解を深めるよう働きかけてきました。

これまでの経験の全てが今の仕事に繋がっています。一人職種であり、常に自己研鑽、自己評価が必要です。分からないことを自覚し、教科教諭の先生方との違いも認め合ってきました。失敗もまた糧になっています。

教職にあるものとしての思いは変わりませんが、経験や立場の違いでさらに見えてきたものがあります。これからも精進し、職責を全うしていきます。

荒波に揉まれて

浜田 浩和（桜修館中等）

平成25年11月1日付、桜修館中等教育学校に前期課程副校長として着任いたしました。

前日まで、新宿山吹高校の保健体育の授業をし、また進路指導部主任として就職指導していた翌日から、副校長という重責を担う毎日がスタートしました。

異動の10日前に校長先生から「異動です」と言われた時、正直耳を疑いました。不安というより、この短い間に教科・分掌の様々な引継ぎ

を行えるか、生徒達に影響は出ないかなど考えてしまいました。それからの時間は早く、ただ先生方には残務をお願いするだけで、結局生徒たちにも何も伝えられない異動となりました。

また、この間には異動面接だけでなく、10月26日に行われた桜修館の学校説明会も見学させて頂き、1日も早く様子がわかるよう努力してきました。

着任の日は、今思えば先生方に挨拶をしましたが、その場の新顔は自分だけなので、一日も早く先生方の名前を覚えることに努め、今の桜修館の波にのることが先決と、いきなりフル回転になりました。着任が金曜日でしたので、翌日の土・日の振替や旅行命令などサービスの仕事がありました。タイムズの設定など2週間ほどかかり、先生方にはお手間を取らせてしまいました。2日の土曜日にはPTA運営委員会・4学年保護会で挨拶、3日の日曜日には新宿高校で都立学校合同説明会で概要説明と、今やらなくてはならないことにただ全力を注いでいました。異動面接で、前期課程の副校長は主に「生徒募集」と「適性検査」の仕事を中心に担当することを告げられました。11月の土日は学校説明会と適性検査解説会、12月からは適性検査の業務が中心となり、その間には3年生の3泊4日の研修旅行、1月下旬には2年生2泊3日のスキー教室引率がありました。学校行事への参加は、生徒たちの様子や先生方の取り組みなど日頃からの指導がよくわかりました。そして、2月には入学検査が行われました。本校の応募状況は大変恵まれており、第2会場を使用することが昨年度からおきています。今まで入選の仕事は教務主任として携わってきましたが、それとは比較にならない重責です。担当者を含め事故の起きないように十分に注意しながら、作業を進めてきました。そして、業務はなお進行中です。

振り返るとこの3ヶ月、校長先生や後期課程の副校長先生には、様々なことをご指導いただき感謝しております。また、先生方にもよくしていただき、感謝しています。

これからの自分自身の目指すところは、まず先生方により良い職場環境を形成していくことと心がけていきます。時には、事故を起こさないため厳しく対応しなくていけませんが、そのためには副校長として当然知らなければならな

い知識や危機管理能力をしっかりと身に付けていきます。最近では、1日がとても早いです。ボヤボヤしていたら、仕事は終わらずに1日がすぐに過ぎてしまいます。重要なこと、分からないことを後回しにせず問い合わせをするなど何事にも積極的に取り組み、桜修館の波にのまれば頑張っていきたいと思います。今後とも、どうぞよろしくお願いいたします。

都立唯一の芸術高校

平林 信彦（総合芸術）

平成25年4月1日付けで、平成22年に開校した総合芸術高等学校に着任しました。芸術高校を母体校として、小石川工業の跡地に校舎が建てられた新設校です。学校の名前の通り、芸術に特化した学校で、美術科、舞台表現科、音楽科の3科で構成されています。特に、舞台表現科に関しては過去、都立高には無かった学科です。生徒は、中学校から早い段階で芸術の方向に行きたいと進路を決め、極めて高い表現力をもち入学してきます。全都の中学校から、そういった選りすぐりの生徒が入学してくるため他の学校とは違った雰囲気が学校にはあります。

校舎に入るとロビーの様なグランドピアノがあり、朝にはモーニングコンサートと称してアンサンブルで演奏が行われ、学校の大きな廊下（コラボストリートと呼んでいます。）には、生徒の絵や彫刻作品が並べられています。美術館のような雰囲気もあります。しかし、その優雅さとは違い、同じ目標をもつ生徒同士の競争が繰り広げられています。まさに修行の場として学校があるのだという印象を受けました。

着任した当時は、細かく目的が細分化されている校舎、複雑な教育課程、200名もの時間講師・市民講師を覚えることなど、とにかく総合芸術高校を理解することが重要で大変です。

本校は、とにかく一筋縄では何事も進みません。中でも一番大きな課題としては200名の講師管理です。時間講師については、授業観察をはじめ研修命令簿の管理、出産や病休など、そして、市民講師は登録漏れの申請手続きなど、講師関係で費やす時間がかなり多くとられてし

まいます。市民講師・時間講師の時間申請は困難を極めます。教員免許に「舞台表現」は無いため、舞台表現科は市民講師の先生方で授業が成り立っている状況です。授業＝時間単位でお金を計算することになり、服務からお金の給与支払いまでを学校が担っています。この経験で経営企画室との連携がいかに大切かということを学びました。

次に厳しいと感じているのは行事が多いということです。連休は必ずと言ってよいほど、2日間は発表会や展示会などの催し物があります。3科がそれぞれ行うため、担当科の教員は催しものは3科それぞれですので3回に1回という感覚ですが、管理職は別で、ほとんど出勤です。その上、会の「挨拶」はもとより、機材運びや生徒の点呼など複数の役割が入っています。副校長は多忙を極めることから、体力も必要であるということを実感しています。年度末に向けて推薦・入選、市民講師申請、教育課程調書の作成など、重要な業務が多くあります。

毎日、「これで良いのか」と自問自答していますが、先生方のサポートで何とか進んでいます。

この10ヶ月、校長並びに先輩副校長のご助言やご指導を頂いたことに深く感謝申し上げます。今後も引き続きご指導の程よろしく願いいたします。

「夢を叶える通り道」

山田 道人（文京）

平成19年4月から平成25年3月までの6年間を教育庁で指導主事として勤務し、6年ぶりに現場に戻ってきました。待ち望んでいた久々の現場でしたが、副校長としての職務は分からないことだらけで、指導主事になったときと同様に戸惑ったことはいくつもあります。幸いにして、星野浩史校長先生に、校内の様々な対応から休暇の処理方法まで、丁寧に御指導いただいたおかげで、11月までたどり着くことができました。

着任して最も戸惑ったことは、生徒数の多さです。平成25年度の入学生が9学級だったこともあり、1000人の高校生が学校にいると考える

と、生徒の安全を確保するため常に緊張していないとだめだと感じています。本校は部活動に力を入れる学校なので、怪我が絶えません。4月から何回救急車を呼んだのかを考えると、よくここまで大事無くこれたものだと思っています。この原稿を書いている間も、怪我が発生しています。

指導主事は自分の判断で、決断したり判断したりすることは基本的にはありませんが、副校長はそうはいきません。1000人もいると様々なことが同時に発生し、その度に瞬時に判断しなくてはなりません。4月当初は、校長先生がいないときに、一人で学校に残るのが、とても怖かったことを覚えています。

行政にいた中で、特に入学選抜係にいた5年間は、様々な出来事に遭遇してきました。その中で高校現場の意向を尊重し、特に副校長の業務に負担がかからないよう常に考えていたつもりです。しかし、現場から見ると不十分であったことを痛切に感じたので、行政の記憶を忘れない内に、現場の声として担当者に伝えていこうと思っています。

後継者の育成も考えようと思っています。「副校長職は忙しく、魅力のない職業」だと思われないように努めるつもりです。正直な気持ちでは苦しいときもありますが、急いでいても、取り乱したり、慌てたりしないようにし、平静を保つよう心がけています。魅力のある職種だと思ってもらえるようにと思います。

文京高校はほんの少し前まで、地域から疎まれる学校だったと聞いています。今は、文武両道の学校として、人気校になりました。これは、この学校で勤務してきた先生方の努力の成果であることは間違いありません。副校長として10か月が過ぎようとしています。日常の仕事の山を一つ一つ着実に間違えないようにこなし、少しでも、生徒と文京高校で働く教職員に還元できればと、頑張っていこうと思っています。本校は、生徒にとっても、私自身にとっても、まさに「夢を叶える通り道」です。期待を裏切らないよう努力する所存ですので、今後も御指導くださるようお願いいたします。

「雑感」

黒田 正（大山）

平成 25 年 4 月 1 日付で、大山高校に着任しました。旧 3 学区で育ち、過去旧 3 学区と旧 5 学区の夜間定時制及びチャレンジスクールで勤務してきました。初めての旧 4 学区に初めての全日制と戸惑うばかりのスタートでした。

4 月当初は前任者が残した資料をひたすら確認する日々でした。入学式後、PTA 役員の選出の場にずっと居残って、報告が遅れてしまったり、細かいミスは数え切れません。とにかく調査統計システムの締切とにらめっこで、目の前にある仕事を片付けることしかできませんでした（これは今の時期になってもあまり変わっていないかも…）。

そんな中、10 月初旬に 50 周年記念式典を控えており、毎月の実行委員会を切り盛りすることが業務の中心になり、だんだんと余裕がなくなってきました。周年行事のある年度に校長、経営企画室長、PYA 会長全てがスイッチ、前年度を知っているのが定時制の副校長のみ、という状況は、綱渡りと言いかないようには感じました。

それでも式典・祝賀会とも、生徒や PTA 役員の皆様、PTAOB の皆様の協力もあり、何とか終わることができ、ホッとしています。

日々の業務は、毎日大量の服務上の処理作業に追われ、特別指導の申し渡しに追われ、提出物の締切に追われ…と、夜になると「今日は何をやったのだろう…？」と嘆く状態が相変わらず続いています。しかし、生徒は毎日楽しそうに登校し、授業・部活に頑張って取り組んでいます。教職員も一生懸命生徒・保護者へ対応しています。地域や中学校からの評判もどんどん上向いてきています。活気のある学校に変わってきていますので、更なる飛躍に少しでも貢献できるよう、先生方のバックアップをしていきたいと思っています。

毎日色々考えることが多く、ストレスを食べることで発散してしまい、胴回りが随分と広がってしまいました。残業後、学校裏の城北中央公園をジョギングすることで、抵抗を試みています。まずはこの 1 年を乗り越えたいと思っています。

驚き

笹平 篤生（王子総合）

この度 9 月 1 日付で、都立王子総合高等学校に副校長として着任いたしました。

王子総合高校は平成 23 年度に 10 番目の総合高校として開校し、今年度全学年が揃い 3 月に初めての卒業生を出します。

8 月 12 日の午後、2 学期に向け、教材作成をしていると校長先生に校長室に呼ばれ、校長室に入ると、「午前中、人事部から連絡があって、9 月 1 日付で異動が決まったよ。学校は王子総合です。」と告げられました。年度途中の昇任異動があるかもしれないと言われていましたが、こんなに突然やってくるとは思っていませんでした。工業高校しかもめぐりあわせで新規採用からずっと定時制勤務でしたので、非常勤講師をずっとしてきたとはいえ全日制が初めてであることと、異動があったとしても異動先は工業高校だろうと思っていましたから、総合学科と聞いて「えっ」と声が出てしまいました。

「19 日までは誰にもこのことは話さないように。」と言われ、帰宅後、家内には話したものの翌日から同僚と顔を合わせる度に何とも言えない気持ちでした。

8 月 30 日、都庁でたった一人の辞令交付式が行われ、9 月 2 日、不安を抱えながら副校長としての生活がスタートしました。

副校長としての生活は、まず、全日制の生活サイクルに変えることから始めなければならず、これが結構大変で、それに加えこれまで経験したことのない業務や事柄が次々と駆け巡っていきました。幸い、本校は副校長複数配置校のため、わからないことを経験豊かなもう一人の副校長先生に聞けることです。間もなく着任から 5 か月が経とうとしていますが、毎日があっという間に過ぎ去って、まだまだバタバタしています。

私自身、総合学科についてまだまだ分からないことも多くありますが、文化祭や授業成果発表会など生徒たちのほつらつとした姿を見ると、総合学科の教育は、これからの時代に求められる、魅力的なものであることを強く感じます。

最後になりましたが、何もわからない昇任副

校長の私を、いつも温かくご指導くださる本校の今澤校長先生、橋田副校長にはこの場をお借りして深く感謝を申し上げます。また、先輩副校長の皆様の支援を深く感謝申し上げるとともに、今後も引き続きご指導よろしくお願いいたします。

着任 1 年目の状況

山下 一郎（光丘）

ディズニーランドの 1.2 倍の広さの光が丘公園が目前にある光丘高校に、昨年 4 月に着任しました。大江戸線の駅名や地名は光が丘と「が」が付きますが、校名には付きません。でも読み方は同じ「ひかりがおか」です。創立時（昭和 52 年）での都立学校の校名には「ケ」や「が」を付けないという決まりがあったということで「光丘」となっています。

副校長に着任してもうすぐ 1 年が経とうとしています。着任してみて改めてわかったことは副校長の業務範囲が半端無く広いということでした。あれやこれや。

毎日のルーチンワークの 1 つに年休処理、出張命令などの勤務に関する処理がありますが、毎日それなりの時間がかかります。でも、先生方がそれを提出しに来るときに会話をする機会が得られるので、それを楽しみにしてコツコツと処理するようにしています。

副校長になる前には学年主任、生徒指導部主任をやっていただけに、生徒との関わりが激減しました。ある程度の覚悟はしていましたが、これほど生徒と接触する機会がないとは思いませんでした。今では、時折生徒会の生徒と話したり、授業観察で教室に行った時に生徒に話しかけるようにして生徒との関わりを少しでも持ち、生徒の実態を正確に把握するよう努力しています。

副校長として最も重要な業務として校長の補佐がありますが、今年はどちらかというと校長先生に助けていただきながら職務をこなしている感じであります。校長の優しさに甘えることなく、校長の補佐として職務を全うしていかなければと強く思っております。

普段、わからないことがちょくちょく出てき

ます。そんなとき、ありがたい存在なのが学校経営支援センターの支援主事の方です。特に、今年は中部学校経営支援センター支所の中田支援主事にはいろいろ教えて頂いてほんとに感謝しております。

着任してもうすぐ 1 年になりますが、目の前のことを 1 つ 1 つこなすことだけで精一杯の毎日です。ですが、副校長連絡会などで先輩の副校長先生方から助言や支援を頂き業務をなんとかこなしております。今後とも引き続きご指導よろしくお願いいたします。

「効果的な学校」で有り続けるために

杉山 智子（大泉桜）

平成 25 年 4 月 1 日月曜日は、校門と職員玄関の開錠をしている用務主事の方への「おはようございます」で始まりました。次に職員室の自席に着き未決箱を空にしながら、着任する先生方からの質問に答え、張り切った気持ちで一日のスケジュール確認をしたことを思い出しています。

本校は平成 15 年に練馬地区単位制高校として開設され同 17 年 4 月に現在の校名で開校し、まもなく 10 周年を迎えます。地元では「桜高校」の愛称で親しまれています。着任以来本校の強みと感じていることは、生徒の気質が思いやり深く温和で素直であること、宮下校長先生の強いリーダーシップのもと先生方の学力向上等への取り組みが生徒の実態に基づいたもので無理無駄がないこと、保護者や地域等関係諸機関の皆様が教育活動に暖かい目を向けてくださっていること、この 3 点です。

欧米の教育社会学に学校効果研究（School Effectiveness Research）と呼ばれる分野があります。1970 年代から 40 年以上の研究蓄積があり学校ごとの教育効果の違いが何によって生み出されるかを事例調査を積み上げることにより分析する領域です。分析の結果「効果的な学校（Effective School）」の条件として次の 5 点が挙げられました。（1）校長の強いリーダーシップ（2）子供への期待に満ちた風土（3）教授活動に対する促進的な風土（4）子供の基礎的なスキルの獲得を明確に打ち出していること（5）

子供の到達度をモニターする様々な手段を持っていること。副校長としては瞬時の課題発見と組織的かつ協働的な危機管理体制の構築を6点目として言い聞かせています。

東京都教育委員会指定「学力スタンダード推進校」としての取り組み、「桜高校版」ともいえる特色ある防災教育の推進、美術や福祉、ボランティアの分野で全国的にも高い評価を受けてきた生徒の諸活動等、本校の強みを最大限に生かし「効果的な学校」であり続けるよう尽力してまいります。よろしくお願いします。

「学校経営の扇として」

石野 隆（千早）

平成25年4月1日付、私は都立千早高等学校に着任しました。本校は、平成16年度に開校した英語とビジネス教育を重視した進学型専門高校であり、都内で初めての「ビジネスコミュニケーション科」の高校です。

4月当初、特色ある高校に着任することができた喜びを噛み締め、ジョブローテーションで積み重ねた教育行政の経験を生かし、新たな風を学校に吹き込みたい、そして、さらなる次の10年に向けて校長の学校経営を具現化していこうと揚々とした気持ちでスタートしました。

しかし、10ヵ月を過ぎた今反省の毎日です。

特に、学校の中核となっている教職員のモチベーションを保ち続けること、学校運営が円滑に進むように様々な働きかけや調整することの難しさを痛切に感じました。

副校長は、生徒の怪我や事故への指示、保護者・地域からの苦情・相談への対応、様々な業務をこなしながら、関係機関との連絡・調整を含め、副校長の迅速かつ適切な判断が、教職員に安心をもたらし、学校運営をスムーズにさせること、このことが本当に難しい仕事であることを実感しています。

副校長の判断は、慎重でなければならないが遅れることは学校全体に大きなダメージにつながる、一瞬たりとも安穩とできない日々が続いています。

そうした中で、本校の行動力ある主幹に様々な面で助けられ、これまでの教育活動を遂行す

ることができました。また、若手教員も先輩教員から叱咤激励されながら、授業に、部活動に、学校行事に奮闘してくれています。若手教員が担当した仕事をやり遂げ、満足そうな顔で同僚と話す様子は学校ならではの嬉しい一コマです。

こうしたフレッシュで、躍動感のある若手教員を育てながら、本校をさらに発展させていくため、副校長である私が学校経営の扇として、さらに機能しなければと考えています。

最後になりますが、未熟である私をいつも暖かくご指導くださる本校の林修校長には、本当に感謝の気持ちで一杯です。校長を補佐できる力量を身に付けられるよう、日々精進していきたいと思います。

また、中部学校経営支援センター支所の皆様、中部Dチームの副校長の皆様には様々なご指導ご鞭撻をいただいております。今後どうぞよろしくお願いします。

『本当の自分に出会う』

増田 雅子（町田総合）

4年前の3月、忠生高校の閉校式典後、校舎改築のため、体育館に全ての物品を詰め込み、校舎を去りました。その忠生高校が新しく総合高校として生まれ変わった町田総合高校に副校長として赴任しました。

町田総合4期生の入学式は体育館中が地元の名士さんからの巨大な生け花で、春の桜や青葉の香りが包まれる中、和太鼓と琴の演奏と小椋佳 作詞作曲の校歌が優しいメロディーと声で流れました。校舎も校門の桜並木も、朝遠くに見える丹沢の山並みも変わらずですが、町田総合は「光」の校章が、象徴するように、生徒達の行く先の道すじを照らす学校です。

入学式から5日目に生徒の交通事故がおき、尊い命を失いました。そのときから町総生徒の命を微力でも全力で守る決意が生まれました。事故を引き起こさない、それは家庭にあっての心がけと同様、そのときそのときに声をかける、転ばぬ先の杖でしかないのですが、そんなことを教職員一同で行うことをイメージしました。

校長室をノックして入ると、校長先生の低～

い声と大きな背中。高橋一信校長は、様々な学校現場を経験され、その体験談を面白おかしく話されるのですが、危機管理の目、人間への深い憧憬には心底、心打たれます。きめ細やかな指導方針の重要性、生徒の存在の裏側まで想像力をめぐらすことを、未熟者の私に教えてください。校長先生の闕に、自分は到底及ぶはずもないのですが、精一杯ついて行こうと思います。生徒の様々な立場や、可能性を直視した教育論になかなかついていけない場面もあるのですが、その溝を埋めていくのが私の使命と感じています。先生方は優しく、地道に努力される方々で、企画室の皆さんにも毎日助けていただいています。

今年度は言語能力推進校として、谷川俊太郎氏と御子息の賢作氏にお越しいただき、「詩と音楽のコラボレーション」という公演が行われました。詩が、音楽に乗り、言霊になる瞬間をこの古い体育館で経験し、生徒達が本物の文学や音楽に触れることの価値を感じています。

また、生徒と対峙することの少なくなった副校長職にありながら、弁論大会に出場する3年生の指導を任されたことは、貴重な体験でした。発達障害のある生徒の学びを直に触れることができ、この生徒の小さいころから共に歩んでくれた指導者達の教師力に畏敬の念を持つと同時に、困難や障碍にもめげずに立ち向かう、薄紙をはがすような一つ一つの教育積み重ねにこそ光がさすことを感じました。

町総の教育目標には「自尊意識を育むと共に、他者を理解し容認する心を育む」とあります。小さな者や弱者へのいたわり。優れているものへの素朴な賞賛、ひそやかなもの対しても「他を顧みる心」自分自身を調整する力を育んで行きたいと思います。

開設から5年。これからが本当の町総の道しるべを、今いる生徒と教職員が一同になって創るとき。コミュニケーション授業、小笠原修学旅行での体験学習、必修の日本文化、多種多様な学校指定科目。総合学科は忙しいと嘆きたくなることもあると思いますが、一つ一つ職務を遂行して行く所存です。

副校長協会の先生方の教えも心から感謝申し上げます。ネットワークなくしてはひとつも進まない現実、今後ともよろしく御指導賜ります

よう、お願いいたします。

人に育てられるということ

澤崎 陽彦（南多摩中等）

平成25年4月1日、東京都立南多摩中等教育学校に副校長として着任しました。思えば平成3年4月に入都、全寮制の秋川高等学校に新規採用されてから、自分がこの職に就くことになるとは全く想像できませんでした。初任の頃は、働き方も何をしたらいいかわからない状態でたくさんの先輩や管理職に迷惑をかけていたなど反省しております。教員になって10年目に今までの研究を継続するか教育に身を捧げるかで本当に悩んでいる時、ある先生が「どっちも続けたら」とアドバイスしてくださいました。それから、悩む時間がないほど夢中になって駆け抜けてきました。

南多摩に着任後、じわじわと感じていることは、母体校である南多摩高等学校の伝統です。八王子市の様々な催しに部活動やボランティアなどで参加すると、年配の方々が必ず声をかけて、南高の自慢をしてくださるのです。その方の出身校というわけではないのに地域の誇りなのでしょう。このことは南高が100年を超える伝統の中で地域に根付いた証です。

平成26年度の高等学校の生徒は第3学年のみとなります。中等教育学校が南高から伝統のバトンをしっかり受け取り、発展していくかどうかがこの数年間に係っているといえます。

教員として22年間勤務する中で、どんな困難なときも気が付くと、良い上司と力ある仲間恵まれてきたように思います。はじめて担任としてホームルーム経営を任された時も、教務主任として入学者選抜を任された時も必ず誰彼問わずアドバイスをくださり、育てていただいたという思いがあります。

学校には日々様々な問題・課題が山積しています。これらを「まあなんとかなるさ」と前向きに捉え、個人で背負うのではなく組織として解決することを教えていただきました。副校長になって、毎日が本当に忙しいですが非常に充実し楽しい生活を送っています。自分を育ててくださった方々への恩返しの気持ちで南多摩を発展

させ、副校長として人を育てるという任務を全うしたいと考えています。

副校長となって

榎 茂喜（武蔵）

都立武蔵高等学校及び都立武蔵高等学校附属中学校の副校長として着任して早いもので1年になろうとしています。中高一貫教育校は初めての経験です。総合学科での経験は長いのですが、また違った新しい出来事が多く、日々業務に追われています。

さて、副校長になり一番大切に考えていることは、学校が明るく元気であることです。生徒も教職員も明るく元気で過ごすことができる環境を準備することが必要であり、また大変なことだと思います。明るく元気の基本は「心と体の健康の維持」です。そのためには、生徒をよく観察すること、そして先生方をよく観察しコミュニケーションをしっかりとることだと思います。体の変調は心に影響していきます。良くない状態が続くと生徒に対しても教職員間でも良好な関係は維持できなくなるおそれがあります。信頼関係が低くなり学校経営に大きな影響を与えてしまいかもしれません。

まだ副校長としてはスタートしたばかりです。より円滑な学校経営を行うために、生徒と教職員そして自分自身の「心と体の健康」に十分に気をつけて、日々の業務を行いたいと思います。

武蔵野の地に赴任して

丸茂 聡（武蔵野北）

5年前の4月に学校から行政に異動したとき、それまでとは違う緊張を味わっていた。単に新しい職場に赴任するのとは異なる劇的な変化に対する不安があったことを覚えている。

この4月に副校長として武蔵野北高校に赴任した時は、管理職として異動することもあり、5年前以上の緊張に見舞われていたことと思う。

「思う」というのは、そういう緊張を感じる暇もないほど、あわただしく日々が過ぎ去ってい

たからである。服務を確認し、打ち合わせを行い、複数の起案を立て、会議の準備をし、出張し、入学式の準備をする。先生方の顔がわからないとか、学校の事をよく知らないとか言っていられないので、近くにいる先生に「この仕事は誰に聞けばわかりますか？」と話しかけ、目の前の仕事をこなす毎日だった。

気がつけば先生方の名前と顔も一致し、少し余裕を持ちながら仕事ができるようになっていた。むしろ不安を感じたのはこの頃で、これまでの自分の対応は間違っていなかっただろうか。と考えることが多くなっていた。「管理職」であることの重さであったかもしれない。そして、「一人」であることを感じたのもこの頃であったと思う。わからないことを相談したり、悩みや愚痴を伝えたりする相手がいないと思っていた。

今考えると、それこそ単なる「思い込み」であったのだな、と感じる。これまでの職場で一緒に仕事をしてきた方々はもとより、学校経営支援主事の頃に毎月のようにお会いしていた副校長の皆様、直接会うことは少ないけれども、電話では何度も話をしたことがある本庁各部署の方々など、同じ職場・部署にいたわけではないけれども、一緒に仕事をしたことがある方々が、様々な場所に今もいる。多くの人たちとのつながりに支えられていることを実感し、「一人」だけでも「一人じゃない」ことに気づくことができた。

武蔵野北高校は武蔵野中央公園に隣接し、住宅街に接している。周囲には高い建物が少なく、空が大変広く感じられる。静かで、とてもゆったりと時間が流れている場所である。校内を見回る途中で屋上に出ると、武蔵野の地から遠くの山々が一望できる。そんな景色を眺めながら、自分も誰かの支えになれているのだろうかと思えることがある。そして、そうなれるように、明日もがんばろうと思っている。

「出会い、そして挑戦！」

高木 健治（保谷）

平成22年度教育管理職試験に合格し、今年度から都立保谷高校に着任することになりました

た。3月中旬くらいには、どきどきしながら昇任の報告を待ち、身辺整理をしていたことを未だにはっきりと覚えています。卒業させた生徒からは、「どうして保谷高校に異動してしまうのか？学校に遊びに来て私たちの先生はいない！」など、それは私にとって本当にうれしいつぶやきでした。

異動先の保谷高校は、東京の西部地区にあり、多摩地区での東京都採用者の私にとっては懐かしく感じられました。保谷高校は、保谷駅とひばりヶ丘駅のちょうど真ん中にあり、西武池袋線から見る事ができる学校です。中堅校で、部活動が大変盛んな学校、今は大規模改修中ということでプレハブの中で一日を過ごしています。

4月を迎え、初日から不安で一杯の日々が始まりしました。実際に、仕事畑が全く変わってしまい、分からないことだらけで、ただただ慌てただけでした。誰に聞いていいのか。校長先生も忙しそうだし……。何から始めていいのか、何をどうしていいのか。本当に、副校長が、対応しなければならないことが私に津波のように押し寄せてきていました。特に、実務関係には、本当に泣かされました。しかしながら、幸いなことに、本校の企画室には、それはそれは、頼りになる女性が二人もいたことに大変感謝しています。

一学期には、副校長という立場がとても重大であることにすぐに気づかされました。学校の2度の危機をいかに校長と共に乗り切るのか。あたかも大海原で二つの台風にでも出会ったかのようにも感じられました。まさに、副校長としての責任ある行動を取らざるを得ない状況が数多くあったことを覚えています。

副校長として8ヶ月を過ぎようとしています。今日では、職場にも多少慣れ、地域の人とも会話をする機会が増え、充実感を感じられる日々を過ごせるようになりました。多くの校長、副校長、そして指導主事の方々とも話をする機会も増えました。この出会いを大切に、これからは保谷高校を校長の学校経営計画の目標に向けて、初心の気持ちを忘れずに教職員と共に邁進していくつもりです。

副校長

請地 政元（田無）

平成25年4月1日（月）、とうとう来てしまったという感じで朝を迎えました。前日は、部活動顧問最後の日だと思い、古くからのバレーボールの監督仲間たちと練習試合を行い、ラストゲームを楽しみました。夜も昔ばなしや将来の話で遅くまで盛り上がりました。学生の時の夢であった教員となり監督となった学校生活も終わってしまうのかという思いと明日からへの不安と期待と複雑な思いが入り混じっていました。

4月1日の朝は、元の同僚の数人から激励のメールを頂戴しながらの出勤で、少し緊張をほぐされました。学校へ着くと久しぶりの多摩地区普通科高校の門をくぐり、懐かしい空気を感じながら副校長としてのスタートを切りました。そして、校長先生と経営企画室長と打ち合わせが終わり緊張する中、東京公会堂で辞令を交付され、身の引き締まる思いで帰校したのを覚えています。

翌日からは、PTA会報誌の教職員の顔写真と職員室の座席表を持って職員室内を行ったり来たりしていました。気を使う入学式と全校生徒と対面する始業式が終わって、いよいよ本番を迎えました。増学級のための教室の準備や施設の不具合、交通事故、外部からの侵入による盗難被害などスタートに相応しい？事案が流れるように起こり、タイムズからもお知らせや調査が溢れるように印刷され、毎日をこなすのが精一杯な4月～5月でした。

本校は、昨年30周年を迎えました。生徒たちは、明るく素直な生徒が多く、授業も落ち着き、しっかり学習し、部活動についても加入率が80%近くもある元気な学校です。しかし、生徒には伸びしろが、まだまだたくさんあります。課題もあります。生徒も教員も現状で満足することなく、向上心を持ち続けながら成長して欲しいと思います。生徒を育てるのは、紛れもなく指導者の存在だと思います。指導者がやり甲斐を感じ、思いきって指導できる体制を構築するのが管理職の仕事だと考えています。それが管理職試験を受験した動機の一つです。

仕事が多くても涼しい顔で、難問が生じても

何食わぬ顔で、慌てている先生には落ち着いて、心はドキドキ動揺しても、表情や態度には絶対出さず。人材育成のためにも、自分のためにもそのように心がけています。

「社会人としての成長」

猪瀬 高宏（田無工業）

本校は、周囲一帯に柏、檜、栗等の雑木林が点綴し、美しい力強い武蔵野の自然に囲まれ、本校教育の根幹を示した校章には、武蔵野の美と力を表現した「柏」の葉が3枚（機械科、建築科、都市工学科）により3学科を表現し、用いられている。更に、「月桂樹」の葉と実3組により、3年間の勉学の努力が実り、知識と技術となり、中堅技術者の榮譽を担って実社会に出て行く生徒達を表現しています。

校歌の歌詞にも、「ひろく世界の 幸せもとめ豊かな心の 翼を広げて 地球にいきる すべての命を おお育て守ろう 希望のひかり田無」とあります。私は、本校の特色でもある生徒達との「ものづくり」を通して、学校生活を楽しく過ごした3年間を見通したキャリア教育の充実を進めたいと考えています。特に、インターンシップ事業やデュアル事業を通した規範意識の向上を通して、個々の生徒に“生きる力”が身につく、学校教育で一番の基本となる“優しく清い心”を育てて行く姿勢を大切にしていきたいと考えています。

田無工業の生徒達には、学校の友達や仲間たちに、できるかぎり優しく接することができる“優しい心”と、将来どんなに苦しく辛い場面に出会っても、くじけない“柔軟な強さ”をもって欲しいと思います。また、本校での3年間に“基礎的な学力”を身に付けるのはもちろん、正しい職業観・勤労観を身に付け、社会に踏み出してもらいたいとも思います。

“元気な挨拶”、“専門の技術力”を最大限に高めて、入学してからの3年後には、目標とした進路先に、100%の生徒が決定することができるよう努めたいと思います。就職活動を有利に進めることの出来る資格取得等の支援とクラブ活動や外部大会への参加にも積極的に参加をしてもらいたいとも思っています。

教職員・保護者、そして生徒達が一つになり、楽しい学校生活を通して、武蔵野の大地に力強く根を張り、その力こそが“知識と技術”となり、中堅技術者として実社会に出て行く生徒達を見送り続けたいと考えています。

思うことなど

栗原 充治（五日市）

平成25年4月1日（月）に、地理上東京都の最も西に位置する五日市高等学校に私は着任しました。

五日市高校は、今年開校66年目を迎えた西多摩地区の歴史ある学校です。私事ですが、祖父母が旧西多摩郡五日市町に居を構えたことで、父親が同町の出身者となったため、五日市高校に着任できたのは、何か目に見えない力によるものだと思ひ、歴史ある五日市高校のために戦力になれるように頑張ろう、と着任したその日、正門から校内に入るときに強く思いました。

それから早いもので丸9か月が経ちました。多くの副校長先生がきっとそう思われたと思いますが、本当に「あっという間の9か月」でした。特に4月5月は、訳の分からないうちに過ぎてしまったというのが正直なところです。

その2か月、校長先生を始め多くの方に助けをいただきました。特に室長を始めとする経営企画室の皆さん、定時制課程の副校長には数多くのことで相談に乗っていただきました。また、全定関係なく、多くの職員の方から助けていただきました。五日市高校は、全日制13クラス、定時制4クラスの小規模校です。ゆえに職員の数も少なく、全定の垣根を越えて交流も深いものがあります。そのように恵まれた環境で新たな立場としてスタートできたことは、私にとって大変な幸運でした。

また、校外では、副校長連絡会で同じチームのメンバーとなった多くの副校長先生や経営支援センター支所の皆さんに仕事のことでアドバイスをいただいています。このことも私にとって本当にありがたいことです。

しかし、そのような環境に甘えているだけではいけません。職員から「〇〇について教えて

ください。」「△△についてはどうすれば良いのですか。」と聞かれて、しどろもどろというのではこの職は務まりません。校長からは「だいたい初心者マークが取れてきた」（過大評価だとは思いますが）と言われるようになりました。しかし、現状に満足しているわけではありません。相変わらず、職員の質問に即座に答えられなかったり、業務が遅れがちになって周囲に迷惑をかけたりの日々です。また、本校に山積する課題の解決がなかなか図れず、自分は何をどのようにしていけばよいのだろう、ということに頭を悩ます日々でもあります。

しかし、悩んでいても始まらないので、もう一度副校長として正門を通過した4月1日の朝の思いを胸に職務に邁進していこう、五日市高校の戦力に名実ともになれるよう、これまで以上に努力していこう、とこの原稿を書くことで気持ちを新たにできました。

貴重な機会を与えていただいたことに感謝いたします。

決意

重中 由香里（瑞穂農芸）

平成25年4月1日付で瑞穂農芸高校全日課程の副校長に補された。

本校は農業と家庭の大学科があり、農業科には園芸科学科、畜産科学科、食品科の3科が、家庭科は生活デザイン科がある。地域に密着しており、文化祭時には地域の人たちが多数来校してくれる。また、本校生徒も保育園や福祉施設へ実習に行ったり、地域のイベントに本校で飼育している動物を連れて行って「移動動物園」を開いたりときまざまな活動をしている。

私自身は、農業の教員であるにもかかわらず、行政、工業系、定時制高校に在籍していて15年ぶりの農業高校であり、わからないことだらけである。

ともかく、時間の経つのがものすごく早く感じている。昨年度までなら「2学期、長いよね」と同僚と愚痴を言っていたが、今年は夏休みが終わったと思っていたら、いつの間にかクリスマス、そして正月を迎えていた。

当然一日も短い。7時半に出勤し、校舎内を

一回りして、自席につくや、電話対応に追われる。保護者からの欠席連絡や職員の年休申請を処理する。提出物の作成でどういう表現をするか考えていると、外部からの電話。来客対応。午後にはまた年休処理。気がつくとも5時過ぎて、定時制の時間帯になっている。その頃からようやく落ち着いて仕事ができ始め、ノってきたところで時計を見ると、10時。定時制の職員が勤務を終えて帰っていく。今日一日何をした？駅に向かいながら自問する。・・・うむ、思い出せない。

以前の職場でも、全日制の副校長は、私たち定時制職員最終下校組と一緒に帰っていた。むしろ、こちらが、「先生、終電に間に合わなくなりますから、急いでください。」とせかす側だった。残念そうな表情でパソコンの電源を落とし、かばんに書類をつめて職員室を閉めていた。「全日制の副校長先生、大変だね。身体壊さなければいいけど。」と心配していた。今、逆に心配される側になってしまっている。副校長って大変、あんなに夜遅くまで残っているし、土日も来ているし、ああなるんじゃ、管理職ってなりたくないよね。

「魅力ある管理職」ではなく、悪い見本となっている自分が情けなくなる。

もう一度、管理職を目指したときの気持ちを思い出そう。事務処理で1日の大半の時間を費やすために管理職を目指したのではない。もちろん「地位」や「給料」のために試験を受けたのではない（少しは魅かれたけど）。

都立高校をより魅力的にし、中学生の保護者から「うちの子にこの高校の教育を受けさせたい」と強く願われる高校を作るために管理職になったのではなかったのか。在学中の生徒の良いところを沢山引き出し、自己有用性を高めてやり、社会に貢献できる人として送り出す高校を作るためではなかったか。そして、女性管理職として、オトコ社会に新しい風を吹き込みたかったのではなかったか。

パソコンと格闘しながら、膨大な文書を作りながら、歯を食いしばり、ともすれば消えそうになる理想の火を、今は熾火として絶やさないうように守っていこう。そしていつの日か、大きな炎として燃え上がらせてやる。

10(1) 挨拶

東京都教育庁指導部

主任指導主事 永森 比人美 先生

東京都公立学校副校長協会平成 25 年度総会の開催に当たり東京都教育委員会を代表して一言ご挨拶を申し上げます。

はじめに、これまで東京都公立高等学校副校長協会が都立高等学校教育の充実・発展に多大な貢献をしてこられましたことに対し深く敬意を表すとともに、東京都教育委員会の各種事業に御理解と御協力を頂いていますことに厚く御礼申し上げます。

さて、グローバル化や情報化、産業構造の変化や雇用の流動化など現代の社会の中で若者を取り巻く環境はこれまで以上に激しく変化しております。一方、現代の若者には基本的なマナーや対人関係能力など社会人として自立していく上で必要な基本的な能力が低下しており、精神的・社会的な自立が遅れているなどの指摘がなされています。こうした中、これからの社会で生き抜く力を身に付けさせるため、高等学校教育には社会の一員として求められる学力やコミュニケーション能力をはじめとして、社会人として必要な規範や規律といった意識を身に付けさせるとともに、人間としての在り方生き方を深めさせる教育を充実させることが求められています。

また、本年度から学年進行により実施する新学習指導要領には「生きる力を育む」という理念の下に、基礎的・基本的な知識や技能の習得とともに、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力等を育成する教育を進めることが示されています。東京都教育委員会では平成24年2月に都立高校改革推進計画第一次実施計画を策定し、今後3年間で取り組むべき具体的な都立高校改革の概要を明らかにしました。都立高校改革推進計画は、都民の期待に応えるため、これからの都立高校が様々な課題の解決を図り、今後の展望を明らかにする総合的な計画です。東京都教育庁指導部高等学校教育指導課では、昨年度までの改革に

係る取組を踏まえ、課全体が一丸となって都立高校改革推進計画第一次実施計画の事業を展開しているところであります。本年度、各事業において推進校や先行実施校の指定を行いました。推進校や先行実施校には先進的なまたは先行的な取組を通して全都にその成果を発信していただきます。当課では平成26年度以降の全校実施に向けた諸課題を明らかにするとともに、各学校の実態に合わせた効果的な導入を進めてまいります。変化の激しい時代の要請に応える都立高等学校となるためには、校長を支える副校長の役割は極めて重要でございます。校長と先生方の橋渡しを行う副校長先生は円滑に職務を遂行できますよう互いに情報を共有し、悩みを分かち合いながら御支援いただければ幸いです。当課においても都立高等学校を全力で支えていく所存でございます。引き続き都立高等学校教育の充実・発展に御尽力頂きますようお願い申し上げます。

結びに東京都公立高等学校副校長協会の益々の御発展と皆様の御健勝を心から祈念いたしまして挨拶といたします。

(文責 事務局)

これは、平成25年6月8日(土)に文京区民センターにて行われた、東京都公立高等学校副校長協会総会での東京都教育委員会挨拶の内容です。



東京都公立高等学校長協会

会長 都立墨田川高等学校長 柴田 哲 先生

東京都公立高等学校長協会会長として、協会のホームページに次のことを書かせていただきましたので、このことを挨拶とさせていただきます。

私は、1月の校長研修でJALを再建しました稲盛氏に関するお話を伺いました。非常に私自身、その再建について感銘を覚えたので、その後何冊か稲盛氏の本を読ませていただいております。その中に「ど真剣」という本があります。この本は、私の高校の同級生から薦められた一冊です。

その中で次のことが書いてあります。「会社は誰のものか。従業員みんなが安心して、喜んで働いてくれるような会社にする。さらには広く社会から信頼と尊敬を受けるような立派な会社にする。その結果として素晴らしい業績を実現する。そうすることがひいては会社の価値を高め、株主にとっても望ましいことになるはずです。」とあります。

ではこの文章を、会社を高等学校に、従業員を教職員に、株主を生徒や保護者、都民に、業績を生徒の進路実現や人間的成長などと置き換えてみましょう。

「高等学校は誰のものか。教職員みんなが安心して、喜んで働いてくれる高等学校にする。さらには広く生徒や保護者、都民から信頼と尊敬を受けるような立派な高等学校にする。その結果として素晴らしい生徒の進路実現や人間的成長などを實現する。そうするとひいては高等学校の価値を高め、生徒や保護者、都民にとっても望ましいことになるはずです。」ということです。

また、次のようなことも書かれています。「私たちはよく好きな仕事を見つける」これは学校現場でも同じです。生徒たちに「好きな仕事を見つけなさい」とよく言います。でもそうではなくて、「自分の仕事を好きになる。自分の仕事を好きになる努力をする。それが大事なんで

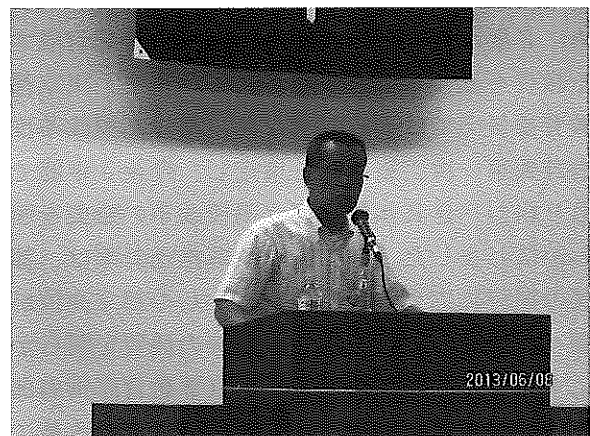
すよ」と書かれています。

私自身、校長になる前、7年間、教頭・副校長とやりました。その中で日比谷の4年間は非常にハードでした。しかし、最先端の仕事をさせていただきましたので、やりがいがありました。ですから頑張ることができたと思います。

先ほどの教育委員会の挨拶にもありましたが、今の都立高校において、副校長先生方の職責は非常に重要なものとなっていると思います。ですから、しっかりと校長先生方を助け、そして先生方、また生徒のための学校づくりに尽力していただきたいと思います。決して無理をして体を壊すことのないようによろしく願いしたいと思います。

(文責 事務局)

これは、平成25年6月8日(土)に文京区民センターにて行われた、東京都公立高等学校副校長協会総会での東京都公立高等学校長協会挨拶の内容です。



「都立高校活性化のための副校長の役割」

講師 前都立荒川商業高等学校長 森田 聖一 先生

私は昭和 52 年に教職の道に入ったわけですが、そのスタートは最終学校になります荒川商業高校です。昭和 52 年に商業科の教員として荒川商業高校に赴任いたしました。その後、芝商業高校、第三商業高校と教員として異動し、平成 10 年から今はなくなりましたが、赤坂高校というところで教頭、その後池袋商業高校に異動しそこで閉校でした。学校を閉じてその後また荒川商業高校に校長で戻りました。つごう 35 年間の教員生活でございました。皆様もそうだと思うのですが、教員になる時に「俺は将来教頭になるぞ、校長になるぞ」という思いで教頭先生になったり、副校長先生になったり、あるいは指導主事になったり、あるいは後に校長になったりという人はまずほとんどいないだろうと思います。何かの縁で何かがきっかけとなって今の皆様があると思います。私は完全にそうでした。

今日は「都立高校活性化のための副校長の役割」という大それた題をいただきまして、私が例えば「こうすると都立高校活性化します」とか「こうやると副校長職を全うできます」というようなウルトラCみたいな話ができるわけがありません。自分自身の教頭時代を振り返っても、満点教頭だったわけでもないし、もちろん校長時代も満点校長だったわけでもありません。自分が見てきたこと、経験してきたこと、こういう風にするとうこういう結果が出た、うまくいったこと、まずかったことなどをお話しさせていただいて、僅かな時間ではありますが、話が終わった時に先生方で「あんなやつでも教頭ができたぞ」「あんなやつでも校長できたんだ」ということで少し気が楽になるような時間になればいいなと思って今回のお話をいただきました。土曜日のお昼過ぎに副校長の先生方がお集まりになる機会なので、先生方に少しでも気が楽に

なるようなお話ができればいいなということで機会をいただきました。改めて御礼申し上げます。

まず、副校長職ということですが、ご存知のとおり、文豪中の文豪、夏目漱石が「坊ちゃん」を明治時代に書きました。夏目漱石は教頭という言葉で「坊ちゃん」の中で使っています。赤シャツという人物です。あれ以来、日本の学校では小中高問わず、教頭という職にはあまり良いイメージが定着していません。例えばテレビドラマを見ても、スカッとした仕事のできるカッコいい教頭なんか絶対出てきません。校長にはへこへこ、教員には威張り散らす、だいたいそういうイメージです。私はいつかドラマや映画を作る機会があったら、カッコいい教頭を描くような作品を作りたいと思っています。

以前、ジャニーズの東山さんが学校の事務長としてももの凄く仕事のできる役柄のテレビドラマがありました。みなさん覚えてらっしゃいますか。事務長として会計的に、あるいは予算的に学校を立て直すという内容です。事務長が学校を立て直すというそんなドラマがありました。少し昔の話ではありますが、事務長がカッコいい役柄のドラマはかつてあったということです。教頭がカッコいいドラマって見たことありますか。だいたいおまけでいつか校長にしてもらおうと思うような雰囲気を感じている、そういう役割で出てくるんです。このイメージのスタートが私は「坊ちゃん」だろうと思っています。夏目漱石の文学的な功績は素晴らしいものであることは言うまでもありませんが、教頭職にとってはあんまりありがたくない本をお書きになったのだと思います。そんなに厚い本ではないですから、少しお時間がある時にそんな思いをもって読み直すのも面白いかもしれません。

それ以来、教頭職というのはあまりイメージ

がよくない。もしかすると私たち日本の全体の中でそういうところがあるかもしれないので、私たちはそういう目で見られているんだということを自覚して仕事をする必要もあるかと思えます。私は、「やっぱり教頭か、やっぱり副校長か」と思われたいような心構えが必要なのかなと常日頃思っていました。最初から副校長になろうと思ってなった人はあまりいないと思いますが、結果として今なっているわけですから、なった以上、マイナスイメージで見られているということを分かりつつ、前向きに全力で日々の職務を遂行する、そんな心構えが当然必要だろうと思っていますし、自分はなんとなくそういうイメージをもって仕事についておりました。

自分自身の恥をさらすようではありますが、私が当時の教頭試験を受けようと真面目に思ったのは、当然校長先生の推薦を受けてそういう試験を受けるわけですが、たまたま当時私が所属していた学校の校長先生は、教頭試験あるいは校長試験の受験者が複数人いるとたぶん事務的に間違えないようにするために受験番号の若い人が推薦順位の高い人のように事務処理をしていました。たまたまその当時は教頭試験が8月のお盆あけの時期だったので、「そんな時にいつも学校来ているんだから、お前教頭試験受ける」という話が校長先生からありました。「いやいや私は教頭になりたくて教員になったわけではありません」と返事をすると、そんなことどうでもいいんだと、とにかく受けてくれ、休まないでくれ、勉強しなくていいから試験の日だけ行ってくれと言われました。野球の送りバントと同じです。2人受けて1人受からせる、3人受けて1人受からせる、さらに4人受けて1人受からせる。その当時はどんな部署と相談するんだか知りませんが、5人も6人も受けていればこれだけ受けさせているんだから1人ぐらい受からせろと言いつかつたのかもしれませんが。だからお前悪いけど送りバント役、受からなくていい、勉強しなくていいから受けてくれ、その後たくさん御馳走してやるからというようなお約束で受け始めました。3回か4回ぐらい、御馳走になることが楽しくて試験を受けていました。するとある時、先ほどのお約束通り、毎年推薦順位というのがあるんですが、当日会場に行けばすぐ分かるんです。自分より前にいる人の方

が推薦順位が高いんです。ある時に自分より後ろにいた人が私より前にいたんです。当然その年にその方は合格したんですけれども、その時にあの人が教頭をやるんなら自分がやった方がいいと思ったのが、真面目に受けようと思った時です。4回目か5回目の試験の時にそういう風に思いました。ですから動機が不純でした。あいつがなるより俺がなった方がいいと、あいつがなるくらいなら…という気持ちが自分が真剣に受けようと思ったきっかけであります。もちろんその方は教頭先生になって校長先生になって退職されましたけど、やっぱり思ったとおりでした。

ですから皆様も色んな状況の中でこういう試験を受けたと思うんですが、せっかくなかった以上は学校の代表、まさに学校を切り盛りしているんだという自信をもってやっていただければ、校長も助かり、もちろん最終的には子供たちが一番助かると、喜んでいるだろうと思います。そのつもりできっかけを問わず現在の仕事に責任を持って、積極的に元気に取り組んでいただければと思っています。

私は生意気に学校づくりうんぬんというような大それたことを、考えてはいても実際は実現できませんでした。たまたま先ほどお話ししたように校長として赴任した学校が自分の教員生活のスタートの学校でありました。当時担任もしておりましたので、3年間担任した卒業生たちがいるわけです。偶然なんですけど、ちょうどその子たちが親となってまた子どもを荒川商業に入学させるというケースが非常に多い学校でした。地域性が強い学校ですので、私が担任したクラスの生徒の子供だけでも、10人以上は親子そろって荒川商業の卒業生と巣立っていきました。当然親はPTA役員であつたり、同窓会であつたりという形で荒川商業に非常に深くかわっています。私が校長として在職している8年間で、5年間はPTA会長が私のクラスの元生徒であります。そんなことで非常にやりやすかったこともあります。縁の深い人たちと一緒に仕事をしたものですから、素晴らしい学校づくりうんぬんということはできなかったんですが、自分のやりたいということはやらせてもらったのかなという気はしています。これはたまたま私の個人的なそういう環境の中でという

ことかもしれませんけれども、どこの学校へ行っても自分の心がけ一つでできるのかなとも思っています。

その一つはウルトラ C ではありませんが、校長先生の中にもこのタイプの方いますけれども、PTA が大嫌い、あんなものと付き合うからおかしなことになるんだと、PTA なんて絶対嫌いだという校長先生がいます。例えば PTA の総会は真面目に出ます。その後には懇親会とかがありますが、お前出ろ、俺帰るからという校長先生もいます。私は自分が副校長の時にその姿を見て、本来 PTA とか同窓会というのは敵であるはずがないし、最大のサポーターであると私は思っていました。味方であると。何かあった時に一番守ってくれるのは PTA であり、あるいは同窓会である。まさに学校のサポーターであります。ですから私は副校長、あるいは校長時代も含めて PTA や同窓会は大切にしましたし、真摯に前向きに接してまいりました。後に振り返ってみるとその人たちに非常に助けられた思いが強くなります。中にはそうでない対応をしている方、副校長でもそうですし、校長でもそうです。そういう方がいますけれども、実にもったいないなという風に思っています。私たちの最大の味方であります。色々難しい場面もあるかもしれないですけども、最大のサポーターであることに間違いないと思います。

ここからは私たちが日ごろから気を付けなければいけないこと、そして私がうまくいったことの中からいくつかお話ししたいと思います。みなさん、副校長ですの、部下という言葉が適切かどうか分かりませんが、教員が各職場にたくさんいます。今は色々職制が新しくなって、主幹がいて、主任教諭がいて、教諭がいて、指導教諭までいます。それから実習助手がいて、色々な職制の方がいらっしゃいます。いわゆる部下がたくさんいます。その人たちがたまたま何かの昇任試験を受けに行くというケースがよくあるかと思えます。その時に私が成功した例です。今は 100 円ショップなどがどこにでも出来てお手軽になったように思えます。100 円ショップで売っているかどうか分かりませんが、私が昔の古道具屋で何千円、もしかすると何万円に見えるようなカフス、あるいはネクタイピンを山積みで売っているところがあっ

て、私はそこで暇な時に 10 個くらい買っておくんです。自分でするわけではないんですけども、引出しに入れておくんです。するといわゆる部下が昇任試験を受けに行くときに、ちょっとお前、こんな大切な試験を受ける日にワイシャツ、ボタンでいくのかと聞くんです。実はその前に自分がしている高いカフスを外しておくんです。外してその 100 円で買ってきた安いカフスを自分で身に付けておくんです。それでカフスを見せて、これやるからこれをしていけて渡すんです。感激してますよ。自分のしているカフスをまあ 100 円のもので、大事なのは取っておいてあるんですけど。本当に感激して喜んでいくんです。最初から言っちゃうと相手がその手口知ってたらもう全く何の役にも立ちませんけども、自分が身につけているカフスをくれる人なんてまずいませんので。ここで皆さんに話をして同じことをすると、あいつやったなということになっちゃうかもしれませんけどね。人をごまかすということではないんですけども、人を元気にさせるという意味ではもの凄くいい方法だと思います。実はこれのヒントになったのは私の恩師が教え子が教員になる、その時の教員採用試験を受けに行くときに、これから行ってきますって挨拶に母校に寄ったんですね。私の恩師でもあり、これから試験を受けに行く生徒の恩師でもあるわけです。その先生はネクタイを外して、お前そんなヨレヨレのネクタイじゃ相手に失礼だろう。教壇というのは役者の舞台なんだから、最高のものをしていけと、その時に恩師はその生徒にそういう話をしていたのですが、横で聞いていてこれは私にも言えることだなと、役者の舞台なんだから最高のものをして舞台の上に乗らなきゃいけないんだよ、教壇に上がらなきゃいけないんだよということを私にも教えてくれたのかなと思いました。ネクタイを外して、それはそれは本当に高いネクタイを渡していました。その光景を見て、いつか使えるかもしれないと思ってカフスでやってみたところ本当に感激していました。本当に喜んでくれたのは今思い出すと 3 人だけです。実は何十回もやっているんですけども、本当に上手くいったのは 3 人くらいで、その 3 人は受かりました。なんだこんなのという顔をした人は落ちました。

それと前後してしまいますが、人の前にいる、私たちはどうしても人に見られている仕事ですよ。先ほど赤シャツの話をしましたが、生徒、教員、もちろん保護者や学校関係者とも教頭先生・副校長先生がかかわることって非常に多いと思うので、常に必ず人から見られているという意識は必要だと思います。私はさっきネクタイの話をしましたが、着ているもの、それこそ歩き方、その人がどんな表情をしているか、どんなことを喋るか、全て常に見られています。ですから、最低限私たちができることは少なくともきちんとしている必要はあるのであろうと思います。特に私たちは高等学校ですからそこその年齢の生徒達と接するわけで、半分くらいは女子生徒です。特に女子生徒はファッションに興味を持っている年代だろうと思いますから、そこにこれでもかという見苦しい姿を現したとき、もうそれだけで信頼関係というかお話をする以前の段階でシャットアウトされてしまうのかなという気がしました。そういう場面が何度もありました。自分自身の経験を踏まえて言います。自分が担任をしている時に、朝礼台で何かを喋る時に自分では何も気づかずに喋っていた。それでその後教室に戻ってホームルームの時に、自分のクラスの女子生徒に先生本当にみっともない、顔から火が出る思いだったと言われました。何を言っているんだろうと思っていたら、私の靴下のかかとに穴が開いていました。朝礼台に上がる時には分からなかったんですが、後ろ向きになって台から降りる時に靴下にまるで模様のように大きく2つ穴が開いていたんです。周りはみんな笑っていたんですけど、自分のクラスの女の子はそれを見て恥ずかしかったと。まるで自分が笑われているようだった。全く自分では気がつきませんでしたけど、そんな細かいことでありますが、子供たちはそんなところも見ているということです。私の勤務した学校でそういうことに無頓着な方がいまして、生徒からあるいは保護者から苦情が来ました。見苦しすぎるという苦情です。珍しいケースです。髪の毛は輪ゴムで縛り、先生色々意見があるからもう少しちゃんとしようというところまで笑うと前歯がない、保護者から苦情が来るくらい珍しいケースではありますが、ちょっと極端な例ではありますが、少なくとも人

から見られている。だからきちっと身ざれいにしなくてはいけないということは間違いなく私たちの義務であります。よく教育はミッションとパッションが必要だという人がいますけど、私はファッションまでいなくていいからせめて格好、見た目はとても大事だと思います。以前、丸山明宏がテレビの番組で出演者に、「何あなたその格好、何もかも捨てた体育の先生みたいな格好」という言葉を使ったんです。そういう目で見ているんだと思いました。時々この仕事には不向きだと思われるような服装をしている人がいますよね。「せめて人の前に出るんだから少しぐらいは気を使おうよ」というのは私たちも最低限の心がけだろうと思っています。あまり偉そうなことは言えませんが、子供たちがそういう目で見ているということを知っている必要があろうかと思います。

それから上手くいった例です。といっても皆さん日頃からそうされていると思いますが、校長先生と毎日打合せをします。あるいは、色々な人と色々な打合せをします。その時に当たり前ではありますが、メモを取ります。色んなメモの取り方があります。付箋を使う人、全て何もかもノートで済ませる人、メモ用紙を綴じて使う人、これはそれぞれ自分の得意なやり方だと思います。私は時系列で1冊のノートで済ませました。そうするとだいたいそれには全部書いてある。さらにそのメモしたことは必ずA3の紙で1か月が見れるようにした予定表に書き写していました。とにかく教頭や副校長は仕事量が多い、多方面に渡って仕事量が多いですから、忘れちゃいけないことを忘れちゃうんですね。昔テレビのCMで「私はこれ1冊で済ましているよ。全部これ1冊だ」みたいな広告がありましたけれども、小さな1冊で済ませられればいいんですけども、私の場合はたまたま本当に用事が多すぎて、小さな手帳では書ききれないので、私はA3の紙で1日分にしたら大したスペースはないんですけども、それで完全に1か月の予定が見れるようにしていました。メモを取る、必ず予定表に書き込む。今タイムズでしたっけ？ この時期、土曜日曜日、そして月曜日に学校に行くと真っ赤になってダーって何十個も来ていますよね。ああいう風にたくさんくると何が大事で何が

大事じゃないかよく分かんなくなっちゃいます。あれ見るだけでも1時間でも2時間でもかかってしまいますよね。あの中でこれ大事なもののだから後で見直そうと思うと、絶対に忘れるんですよ。「あっ、これ大事だ」けど、締切がしばらく先のものと後で見ようとなります。私にとって後で見るというのはもう見ないということです。だから何かを忘れてしまう、大きなミスをしてしまうということになりかねないので、私は大事なものを見た瞬間に、1年分の予定表がありますから、そこに何月何日、何の締め切りというのをきちんと書いていました。特に私はズボラなものですから、後でやるというのは全くダメで、すぐやる、すぐメモしておかないと私には後での整理が出来ないんです。メモを取ったら予定表に必ず書く。1年間の予定がありますよね。例えば人事についていつ頃異動の発表があって、いつ頃何があるというような文書がかなり早い時期に来ているんですよ。1学期ぐらいにもう来ているんですよ。そんなものすっかり忘れちゃうんですよ。だいたいいつぐらい程度のことでもう見ない、そうすると12月ごろになって、あるいは1月頃になって「何か出さなきゃいけないんだよね」ということが副校長会など話題になる時に、私何もやってないという経験がある方、多いと思うんですけども、それはたぶんスケジュールの立て方の失敗であると思います。それに付随してですが、仕事というのは早く美しく。これはのんびりやっていけば誰だって綺麗にできるんです。例えば、校長先生から頼まれた、PTAから頼まれた、同窓会から頼まれた、色々副校長は本当に自分は小間使いじゃないよと反論したいぐらい色んなことを頼まれるだろうと思います。そのどうせやらなきゃいけないことですから早く美しく。早いけど汚い仕事というのはこれはちょっと喜ばれませんからね。ですから、仕事は早く美しくです。美しく早くでもいいと思いますが、まずは早さが要求されると思います。これは当然予定表の作り方にもよると思いますが、仕事は早く美しく。

それからONとOFFの切り替えを完全にやることは自分にとって必要でありました。仕事は100%の集中力をもって、偉そうなことは言えないですが、自分は今ONである、自分は今仕事

中だと切り替える。例えばこれは副校長の場合には1日学校にいる時間だけでも平均的に10時間くらいいるんでしょうかね。10時間くらい学校にいる、あるいはもっと長く学校にいらっしゃる方も多いと思います。この10時間の中のONとOFFの切り替えが大事というように思います。1日ずっとONということも疲れてしまいますし、現実問題なかなか難しいだろうと思います。ONとOFFの切り替えは毎日やっているとそんなに大変なことではないかもしれません。

次にお金についてですが、副校長の職に就いていると金一封、お祝いなどで、お金を使うケースが非常に多いと思います。私がやっていたことは、朝、財布の中に一定額を入れておくようにしました。財布の中にいくら入っているか分からないといくら使ったか分からないです。お金は本当に使い方だろうと思います。ムダ金を使って恨まれる。せっかくみんなに御馳走してちっとも喜ばれなかったり、あるいはささいなお金だけでも感謝されたりすることもあるので、先ほどのカフスではありませんけども、お金の使い方というのはとても大事だなと思います。だから自分のお金の出し入れに関してもある程度シビアというかポリシーがなきゃいけないのかなと思って、私はそんなやり方をしていました。

それから日ごろの心構えということも含めてですが、副校長に急に挨拶であったり話をして欲しいというような依頼がありますよね。副校長がお話をする機会は非常に多いと思うのですが、一番いい話はその話が全くの部外者にもよく理解できるということ、これが一つのものさしだそうでございます。学校の場合は保護者やPTAは全くの部外者ではありませんので関係者かもしれません。全くの部外者が効いてもよく分かるように話をすること、これを日頃から身につけておく必要があると思います。今月は6月ですから、6月の20何日に、この中には職務論文を出さなきゃいけない方いらっしゃると思いますよね。あの職務論文を読む先輩の校長先生だったり、あるいは先輩の副校長先生だったり、専門家に見てもらうのも悪いものではないのですが、あの論文みたいなものをどういう人に読んでもらってコメントをもらうのが一番いいのか。

私が先輩に言われたのは結婚されている方であれば、専門家ではなくパートナーに読んでもらう。全くの素人です。素人がその職務論文を読んで十分理解できるようならこれは素晴らしい。読んで、何が書いてあるか分からないというのはこれはダメ。業界じゃない人に読んでもらうというのは一つの方法なのだと思います。もちろん字が綺麗というのは最低限でありますけれども、その時に日頃から考えていることが本当に出ていないと人にはなかなか伝わらないと思っています。職務論文というのは非常に限定的な内容の文章ではありますが、日頃から考えている。これは素人が見たとき、聞いた時に分かりやすいと申しましたが、日頃から自分が本当に考えていることでないと非常に伝わりにくい。あるいは、話をした時に相手に伝わりづらいと思います。ずいぶん前の話ですが、文部省とのやり取りの時に私は質問するのも恥ずかしかったのですが、どこにでも出てくる、学習指導要領にも出てくるし、東京都の教育目標のところにも出てくるのでしょうか。「基礎・基本の充実」どこかの学校経営計画でも出てくる。校長先生もお使いになっている。そこで「基礎と基本はどう違うんですか」と質問してみる。「同じようなものだ」と必ず言います。同じようなものなら1個でいいじゃないか。基礎でいい、基本でいい。なぜ基礎・基本なのか文部科学省で質問したんです。回答は一緒でした。「同じようなものだ」。同じようなもの、なんで2つ言うんだよ。辞書を引くと「基礎(基本)」「基本(基礎)」とごまかしていますが、実は基礎と基本というのは私は全く違うものだと思います。当然違うものだから基礎・基本と両方使うんだと思います。基礎というのはまさに全ての基礎であります。例えば、建築で言えば洋風の建築、あるいは和風の構築。どんな建物でも基礎は同じです。スポーツで言ったら走る、あるいは投げる、飛ぶ、こんな基礎体力がどんなスポーツをやるについても基礎であります。基本というのは、洋風建築をやろうと思ったら、洋風の基本があります。和風は和風の基本があります。スポーツでもそうです。野球やるのとサッカーやるのではそれぞれの基本が違うだろうと思います。基礎は全て共通のもの。基本はその上に立つそれぞれの基本がある。だから、

基礎と基本はもしかすると縦と横の関係、そういうようなイメージなんだろうと思っています。ただ、この使い分けがよく分かっていないでそのまま使うと相手に非常に伝わりづらいです。自分がよく分かってないと。素人の方がそういうことを感じるので、私は部外者との付き合いというのは非常に大切だろうと思います。学習指導要領ってこれ何？って聞かれたり、東京都の教育目標って何？って聞かれたり、当然そういうことを部外者は聞いてきたりします。その時に自分が明確な答え、あるいは自分のきちんとした定位置がないとすぐに答えができないし、答えが曖昧になるし、相手にすぐごまかしていることが伝わってしまうというのが難しいことだろうと思います。

同じようなことで目的と目標というのも使われています。目的というのはまさに的であります。例えば弓矢をやる時に的がいっぱいあったらどの的を射っていいか分からないですよ。目標というのは標でありますから、的に到達するための標、これはいくつあってもいいわけで、今週の目標、来週の目標、再来週の目標。これは的に向かっての道標であります。目的は1つ、目標はそれに迫り着くための一つの目安です。これはしっかり使い分けないと、非常に相手には分かりづらい。特に子供たちの前、あるいは部外者の人たちに何か話をする時でもめっちゃくちゃになる。小学校の頃に今週の目的、来週の目的なんて言葉なかったらだろうと思います。たぶん、今週の目標、来週の目標だったと思います。この目的と目標の使い方であるとか、基礎と基本の使い方であるとか、こういったところも含めて日ごろからの自分の心構え。これは何でこんな時にこんな言葉を使うんだろう、何で今どきにこんな話題が出てきたんだらうという自分なりの目ごろのクエスションマークの持ち方やアンテナを高くしておくというのはとても大切なことだと思います。

つい最近、センター入試をやめようかという話がちょっと大きく出てきています。そうすると当然のように私たちの周りを取り巻く人はセンター入試ってだいたい何？って聞いてきます。受けたことない人は分かりませんよね。センター入試っていつ頃からやっているの？センター入試以前は何試験だった？共通1次でしたよね。

そんなことも含めて常にアンテナを高くして、少なくとも業界の話題に関しては誰にでも説明が出来るような心構えが必要だろうと思います。日ごろからそういう心構えがないと、「センター入試って何なんでしょうね」なんて我々が発言したら、信用関係、信頼関係を失ってしまうような例の一つかもしれません。

それから、似たようなことではありますが、日ごろからいつも自分の頭の中の引出しをたくさん持っているということが必要だろうと思います。日ごろの心がけの一つではありますが、例えば新聞を読むのただ新聞を読むのではなくて、もしこのことについて自分が質問をされたらどういう風に答えようかというような姿勢で新聞を読むとだいぶ違うと思います。その方が頭にも入ってきますし、積極的に新聞の記事そのものにかかわっていけるとと思います。当然メモが必要であればメモを取ることも必要だと思います。

先ほど1つ言い忘れました。用品の輪ゴムで髪の毛を縛っている人がいると言いましたけれども、私たちが仕事をする時に、いわゆる事務用品というのは売るほどありますよね。これは大切に使わなきゃいけないんですが、下手すると特に副校長先生の机の上で山積みになっていたり、引出しを開けると引出しが開かないくらいボールペンが入っていたり、中にはボールペンが縦横になっちゃって引出しが二度と開かなくなるようなそういうケースも時々見受けられます。しかし、事務用品は毎日使うものですから、お金をかけて自分が一番使いやすいものを使うべきだろうと思います。用品で済ますことは出来ますけれども、毎日使うものですから自分が一番信頼でき、愛着のわいているものを使うべきなんだと思います。学校の事務用品でボールペンでも何でもありますが、ボールペンのインクが出なければ捨てて、次のものを出してなんてやる人もいますけど、私は仕事がそういうところに何らかの形で影響が出てくるのかなと思います。メモ用紙一つでもきちんとメモを取れる。私も今日そうなんですが、よく裏側を使えと言われ、裏側を使って人に渡すと、どっちが正しいんだかよく分かんなくなっちゃって、結局どうでもいいもんが一人歩きしちゃって、何だか訳わからなくなる時ありますよ

ね。裏があるのであれば、私だったら裏に大きく×が付いているとか、これは余計なことですけども。事務用品はベストのものを使うべきだろうと思います。これは相手からの見た目も含めてです。例えば鉛筆を使うにしても、何回も削ってないような木の部分が真っ黒になっちゃっている鉛筆でメモをしている。それを生徒が見る時にだらしのない先生だなという風に思われてしまうことがあるので、事務用品も含めて仕事の仕方というのは非常に大きく影響するという風に思っています。

それから最後にいつも気を付けていなければいけないと思うのは、副校長先生が明るく人と接しているということだろうと思います。遠くから見ても副校長と誰かが怒鳴り合いをしているのを見るだけで職員もビリビリするし、もちろん生徒はもっとビックリしちゃう。よくあるんですよね、怒鳴り合い。私もけっこう怒鳴っていたので人に偉そうには言えないんですが、副校長先生と誰かが怒鳴り合いしている。もちろん校長と副校長が怒鳴り合いしていたらこれは職員なんてけっこうビリビリしちゃうんですけども、常に副校長先生は明るく「あっ、楽しそうな話をしているな」というのを遠くから見ただけでも雰囲気が非常によくなります。学校の中の雰囲気もよくなるし、色んな意味で雰囲気が良くなる。明るさというのはとっても大事だと思います。もしも何か叱らなければならないような場合には校長室であったり、あるいはどこかの小部屋であったり、そういったところで1対1で注意をするという心がけが必要だろうと思います。遠くから誰もが見てるところで副校長先生が明るければ、職員に必ずいい影響が出てくると思います。偉そうな学校経営計画、びっしり書いてあって、これもやるぞ、あれもやるぞと書いてありますが、言うは易しだろうと思います。そんな簡単に出来るんだったら誰だって素晴らしい学校が作れる、しかし現実にはなかなか難しい。一言でどういう学校にしたいかと聞かれたら、私は「明るく、仲よく、元気のよい職場にしたいし学校にしたい」と言います。小学校の来週目標のようではありますが、実はすごく難しいことで、みなさんが今勤める学校は明るく仲よく元気のいい職場ですか？ はい！なんて手を挙げられる人

なんてほとんどいいないと思いますよ。私もずっと長年、明るく仲よく元気のいい職場を作りたいんだと言ってきました。子どもたちには「面倒見のいい学校」を作りたいんだと。必ず職員は手を挙げて、面倒見のいい学校というのは具体的にどういう学校ですかと必ず質問がきます。日ごろからこうきたらこう言うぞなんて考えていますから、面倒見のいい学校というのは具体的に言えば、生徒と長い時間一緒にいてくれる学校ということです。これは部活動でもいいし、補習でもいいし、もし放課後暇な先生が学校の中ぶらぶら歩いていれば、暇そうな生徒がぶらぶらしていたり、教室にいればそこに入っていて、世間話をしているうちに生徒たち本人が悩みを言うことがあるかもしれない、今考えている夢を語るかもしれない。そんなところから信頼関係ができていくので、面倒見のいい学校というのは生徒と長い時間一緒にいる学校。そんなことを続けながら、明るく仲よく元気のいい職場あるいは学校を作っていきたいんだというようなことを本当にいつもいつも言っていたので、そのうち同じことを何十回、何百回言っていけば色々伝わっていくのかなと思います。学校経営計画というのは4月・5月くらいに広まりますよね。先生方に自分の学校の学校経営計画を全部お話してみてくださいってお願いしてみてください。たぶん全部言える人は少ないですよね。本当にみんなが共有しているかというとなかなかそういうこともなさそうです。私

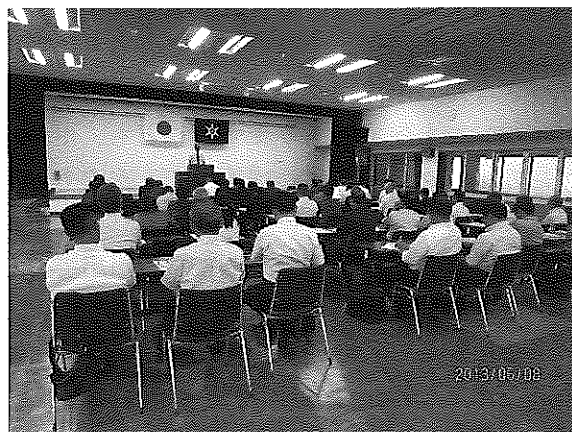
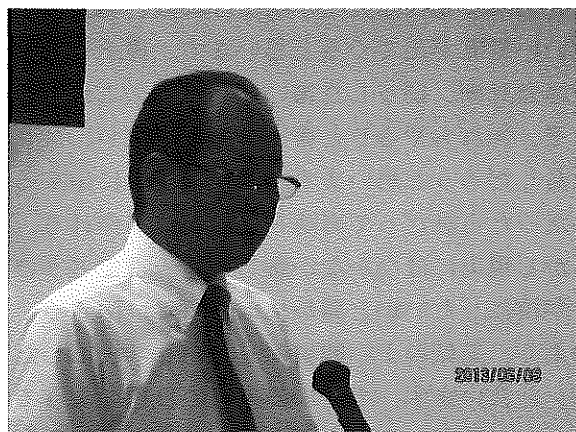
たちは本当にこういう学校が作りたいということの日ごろから明るい雰囲気の中で伝えていくことが大事だと思います。副校長は特にそういうことが大事な職務なのかなと思っています。

いずれにしても、学校の中で一番大切なのは私は副校長だろうと思っています。校長が学校経営で副校長が学校運営だなんていう言葉もありますが、私は違うと思っています。校長と副校長は共同経営者だと思っています。「片方が経営で片方が運営だよ」、「経営者の言うとおり運営すればいいんだ」なんて思っていたら、これは副校長職としてはまだまだ不足なのかなと思います。校長と一緒に自分が学校を切り盛りしているんだと、あるいは方向性も校長と一緒に定めているんだというような意識をもって明るく職務を遂行すれば必ずしや明るい学校になるだろうと思います。それが繋がって都立高校の活性化に繋がっていくだろうと思います。いずれにしても、副校長職が一番大切な仕事、これは赤シャツの時代から変わってないと自信をもって自身の仕事に取り組んでいただければありがたいなと思います。

ご清聴ありがとうございました。

(文責 事務局)

これは、平成25年6月8日(土)に文京区民センターにて行われた、東京都公立高等学校副校長協会総会での講演の内容です。



「今だから話せること」

講師 元つばさ総合高等学校長 山上 隆男 先生

ただいまご紹介いただきました通り、私はちょうど西暦 2000 年（平成 12 年）に民間人校長導入が始まったときに、第 1 号として就任いたしました。日産自動車で 31 年間勤め、実は技術屋でして、エンジン開発部門にいました。その後、日産の開発部門全体を束ねる設計管理部という部署に移りました。当時の日産は、社員 5 万 5 千人のうち開発部門だけで 9 千 5 百人位いて、それを束ねる仕事をやっていました。そこで、どの企業も一生懸命やっていた人材育成を兼ねた改善活動を任せられ、やがて日産全社の責任者になり、それで品質経営や人材育成との関わりができていったのです。

その 7～8 年後に東京都が日本で初めてトップを切って、民間人校長を導入したいということで都教委は東京商工会議所に推薦依頼をしたのです。現在の東京都はそういう推薦制と自分で手を上げる一般公募制を併用していますが、当時は推薦だけでした。何人いたかは分かりませんが、6 人位だったのではないのでしょうか。1 名をつばさ総合の開設準備室に入れようとしたのですけれども、たまたまもう 1 人、日立出身の方と 2 人をどちらも落とすには忍びないということで、2 人採用されたようです。当時は文科省も中教審の答申で少し教育界に新しい刺激を与えたい、ついでには民間のマネジメントあるいはリーダーシップといったものを導入することと、校長先生に刺激を与えようという目的で導入したわけです。その後、皆様もご承知だと思いますが、徐々に採用する都道府県が増えて、数年後から現在に至るまで、だいたい毎年全国で民間人校長が 100 名前後活躍しています。その後、2006 年には教頭も導入しようとなりました。ただ私から見ると、民間人が教頭になる方が難しいと思います。というのは、教頭・副

校長先生たちは一番大変な仕事であり、教育課程も含めて細かいことまで何でも知ってないといけないですし、上と下のサンドイッチで大変な思いもされている。そこに、民間人がボンといても私は難しいと思います。制度があるのは構わないのですが、案の定と言いますか、なかなか教頭・副校長の方はそんなに増えていないです。全国で 50 人前後です。個人的にはそちらはあまり必要ないのではないかなと思っています。

今年の 9 月に私のところに読売新聞大阪支局の記者から電話取材させてくれと依頼があり、何を?と聞いたら、「初期の民間人校長から民間人校長制度についてお聞かせいただきたいので」ということで、30 分位話をさせてもらいました。どんな記事を書くのかと聞いたら、「大阪で橋下市長が民間人校長を大量に導入したいということで動いていますが、その中にちょっとまずい人が入ってしまって、セクハラとかで採用されて間もなくやめた人が出て、それも含めて民間人校長についての特集を組みたい」とのことでした。色々なことをお話したのですが、結果的に出た記事は私が喋った話では全然なくて、皆さんもご覧になったと思いますが、全国の都道府県と政令指定都市の教育委員会のほとんどが 1 カ所を除いて全て何らかの形で民間人校長を採用しているので、今後についてどう思うかというアンケート結果が載っていました。その中で 67 の都道府県あるいは政令指定都市の中で半分以上の 37 の教育委員会が消極的な姿勢であるという記事でした。私はちょっとショックを受けたのですが、どうしてそういうことになってしまうのかなと、いろいろ考えてみました。私は大阪ほどたくさん入れることはないと思いますが、都道府県ごとに数名くらいは

いた方がいいと思います。というのは、世の中にはいろいろな社会があって、学校社会や企業社会あるいは一般の公務員の社会、様々な社会があって成立しているわけだから、その多くの世界の考え方とか価値観とかノウハウなどが交流されてしかるべきなのです。ただ、問題はこういう消極的な教育委員会があるというのは、ある意味では、民間人の校長や教頭を活用するといいいながら、うまく活用できてないからではと思うのです。そこが非常に大きな問題だと思います。

その最大の原因は、教育委員会や教員出身の校長が考える学校経営と、民間から採用される方の学校経営、いわゆる経営というものに対する概念がずれているからではないかと思うのです。私自身がびっくりしたのですから。私も学校経営を任せると聞いて、校長になったわけですが、経営権に対して学校長の権限があまりにも狭かった。当時いろいろな所で話しましたが、校長はいわゆる雇われマダムみたいだなと…。経営とは、その組織の目的や目標を達成するために、人・モノ・金という、3M を駆使して組織目標を達成することです。ところが、人であれば人事権、それからモノは施設・設備やその会社にある色々なシステム、装置などを指します。もう1つの金は予算権、執行権です。学校の校長は非常に大事な予算権、人事権の制約が極めて大きい。教育委員会がほとんど仕切っていて、そういうものへの校長の自由度が少ない。その後、お金は少し裁量権が広がりしましたが、当時は費目別に予算申請を出して、その費目の中でオーバーしたらダメ。費目毎に予算枠の中でしか使えないから、費目ごとに全部足すとけっこう余ります。それを年度末に回収されてしまいます。教育委員会は、それをいろいろなことに組み替えて使っているわけですし、これはおかしいではないかと思ったものです。そんなこんながあって、ずいぶん経営権のとらえ方の違いや、人もお金も裏表があるのだなとわかりました。この辺はあまり暴露すると怒られそうですから、この位にしておきます。さきほども触れたように、都教委は各学校の余剰金とか、あるいは融通の利くお金を持っていたわけです。そこで、時期をみて担当部署と調整して、必要

事項を申請すれば追加の予算が付くこともありました。民間人校長第1号の私を物心両面から何らかの形で支えるため、ご配慮いただいた部分もあったのでしょうね。その後、特別予算がつく重点支援校制度ができたのでよかったです。

こうした支援もありまして、いい経験をさせていただきました。私は定年退職して7年目に入っていますが、今になって考えると私が民間人校長としてやってこられたのは、やはりいい先生方を集められたからだと思います。校長一人がいくら頑張っても子供に直接教育はできないわけですから、先生方にやってもらわないといけない。つまり、校長がいろいろなことを要望した場合、先生がその通り動いてくれないとダメじゃないですか。あるいは、民間人校長がなんとか自分が思った通りの子供への直接的な教育や、何か新しいことをやろうとしたら、自分自身が講師などを連れてきたり、仕組みを作らないとできないですよ。先生方に頼んで、嫌だと言われたらできないでしょ。あるいは、嫌だと口で言わなくても、腹の中でそう思った人はやらない、動かないから、何もできない。杉並区の民間人中学校長の藤原さんとかその後任の方も直接的に新しいことをやったんですよ。「校長が変われば学校が変わる」とある校長先生がいて有名になりましたけど、また「校長が変われば学校は戻る」こともありますよね。だから、教育システムをきちんと繋いでいくには、先生方がちゃんと受け継いで実行してくれないといけない。私の後任のつばさの校長は幸いにも私の考え方ややったことをうまく引き継いでくれ、さらに発展させてくれています。そうした繋がりができない限り、なかなか残っていかない。ましてや、教育委員会が言っているように他の学校や他の校長先生に民間人のノウハウや考え方を広めて学校改革に生かしてもらうというのは、なかなか難しいことです。なぜなら、副校長や校長になる人はそれなりの経験と教育観などいろいろとお持ちで、それをやりたいわけですよ。そういう立場になったら自分流を実行したいわけです。それを安易に「民間人校長がいいことやったから、その通りに真似したら」と言っても簡単にはいかない。

民間人校長制度低迷のもう一つの要因は、民

間人校長の受け入れ研修があまりよろしくないように思います。私は開設準備担当校長から始めることができ、担当アドバイザーがいたのでずいぶん勉強できました。しかし、一般的には、全国を見ても採用後長いところで半年、短いところで1~2か月でパッと4月1日を迎えて、校長業務を始めることが多いのです。先ほど言いましたが、価値観や育ってきた環境が違うのだから、その学校社会と企業社会の違いの情報をしっかり教えてあげなかったら、問題が起きやすくなってしまいます。先生方といろいろな所ですれ違ったり衝突したりしてしまうのです。それはある意味でしかたがない。先生が悪いとか、民間人校長が悪いのではなく、育ってきた世界が違う、いろいろな考え方や経験が違うのだからぶつかったり、すれ違ったりは当たり前だから、それをしっかり民間人校長に教えておかないと非常に大変なのです。ましてや、私の場合、東京都の高校改革、教育改革の真っ只中の時期だったので、大変でした。だから、よくいに先生方とのぶつかり合いもありました。つまり、教育経営をちゃんとやるにはそれなりの期間が必要なのと、教える方が両方の世界を知っている方が教えないと難しいと思います。着任後、私のところに全国の民間人校長に採用された方がずいぶんお見えになり、「学校社会ってどうなんですか」と聞かれました。本来は私のところに来なくても理解できないとおかしいわけです。教育委員会がしっかり教えるべきなのに、教育委員会にもたぶんその両方の違いを明確に解説できる人が少ないのかもしれませんが。経営者や管理職の養成といっても、公務員と企業では全然違いますね。だから、民間人校長研修が非常に不十分だと思っています。その結果、民間人校長の中には定年前に辞めたり、あるいは当時不幸にして広島では自殺された方もいた。あの後、文科省が慌てて民間人校長の代表を集めて、私も含めて7~8名でしたか、当時の文部科学副大臣が同席して、その件を含めていろいろ意見交換したことがありました。それくらい、民間人校長受け入れ研修というのは大変大事だと思っています。2つの社会の違いをよく知らないで来て、ぶつかることがあまりに多いとお互いに不幸なのです。

国旗・国歌問題についても何でこんなに騒がれるのかがとっても不思議でした。国旗・国歌が太平洋戦争を引き起こしたわけではないのに…。国旗・国歌を反対するなら、国旗を変えろとか国歌を変える運動をやったらどうですかと、強く反対する先生に言いました。国旗・国歌が問題なのではなく、当時の政権・軍部が誤った権限の使い方をして戦争に突っ走ったのがいけないのでしょうと…。なぜ、日本が戦争に突っ走ってしまったのかという歴史をしっかりと教育すべきなのに、それを国旗・国歌のせいにした、国旗・国歌を象徴的にとらえて反対するのはおかしいのではないかということをごんざんやりあいました。職務命令を出すことになって、毎回職員会議で同じ論議をすることがありました。他の課題やテーマが進まなくて困ったので、その件については次から時間を制限することにしたこともありました。私の言い方の上げ足を取ったり、憲法論議へと拡大されたり、といろいろ大変でした。今になって思うと、民間人校長教育でそういうことも課題だったのではないかなと思います。

いずれにしても、なんとかやれたのは先生方のおかげです。当時は、新設校を立ち上げたときには3年間、完成年度までは校長が来て欲しい先生を指名できる権限がありました。これはいいなと思ったのですが、ところがそう簡単にはいきません。相手の校長がダメと言えばダメになるし、本人もヤダと言えばダメ、これでは自由な人事権、異動権限とは言えません。その辺の理解がずれていて大変でした。企業からボンと来たばかりで、当時、どこにどういう先生がいるかも知らないで、同じ学区の校長をはじめ、民間人校長を支えようと考えてくれた校長との懇親会などを通して、「ちょうど異動時期がきている良い先生はいないですか」とお聞きして有益な情報をもらったり、推薦を頂いて、次にその先生に会いに行ったりしました。その結果、異動して頂いた方が初期の開設準備室の2年目の人たちだった。その先生方は今までの学校ではできなかったが、山上校長が来た学校ならひょっとしたら出来るのではないかという方々が大半でした。この初期3年間の先生方を核にしていろいろなことができたし、その

おかげで私も大きな問題なくできたのだと思う。ほんとに感謝しています。

開設準備室の2年目のことですが、学校説明会を合計20回くらいやったのですが、その学校説明会が終わるたびにみんなで飲食して、飲んだ後に今度はカラオケです。そうやって先生方とずいぶんいろんな話をして、先生たちのことがかなり分かりました。その時に先生たちに言われたのが、「私たちは長いこと教師をやっているけど、校長とこんなに飲んだのは初めてだ」といわれて驚いたものです。学校を良くするのも悪くするのも先生です。ある意味では良い先生ばかりだったらいいののですが、問題のある先生もいる。本当に問題のある先生というのは少ないと思いますが、問題教師というのは私の目から見るとだんだん増えてきたと思えます。私から見た問題教師とは、価値観が違うから校長にぶつかるのはしかたがないと思いますが、教育研究をちゃんとやらない先生はダメだと思います。授業観察すればわかりますが、擦り切れそうな昔の大学ノートに手書きで書いたものを毎年くり返して使っているようでは問題です。古いものを大事にするジャンルや理論もありますが、教え方とかいろいろな知識というのは、世界中で日々進歩しているわけですから、それをちゃんと調べて新しいことを教えたり、新しい教え方に挑戦したりしなければダメだと思います。研究・研修しない先生ほど、学校全体で中学校へ訪問説明に行きましょうよといった時に協力しないし、定時になるとさっさと帰ってしまうのです。

私が定年になる少し前によく評価制度が入ってきました。そうしたものが無い世界があることが不思議でビックリしました。なぜ、そういう先生が態度を改めないかと言えば、当時はだれもが毎年1号給づつ給料が上がっていた。昇給期間短縮制度という成績反映制度があったので、その範囲では成績・実績を反映しましたが十分ではありませんでした。企業では、成績を上げる努力をしたり、あるいは成果を上げた人にはちゃんとボーナスという形で報われます。能力査定は、毎年の基準賃金のベースアップに反映されます。あるいは年功序列もありました。最近では段々なくなってきましたが、そのひとつ

に資格制度というのもありました。概略この3制度で能力や頑張りを評価するシステムでした。頑張らない人は現状維持か下手すれば下がる。だからそれなりに頑張るわけです。ところが、学校社会は違うんだなとわかってビックリしました。都教委は全国的にも早めに評価制度を導入しました。私も少し調べたのですが、全国の67の都道府県・政令指定都市の教育委員会の中で評価制度が導入されているのが、現在66です。ところが評価制度はあるが、給与や手当に反映されているのはその中の6分の1位で十幾つくらいです。だから、未だ日本は全国的には本当の意味での評価査定制度は導入されているとはいえないのです。教育公務員の身分を保証するという意味ではある程度やむを得ない部分はあるし、企業ほどドラスティックな制度でなくても良いですが、ある程度なかったら問題のある先生が改めるとは思えない。だって、頑張っても頑張らなくても給料や期末手当に差がつかないのなら、楽な方がいいという人が出て、これまた人間という動物の常だからしかたがない。だから、そこを少し日本の教育界は考えた方がいいなというふうに思いました。

東京は次々に新しいものを導入していったのですが、ほんとうはそうした制度がなくても、先生たちが頑張ればいいのです。例えば、校長と人間関係ができて、校長が授業観察などを通して話しあって頑張ってくればいいのですが、現実にはひと悶着もふた悶着もありました。観察結果のフィードバックを心よく受け入れる人もいれば、指摘してくれなくてもいいという人もいました。もちろん、校長は全ての教科の専門家ではないですが、生徒の目線では見られます。先生の教え方とか、生徒の様子、工夫、努力などについて評価するわけです。その後、前出のようにこれらを反映できる人事評価制度ができていきました。評価に異論があつたり、納得できない人は訴えていいよというものがあり、実際に私の評価に納得できないと訴えた人もいました。私がそれに対して、研究姿勢や授業内容、日常活動などの根拠を説明しました。日常活動では、学校行事への貢献や部活動、教科準備室での様子などが含まれます。評価がおかしいと都教委に訴えても、根拠となる事実を私が書類

で提出しましたら、評価が変わることはなかったです。

それから、学校の社会で弱いのは組織力です。先生方は、個々人はちゃんと教育も受け、教員免許も持っているのだから素晴らしい人が多いのです。自分の教科・科目とか、授業、クラスでは一種のミニ経営者です。誰の干渉も受けなくても済むし、干渉されたくない人も多いわけです。そういう意味では個人的であり、個々の集まりですから、みんなで力を合わせて何かやろうという時に非常に力が発揮しにくい土壌があります。本当はみんなで力を合わせれば学校なんて簡単に変わると思うのです。私の学校が母体校からかなり大きく変わったのは、組織活動ができる先生がたくさんいたからだと思うのです。企業にも収益をあげ、儲かっている会社、儲からない会社などいろいろあります。例えば、自動車業界が今儲かっているのは円安のせいももちろんありますが、何もしないであの収益があがるわけではないのです。収益〇〇億円という組織目標があって、ついでに車を〇〇台売らないといけない、この国では〇〇台とか、原価低減、効率向上など職場別の収益につながる目標も決める。そして、新しいものを開発しないと競争に負けてしまうから、開発力と営業力、さらに生産して品質が良くないとダメ、つまり生産力などが噛み合わなきゃあれほどの収益なんて出ないのです。円高になっても、日本で潰れる自動車会社はなかった。7~8つもの自動車メーカーが生き残っている国って日本しかないのです。昔、オイルショックなどがあった時に世界中の自動車会社は統廃合が進んで減っていききました。その時に日本もあんなにたくさんの自動車会社があったら、やっていけないって世界中から言われましたが、今でも残っています。それは今申し上げた競争力・組織力が各社にあるからなのです。いい意味で個々の競争がいい結果をもたらしているのです。やはりある程度競争というのがないとなかなか社会というのはダメなのです。そういうところが上手く機能したのが日本の自動車業界なのです。だから、先生たちもある意味では、そういう部分があればもっといい教育ができると思います。

教員は、モンスターペアレントとか、口うるさい保護者も増えてほんとうに大変だと思います。

私の場合、外部からもクレーム電話がきました。クレームといっても私まだ何もやってない頃です。民間人校長というだけで、利益主義を入れるとか、国旗・国歌に反対しろとか電話で言われたことがありました。そこで、「名前と住所を教えてください、手紙で丁重にお答えしますから」とか、「来て頂ければ面談します」と言ったのですが、答えてくれないのです。また、保護者から都教委に訴えられたこともありました。学校人事に絡む場合、私は一方的に子供からの訴えだけでは動きません、周囲の先生やいろいろな生徒の話も聞いて公平に判断するようにしましたが、納得出来ない方もいたのです。都教委は結局、学校現場で解決するよう指示してきました。もう一つ先生方を見ていて奇異に思ったのが、子供にすり寄りすぎる人がいることです。先生なのに生徒から「〇〇ちゃん」とか呼ばれて、お友達感覚で付き合っている方、あれは絶対に良くない。先生というのは、もともと教師とか教諭であり、生徒の師とか、生徒を教え諭す立場です。それなのに友達感覚はないでしょう。そういう人はある意味親しくはされているけど、子供たちから尊敬されてはいません。私からみて評価の高い先生は、見ていると授業中の姿勢や生徒指導が非常に厳しい。しかし、後のフォローがいい、放課後などによく理解できなかった子にちゃんと声を掛けて教えてあげたり、フォローしている。生徒がすべて帰った後に自分の仕事をしているので、退勤が遅い時間になりやすい。「残業代などは出ないのだから早く帰れば…」って、私が言うと、「私はやるべきことをやっているだけですから…」と言って頑張っていた。そういう先生は子供たちから非常に尊敬されていました。先生はそうあってほしいと思います。そういう先生がもっともっと増えないといけないと思いました。

さっき言った個人主義の先生は、自分の世界だという感覚が強くて、外の力をあまりうまく利用したがない。もちろん、市民講師は予算が少ないのは先生方もご承知の通りで、自由に市民講師とか外部の人を引っ張ってこられないというのはありますが、先生自身が嫌がる面がありますね。例えば、総合学科の特色のひとつに特色ある科目設定があります。特色ある科目設定で特色ある教育をやるには、もちろん先生が勉強して楽しくか

つ有意義な授業をやるのならそれでもいいのですが、先生方も人間です。自分が勉強するだけではなかなかフォローできないところは、外部の力を借りた方がよろしいのではと言って導入される方もいるけど、受け入れない方もけっこういます。外部の力は、保護者でもいいし、地域の方でもいい、どんどんそういう人たちを活用された方がいい。なぜなら、生徒はいずれそういう社会に出ていくと、先生から教わってないこともたくさんあるな、先生の言っていることだけではないんだな、ということが分かるのですから。先生は、そうした外部講師導入や、進路指導、キャリア教育の力をもう少し付けるべきだと思う。大学を出て、教員免許は持っていてでもなかなか教師になれなくて就職する方もいますが、でも結構な割合の方がストレートで採用されます。そういう方がほんとうに生きたキャリア教育が出来るのだからと思います。やっぱり、さきほど言ったように学校社会だけで育てはだめで、企業社会も経験した方が良い。企業社会に子供たちをいずれは送り出すのであり、高校からすぐではなくても大学を出て、大半の方は社会に出るのだから、社会がどういう人たちで成り立っているのか、企業とは何なのか、企業の考えとか、企業理念とか企業に行くときどういふところが大変なのかとか知った上で、そこで生き抜いていける力を身に付けさせるのが、私は生きる力・キャリア教育だと思います。だから先生に企業社会経験が必要だといいたいのであり、経験のない先生には採用後の初任者研修もいいのですが、思い切って1年間とか2年間くらい企業に送り込めばいいのです。企業というのは1年間のサイクルで動いているので、1週間とか数日の企業研修に行ってもごく一部しか見えない。企業の表面しか見えない。どこの社会も年間を通じたサイクルを一通り経験しないと分からないですね。そういう教育を私はやった方がいいのではないかなと思います。あるいは10年研修でやるのがいいかもしれない。そういうことをもっとやられたらいいと思います。

最後になりますが、私もこういう世界に身を置いたこともあり、日本の教育が良くなってほしいと思う。そこで大事なのは、先生の活性化、学校の活性化が一番です。それから民間人校長とか民間のノウハウをもっと活かすために、もっと東京

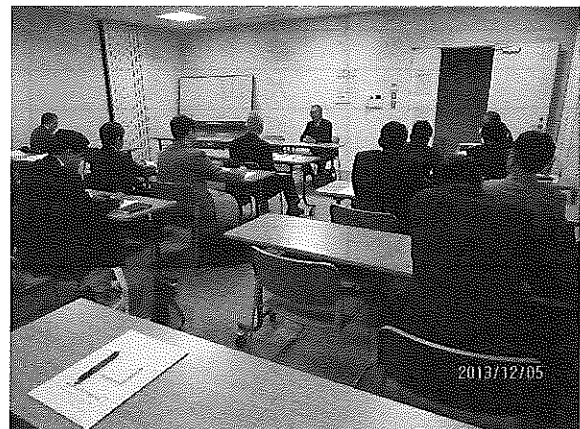
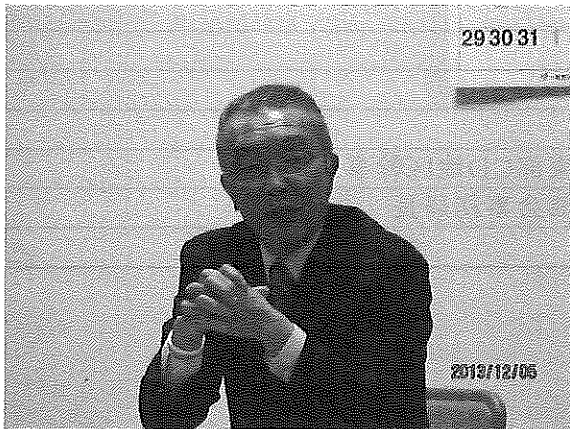
都全体の高校に伝えたりする仕組みや仕掛けがあると思います。それがなかなかできないので、その対策のために教育委員会や文部科学省にもっと民間人を入れるべきなのです。国の省庁の中で民間人を一番入れてないのは文部科学省だと聞いています。学校には民間人校長を入れよう言っておいて、都教委やら都庁も意外と民間人を入れてないのです。だから変わらないのです。活かし方も分からないし、本当の意味で民間ノウハウを入れるという課題はお題目で終わるのではないのでしょうか。そこから変えていくべきだと私は思っています。私も第1号という立場上、文科省の会議とかいろいろな会合メンバーとして、文科省の方とかいろいろな方にそういうことを言ったのですが、なかなか実現できず、とても残念です。それをやっただけからもっと多様な学校や教育の在り方を導入すべきだと思います。

実は私、不登校・引きこもりをなくす活動体として友人とNPOを作ってる2年になり、活動自体は4年位やっていて、メンタルカウンセラーもやっています。いまは、不登校者や不適応者のクラスを作ったり、どこかにそういう児童・生徒だけを集めて対応していますが、あれは基本的に普通学級に戻すための活動なのです。また、特に義務教育なんかはフリースクールに行っていれば、あるいは学校に全然行かなくても、トコロテン式に卒業させてしまい、それを高校が受け取るわけだから大変です。しかし、そういう子どもたちにも学ぶ権利があるので、フリースクールや民間の居場所中心の施設に任せるのではなく、国や地方自治体や教育委員会がもっと責任を持って、対処すべきだと思います。国も都道府県も市町村もそうですが、教育にちゃんとお金をつぎ込んでもらいたい。GDPに占める公的な教育支出比率はOECDの中でずっと最下位ではないですか。その原因はなんでしょうね。日本の歴代の総理大臣の就任演説を聞いたり、新聞で読んでも教育について熱い想いを語っている人がいなくて、がっかりしてしまいます。どこの国でも、いずれは若い世代が国を背負って立つわけだから、教育ほど大事なものはないので。そこにもっと人も金も物も資源も、投入しなかったらダメです。いい教員を採用して、いい教員の頑張りだけで何とかしてもらおうというのはちょっと虫が良すぎ

る。さきほど申し上げた市民講師の予算などもケチケチしといて、特色ある教育をやりましようと言ってもではしない。人もお金をもっと必要です。そういうところがいちばん大事なかなというふうに思っております。ご清聴ありがとうございます！

(文責 事務局)

これは、平成 25 年 12 月 5 日(木)に行われた、第 8 回総務部会での講演の内容です。



11. 会 員 異 動

定年退職者（17名）

平成 26 年 3 月 31 日

学 校 名	氏 名	25 年度副校長協会役職名
工 芸	原 田 明	全国高等学校教頭・副校長会会計
蒲 田	長 田 真 一	
日 本 橋	玉 井 篤	全国高等学校教頭・副校長会会長
橋	瀧 上 哲	
神 代	清 水 進	
小 笠 原	清 水 昭 弘	
総 合 工 科	守 屋 誠 一	全日制部会長
北 豊 島 工 業	中 村 辰 夫	
井 草	東 信 幸	
練 馬 工 業	北 川 昇	
片 倉	畑 中 喜 八	
府 中 工 業	益 子 義 明	
農 業	大 山 宗 一	
農 産 ・ 定	須 賀 秀 次	
大 江 戸 ・ 定	小 野 寺 一	定通制東部CD地区幹事
中 野 工 業 ・ 定	市 川 政 弘	定通制部会事務局長
八 王 子 拓 真 ・ 定	中 村 直 治	

校長栄進者（34名）

平成25年4月1日発令

現任校	氏名	前任校	24年度副校長協会役職名
足立西	宮川 隆史	光丘・全	全日制中部D研究幹事
足立新田	雨森 義勝	江北・全	
足立工業	堀切 哲弥	目黒・全	
葛飾野	藤田 泉	東部支援センター支所	
八潮	高橋 斉	竹台・全	
篠崎	鹿目 憲文	紅葉川・全	
大江戸	佐々木 雅人	浅草・定	
葛西工業	有明 得良人	青山・全	
神代	真保 俊哉	町田・全	
八丈	齋藤 義弘	瑞穂農芸・全	
小笠原	加藤 隆	大崎・全	
田園調布	吉田 亘	葛西南・全	
総合工科	石崎 規生	三鷹中等・全	
新島	前田 吉明	府中東・全	
板橋	八百板 真弓	向丘・全	
大山	小山 秀高	大泉桜・全	
飛鳥	神田 亮二	戸山・全	全日制中部D常任幹事
赤羽商業	昼間 一雄	葛飾商業・全	会計監査
井草	宮本 信之	大田桜台・全	全日制東部C常任幹事
練馬	遠藤 紳一郎	調布北・全	
杉並工業	板倉 哲	田無工業・全	
成瀬	安部 卓郎	八王子東・全	
町田工業	淵脇 英一	武蔵野北・全	
富士森	小野 寺真也	小石川中等	
松が谷	平野 篤士	日比谷・全	
日野	宮崎 高一	立川・定	
南平	奥秋 将史	国立・全	
第五商業	佐藤 俊一	西部支援センター	
多摩科学技術	金田 裕治	人事部職員課	
東大和	俵田 浩一	人事部職員課	
武蔵村山	川瀬 徹	武蔵・全	全日制西部C常任幹事
東大和南	小倉 良之	両国附属中	
瑞穂農芸	小堀 紀明	農産・全	会長、全国高等学校教頭・副校長会副会長
荒川工業	山寺 佳幸	つばさ総合・全	平成25年10月1日発令

中学校長（1名）

平成25年4月1日発令

現任校	氏名	前任校	24年度副校長協会役職名
八王子宫上中	大熊 一正	南多摩中等	

全日制間の転任（26名）

平成 25 年 4 月 1 日発令

現 任 校	氏 名	前 任 校	24 年度副校長協会役職名
江 北	中 間 均	蒲 田	高校研究部長、全国高等学校教頭・副校長会研究委員長
日 比 谷	牧 野 敦	九 段 中 等	
青 山	大 島 良	大 泉	
小石川中等	臼 田 三 知 永	桜修館中等	
紅 葉 川	伊 達 崎 広	総 合 芸 術	
三 鷹	富 川 麗 子	小 平 南	
大 崎	小 林 孝 行	松 原	
小 山 台	鶴 田 秀 樹	豊 島	
大 島	住 吉 貴 之	淵 江	
神 津	小 澤 彰	足 立 新 田	
桜修館中等	笠 原 聡	神 津	
王 子 総 合	太 田 斗 志 夫	千 早	
戸 山	北 澤 良 浩	東 村 山	
大 泉	北 江 繁 治	大島海洋国際	
町 田	久 保 淳	八 王 子 北	
小 川	平 野 み どり	世 田 谷 総 合	
富 士 森	黒 澤 敏 明	多 摩 工 業	
八 王 子 東	渡 邊 和 己	豊 多 摩	
八 王 子 北	石 井 哲 也	拝 島	
府 中 東	室 岡 誠 一	墨 田 川	
国 立	山 崎 仁	保 谷	
久 留 米 西	木 田 貴 子	田 無	
東久留米総合	若 林 直 司	町 田 総 合	
拝 島	柴 山 佳 久	大島海洋国際	
東 大 和 南	上 野 努	久 留 米 西	
青 梅 総 合	菅 勇 真	大 島	

定通制から全日制への転任（10名）

平成 25 年 4 月 1 日発令

現 任 校	氏 名	前 任 校	24 年度副校長協会役職名
葛 飾 商 業	加 藤 哲 次	荒 川 商 業	
大 森	齊 藤 聡	園 芸	
六 郷 工 科	早 川 忠 憲	六 郷 工 科	
松 原	赤 羽 美 佐 恵	荻 窪	
調 布 北	土 肥 剛	瑞 穂 農 芸	
北 園	亀 崎 隆 彦	第 三 商 業	
杉 並 工 業	山 本 誠	北 豊 島 工 業	
豊 島	佐 藤 昭 二	雪 谷	
国 分 寺	白 鳥 靖	福 生	
小 平 南	池 田 克 則	町 田	

他校種から全日制へ転任（6名）

平成 25 年 4 月 1 日発令

現 任 校	氏 名	前 任 校	24 年度副校長協会役職名
墨 田 川	内 田 隆 志	北 神 谷 中	
富 士	海 發 真 一	練馬光丘三中	
南多摩中等	長 嶋 浩 一	西東京保谷中	
秋 留 台	高 橋 和 久	板橋高島二中	
東 村 山	加 藤 竜 吾	西東京田無二中	
大 田 桜 台	石 山 智 典	人事部職員課	

全日制から定通制への転任（4名）

平成 25 年 4 月 1 日発令

現 任 校	氏 名	前 任 校	24 年度副校長協会役職名
蔵 前 工 業	松 本 哲 雄	三 宅	
六 郷 工 科	松 尾 龍 太 郎	杉 並 工 業	
荻 窪	遠 山 裕 之	青 梅 総 合	
砂 川	並 川 直 人	立川国際中等	

定通制から定通制への転任（1名）

平成 25 年 4 月 1 日発令

現 任 校	氏 名	前 任 校	24 年度副校長協会役職名
第 三 商 業	川 澄 秀 一	蔵 前 工 業	

新任者（61名）

平成 25 年 4 月 1 日発令

現 任 校	氏 名	前 任 校	備 考
江 北	濱 口 徳 広	東 部 支 援 セ ン タ ー	行政より
淵 江	佐 々 木 巧	練 馬	昇任
青 井	加 藤 正 和	大 江 戸	昇任
足 立 新 田	高 野 幸 代	蒲 田	昇任
葛 飾 野	大 竹 裕 二	総 務 部 教 育 情 報 課	行政より
農 産	形 部 光 昭	北 園	昇任
九 段 中 等	山 本 一 之 介	区 教 委	昇任
向 丘	杉 渕 明 子	南 葛 飾	昇任
竹 台	中 村 力	世 田 谷 泉	昇任
荒 川 工 業	岡 田 悟	科 学 技 術	昇任
蒲 田	武 市 玲 子	紅 葉 川	昇任
美 原	竹 尾 展	八 潮	昇任
両 国 附 属 中	渋谷 寿 朗	江 北	昇任
葛 西 南	杉 森 共 和	小 岩	昇任
第 三 商 業	新 井 智 恵 子	江 東 商 業	昇任
豊 多 摩	飛 田 牧 弘	新 宿	昇任
三 宅	志 波 昌 明	淵 江	昇任
三 鷹 中 等	北 鹿 渡 昭 喜	武 蔵 野 北	昇任
三 鷹 中 等	森 田 常 次	指 導 部 高 指 課	昇任
田 園 調 布	野 村 悟	府 中 東	昇任
目 黒	今 井 啓 介	深 沢	昇任
国 際	市 村 裕 子	研 修 セ ン タ ー	昇任
大 島 海 洋 国 際	佐 藤 尚 之	荻 窪	昇任
大 島 海 洋 国 際	小 口 淑 美	新 宿	昇任
総 合 芸 術	平 林 信 彦	中 部 支 援 セ ン タ ー 支 所	昇任
文 京	山 田 道 人	都 立 部 高 教 課	昇任
大 山	黒 田 正	稔 ケ 丘	昇任
光 丘	山 下 一 郎	砂 川	昇任
大 泉 桜	杉 山 智 子	東 部 支 援 セ ン タ ー 支 所	昇任
千 早	石 野 隆	東 部 支 援 セ ン タ ー	昇任
町 田 総 合	増 田 雅 子	世 田 谷 総 合	昇任
立 川 国 際 中 等	宮 田 明 子	立 川	昇任
南 多 摩 中 等	澤 崎 陽 彦	小 平	昇任
武 蔵	榎 茂 喜	世 田 谷 総 合	昇任
武 蔵 野 北	丸 茂 聡	西 部 支 援 セ ン タ ー	昇任
保 谷	高 木 健 治	武 蔵 丘	昇任
田 無	諸 地 政 元	第 四 商 業	昇任
田 無 工 業	猪 瀬 高 宏	杉 並 工 業	昇任
五 日 市	栗 原 充 治	府 中 東	昇任
多 摩 工 業	近 藤 光	府 中 工 業	昇任
瑞 穂 農 芸	重 中 由 香 里	青 梅 総 合	昇任

現任校	氏名	前任校	備考
荒川商業・定	菅原 敏雄	葛飾商業	昇任
一橋・定	小窪 昇	葛飾野	昇任
新宿山吹・通	小山 治夫	武蔵村山	昇任
浅草・定	中澤 良徳	足立	昇任
大江戸・定	松本 治子	相談センター	昇任
橘・定	橋本 良平	北豊島工業	昇任
神代・定	大島 和華子	野津田	昇任
雪谷・定	小松 史幸	松原	昇任
園芸・定	小原 孝太郎	蒲田	昇任
桐ヶ丘・定	加藤 孝行	美原	昇任
飛鳥・定	太田 勲	千歳丘	昇任
北豊島工業・定	沢野 茂	墨田工業	昇任
稔ヶ丘・定	荒川 留美	第三商業	昇任
豊島・定	中村 辰雄	荒川商業	昇任
町田・定	戸川 点	六本木	昇任
八王子拓真・定	沖山 英一	桐ヶ丘	昇任
立川・定	古閑 伸幸	町田	昇任
農業・定	佐藤 浩史	農産	昇任
福生・定	田母神 武治	東村山西	昇任
瑞穂農芸・定	岡田 貴夫	羽村	昇任

25年度途中の昇任者（3名）

現任校	氏名	前任校	備考
王子総合	笹平 篤生	墨田工業	平成25年9月1日発令
つばさ総合	笹沼 克宜	練馬工業	平成25年10月1日発令
桜修館中等	浜田 浩和	新宿山吹	平成25年11月1日発令

編集後記

はじめに、東京都公立高等学校副校長協会会報第 41 号の発行にあたり、ご多忙のところ原稿をお寄せいただきました先生方に深く感謝申し上げます。今年度の活動も 4 月 11 日の総務部会を皮切りに 6 月 8 日幹事会・総会、8 月 19 日研究協議会と順調に行われてまいりました。この間、定例の総務部会にご出席いただき地区副校長会を支えてくださった常任幹事の先生方、研究協議会での協議運営に当たっていただいた研究幹事をはじめ、さまざまな形で関わっていただいた先生方に重ねて御礼を申し上げます。

さて、8 月に全国高等学校教頭・副校長会総会及び研究協議大会を機に伊勢に参ることができました。20 年に一度、正殿を始めとする御垣内の建物を建て替えし、さらに殿内の御装束や神宝を新調して、御神体を新宮へ遷す「式年遷宮」の年で、折しも「お白石持ち」行事に出くわし、新旧二つ並んだ正殿を拝したわけです。今は苔生して朽ちた旧正殿も、二十年前はこのような美しい白木だったのだなあと年月の流れに感慨深く見入ってしまったのは私だけではないはずです。匠の技を伝え続けてきた宮大工たちが、永遠を求めて新たな命を吹き込むために、切磋琢磨して作業に取り組んできたと聞きます。「神様の御殿だから、目に見えないところまで丹念に造る。それが宮大工の誇り。造営を重ねるうちに、崇敬の心も生まれる。」と、まさに宮大工の技術、精神の継承となっていると言えます。歴史に裏付けられた人材育成のシステムでもあるのですね。

翻って我が身を省みると、果たして引き継ぐべき技術や精神をもっているのかと恥じ入ってしまいます。物事を深く考えることをせず、日常目の前にある仕事を事務的にこなし、「忙しさ」に文字通り「心を亡くして」いる自分をただただ嘆き、一人では何もできないことを痛感するばかり。人材育成とて思うように捗らず・・・困難な教育課題が山積み、副校長の業務が増大化している今こそ、課題解決に向けてネットワークを最大限に活用することが重要であると考えます。本会報がその情報交換の一端となり、解決の糸口となることを念じてあとがきに代えさせていただきます。

副校長協会の活動が相互に支えあうものとなって学校経営を推進することができるように、また後進の育成のためにも、今後とも皆様のご理解とご協力を賜りたくお願い申し上げます。

全日制副部会長 栃倉 和則（飛鳥）

会 報

第 41 号 （平成 25 年度） 非売品

発行日 平成 26 年 3 月 31 日
編集者 東京都公立高等学校副校長協会事務局
発行所 東京都公立高等学校副校長協会
〒113-0034 東京都文京区湯島 1 - 5 - 28
ナールお茶の水 2 階
電話 5840 - 6104 FAX 5840 - 6108
E-mail: info@zenko-kyotou.jp
印刷所 社会福祉法人 東京コロニー 東京都大田福祉工場
〒143-0015 大田区大森西 2 - 22 - 26 電話 3762 - 7611



横山大観 五郷先生